

しん まち まえ い せき
新町前遺跡（第1～4次）

青洲高校（峡南地域単位制・総合制高校）建設工事に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2024. 3

山梨県観光文化・スポーツ部
山梨県教育委員会

しん まち まえ い せき
新町前遺跡（第1～4次）

青洲高校（峡南地域単位制・総合制高校）建設工事に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2024. 3

山梨県観光文化・スポーツ部
山梨県教育委員会



新町前遺跡上空から芦川扇状地を望む（東方向）



新町前遺跡上空から旧市川高校、富士川方面を望む（南西方向）

新町前遺跡のあらまし

新町前遺跡は、山梨県西八代郡市川三郷町市川大門に位置する弥生時代後半及び平安時代後半～中世の集落遺跡と中世後半まで続く田畑の遺跡です。新町前遺跡の発掘調査までは遺跡が存在しない地域と考えられていたところですが、平成30年度の発掘調査を皮切りに令和4年度までの4次の調査により、広い範囲に遺跡が展開していたことが明らかになりました。



石組み護岸を持つ水路と水田面

発掘調査では、今から約600年前までこの地域には水田や畑が広がっていることがわかりました。また、田畑の上に厚く堆積した砂礫層や、水田面に残された川の氾濫の跡などの痕跡から、大規模な水害によって水田や畑が埋もれてしまい、この場所から人々がいなくなってしまったことがわかりました。

◇中世の田畑跡の発見

新町前遺跡では、中世の田畑面、平安時代～中世の集落、弥生時代の集落が重層的に見つかりました。

地表面に分厚く堆積した砂礫層を取り除くと、今から約600年前の水田跡や畑が姿を現しました。



1m程堆積した砂礫層



見つかった畑の畝



水路を壊す氾濫の痕跡

◇平安時代～中世のムラの調査

中世の田畑の層を更に掘り下げると、今から約1,100～900年前の集落が見つかりました。

発掘調査では、72軒の竪穴建物跡や掘立柱建物、大規模に土地を区画する大溝などの人々の暮らしの痕跡が、たくさんの遺物とともに見つかりました。



見つかった竪穴建物跡 (SI33)



食器や調理に使われた一般的な土器



新町前遺跡で使われた灰軸陶器・緑軸陶器



出土した貿易陶磁（白磁・青磁）

平安時代集落の調査では、一般に使われた土器や陶器のほかに、中国で作られて海を渡って搬入された「貿易陶磁」の破片が大量に出土しました。

こうした貴重で高価な品を持つことができた人が近くに暮らしていたのかもしれない。

◇鍛冶に関連する遺構と遺物

新町前遺跡の平安時代～中世の集落では、鉄製の道具を修理・加工する「小鍛冶」に関する痕跡が多く見つかりました。また、鍛冶炉を持つ竪穴建物跡も見つかっています。

このことから、この集落では頻繁に鉄器加工が行われていたと考えられます。



底が焼けて固まっている鍛冶炉



鍛冶に関連する遺物



出土した鉄製品（刀子、鋸、鎌、釘など）

◇地下深くから見つかった弥生時代集落

第4次調査では、地下約4mの深さから、今から約1,800年前の集落が見つかりました。甲府盆地で最も標高が低い場所で見つかった弥生時代集落と考えられ、当時の甲府盆地がもっと低く、またその低い場所にも人々が暮らしていたことが明らかになりました。



弥生時代終末～古墳時代初頭の土器

序 文

本書は、青洲高校（峡南地域単位制・総合制高校）建設に伴い、2018年度（平成30年度）から2022年度（令和4年度）に実施した新町前遺跡の発掘調査成果をまとめた報告書です。

御坂山地を水源とする芦川が作り出す扇状地上に位置する新町前遺跡では、弥生時代後期と平安時代後期の集落跡や中世の田畑等が発見され、新町前遺跡の発見まで遺跡が無いとされていたこの地域において、古来人々の生活の場として利用されていたことが明らかになりました。

本事業に伴う4次にわたる発掘調査の結果、平安時代後期の竪穴建物跡は72軒にも及び、芦川扇状地を舞台として活動していた人々の大規模な集落であったことが想定されます。また、中世に至りこの土地の湿潤化とともに土地利用の形態を水田へと変容していった状況は、甲府盆地に暮らした古代の人々の動向を知るうえで重要な手掛かりを示してくれます。

本書が、今後の新町前遺跡の保護、地域における歴史学習や研究のために多くの方に御活用いただければ幸いです。

最後に、今回の発掘調査及び調査報告書に当たり、御理解と御協力をいただいた関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

2024年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所 長 北 村 徹

例 言

1. 本書は山梨県西八代郡市川三郷町市川大門に所在する新町前遺跡（第1次～第4次）の発掘調査報告書である。
2. 調査は峡南地域単位制・総合制高校（青洲高校）建設に伴う事前調査であり、平成30年度・令和元年度（第1・2次）は山梨県教育委員会学校施設課から学術文化財課が委託を受けて埋蔵文化財センターが実施し、令和3・4年度は埋蔵文化財センターが観光文化部に移管されたことにより、山梨県教育委員会から山梨県観光文化部が委託を受け、同部埋蔵文化財センターが発掘調査・整理作業・報告書作成を実施したものである。
3. 発掘調査及び整理作業に当たった組織体制は第3章第2節に示した。
4. 本書の執筆分担は次の通りである。第1～7及び9章は御山、第8章第1節は（株）バリノ・サーヴェイ、第8章第2節は（株）古環境研究所が執筆し、御山が編集をおこなった。
5. 遺構写真及び調査風景は、第1次調査は御山、第2次調査は宮里、第3次調査は久保田及び上野、第4次調査は岩永及び高野が撮影し、報告書掲載遺物の写真は御山が撮影した。
6. 整理作業は、山梨県埋蔵文化財センター整理室にて行った。
7. 本報告に関わる記録図面及び写真、出土遺物等は山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
8. 発掘調査に当たっては、以下の通り業務を委託して行った。

〔第1次調査〕	基準点測量	（株）テクノプランニング
	空中写真撮影	（株）テクノプランニング（1・2回目）
	空中写真撮影及び図化	（株）シン技術コンサル（3回目以降）
〔第2次調査〕	基準点測量	（株）テクノプランニング
	空中写真測量	（株）シン技術コンサル
	土壌堆積観察業務	（株）古環境研究所
〔第3次調査〕	基準点測量	（株）シン技術コンサル
	空中写真撮影及び図化	（株）シン技術コンサル
〔第4次調査〕	基準点測量	（株）シン技術コンサル
	空中写真撮影及び図化	（株）シン技術コンサル
	発掘作業員の派遣	（公社）山梨県シルバー人材センター
9. 発掘作業に当たっては、以下の通り機材を借り上げた。

〔第1次調査〕	光波測距儀（Topcon LN150）、遺跡測量システム（Cubic 遺構くん）、デジタル一眼レフカメラ（Nikon D850）	（株）テクノプランニング
〔第2次調査〕	光波測距儀、遺跡測量システム（遺跡管理システムⅡ）、デジタル一眼レフカメラ	（株）シン技術コンサル
〔第3次調査〕	光波測距儀、遺跡測量システム（遺跡管理システムⅡ）、デジタル一眼レフカメラ	（株）シン技術コンサル
〔第4次調査〕	光波測距儀（Topcon LN150）、遺跡測量システム（Cubic 遺構くん）、デジタル一眼レフカメラ（Nikon D850）	（株）テクノプランニング
10. 整理作業に当たっては、以下の通り業務を委託して行った。

〔平成30年度〕	自然科学分析	（株）バリノ・サーヴェイ
（樹種同定（炭化材）、種実同定、花粉分析、微細物分析、放射性炭素年代測定、植物珪酸体分析、珪藻分析）	金属製品保存処理	（公財）山梨文化財研究所
〔令和元年〕	写真解析及び図化（第1次）	（株）シン技術コンサル
	図面作成等（第2次）	（株）シン技術コンサル
	金属製品保存処理	（株）文化財ユニオン

11. 整理作業に当たっては、以下の通り機材を借り上げた。

〔平成30年度〕	遺跡測量システム (Cubic 遺構くん)	(株) テクノブランニング
	注記マシン	(有) 新成田総合社
〔令和元年度〕	遺跡測量システム (Cubic 遺構くん)	(株) テクノブランニング
〔令和2年度〕	遺跡測量システム (Cubic 遺構くん)	(株) テクノブランニング
〔令和4年度〕	遺跡測量システム (Cubic 遺構くん)	(株) テクノブランニング
	注記マシン	(株) イビソク山梨営業所

12. 発掘調査及び報告書の作成に当たって、以下の個人から御協力を賜った。ここに記して厚く感謝申し上げます (50音順・敬称略)。

【発掘作業員】

〔第1次調査〕 浅野修、穴山清、穴山公、雨宮信次、新谷博朋、飯室恵子、今村美和子、大森博、岡田保彦、河西町男、河西元彦、勝村深太、川崎貴彦、川住たまたみ、木内雅人、窪田信一、熊谷文彦、小池幹子、小泉昌彦、小林英樹、小林森雄、阪本國廣、坂本健治、清水治重、田丸進、近山辰男、鶴田晴夫、直井光江、中込榊、難波礼、新田史男、萩原森詞、長谷部久樹、弘内茂明、藤原正大、松木泰嶺、水上喜正、宮城良男、武藤駿平、村松夏彦、望月晶、山本頼伸、山本茂樹、山本修二、箭本公幸、米山文徳、渡辺三男、和田豊

〔第2次調査〕 秋山博、穴山清、新谷博朋、飯室恵子、今村美和子、大森博、長田秋文、川住たまたみ、小池幹子、小山真理子、阪本國廣、清水治重、大長寿美子、田丸進、名取昌未、萩原森詞、長谷部久樹、深澤優毅、保坂秋蘭、宮城良男、望月晶、山本茂樹、山本修二、箭本公幸

〔第3次調査〕 赤池初子、赤澤里奈、穴山清、雨宮貞夫、雨宮信次、飯沼礼子、石黒毅志、一瀬淑子、沖松久美、小原 治、笠井 歩、河西とし江、金丸一秋、河崎久美子、川住たまたみ、木本かよ子、小池幹子、齊藤幸雄、佐野克也、清水治重、田中隆ノ介、長谷川浩三、保坂秋蘭、松上健、望月晶、望月起男、依田 遙

〔第4次調査〕 シルバー人材センター・岐阜事務所から派遣

【整理作業員】

〔平成30年度〕 小池美保子、流石利枝子、中根修二、原光彦、藤原由紀子

〔令和元年度〕 飯室恵子、川住たまたみ、小池幹子、大長寿美子、保坂秋蘭

〔令和2年度〕 石坂恵理、長田良二、小松千賀子、齊藤律子、土井みさほ、新津多恵

〔令和3年度〕 一之瀬はる奈、齊藤律子、難波礼

〔令和4年度〕 難波礼、森原千恵子、シルバー人材センター・岐阜事務所から派遣 6名

凡 例

1. 本報告書中の測量図面、実測図面の縮尺はそれぞれの挿図内に記した。
2. 土層色調表記は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所色票監修）に準拠している。
3. 第1図に使用した地形図は、国土地理院発行地形図「市川大門」、「甲府」を使用した。
4. 第2図に使用した図の下図は、国土地理院発行「治水地形分類図」を使用した。
5. 第4章自然科学分析の挿図番号、挿表番号、図版番号等は同章内で完結しており、本文目次には示していない。
6. 第4章の挿図中に使用したトーン、記号は以下の通りである。なお、必要に応じて挿図中にも示した。
遺構図中・・・斜線トーン：礫断面、網掛けトーン：焼土範囲、●：土師器、○：柱状高台土器、▲：煮炊具、△：脚高台土器、◇：灰釉陶器、◆：須恵器、★：金属製品の出土位置
遺物図中・・・網掛けトーン：灰釉陶器、黒塗：須恵器
第5章以降のドットは遺物の出土位置を示す。

目次

例言	
凡例	
第1章 経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の経過	2
第2章 遺跡の位置と周辺環境	5
第1節 遺跡の位置と地理的環境	5
第2節 遺跡周辺の歴史的環境	7
第3章 調査の方法	9
第1節 発掘調査の方法	9
第2節 調査体制	9
第3節 試掘調査の成果	11
第4節 調査の目的と課題	11
第5節 基本土層	13
第4章 第1次調査の調査成果	15
第1節 I期の遺構と遺物	15
第2節 II期の遺構と遺物	185
第5章 第2次調査の調査成果	201
第1節 I区I期の遺構と遺物	201
第2節 I区II期の遺構と遺物	212
第3節 II区の遺構と遺物	213
第4節 III区I期の遺構と遺物	214
第5節 III区II期の遺構と遺物	231
第6章 第3次調査の調査成果	235
第1節 I期の遺構と遺物	235
第2節 II期の遺構と遺物	247
第7章 第4次調査の調査成果	249
第1節 I期の遺構と遺物	249
第2節 II期の遺構と遺物	258
第3節 III期の遺構と遺物	265
第4節 部室棟地点の調査	272
第8章 自然科学分析	273
第1節 第1次調査の自然科学分析	273
第2節 第2次調査の自然科学分析	303
第9章 総括	311
第1節 新町前遺跡の段階設定について	311
第2節 新町前遺跡の変遷について	312
第3節 新町前遺跡出土の鍛冶関連遺構・遺物について	314
第4節 新町前遺跡から出土した貿易陶磁について	315

挿図目次

図1	新町前遺跡周辺の地形	6
図2	周辺遺跡分布図	8
図3	グリッド配置図	10
図4	試掘調査トレンチ 土層柱状図及び平面略図	12
図5	基本土層図(第1次～4次)	14
図6	1次調査 I期遺構配置図(分割図①)	32
図7	1次調査 I期遺構配置図(分割図②)	33
図8	1次調査 I期遺構配置図(分割図③)	34
図9	1次調査 I期遺構配置図(割付図④)	35
図10	1次調査 遺構配置図(割付図⑤)	36
図11	1次調査 遺構配置図(割付図⑥)	37
図12	1次調査 遺構配置図(割付図⑦)	38
図13	1次調査 遺構全体図(I期)	39～40
図14	竪穴建物跡 SI01 平面図、SI01 内ピット	41
図15	竪穴建物跡 SI01 遺物分布図、SI01 内土坑	42
図16	竪穴建物跡 SI02、SI02 カマド	43
図17	竪穴建物跡 SI02 遺物分布、SI03、SI03 遺物分布図	44
図18	竪穴建物跡 SI03 カマド、SI04、SI04 遺物分布	45
図19	竪穴建物跡 SI04 カマド、SI05、SI05 遺物分布	46
図20	竪穴建物跡 SI05 カマド、SI06、SI06 遺物分布	47
図21	竪穴建物跡 SI06 カマド、SI07、SI07 カマド	48
図22	竪穴建物跡 SI08、SI08 カマド①、②	49
図23	竪穴建物跡 SI08 遺物分布、SI09、SI09 遺物分布	50
図24	竪穴建物跡 SI09 カマド、SI10	51
図25	竪穴建物跡 SI11～SI13	52
図26	竪穴建物跡 SI14・17、SI14・17 遺物分布	53
図27	竪穴建物跡 SI17 カマド、SI15	54
図28	竪穴建物跡 SI16、SI16 遺物分布、SI16 カマド	55
図29	竪穴建物跡 SI18、SI18 カマド	56
図30	竪穴建物跡 SI18 遺物分布、SI19	57
図31	竪穴建物跡 SI19 遺物分布、SI19 カマド	58
図32	竪穴建物跡 SI20、SI21	59
図33	竪穴建物跡 SI22、SI23、SI23 カマド	60
図34	竪穴建物跡 SI24、SI25	61
図35	竪穴建物跡 SI26～28	62
図36	竪穴建物跡 SI26～28 遺物分布	63
図37	竪穴建物跡 SI27 カマド、SI29・31	64
図38	竪穴建物跡 SI29・31 遺物分布、SI31 カマド	65
図39	竪穴建物跡 SI30、SI30 カマド	66
図40	竪穴建物跡 SI32、SI33、SI33 カマド、SI33 遺物分布	67
図41	竪穴建物跡 SI34・SI34 カマド、SI35	68
図42	竪穴建物跡 SI36、SI36 遺物分布、SI36 カマド	69
図43	竪穴建物跡 SI36 カマド横土坑、SI37、SI37 カマド	70
図44	竪穴建物跡 SI38・41・42	71
図45	竪穴建物跡 SI38・41・42 遺物分布	72

図 46	竪穴建物跡 SI38 カマド、SI41 カマド、SI42 カマド	73
図 47	竪穴建物跡 SI39・40、SI39 カマド、SI40 カマド	74
図 48	竪穴建物跡 SI43・SI43 カマド、SI44・SI44 鍛冶炉	75
図 49	竪穴建物跡 SI45、SI46・SI46 鍛冶炉?	76
図 50	竪穴建物跡 SI47・SI47 カマド、SI48、SI48 遺物分布、SI48 カマド	77
図 51	竪穴建物跡 SI49・50	78
図 52	掘立柱建物跡 SB01	79
図 53	掘立柱建物跡 SB02	80
図 54	掘立柱建物跡 SB03、溝 SD1004・1005、SD1006	81
図 55	溝 SD1007、SD1009、SD1010	82
図 56	溝 SD3002、SD3003、SD3004、SD4001	83
図 57	溝 SD4002	84
図 58	自然流路 NR1001・3001・4001 割付図、NR1001	85
図 59	自然流路 NR3001・4001	86
図 60	配石遺構 SS2001、SS3001、SS3002	87
図 61	土坑 (SK) ①	88
図 62	土坑 (SK) ②	89
図 63	土坑 (SK) ③	90
図 64	土坑 (SK) ④	91
図 65	土坑 (SK) ⑤	92
図 66	土坑 (SK) ⑥	93
図 67	土坑 (SK) ⑦	94
図 68	土坑 (SK) ⑧	95
図 69	ピット (SP) ①	97
図 70	ピット (SP) ②	98
図 71	ピット (SP) ③	99
図 72	ピット (SP) ④	100
図 73	ピット (SP) ⑤	101
図 74	ピット (SP) ⑥	102
図 75	性格不明遺構 SX1001、SX1003、SX2005	104
図 76	性格不明遺構 SX1002 遺物分布	105
図 77	SI01 出土土器	106
図 78	SI02・SI03 ①出土土器	107
図 79	SI03 ②、SI04 出土土器	108
図 80	SI05 ①出土土器	109
図 81	SI05 ②出土土器	110
図 82	SI05 ③、SI06～08 出土土器	111
図 83	SI09、SI10 出土土器	112
図 84	SI11～SI13、SI14 ①出土土器	113
図 85	SI14 ②、SI15 出土土器	114
図 86	SI16、SI17、SI18 ①出土土器	115
図 87	SI18 ②、SI19 出土土器	116
図 88	SI20～SI23 出土土器	117
図 89	SI24～SI26 出土土器	118
図 90	SI27、SI28 出土土器	119
図 91	SI29、SI30 ①出土土器	120
図 92	SI30 ②、SI31 ①出土土器	121

図 93	SI31 ②、SI32、SI33 ①出土土器	122
図 94	SI33 ②出土土器	123
図 95	SI34、SI35、SI36 ①出土土器	124
図 96	SI36 ②出土土器	125
図 97	SI36 ③出土土器	126
図 98	SI34、SI35 出土土器	127
図 99	SI39、SI40 ①出土土器	128
図 100	SI40 ②出土土器	129
図 101	SI41 ①出土土器	130
図 102	SI41 ②、SI42 出土土器	131
図 103	SI43、SI44 出土土器	132
図 104	SI45～SI47 出土土器	133
図 105	SI48 ①出土土器	134
図 106	SI48 ②、SI49・50 出土土器	135
図 107	SD、NR1001 ①出土土器	136
図 108	NR1001 ②出土土器	137
図 109	NR1001 ③、NR3001 ①出土土器	138
図 110	NR3001 ②、NR4001 ①出土土器	139
図 111	NR4001 ②、SS2001、SS3001、SK ①出土土器	140
図 112	SK ②出土土器	141
図 113	SK ③、SP ①出土土器	142
図 114	SP ②、SX1001 ①出土土器	143
図 115	SX1001 ②、SX1002 ①出土土器	144
図 116	SX1002 ②出土土器	145
図 117	遺構外出土土器①	146
図 118	遺構外出土土器②	147
図 119	遺構外出土土器③	148
図 120	遺構外出土土器④	149
図 121	遺構外出土土器⑤	150
図 122	出土貿易陶磁①	151
図 123	出土貿易陶磁②	152
図 124	出土貿易陶磁③	153
図 125	出土土製品	179
図 126	出土石製品	180
図 127	出土金属製品①	181
図 128	出土金属製品②	182
図 129	出土金属製品③	183
図 130	1次調査Ⅱ期全体図・エレベーション図	187～188
図 131	1次調査Ⅱ期分割図①	189
図 132	1次調査Ⅱ期分割図②	190
図 133	1次調査Ⅱ期分割図③	191
図 134	1次調査Ⅱ期分割図④	192
図 135	1次調査Ⅱ期分割図⑤	193
図 136	1次調査Ⅱ期分割図⑥	194
図 137	大畦畔 SD1001 南	195
図 138	大畦畔 SD1001 中央	196
図 139	大畦畔 SD1001 北、畑跡 SN16	197

図 140	SN 出土土器①	198
図 141	SN 出土土器②、出土古銭	199
図 143	竪穴建物跡 SIO1、SIO1 カマド、SIO2	203
図 144	竪穴建物跡 SIO2 カマド、SIO3、SIO4	204
図 145	竪穴建物跡 SIO5、SIO6、土坑 (SK)	205
図 146	ビット (SP) ①	206
図 147	ビット (SP) ②、性格不明遺構 (SX・SZ)	207
図 148	SIO1、SIO3 出土土器	208
図 149	SIO4 遺構外出土土器	209
図 150	第2次Ⅰ区Ⅰ期全体図	211
図 151	第2次Ⅰ区Ⅱ期全体図及び畑跡エレベーション	212
図 152	第2次Ⅱ区遺構平面図及び遺構図 (SK01・SK02)	213
図 153	第2次Ⅱ区土層柱状図	213
図 154	第2次Ⅲ区Ⅰ期全体図	218
図 155	竪穴建物跡 SIO1、SIO1 カマド、SIO2	219
図 156	竪穴建物跡 SIO3、SIO4・07	220
図 157	竪穴建物跡 SIO5、SIO6	221
図 158	竪穴建物跡 SIO8、溝 SD01～03、SD05、SD06	222
図 159	大溝 SD04、SL01～03	223
図 160	土坑群①	224
図 161	土坑群②	225
図 162	土坑群③	226
図 163	SIO1、SIO4、SIO7、SD04、遺構外①出土土器	227
図 164	遺構外出土土器②	228
図 165	第2次Ⅲ区Ⅱ期全体図	232
図 166	水田面・畝状遺構エレベーション・石列見透し	233
図 167	大畦畔	234
図 168	3次調査 遺構全体図 (Ⅰ期)	236
図 169	竪穴建物跡 SIO1、SIO2	237
図 170	竪穴建物跡 SIO1・SIO2 カマド、SIO3 遺物分布	238
図 171	掘立柱建物跡 SB01、ビット SP01、土坑 SK01、SK02	239
図 172	竪穴建物跡 SIO1・SIO2、SK01、遺構外①出土遺物	240
図 173	遺構外出土遺物②	241
図 174	遺構外出土遺物③	242
図 175	遺構外出土遺物④	243
図 176	遺構外出土遺物⑤	244
図 177	第3次調査 遺構全体図 (Ⅱ期)	247
図 178	畑跡	248
図 179	第4次調査 遺構全体図 (Ⅰ期)	251
図 180	竪穴建物跡 SIO7～09 平面図	252
図 181	第4次Ⅰ期 溝 SD03～12、ビット SP21～23	253
図 182	SIO7、SIO8 出土土器	254
図 183	SIO9、溝 (SD)、Ⅰ期遺構外①出土土器	255
図 184	Ⅰ期遺構外②出土土器	256
図 185	第4次調査 遺構全体図 (Ⅱ期)	259
図 186	竪穴建物跡 SIO5、SIO6 畑?、ビット SP05	260
図 187	ビット SP06～09、SP12・13	261

図 188	SP14～17、SP19・20	262
図 189	Ⅱ期出土土器	263
図 190	第4次調査 遺構全体図(Ⅲ期)	266
図 191	竪穴建物跡 SIO1、SIO2	267
図 192	竪穴建物跡 SIO4 カマド、溝 SD01、SD02、ピット SP01～SP04	268
図 193	竪穴建物跡 SIO3 カマド、SIO4	269
図 194	Ⅲ期、Ⅳ期、部室棟地点出土土器	270
図 195	部室棟地点全体図	272
図 196	新町前遺跡遺構変遷図	313

表 目 次

表 1	発掘調査に係る届出等一覧	1
表 2	周辺遺跡一覧	8
表 3	第1次土坑(SK)計測表	96
表 4	第1次ピット(SP)計測表	103
表 5	第1次調査(Ⅰ期)出土土器観察表	154
表 6	出土貿易陶磁分類表	177
表 7	出土土製品観察表	180
表 8	出土輪羽口計測表	180
表 9	出土石製品観察表	180
表 10	第1次調査出土金属製品観察表	184
表 11	第1次調査(Ⅱ期)出土土器観察表	200
表 12	第2次Ⅰ区出土土坑・ピット計測表	202
表 13	第2次Ⅰ区調査出土土器観察表	210
表 14	第2次Ⅲ区出土土坑計測表	216
表 15	第2次Ⅲ区調査出土土器観察表	229
表 16	第3次調査出土土器観察表	245
表 17	溝状遺構計測一覧表	250
表 18	第4次調査(Ⅰ期)出土土器観察表	257
表 19	第4次調査(Ⅱ期)出土土器観察表	264
表 20	第4次調査(Ⅲ期・Ⅳ期・部室棟地点)出土土器観察表	271

第1章 経緯

第1節 調査に至る経緯

新町前遺跡の発掘調査は、山梨県教育委員会学校施設課が実施する峡南地域単位制・総合制高校建設事業に伴い実施したものである。事業着手に先立っては、詳細な建築計画が未確定であったことから、事業用地となる市川高等学校、市川三郷町民会館及び同町民体育館の敷地約50,000㎡を対象に試掘調査を実施することとなった。試掘調査は平成30年4月24日～27日にかけて実施し、その結果、旧地表面下約1.5m地点において中世後半に帰属する水田床土層及びその下層の黒褐色砂質土層から平安時代の土器及び貿易陶磁（龍泉窯系青磁）細片が出土した。特に水田床土層は事業用地に広範囲に広がっていることが分かった。

このことを受けて、山梨県教育委員会学校施設課（事業課）及び同学術文化財課による協議を経て、山梨県埋蔵文化財事務取扱要綱に基づいて、建設工事等により埋蔵文化財に影響が及ぶ範囲について記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなった。新町前遺跡の発掘調査に係る届出等は表1の通りである。

表1 発掘調査に係る届出等一覧

調査年次	日付	文書番号	件名	あて先	発行者
第1次調査	平成30年4月10日		峡南地域単位制・総合制高校建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する覚書		
	平成30年5月9日	教理文第61号	埋蔵文化財発掘調査の実施について	教育長	所長
	平成31年2月6日	教理文第629号	埋蔵文化財の発見について	教育長	所長
	平成31年3月20日	教理文第702号	実績報告の提出について	学術文化財課長	所長
	平成31年3月25日	教理文第739号	埋蔵文化財調査の終了について	教育長	所長
第2次調査	平成31年4月1日		峡南地域単位制・総合制高校建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する覚書		
	令和元年7月17日	教理文第379号	埋蔵文化財発掘調査の実施について	教育長	所長
	令和元年9月19日	教理文第388号	埋蔵文化財の発見について	教育長	所長
	令和2年3月18日	教理文759号	実績報告の提出について	学術文化財課長	所長
	令和2年3月19日	教理文769号	終了報告の提出について	学術文化財課長	所長
第3次調査	令和2年4月1日		青洲高校建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する覚書		
	令和2年12月17日	埋文第859号	埋蔵文化財発掘調査の実施について	知事	所長
	令和3年3月1日	埋文第1109号	埋蔵文化財の発見について	知事	所長
	令和3年3月17日	埋文第1182号	埋蔵文化財の発掘調査の結果について	文化振興・文化財課長	所長
	令和3年3月17日	埋文第1183号	実績報告の提出について	文化振興・文化財課長	所長
第4次調査	令和3年4月20日		青洲高校建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する覚書		
	令和4年3月8日	埋文第1277号	埋蔵文化財の発掘調査の実施について	知事	所長
	令和4年4月1日		青洲高校建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する覚書		
	令和4年4月21日	埋文第81号	実績報告書の提出について	文化振興・文化財課長	所長
	令和4年6月15日		青洲高校建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する変更覚書		
	令和4年8月1日	埋文第560号	埋蔵文化財の発見について	知事	所長
	令和4年9月12日	埋文第698号	埋蔵文化財発掘調査の結果について	文化振興・文化財課長	所長
	令和5年3月31日	埋文第1688号	実績報告の提出について	文化振興・文化財課長	所長
令和5年4月3日		青洲高校建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する覚書			

第2節 発掘調査の経過

第1項 1次調査の経過

調査対象範囲 1次調査は、町民体育館、町民会館及び県立市川高校のグラウンドの一部を事業用地として実施した。発掘調査の着手に当たっては、町民体育館及び町民会館の解体工事と並行して実施することとなり、試掘調査が不十分であったことを踏まえて、基礎解体時に立会調査または解体工事終了後に随時試掘調査を実施しながら保護措置を必要とする遺跡の範囲を確認しつつ調査を進めることとなった。このことを受けて、調査着手時点で市川高校グラウンドの一部に当たる約600㎡（便宜的にⅠ区と呼称）を対象に調査を実施したⅠ区の調査に先立ち、市川高校のグラウンド用地内において試掘トレンチを設定し、グラウンド内用地の西側についても遺跡の広がりを確認した。Ⅰ区の調査着手に当たっては平成30年4月10日に県教委市川高校事務室及び学術文化財課、埋蔵文化財センターの3者で、調査の開始時期及びグラウンドの使用範囲について協議を行い、平成30年4月26日に発掘調査に着手した。同年5月22日には、町民体育館の基礎解体に伴い立会調査を行い、水田耕作土層及び平安時代の遺物包含層に当たる黒褐色砂質土層が遺存していることを確認し、調査対象地を町民体育館跡地に該当する事業用地約1,300㎡（同じくⅡ区と呼称）が加えて調査対象となった。同年10月26日には、町民会館の解体工事が終了したことを受けて試掘調査を実施し、事業対象地の北東隅の一部が既掘の範囲となっていることを把握したが、そのほか約3,500㎡（同じくⅢ区と呼称）について遺跡の広がりを確認したため、同年5月11日から表土掘削に着手した。同10月には事業用地南西端に設置されるごみ集積施設の建設が計画されていることから、試掘調査を実施し、事業対象地約300㎡（同じくⅣ区と呼称）について遺跡の広がりを検出した。このことを受けて、翌平成31年1月8日に執り行われた起工式終了後、同年1月10日にⅣ区の発掘調査に着手した。以上の経過より、1次調査として総面積約5,700㎡について2面の調査を実施した。

調査の経過 各区の調査経過は以下の通りである。Ⅰ区は平成30年5月10日に表土掘削に着手した。表土の掘削については、1面目とした15世紀代の水田耕土上に堆積した砂礫層を除去した。水田の畦畔が良好な状態で遺存していることが表土除去中に確認できたことから、畦畔を掘削しないよう慎重に掘削を行った。Ⅰ区の表土掘削は5月18日までに完了し、5月23日から発掘作業員による人力掘削作業を実施し、検出した遺構については必要に応じて図面記録、写真記録をとって掘削を進めた。6月10日には空中写真撮影を実施し、翌20日から水田耕土及びその下層の10～12世紀の遺物包含層を人力により層別的に掘削した。遺物包含層から出土した遺物のうち大きい破片については、光波測距儀による位置情報の取得に努めた。以下各区の調査についても同様の手法で調査を行っている。地表面化約1.8mにおいて遺構確認を行い、10世紀前半（甲変型M期）～11世紀後半（甲変型D期）の竪穴建物跡4軒を検出し、試掘調査では未確認であった集落跡の存在が明らかになった。検出した遺構については、1面目同様に図面記録、写真記録を取得し、一連の記録作業が終了した9月18日には、空中写真撮影を実施した。9月19日には、バックホーによる埋め戻し作業を実施した。Ⅱ区の調査はⅠ区2面目の調査に平行して開始した。調査は重機による表土掘削作業に着手し、掘削作業に合わせて水田耕土の精査を行った。遺存している水田耕土を精査した後、9月20日に空中写真撮影を実施した。空中写真撮影後、検出した水路（SD1001）は土層確認用のサブトレンチを掘削し、記録作業を行ったうえで1面目の作業を終了した。水田耕土及び平安時代遺物包含層の掘削は調査対象範囲が事業用地全体に広がっていることを想定して、調査期間が十分に確保できない事態を考慮し、バックホーを用いて慎重に間層掘削を実施した。間層掘削に当たり出土した遺物については、原位置を留めているかを都度判断して可能な限り位置情報の取得を行った。2面目では10世紀前半～11世紀後半の竪穴建物跡17軒等の遺構を検出した。検出した遺構については、図面記録、写真記録を取得し、一連の記録作業が終了した10月30日には空中写真撮影を実施した。Ⅱ区の調査に平行して、Ⅲ区の表土掘削を実施した。Ⅲ区は調査面積が広いので、1面目の水田面は北側と南側の2回に分けて空中写真撮影を行った。北側の空中写真撮影は11月15日に行い、翌作業日からバックホーを用いた間層掘削を実施した。南側の空中写真撮影は11月30日に行い、北側の間層掘削に引き続き実施した。2面目の調査は、北側と南側に分割せずに一括で実施した。Ⅲ区では、10世紀後半～12世紀の竪穴建物跡23軒等を検出し、図面記録、写真記録を取得し、一連の記録作業が終了した12月14日には空中写真撮影を実施した。12月14日から埋め戻しを実施して、翌平成31年1月8日に執り行われた起工式に合わせてⅠ区～Ⅲ区の埋め戻しを完了した。Ⅳ区の調査は、1月10日から表土掘削を開始した。1面目では、これまでの水田耕土は北側一部のみ遺存しており、南側では畑の畝跡が検出した。1月18日までに畝間の掘削及び畝の検出、図面、写

真等記録作業を行い、同日に空中写真撮影を実施した。その後、バックホーを用いて間層掘削を行い、10世紀後半～11世紀後半の竪穴建物跡6軒を検出した。1月30日までに検出した遺構の記録作業を終え、1月31日に空中写真撮影を実施した。空中写真撮影後に埋め戻し作業を実施したが、発掘調査による掘削でごみ集積場建設に伴う地耐力が不足することが懸念されることが県教委学校施設課から指摘されたため、埋め戻しに当たっては、砕石を30cm毎に転圧しながら埋め戻した。2月4日までに埋め戻し作業を完了して、重機等の撤収を行い、2月4日に作業を完了した。

第2項 2次調査の経過

調査対象範囲 2次調査は平成31年度に実施した、市川高校敷地内及び隣接する市川三郷町所有地（職員駐車場及び町立保育所）において、受水槽設置及び弓道場建設に伴う発掘調査である。発掘調査の実施に先立っては令和元年5月29・30日に試掘調査を実施し、1次調査と同様の土層堆積及び遺物包含を確認した。このことを受けて、事業計画に基づき市川三郷町役場職員駐車場に設置される受水槽設置計画範囲をⅠ区、町立市川保育園跡地に建設される弓道場建設に伴い遺跡が破壊される建物基礎範囲をⅡ区、県立市川高校グラウンド内の受水槽設置計画範囲をⅢ区として発掘調査を行うこととなった。

調査の経過 Ⅰ区の発掘調査は、令和元年7月16日から9月13日に実施した。調査面積は約845㎡を対象とし、試掘調査の結果を踏まえて、1次調査同様2面の調査を行った。Ⅰ区の調査は、7月16日からバックホーを用いた表土掘削に着手し、7月16日から発掘作業員による人力掘削作業を開始した。1面目では中世後半頃の畑跡を検出し、図面、写真記録作業を行いながら畝間の掘削を行った。畑跡の掘削が完了した後、8月13日には空中写真撮影を実施した。1面目の記録作業が完了した後、2面目の遺構面までの間層はバックホーを用いて掘削した。2面目において検出した遺構については、都度図面、写真記録作業を行い、4月12日に空中写真撮影を実施して作業を発掘作業完了した。作業完了後、9月13日までに撤収作業を行い、作業を終了した。なお、Ⅰ区は発掘作業終了後、受水槽設置工事に着手することから、埋め戻し作業を行わずに事業者に引き渡した。

Ⅱ区の発掘調査は、同7月16日に実施した。調査面積は約2㎡であり、これまでの中世水田層、平安時代集落跡に加えて、3層目の遺物包含層を検出した。調査はⅠ区の土層堆積に対応する層の確認及び当該層における遺構確認を行いながら、検出した遺構については掘削及び図面、写真記録作業を行い、掘り下げを進めた。掘り下げに当たってはバックホーを用いて慎重に掘削作業を実施した。狭小範囲であることから、掘削深度3.6mまで掘り進めた段階でバックホーによる掘削及び法面の形成限界に達したため、以深の掘削作業は行わず、埋め戻しを実施した。同日中に埋め戻し作業を行い、Ⅱ区の作業を終了した。

Ⅲ区の発掘調査は、同10月15日～翌令和2年2月4日に実施した。10月15日からバックホーを用いて表土を掘削し、10月15日から作業員による人力掘削作業を実施した。表土の掘削に当たっては、発掘調査区の北西隅が試掘トレンチの設定箇所当たり、法面崩落の危険性が予見されることからトンバッグによる法面補強を行った。1面目では中世後半頃の水田及び畑跡を検出し、検出した遺構の図面記録及び写真記録を行った。11月20日には空中写真撮影を実施し1面目の調査作業後2面目の調査に向けて、バックホーを用いて間層掘削を実施して、人力作業により遺構検出を行った。2面目の調査では、竪穴建物跡と思われる遺物遺物集中区や焼土を7ヶ所検出したが、明確なプランの確認には至らなかった。したがって、遺物の位置情報の取得に努めるとともに、土層堆積状況の図化記録を都度行い、調査終了後に竪穴建物跡の推定プランを検討することとした。2面目の記録作業を一通り行った後、1月31日には空中写真撮影を実施し、発掘調査は2月4日までにすべての図面記録、写真記録作業を行い、作業を完了した。Ⅲ区は、Ⅰ区と同様に発掘作業終了後、受水槽設置工事に着手することから、埋め戻し作業を行わずに事業者に引き渡した。

第3項 3次調査の経過

調査の経過 3次調査は青洲高校に係る屋内運動場施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査である。当該地点における埋蔵文化財調査については、近接して実施した1次、2次の調査成果を受けて実施した。発掘調査は、令和2年12月14日に表土掘削に着手し、翌15日に作業員による人力掘削作業を行った。1面目では中世後半頃の畑跡を検出し、翌令和3年1月上旬までに遺構確認、掘削及び図面又は写真撮影による記録作業を実施し、1月5日に空中写真撮影を実施した。1月14日には2面目の平安時代遺構面上面までをバックホーを用いて掘削し、間層掘削終了箇所から随時、作業員による人力掘削作業を進めた。2面目では10世紀から11世紀に比定される竪穴建物跡3軒及び掘立柱建物跡1棟、土坑3基を検出した。2月26日までに遺構確認、掘削及び図面又は

写真撮影による記録作業及び空中写真撮影を実施し、現場での記録作業を終了した。調査区の埋め戻しは屋内運動場建設工事の一環で実施することとなっているため、埋め戻し作業を行わず事業者に引き渡した。

第4項 4次調査の経過

調査区の設定 4次調査は、雨水浸透施設建設工事に伴うものである。第3次調査に合わせて実施した試掘調査により、第1～3次調査において把握されていた中世後半の遺構面（1面目）及び平安時代の遺構面（2面目）に加えて、古墳時代前期の遺構面（3面目）の存在が想定された。設定した調査区は、第3次調査区の西側に約20mの調査区を設定して「部室棟地点」と呼称し、雨水浸透施設建設範囲に設定した約584㎡の調査区を「雨水施設地点」と呼称して調査を実施している。

調査の経過 部室棟地点の発掘調査は、令和4年2月26日に着手し、表土は3月7日からバックホーを用いて掘削し、掘削終了箇所から随時、作業員による人力掘削作業を進めた。1面目の調査では、地表面下約0.9m地点において中世後半に帰属し、1～3次調査において検出している田畑層と同一と想定される土層を検出した。1面目で検出した土層については、畝、畦畔等の構造は検出しなかった。また、1面目下層では洪水に由来すると思われる亜角礫を主体とする砂礫層が厚く堆積しており、既往の調査で検出している平安時代～中世にかけての遺物包含層及び遺構面は検出しなかった。このことから、部室棟地点における調査は、3月末までに埋め戻しを終了した。

雨水浸透施設の発掘調査は、部室棟地点の表土掘削作業に引き続き実施して3月4日に着手した。当初6月24日までの調査期間を予定していたが、3面目の下層において弥生時代終末期～古墳時代初頭の遺物包含層及び遺構面が確認されたため、関係機関との協議を経て、調査期間を7月29日まで延長することとなった。なお、4面目は地表面下約4.0mに位置しており、雨水浸透施設による施工深度より深い位置にあるが、雨水浸透の作用により遺跡の埋没環境が変化してしまう可能性が危惧されることから、保護措置として発掘調査を行うこととなった。雨水浸透施設地点の発掘調査では、地表面下約0.9mにおいて中世後半の水田床土層を検出し、同層上面において溝状遺構及び噴砂跡を検出した。水田床土層を除去すると、黒褐色土層において平安時代後期～中世前半に帰属する遺物包含層及び竪穴建物跡等を検出する遺構面（2面目）が存在する。地表面下約2.5mにおいては、弥生時代終末期～古墳時代初頭に帰属する竪穴建物跡を検出する遺構面（3面目）を確認し、地表面下約4.0mでは弥生時代終末期の竪穴建物跡を検出した遺構面（4面目）を確認した。調査においては、各遺構面の間層はバックホーを用いて除去し、表土掘削終了箇所から随時、作業員による人力掘削作業及び検出遺構の測量、写真等記録作業を実施した。ドローンを用いた空中写真撮影は2～4面目において3回に分けて実施し、調査作業を終了した。

第2章 遺跡の位置と周辺環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

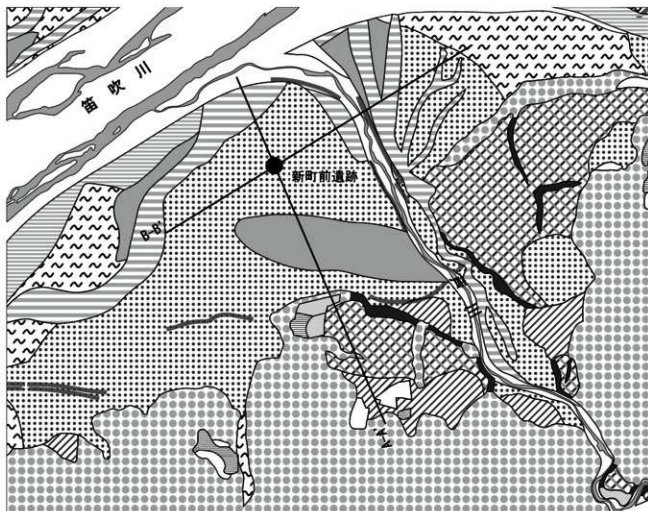
新町前遺跡が所在する西八代郡市川三郷町市川大門は、御坂山地を水源とする一級河川芦川が曾根丘陵より流れ出し形成する扇状地（芦川扇状地）にある。芦川の現行流路は芦川扇状地の中央やや東寄りを行流している。扇状地の両脇は芦川扇状地により浸食された山地ないしは山麓堆積地形から段丘崖によって急峻な勾配を示している。一旦扇状地形に入ると、やや緩やかな勾配によって笛吹川まで扇状地形が続いている。国土地理院治水地形分類図（図1）によると、扇状地扇頂部中央に当たる芦川右岸沿いは低湿地が広がっており、現在においても水田耕作が行われている。芦川右岸にある山地～段丘面は北側にせり出しており、当該地域における扇状地は芦川が流入した「川浦」辺りから北に約1.5kmの地点を頂部として扇状を呈している。一方芦川左岸については、山地から段丘面が北側にせり出しているものの右岸側ほど顕著ではない。段丘面の前面には微高地（自然堤防）が北西方向に形成されており、微高地南側の段丘面との境には扇状地形（または低湿地）が広がっていることから、一時期は芦川が段丘面を取り巻いて流下していた可能性があり、芦川左岸地域では段丘面を取り巻く形で扇状地形が展開している。扇状地形は笛吹川に至るまで続く。現行の笛吹川流路は現在の桃林橋付近から青洲橋に至るまでに若干北側に蛇行しているが、明治期の測量地形図では笛吹川はもっと南側を流れており、中央市大田和地区を取り巻く形で大きく蛇行している。現在の国道140号線（笛吹ライン）が笛吹川沿いに北側に膨らんでいるのは、笛吹川が芦川扇状地の堆積物に押された線形をしていることに由来すると考えられる。また、同測量地形図では笛吹川、釜無川、芦川が同じ場所で合流している。現在の釜無川、笛吹川、芦川の合流地点が変更になるのは、明治40年に甲府盆地を襲った大水害の対応として、地元の名士である渡辺青洲（信）が尽力して合流地点を約3km西側に移動する堤防（青洲堤）を築いたことによる。現在の市川大門地区周辺の地形は、明治時代以降、水害への対応として行われた河川改修、堤防構築等により自然地形に対して大きく変更されている。

新町前遺跡は、芦川扇状地の扇端部中央に位置している。笛吹川の左岸約300m地点にあり、市街中心部からはやや北へ外れた場所にある。遺跡から南へ約500mには東西方向に延びる微高地（自然堤防）が展開しているとされ、現在の市街中心部はこの微高地上に位置している。標高は約248.0m。周辺の土地利用としては、芦川の両岸に展開する段丘面に分類される地域の山地側においては果樹栽培が盛んにおこなわれており、扇状地扇端部においては水田耕作が多い。芦川右岸地域では、段丘面の上に矢作地区、上野地区の市街地が展開しており、その市街地内をJR身延線が通っている。芦川左岸地域も同様に段丘面上を狙ってJR身延線が通る。交通路としては、現在の県道3号甲府市川三郷線が「市川道」と比定されており、芦川を渡った後に微高地上の中心を通る「中央通り」が市川道とされる。近世にはこの通り沿いに市川代官所が設置されており、当時の市街中心部であった。この市川道は、市街中心部を通った後に新町前遺跡の西側を通って、押切の渡しや押切刑場（図2A・G）に向かっていたとされる。

新町前遺跡は扇状地地形内でも標高の低い地域に立地している。図1A-A'断面から、標高が高い土地には寺院や伝承地である館跡、延喜式内社、代官所などが設置されており、一般的集落跡や水田跡と考えられる当遺跡は罹災の危険性が比較的高い場所に立地していることとなる。ただし、図1B-B'断面では、扇状地中央部の凸部で標高が高い土地に位置していることがわかり、扇状地低地部の災害危険区域中でも、少しでも高い場所に暮らそうとした防災意識があったと想定される。市川大門地区における遺跡は、新町前遺跡のほか自然堤防上に位置している御陣屋遺跡のみに限られている。両遺跡とも近年になって新たに発見された遺跡であり、市川大門地区においては遺跡がまだまだ地中に埋もれている可能性が十分にある。これまでの埋蔵文化財調査による地下情報の取得は、これから更に推進されていくと考えられ、その中で、新町前遺跡周辺の周辺環境に関する知見が更新されていくことが期待される。



遺跡上空から見た芦川扇状地



国土地理院「治水地形分類図」を基に作成

<凡例>

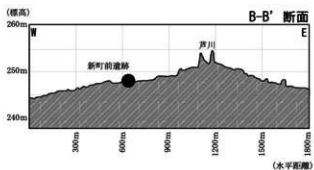
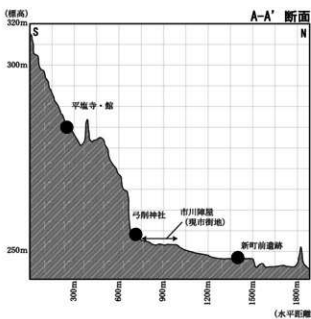
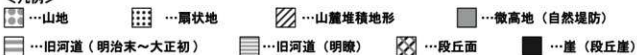


図1 新町前遺跡周辺の地形

第2節 遺跡周辺の歴史的環境

新町前遺跡は弥生時代、平安時代～中世の遺跡で、平成30年に新たに見つかった周知の埋藏文化財包蔵地である。遺跡が所在する西八代都市市川三郷町市川大門地域では、当時周知の埋藏文化財包蔵地は確認されておらず、遺跡の等閑地となっていた。平成30年に実施した当事業に先立つ試掘調査によって、はじめて遺跡の存在が明らかになり、またその遺跡の範囲が東西約200m、南北約300mにわたる大規模な遺跡であることが第1～4次にわたる発掘調査の結果わかってきた。さらに近年では、市川大門郵便局の新築工事に先立つ試掘調査において、中世～近代の御陣屋遺跡が発見されるなど、市川大門地域における遺跡の等閑地であるという認識は払しょくされつつある。

新町前遺跡が所在する芦川の扇状地周辺では、奈良・平安時代の遺跡を中心に、縄文時代～中世の遺跡が点在している。縄文時代では、一条氏館跡、上野遺跡、道林遺跡が見つかった。一条氏館跡では、第4次調査において、縄文時代早期（鶴ヶ島台）、前期前半、前期末（十三菩提）、中期（藤内・井戸尻）に帰属する遺構が検出されている。上野遺跡では、縄文時代前期後～末葉の竪穴建物跡が見つかった。扇状地を形成する芦川右岸に展開する丘陵上に縄文集落が点在している状況がみられる。扇状地上において縄文時代の遺跡は見つからない。

芦川扇状地の右岸縁辺部においては、一条氏館跡、上野遺跡において広範囲にわたり弥生時代後期の集落跡や方形周溝墓が多数見つかった。これらの成果から丘陵上に弥生時代集落が展開すると考えられていたが、今回、新町前遺跡の発掘調査において、地表面下約4mにおいて弥生時代終末期～古墳時代初期の集落が見つかり、当該期の生活圏について一石を投じる成果となっている。

古墳時代の遺跡では、上野古墳群、エモン塚古墳などの古墳が芦川右岸の丘陵に分布する。曾根丘陵から続く墓域の西端部に位置しており、弥生時代の上野遺跡から継続する墓域の展開が見られる地域になっている。

奈良・平安時代になると、遺跡等が芦川の扇状地上に分布するようになる。扇状地扇端部には、天台宗の甲斐国における拠点の古代寺院の平塩寺があり扇状地のほぼ全域を見わたす位置に座している。その他、芦川扇状地の西縁部を担っている断崖上には延喜式内社である弓削神社が鎮座している。これらの宗教的な拠点施設が芦川扇状地の縁辺部に位置している。一方で、一般的な集落についての配置に関しては、これまで発掘調査がほとんど行われていない当地域においてはわかっていないことは少ない。本遺跡の発掘調査により、その階層的な空間構成に関して検討し得る資料を提供したと考える。

中世では、平塩寺の北側に甲斐源氏の祖源義清が甲斐国入国に伴って館を築いたとの伝承がある平塩館がある。源義清が甲斐国に入国したのは1130年頃とされ、『尊卑文脈』において、「甲斐国市河荘」に配流されたとの記述がある。甲斐国市河荘の位置については、『法勝院領目録』により具体的な条里坪付が示されているが、その四至は判然としない。磯貝正義氏（磯貝1988）、ラインハルト・ツェルナー氏（ツェルナー1990）によって、その本拠地が旧玉穂町、旧田高町付近に比定されているもの、市川大門地域が古代市河荘の荘域であった根拠は示されていない。一方で、秋山敬氏は「在地に武士団が形成される過程」で市河荘が分解し、「鎌田、稲積、小井川、布施、青島」荘が成立したことを想定している。また、その中で市川大門地域における荘域には青島荘が命名される中で、地元「市川」の地名が残ったことを推定した（秋山2003）。義清が入国した時期には、すでに青島荘が立荘されていた可能性があり、その荘域は古代市河荘とは別である可能性もある。その後の文献史料においても義清が「青島荘下司」であったことを記す資料があり、荘園の動向と義清の入国については、より詳細な検討が待たれる。発掘調査では、現在の市川大門の市街地において、市川大門郵便局の建て替えに伴う「御陣屋遺跡」の発掘調査が行われている。御陣屋遺跡の中世遺構は建物の設計上に狭小地の調査に留まっているが、石垣いかなどの居住空間と思われる遺構が検出されている。このことから、当該自然堤防上において少なくとも中世段階には人の生活空間としての利用がなされていたことが明らかになっている。

近世では、市川大門市街地となっている自然堤防上に「市川代官所」が設置されている。近世の甲斐国の物流を担う富士川舟運を擁する地域であり、その重要性が窺える動向である。また、芦川、笛吹川、釜無川の3つの河川が合流し、増水することにより、その上流に位置する押出川が逆流する現象が度々発生したとされる。このことにより、明暦期の代官である中井清太夫が押出川の河床を下げる工事を行い逆流現象を解消したとされる。その功績により中井清太夫の生き祠が設置された。

市川大門地域においては、現段階において芦川扇状地域における人の活動領域は未解明な部分が多い一方で、中世以降の文献史学等から見える当地域の状況は、要衝的な要素が多く、歴史的背景の整理が必要である。

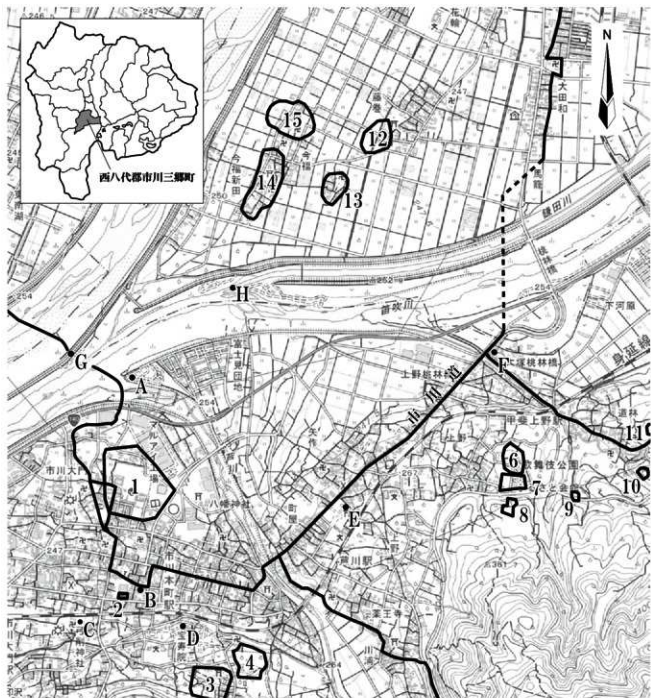


図2 周辺遺跡分布図

表2 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	時代	種別	備考
1	新町南遺跡	平安・中世	集落跡	県 2021
2	御陣屋遺跡	中世～近代	集落跡	県 2023
3	御屋敷遺跡	奈良～中世	寺院跡	市川三郷町教委・山文研 2016
4	平塩館跡	平安・中世	城館跡	源義清配流の地伝承地
6	上野古墳群	古墳	古墳	
7	一条氏館跡遺跡	縄文～中世	集落跡	三珠町教委 1988、1991、1993
8	上野遺跡	縄文～古墳・中世	集落跡	三珠町教委 1989
9	一城林遺跡	弥生	集落跡	
10	エモン塚古墳	古墳	古墳	
11	道林遺跡	縄文	集落跡	
12	延里遺跡	近世	散布地	
13	神村遺跡	近世	散布地	
14	中道下遺跡	近世	散布地	
15	今福村東遺跡	近世	散布地	

番号	史跡等名称
A	押切刑場及び普濟堤
B	市川陣屋
C	弓削神社
D	宝寿院
E	表門神社
F	大塚色水路新造碑 代官中井清太夫生祠
G	押切の渡し
H	忍の渡し

〈凡例〉
 県…山梨県
 教委…教育委員会
 山文研…(公財)山梨文化財
 研究所

第3章 調査の方法

第1節 発掘調査の方法

調査区とグリッドの設定 発掘調査における表土掘削作業は、各年次の調査区とも試掘調査にて得られた結果を基に遺物包含層上層まで、0.45㎡または0.7㎡クラスバックホーを用いて実施した。表土掘削がある程度終了した段階で、調査区内に一辺5m間隔で方眼杭を設置しグリッドを設定した。調査区の設定においては、第1次調査における調査区は、既存建物である市川三郷町民体育館、町民会館の解体工事に合わせて調査区を拡張しながら実施したため、Ⅰ～Ⅳ区に区分けしておこなった。なお、町民体育館、町民会館敷地における遺跡の有無の確認のためのトレンチ調査を実施しながら、必要に応じて調査区を拡張している。また、グリッドの設定については、第1次調査実施時点では付帯工事計画が未確定であったことから、工事計画が確定した地点から試掘調査を実施し各年次の発掘調査区を設定しているため、第1次調査Ⅰ区の北西隅を起点として世界測地系座標に即して設定を行っている。

したがって、X軸方向（南北方向）のX=48,065mを起点としてアラビア数字を付し、Y軸方向（東西方向）では、Y=75mを起点としてアルファベットを付した。また、X軸方向でグリッド番号「1」以上のグリッド番号は、「100」からさかのぼる順で番号を付し、Y軸方向でグリッド番号「A」以西のグリッド番号は、「ZZ」、「ZY」、「ZX」・・・となるようにさかのぼる順で番号を付した（図3）。なお、上記のグリッド番号設定は、今回の新町前遺跡（第1～4次）調査に係る総括番号であり、第1次調査及び第2次調査はこの番号を用いた。第3次調査では個別番号としてグリッド番号を付している。第3次調査では、X軸方向をX=48,165mが「1」、Y軸方向をY=0mが「A」を原点として、5mグリッドの北西の杭番号を「A-1区・・・」といった名称でグリッド名を付した。第4次調査も同様にグリッド番号を個別に付しており、X軸方向は第3次調査と同様にX=48,165mが「1」を起点として、Y軸方向はY=30mが「A」を起点としている。

遺構名の付番 発掘作業は、第1面目の調査は水田耕土直情まで重機を用いて掘削して、畦畔、水路等遺構の検出、精査を実施した。検出した遺構については、『発掘調査のてびき-集落遺構発掘編-』（文化庁文化財部記念物課監修、奈良文化財研究所編2010同成社）にならない、SB：掘立柱建物、SD：溝・大溝、SI：竪穴建物跡、SK：土坑、SL：焼土、SN：田畑、SP：ピット、SS：配石遺構、集石、SX：性格不明遺構、NR：自然流路といった遺構番号を用いて付番した。確認した遺構は、原則として半裁して土層の確認に努め、土層断面図の図化及び写真撮影等の記録を行ったのちに完掘した。遺構平面図については写真測量によって平面図を作成した。出土遺物はトータルステーションを用いた光波測量により三次元位置情報を記録して取り上げた。原位置を保てなかったものについてはグリッド毎に一括して取り上げた。

空中写真撮影 遺構がある程度掘りあがった状態で、空中写真による全景写真記録作業を実施したが、一部ベルトが残ったまま撮影を行ったものもある。空中写真撮影は、第1次調査ではⅠ～Ⅳ区×2面の遺構面について8回に分けて写真撮影を行った。その他、地理的景観、歴史的景観を表現することを目的として周辺の俯瞰写真撮影も合わせて実施した。発掘調査の記録として、発掘調査風景の写真記録も実施している。

第2節 調査体制

発掘調査担当

【第1次調査（平成30年度）】

御山 亮済（主任・文化財主事）
敷野 優（主任・文化財主事）
岩永 祐貴（文化財主事）
長田 隆志（非常勤嘱託職員）

【第2次調査（令和元年度）】

宮里 学（副主査・文化財主事）
敷野 優（主任・文化財主事）

【第3次調査（令和2年度）】

久保田健太郎（主任・文化財主事）

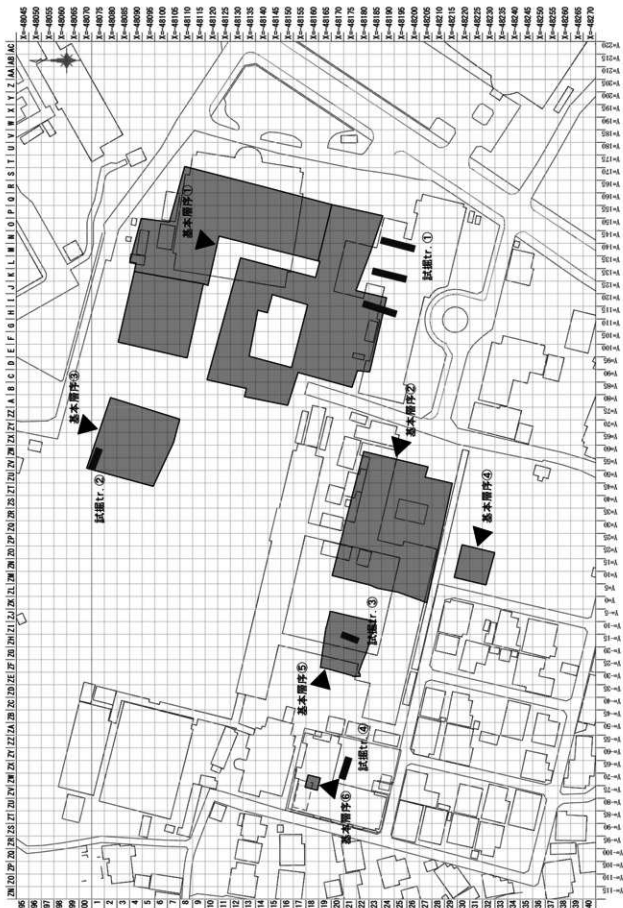


図3 グリッド配置図

上野 桜 (主任・文化財主事) (史跡資料活用課)

小池 準一 (会計年度任用職員) (史跡資料活用課)

【第4次調査 (令和4年度)】

高野 玄明 (専門員)

岩永 祐貴 (文化財主事)

數野 優 (副主査・文化財主事)

【整理作業担当】

〔平成30年度〕	御山亮済	<第1次基礎的整理>
〔令和元年度〕	宮里 学、數野 優	<第2次基礎的整理>
	御山亮済	<第1次本格的整理>
〔令和2年度〕	御山亮済	<第1次本格的整理・第1次概報刊行>
	宮里 学、數野 優 (副主査・文化財主事)	<第2次本格的整理>
〔令和3年度〕	上野 桜、小池準一	<第3次基礎的整理>
〔令和4年度〕	御山亮済	<第1～3次本格的整理>
	御山亮済、小高鉄平 (主任・文化財主事)	<第4次基礎的整理>
〔令和5年度〕	御山亮済	<第1～4次発掘調査報告書刊行>

第3節 試掘調査の成果

峡南地域単位制・総合制高校建設事業の実施に先立ち実施し、新町前遺跡の発見となった試掘調査の成果については、『年報34』(山梨県埋蔵文化財センター2018)に記載されているので参照されたい。第1章で記したように、通常は工事計画が確定した段階で試掘調査を実施しているが、本件は発掘調査の延長で試掘調査を実施した分については当センターが刊行している『県内分布調査報告書』に掲載されていない。そのため、本節をもって報告する。なお、第1次調査着手に先立つ試掘調査では、調査対象面積に対して極狭小であったため、調査対象面積の確認のための調査を平成30年4月20日に実施した。その結果、旧市川高校グラウンド敷地内には遺跡が広がっていることが把握された。

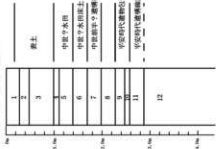
平成30年10月26日には、旧町民会館の解体工事が完了したタイミングで遺跡範囲確認のためのトレンチ調査を実施し(試掘①tr)、調査対象範囲の南西隅において大規模な攪乱を検出したことから約100㎡の範囲について調査不要と判断した。2次調査に当たって平成31年2月に実施した試掘調査(試掘②tr)では、地表面下約1.0m地点において第1次調査における1面目(Ⅱ期)遺構面と同一面と思われる中世水田面及び石列を検出し、地表面下約2.9mでは平安時代の遺物包含層を伴う遺構面(Ⅰ期)を検出した。当該面においては、土坑・ピット・堅穴状の掘り込みを検出している。このことを受けて保護措置が必要であると判断したが、当該範囲において受水槽が設置される計画であることから2次調査を実施することとなった。

試掘③トレンチは受水槽設置計画に伴う試掘調査である。第3次調査の延長で試掘調査を実施した。調査の結果、地表面下約2.8mにおいて畑跡(1面目)、同約3.3m地点において水田跡(2面目)、同約3.8m地点において生活面(3面目)を検出した。このことを受けて保護措置が必要であると判断したが、当該範囲において受水槽が設置される計画であることから第3次調査を実施することとなった。

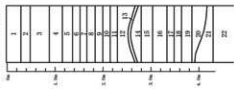
第4節 調査の目的と課題

新町前遺跡の発掘調査は、市川三郷町市川大門地区における初めての本格的な発掘調査である。これまでは、古代市河荘や市川郷の遺称地として考えられていた地域であったが、考古学的な調査のメスが入らなかったこともあり、今回の調査における期待感が高かった。発掘調査においては、工事工程上、試掘調査が狭小範囲でしか実施できなかったことや、試掘調査では遺物包含層を検出したものの明確な遺構を検出できなかったことから、事前の検出遺構の想定ができなかった。そのため、事前に調査の目的を設定することができなかった。発掘調査においては、表土掘削に伴い約90cmの砂礫層を撤去している。このことから、この地域は河川氾濫原であるという認識が地元住民からも根強く「遺跡なんて無い」という聞き取りもされている。調査の目的としては、検

試験②tr.土層柱状図



試験③tr.土層柱状図



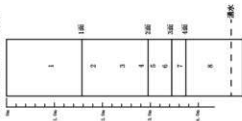
試験④tr.土層柱状図

1. 砂土
2. 砂土
3. 砂土
4. 砂土
5. 砂土
6. 砂土
7. 砂土
8. 砂土
9. 砂土
10. 砂土
11. 砂土
12. 砂土

試験①tr.土層説明

1. 101K5/4 砂土 (100%以上砂土を含む)
2. 101K2/3 砂土 (100%以上砂土を含む)
3. 101K0/2 砂土 (100%以上砂土を含む)
4. 101K2/3 砂土 (100%以上砂土を含む)
5. 101K2/3 砂土 (100%以上砂土を含む)
6. 101K2/3 砂土 (100%以上砂土を含む)
7. 101K2/3 砂土 (100%以上砂土を含む)
8. 101K2/3 砂土 (100%以上砂土を含む)
9. 101K2/3 砂土 (100%以上砂土を含む)
10. 101K2/3 砂土 (100%以上砂土を含む)
11. 101K2/3 砂土 (100%以上砂土を含む)
12. 101K2/3 砂土 (100%以上砂土を含む)
13. 101K2/3 砂土 (100%以上砂土を含む)
14. 101K2/3 砂土 (100%以上砂土を含む)
15. 101K2/3 砂土 (100%以上砂土を含む)
16. 101K2/3 砂土 (100%以上砂土を含む)
17. 101K2/3 砂土 (100%以上砂土を含む)
18. 101K2/3 砂土 (100%以上砂土を含む)
19. 101K2/3 砂土 (100%以上砂土を含む)
20. 101K2/3 砂土 (100%以上砂土を含む)
21. 101K2/3 砂土 (100%以上砂土を含む)
22. 101K2/3 砂土 (100%以上砂土を含む)

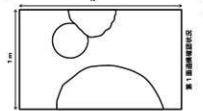
試験④tr.土層柱状図



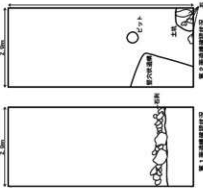
試験④tr.土層説明

1. 砂土
2. 砂土
3. 砂土
4. 砂土
5. 砂土
6. 砂土
7. 砂土
8. 砂土

試験②tr.平面略図



試験②tr.平面略図



試験④tr.平面略図

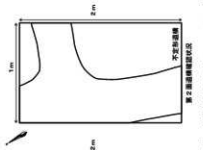


図4 試験調査トレンチ土層柱状図及び平面略図

出した遺構について、芦川河川氾濫原となる地域における遺地、遺跡立地としての地質条件や環境の変遷に重きを置いて、扇状地扇端部における遺構形成のプロセスを把握することに努めた。また、発掘調査中においては、河川氾濫流路や地震による噴砂、地下水位の上昇などの災害や自然環境の変化を捉えることができ、またその災害に対して行った災害復旧の遺構や痕跡を検出している。これらの災害復旧に関する遺構も当該期、当該地に暮らした人々の重要な痕跡であると考え、調査に臨んだ。

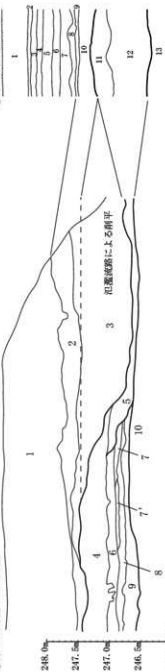
第5節 基本土層

新町前遺跡における基本土層については、各年次調査において確認した土層の対応関係の検討まで行うことができなかったため、それぞれの調査地点における土層堆積状況についてみていくこととする(図5)。

図5の上位に示した土層柱状図については、新町前遺跡の南北方向の土層堆積を示す。①第1次調査I区南壁においては、表層が旧市川高校のグラウンド造成土のほか、現代の盛り土が厚く盛られている。2、3層は氾濫砂礫層であり、最も東側に位置している第1次調査では最大約90cmの厚さで堆積している。当該層と同一と考えられるのは②第3次西壁9-10層、③第2次Ⅲ区北壁14層、④第2次I区東壁8層でみられる砂礫層である。第2～4次においては当該砂礫層が薄くなる状況が見て取れることから氾濫流路の最先端に当たると考えられる。これらは同一氾濫流路による堆積であり、上層に向かって細粒化する。当該氾濫砂礫層は褐色粘質シルト層によって構成される中世水田跡をパックしている(①4・5層、②11層、③18層、④9層、⑤8層、⑥6層)。発掘調査では、当該層上面において遺構精査を実施した。なお、I区においては氾濫流路により北西方向に削平されており、強い営力により土砂が運搬されたことが推測される。水田耕土層以下は黒褐色細粒砂層で構成される平安時代遺物包含層が層厚約50cm堆積している(①8・9層、②12層、③19～22層、④10層、⑤14層、⑥8層)。上層との層界は水田耕作により不整合面となっており、中世水田耕土からは平安時代の遺物が混ざって出土する。炭化物の混入量が多く、周辺における人の活動が活発に行われていたことがうかがえる。①10層、②13層、③24層、④11層、⑤9層、⑥10層は平安時代集落面の地山。黄褐色の細粒～粗砂層によって構成されている。詳細な観察結果は第8章第2節において記述されているが、北西方向の営力によって山側から運搬された礫層が細い筋になって堆積し、その筋状に分布する礫層の間に堆積した細粒の砂層が平安時代集落の生活面として利用されている。第1～3次調査I期遺構面においては、顕著に砂礫の筋状の分布が平面で検出している。この砂礫層の由来は芦川と考えられるが、現行流路は遺跡の北側を流れていることから、往時は遺跡南東の現在市街地となっている微高地(自然堤防)の当たりを取り巻いて芦川の流路が存在していた可能性が考えられる。当該土層以下を確認したのは⑤、⑥のみであるが、以深は褐色～暗褐色細粒砂、シルトによって構成されており緩やかな水流による安定した土砂の供給が続き、時々離水したタイミングで土壌化するというサイクルがみられる(⑤15～20層、⑥9～13)。離水して陸地化した時期に遺跡が形成されている(⑤18・20層、⑥13層)。当該層の時期は弥生時代後期に比定される。⑤については15・20層とも弥生時代後期の土器が主体的であり、その間に50cm程の土層堆積がみられ土層形成が活発であったと考えられるが、堆積土を構成する粒径に明確な変化を捉えることができず、その要因は明らかではない。この間層中では明確な礫の混入がほとんど見られないため、緩やかな水流で水量が増加したため、弥生時代後期段階で厚く堆積したのかもれない。

当該地域の基本的な土層堆積要因は、芦川に由来すると想定される河川碎屑物である。弥生時代後期～平安時代に至るまでは、やや安定した細粒砂の供給がみられ、途中⑥10層のような砂礫が供給されるような河川氾濫が起きていたと考えられる。しかし、砂礫層は頻繁にみられるのではないため、当該期は氾濫流路が直接届く地域ではなかったと考えられる。平安時代集落の遺構面を構成する地山は氾濫により細長く堆積した礫層とその間に溜まった細粒砂によって形成されている。当該層が形成された明確な時期は明らかではないが、1度の災害によって形成されたものと考えられ、弥生時代後期～平安時代中期までの間にこうした地盤を形成する災害が発生したことを示唆している。その後、15世紀代まで人の生活痕跡が継続するが、最終的な遺跡廃絶要因は河川氾濫による分厚い砂礫層の堆積である。近世以降にはこの砂礫層を埋め立てようとする災害復旧痕跡も見られる(第2次Ⅲ区5・16層)ことから、この地域から人が離れていった訳ではないが、主体的な活動領域では無くなっていったと考えられる。

①第1次調査 I区南端



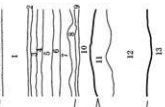
②第3次調査 西壁



③第2次調査 西壁



④第2次調査 I区東壁



⑤第4次調査 西壁



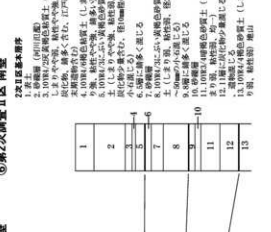
⑥第2次調査 II区南壁



⑦第1次調査 I区南端



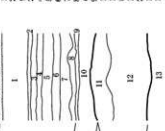
⑧第2次調査 西壁



⑨第2次調査 西壁



⑩第2次調査 I区東壁



⑪第4次調査 西壁



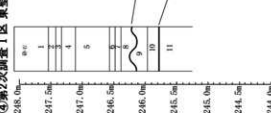
⑫第2次調査 西壁



⑬第2次調査 I区北壁



⑭第2次調査 西壁



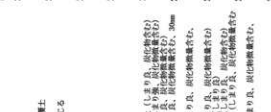
⑮第2次調査 西壁



⑯第2次調査 西壁



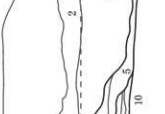
⑰第2次調査 西壁



⑱第2次調査 西壁



⑲第2次調査 西壁



⑳第2次調査 西壁



㉑第2次調査 西壁



㉒第2次調査 西壁



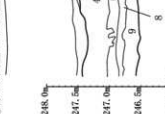
㉓第2次調査 西壁



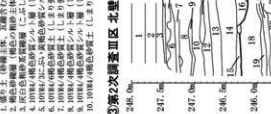
㉔第2次調査 西壁



㉕第2次調査 西壁



㉖第2次調査 西壁



㉗第2次調査 西壁



㉘第2次調査 西壁



㉙第2次調査 西壁



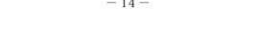
㉚第2次調査 西壁



㉛第2次調査 西壁



㉜第2次調査 西壁



㉝第2次調査 西壁



㉞第2次調査 西壁



㉟第2次調査 西壁



㊱第2次調査 西壁



㊲第2次調査 西壁

㊳第2次調査 西壁

㊴第2次調査 西壁

㊵第2次調査 西壁

㊶第2次調査 西壁

㊷第2次調査 西壁

㊸第2次調査 西壁

㊹第2次調査 西壁

㊺第2次調査 西壁

㊻第2次調査 西壁

㊼第2次調査 西壁

㊽第2次調査 西壁

㊾第2次調査 西壁

㊿第2次調査 西壁

㋀第2次調査 西壁

㋁第2次調査 西壁

㋂第2次調査 西壁

㋃第2次調査 西壁

㋄第2次調査 西壁

㋅第2次調査 西壁

㋆第2次調査 西壁

㋇第2次調査 西壁

㋈第2次調査 西壁

㋉第2次調査 西壁

㋊第2次調査 西壁

㋋第2次調査 西壁

㋌第2次調査 西壁

㋍第2次調査 西壁

㋎第2次調査 西壁

㋏第2次調査 西壁

㋐第2次調査 西壁

㋑第2次調査 西壁

㋒第2次調査 西壁

㋓第2次調査 西壁

㋔第2次調査 西壁

㋕第2次調査 西壁

㋖第2次調査 西壁

㋗第2次調査 西壁

㋘第2次調査 西壁

㋙第2次調査 西壁

第4章 第1次調査の調査成果

第1節 1期の遺構と遺物

第1項 竪穴建物跡(SI)

竪穴建物跡 SI01 (遺構: 図14・15、遺物: 図77)

＜位置・主軸＞ J～K-7～8区に位置している。主軸方位はほぼ真北を向く。＜形状・規模＞ 東西5.65m×南北6.85mの方形を呈する。検出面からの深度は0.2m。主軸はほぼ真北。壁面はやや皿状に立ち上がる。＜床面＞ 全体的にやや礫を含む地山の細粒砂層であり、軟弱である。中央部には焼土が集中している。＜柱穴＞ 検出しなかった。＜カマド＞ カマドを有さない。SI01 南西隅において亜円礫の集中が認められたが、掘り込みや石組みを確認できないことから、遺構廃絶後に投棄されたものの可能性がある。＜その他＞ SI01内では、3基の掘り込みを有する遺構を検出した。いずれもSI01に伴うものの可能性があるが機能は不明。SPO2の周辺では、薪炭材と思われる5本の炭化材が並んで出土している。火を使った作業場の可能性が想定される。＜出土遺物＞ 土師器坏(1～14)、土師質土器皿(7～14、21)、柱状高台付坏(15～20)、土師器甕(22・23)、須恵器甕(24・25)、灰軸陶器碗・段皿(26・27)が出土した。1～6は編年上他の出土遺物に比べて古い。したがって、SI01の機能時の遺物ではない可能性が高く、流れ込みか、認識できなかった遺構があった可能性がある。カマドを有していない点、柱状高台付坏が多く甕等の煮炊具が極めて少ないことから居住空間以外の機能が考えられる。遺物は中央の焼土周辺に分布する傾向が認められる。＜時期＞ 12世紀前半頃(甲斐型X期) ※甲斐型土器の時期区分は、「泉史編年」に準拠する。以下、同様。

竪穴建物跡 SI02 (遺構: 図16・17、遺物: 図78)

＜位置・主軸＞ L-5～6区に位置している。主軸方位N-10°-E。＜形状・規模＞ 東西5.25m×南北5.25mの隅丸方形を呈する。検出面からの深度は0.25m。壁面は皿状に立ち上がる。＜床面＞ 全体的に礫を含む地山の細粒砂層であり、軟弱である。＜柱穴＞ 検出しなかった。＜カマド＞ 北壁やや中央寄りの北東隅に位置している。一辺20～30cm程度の亜角礫を使用した円形のカマドである。袖石・天井石は崩壊しており往時の形状は不明である。焚口の前面には焼土、さらに前面に当たるSI02中央部では炭化物が集中して遺存していることから、カマド内の焼土、炭を整理した後にカマドの破壊行為が行われたと考えられる。調査では焚口の掘方は明瞭に検出できたが、燃焼部及び煙道については調査区北端に当たり不明瞭であった。＜出土遺物＞ 遺物量は比較的少なく、破片資料が主である。土師器坏(28～33)、柱状高台付坏(34)、脚高高台付坏か皿(35)、土師器甕(36)、羽釜(37)、須恵器甕(40)、灰軸陶器皿・碗(41～43)、灰軸陶器壺(44)がある。遺物の分布は散在的であり、建物廃絶時にカマドとともに整理されている可能性がある。＜時期＞ 11世紀後半(甲斐型IX期)

竪穴建物跡 SI03 (遺構: 図17・18、遺物: 図78・79)

＜位置・主軸＞ F-7区に位置している。主軸方位N-9°-W。＜形状・規模＞ 東西2.8m×南北2.2mの隅丸方形を呈する。検出面からの深度は0.35m。壁面はやや皿状に立ち上がる。＜床面＞ 地山の細粒砂層であり、軟弱である。＜柱穴＞ SI03北東、北西、南西隅に1基ずつ検出した。いずれの柱穴も中央部に向かって内傾している。＜カマド＞ 東壁中央からやや南寄りに位置している。人頭大の亜角礫を使用して構築されている。袖石は焚口周辺のみ遺存しており、天井石は焚口上部に崩落していた。＜出土遺物＞ 遺物はカマド周辺に多く、土師器皿(45～50)、坏(51～57)、高台坏(58)、甕(59～63)、灰軸陶器皿(65)、須恵器甕(64)等、生活空間として使用されたものと想定できる。54は口縁部に灯芯痕と思われる煤が付着しており、灯明皿として使用されたものだろう。59・60は内面を黒色処理しているものである。60は内面にミガキが放射状に施されており、光沢がある高台付の甕である。＜時期＞ 10世紀前半頃(甲斐型VI期)

竪穴建物跡 SI04 (遺構: 図18・19、遺物: 図79)

＜位置・主軸＞ J-6区に位置している。主軸方位N-3°-E。＜形状・規模＞ 東西2.9m×南北2.9mの方形を呈する。検出時点では、北辺の立ち上がりを削平してしまっており、形状は不明である。溝SD1007に切られている。検出面からの深度は0.15m。壁面はやや皿状に立ち上がる。＜床面＞ 全体的に地山の細粒砂層であり軟

弱である。〈柱穴〉 検出しなかった。〈カマド〉 南東隅に構築されている。垂角礫により構築されていたと考えられ、袖石の一部及び天井石等は検出されなかった。煙道部には人頭大の垂角礫が見られるが、原位置を留めていない。前面に若干の窪みが認められることから焚口と想定されるが、明確な燃焼部及び煙道は認識できなかった。〈出土遺物〉 遺物量は比較的少なくカマド周辺に集中する傾向がある。土師器環 (66～70)、高台環 (71)、土師器甕 (72～74)、灰軸陶器皿 (75)、碗 (76・77)、壺 (78～80) が出土した。土師器環は、体部と底部の境界が外側に突出するものが主体であり、(70) のような柱状高台を持つものも含まれる。75 は灰軸陶器皿で内外とも被熱している。他の竈穴建物に比べて灰軸陶器の出土量が多く特異的である。〈時期〉 11 世紀前半頃 (甲斐型Ⅷ期)

竈穴建物跡 S105 (遺構: 図 19・20、遺物: 図 80～82)

〈位置・主軸〉 G～H-4 区に位置している。主軸方位 N-27°-E。〈形状・規模〉 東西 2.3 m 以上×南北 3.5 m の隅丸方形を呈する。検出面からの深度は 0.5 m。壁面はやや直角に立ち上がる。〈床面〉 全体的に地山の細粒砂層であり軟弱である。〈柱穴〉 検出しなかった。〈カマド〉 南東隅にある。礫を用いないカマドである。S105 は全体的に遺構検出が困難であり、カマドと判断したのは掘り上がった後であったため、土層断面図の記録はない。両袖は地山に似た暗褐色の砂質土が壁面に取り付いて盛られており、その内側に焚口及び燃焼部、煙道があったと思われる。〈出土遺物〉 遺物量は非常に多く、残存度が高い土師器環が大半である。遺物の分布は全体的に散在する傾向があるが、下部ほど多い傾向がある。土器の形態的特徴がいくつかの群で齊一であり建物廃絶時に投棄されたものと思われる。土師器環は大きく 2 つの群に細分することができる。1 つは底部と体部の境界が外側に突出し、口縁部がやや外反するもの (81～91)。2 つ目は底部と体部の境界は突出せず、口縁部が内湾するもの (92～105)。前者は胎土中の赤色粒子の含有量が後者に比べて多い傾向があり、後者には赤色粒子は含まれるものの少なく胎土全体の密度が低い。そのため、後者の土器は、素手で触れると手に胎土が付着するほど脆弱である。131 は片口。133 の土師器甕の表面には、種実圧痕が 10 か所程度観察できる。143～147 は灰軸陶器碗。いずれも百代寺窯式のものと思われる。〈時期〉 11 世紀後半 (甲斐型Ⅷ期)

竈穴建物跡 S106 (遺構: 図 20・21、遺物: 図 82)

〈位置・主軸〉 O-14・15 区に位置している。主軸方位 N-39°-E。〈形状・規模〉 東西 2.55 m×南北 3.8 m の長方形を呈する。検出面からの深度は 0.25 m。壁面はやや皿形に立ち上がる。〈床面〉 全体的に地山の細粒砂層であるがやや硬質である。〈柱穴〉 検出しなかった。〈カマド〉 北東隅に焚口と思われる掘り込みを床面から検出した。焚口内において拳大の礫を検出したが、原位置は留めていない。これらの礫はカマドの構築材と思われる。〈出土遺物〉 遺物量は非常に少なく、破片資料しかない。遺物の分布は全体的に散在的である。土師器環 (151・152)、土師器甕 (153・154) が出土した。〈時期〉 11 世紀代 (甲斐型Ⅷ期)

竈穴建物跡 S107 (遺構: 図 21、遺物: 図 82)

〈位置・主軸〉 P・Q-15 区に位置している。主軸方位 N-35.5°-E。〈形状・規模〉 東西 3.95 m×南北 3.4 m のやや不整の方形を呈する。検出面からの深度は 0.2 m。壁面はやや皿形に立ち上がる。〈床面〉 全体的に地山の細粒砂層であり軟弱である。〈柱穴〉 検出しなかった。〈カマド〉 南東隅にある。袖石の一部が残存している。〈その他〉 S107 北東隅では人頭大の垂角礫が集中して検出した。これ自体が何らかの機能を持つ遺構とは判断し難い。竈穴建物屋内の掘り込み上部に集積されたものかもしれない。〈出土遺物〉 遺物量は非常に少なく、破片資料しかない。遺物の分布は全体的に散在的である。土師器環 (155～159)、須臾器甕 (160) が出土した。〈時期〉 11 世紀代

竈穴建物跡 S108 (遺構: 図 22・23、遺物: 図 82)

〈位置・主軸〉 L-5・6 区に位置している。主軸方位はほぼ真北を向く。〈形状・規模〉 東西 4.9 m×南北 5.4 m の方形を呈する。検出面からの深度は 0.35 m。壁面はやや皿形に立ち上がる。〈床面〉 全体的に地山の細粒砂層であり軟弱である。〈柱穴〉 検出しなかった。〈カマド〉 南東隅と南西隅にある。前者をカマド①、後者をカマド②とした。カマド①は袖石の垂角礫が両袖ともに残存している。天井石はない。カマド①の西側は大きく掘り込まれている。作り替えかカマド構築時の掘方と考えられる。カマド②は礫及び焼土塊の集中である。使用した痕跡は強く残存しているが、構造としてカマド①に比べて小規模であり、補助的な作業場として使用され

ていたものと想定している。＜出土遺物＞ 遺物量は多く、残存度が高い資料も多い。遺物の分布はカマド①及び②周辺に集中するほか、中央部にも多く分布している。土師器環及び皿（161～175）は底部と体部の境界が突出する断面形状のものが主体であるが、176・177のような柱状高台を持つものも含まれる。SI08はカマドを2基有しているが、煮炊具の出土が極端に少ない。土師器環・皿は完形品が多く、建物の機能廃絶時に裏などの日用品は撤去して、食膳具を使用する行為が行われたなどの状況を想定しておきたい。＜時期＞ 11世紀後半（甲斐型Ⅰ期）

竪穴建物跡 SI09（遺構：図 23・24、遺物：図 83）

＜位置・主軸＞ N-6区に位置している。主軸方位はほぼ真北を向く。＜形状・規模＞ 東西2.95m×南北2.9mの不整の方形を呈する。検出面からの深度は0.25m。壁面はやや直角に立ち上がる。＜床面＞ 全体的に地山の細粒砂層であり非常に軟弱である。＜柱穴＞ 検出しなかった。＜カマド＞ 南東隅にある。袖石の一部が原位置を留めた状態で検出した。＜出土遺物＞ 遺物量は少ない目であり、破片資料しかない。遺物の分布は全体的に散在的である。183は土師器蓋。口縁端部内面に沈線が施されている。184は土師器羽釜であるが、把手は欠損している。185は土師器甕と思われるが、体部のふくらみが著しい。190は高台を持つ内黒土器碗である。内面は格子状にミガキが施されている。＜時期＞ 11世紀後半（甲斐型Ⅰ期）

竪穴建物跡 SI10（遺構：図 24、遺物：図 83）

＜位置・主軸＞ M-7・8区に位置している。主軸方位 N-29°-E。＜形状・規模＞ 東西4.75m×南北4.95mの方形を呈する。検出面からの深度は0.15m。壁面はやや直角に立ち上がる。＜床面＞ 全体的に地山の細粒砂層であり軟弱である。＜柱穴＞ SI10内では多くのピット、土坑が検出したが、SI10との関連は不明である。＜カマド＞ カマドを有さない。＜その他＞ 北西、北東、南西に土坑を検出した。＜出土遺物＞ 遺物量は非常に少なく、破片資料しかない。遺物の分布は全体的に散在的である。土師器皿（191～194）、土師器甕（195・196）、小鉢？（197）、灰陶陶器碗（198～200）が出土した。＜時期＞ 11世紀後半（甲斐型Ⅰ期）

竪穴建物跡 SI11（遺構：図 25、遺物：図 84）

＜位置・主軸＞ N・O-6区に位置している。主軸方位 N-17°-E。＜形状・規模＞ 東西4.0m×南北4.0mの隅丸方形を呈する。検出面からの深度は0.35m。北東隅は調査対象であり、確認していない。壁面はやや外反して立ち上がる。＜床面＞ 全体的に地山の細粒砂層であり軟弱である。＜柱穴＞ 検出しなかった。＜カマド＞ なし。ただし、調査区外にある北東隅にカマドがある可能性はある。＜その他＞ 中央やや北西寄りに礫が投棄された状態で検出した。＜出土遺物＞ 礫周辺に集中して出土している。床直上から出土することから、遺物の出土と礫の投棄は位置的に有機的であり、礫と遺物の投棄は同一時期に行われたものと想定される。土師器環（201）、甕（203～204）、灰陶陶器碗（205・206）、四耳壺（207）が出土した。＜時期＞ 11世紀前半（甲斐型Ⅰ期）

竪穴建物跡 SI12（遺構：図 25、遺物：図 84）

＜位置・主軸＞ O-7区に位置している。主軸方位 N-11°-E。＜形状・規模＞ 東西2.95m×南北2.35mの隅丸方形を呈する。検出面からの深度は0.1m。SI11に切られて検出した。壁面はやや外反する。＜床面＞ 全体的に地山の細粒砂層であり軟弱である。＜柱穴＞ 検出しなかった。＜カマド＞ カマドを有さない。＜出土遺物＞ 遺物量は少ないが、残存度が高い遺物が多く、刻書土器（211）を含む土師器環（208～212）や土師器甕（213～216）、灰陶陶器壺体部（217）が出土した。カマドを有さない点も考慮し、住居とは機能の建物であった可能性が推測される。＜時期＞ 10世紀後半（甲斐型Ⅰ期）

竪穴建物跡 SI13（遺構：図 25、遺物：図 84）

＜位置・主軸＞ O・P-7区に位置している。主軸方位 N-11°-E。＜形状・規模＞ 東西3.5m×南北3.95m以上の方形を呈する。検出面からの深度は0.2m。北辺は調査区外にある。壁面はやや外反する。＜床面＞ 全体的に地山の細粒砂層であり軟弱である。＜柱穴＞ 検出しなかった。＜カマド＞ 確認できなかったが、調査区外にある可能性はある。＜出土遺物＞ 遺物量は極めて少ない。218は土師器環の底部破片。＜時期＞ 11世紀代（甲斐型Ⅰ期）

竪穴建物跡 SI14 (遺構：図 26、遺物：図 84～85)

＜位置・主軸＞ O-7・8区に位置している。主軸方位 N-25.5°-E。＜形状・規模＞ 東西 3.4 m×南北 3.5 m の隅丸方形を呈する。検出面からの深度は 0.4 m。SI17 を切っている。壁面はやや外反する。＜床面＞ 全体的に地山の細粒砂層であり軟弱である。＜柱穴＞ 北西隅に 1 基確認したが、そのほかの柱穴は確認できなかった。＜カマド＞ カマドを有さない。＜出土遺物＞ 遺物量はやや少なく、出土遺物の多くが床面からやや浮いた位置で出土した。223 は口縁部が玉縁状に肥厚するものであり、混在したものと思われる。219～226 は土師器環、227～229 は土師器甕、230～237 は灰陶軸器碗であり、個体数が多い。土師器は煮炊具が微量であり、カマドを有さない点からも、居住空間以外として使用された建物の可能性がある。＜時期＞ 10 世紀後半 (甲斐型Ⅶ期)

竪穴建物跡 SI15 (遺構：図 27、遺物：図 85)

＜位置・主軸＞ M・N-16区に位置している。主軸方位 N-12.5°-E。＜形状・規模＞ 東西 3.55～3.8 m 以上×南北 5.05 m の隅丸方形を呈する。西辺は調査区外にある。北東隅は段状に突出しており、南東隅が棚状になる可能性があるが検出段階では未確認である。検出面からの深度は 0.4 m。壁面はやや外反する。＜床面＞ 全体的に地山の細粒砂層であり軟弱である。＜柱穴＞ 北辺に 2 基のピットを検出した。＜カマド＞ 南東隅にカマドと思われる焼土・炭化材の集中を検出したが、袖石等の構造材は残存しておらず、全体の形状・規模等は不明である。＜その他＞ SI15 の検出面表層では焼土層を検出した。竪穴建物跡とは異なる遺構の可能性があるが不明である。＜出土遺物＞ カマドと思われる南東隅に集中し、床面直上から多く出土した。土師器では環 (238～246)、高台付環 (247～250)、甕 (251～252) が出土し、高台付の比率が多く特異的である。その他、緑陶軸器碗 (257) が出土している点も特異的である。＜時期＞ 11 世紀前半 (甲斐型Ⅷ期)

竪穴建物跡 SI16 (遺構：図 28、遺物：図 86)

＜位置・主軸＞ Q-14区に位置している。主軸方位 N-26°-E。＜形状・規模＞ 東西 3.2 m×南北 4.3 m の長方形を呈する。検出面からの深度は 0.2 m。壁面は皿形を呈する。＜床面＞ 全体的に地山の細粒砂層であり軟弱である。＜柱穴＞ 検出しなかった。＜カマド＞ 南東隅に構築されており、袖石の一部が立位の状態を検出した。天井石や支柱石は検出しなかった。＜その他＞ 北西隅を中心に遺構内全域に焼土及び炭化材が密に分布している。南東隅の壁面は壁に沿って焼土がみられる。出土遺物にも被熱しているものが大半を占めていることから、SI16 は焼失した竪穴建物跡である。残存した炭化材の樹種同定の結果、クマギ節が主体的に認められており、建築材としての選材が想定される。SI20 の焼失竪穴建物跡も同様の結果が得られており、当該地域における木材利用が明らかになった。その他、カマドの前には炭化米が出土した。＜出土遺物＞ 遺物は遺構内全域に散逸しており、接合関係も広範囲で接合するものが多い傾向がある。出土遺物は概ね被熱している。土師器環 (259)、甕 (261～263)、灰陶軸器碗 (264・265)、壺 (266) が出土した。＜時期＞ 11 世紀代 (甲斐型Ⅷ期)

竪穴建物跡 SI17 (遺構：図 26・27、遺物：図 86)

＜位置・主軸＞ O・P-8区に位置している。主軸方位 N-12°-E。＜形状・規模＞ 東西 3.8 m 以上×南北 4.3 m の隅丸方形を呈する。検出面からの深度は 0.3 m。SI14 に切られている。壁面は皿形を呈する。＜床面＞ 全体的に地山の細粒砂層であり軟弱である。＜柱穴＞ 検出しなかった。＜カマド＞ 南東隅に構築されており、袖石の一部を検出した。天井石や支柱石は検出しなかった。焚口はやや深めに掘られ、煙道は急峻に作られる。＜出土遺物＞ 遺物量は少量であり、中心部において、やや高い位置で出土しているものが多い。破片資料が多く、土師器環 (267～270)、柱状高台付環 (271・272)、高台付環 (270)、甕 (273)、灰陶軸器碗か皿 (275) が出土している。＜時期＞ 11 世紀後半～12 世紀前半 (甲斐型Ⅷ期)

竪穴建物跡 SI18 (遺構：図 29・30、遺物：図 86～87)

＜位置・主軸＞ P-9・10区に位置している。主軸方位 N-25.5°-E。＜形状・規模＞ 東西 5.45 m×南北 5.0 m の隅丸方形を呈する。検出面からの深度は 0.3 m。壁面はやや外反する。＜床面＞ 全体的に地山の細粒砂層であり軟弱である。＜柱穴＞ 検出しなかった。＜カマド＞ 南東隅に構築されている。構築材と思われる礫が周辺に散在しているが、原位置を留めていると明確にわかるものはない。焚口と思われる掘り込みは明確に認められず平坦である。構築材の粘土等も見当たらず、カマドの構造では煙道のみ明確に確認できた。煙道の周囲は焼土

化しており、坑口径が明確である。〈出土遺物〉 遺物は遺構東部に多く集中しており、カマド周辺には裏破片が散在している。土師器環 (276 ~ 284) は底部から体部の境界の断面形状が突出するものが主体である。その他、脚高台付環 (285 ~ 287)、土師器裏 (288 ~ 295)、羽釜 (296)、灰軸陶器碗 (298・299)、壺 (300 ~ 302) 破片が出土している。〈時期〉 11 世紀前半 (甲斐型Ⅰ期)

竪穴建物跡 S119 (遺構：図 30・31、遺物：図 87)

〈位置・主軸〉 O・P-12・13 区に位置している。主軸方位 N-22°-E。〈形状・規模〉 東西 4.35 m × 南北 4.4 m の方形を呈する。検出面からの深度は 0.25 m。壁面はやや直立する。〈床面〉 全体的に地山の細粒砂層であり軟弱である。〈柱穴〉 北辺及び南西隅に 3 基検出した。〈カマド〉 南東隅に構築されていたが、焚口の掘り込みのみ明確に検出できた。構造材は明確に認識することができなかった。〈出土遺物〉 遺物は少量である。カマドや土器等が付付けられた状態と推測される。306 は坏見込み部のみの破片で溶融物が 3ヶ所付着している。307 は脚高台付皿。308 は小鉢? である。〈時期〉 11 世紀前半 (甲斐型Ⅰ期)

竪穴建物跡 S120 (遺構：図 32、遺物：図 88)

〈位置・主軸〉 Q・R-9・10 区に位置している。N-14.5°-E。〈形状・規模〉 東西 4.0 m × 南北 3.8 m の隅丸方形を呈する。検出面からの深度は 0.2 m。壁面はやや外反する。〈床面〉 全体的に地山の細粒砂層であり軟弱である。〈柱穴〉 検出しなかった。〈カマド〉 カマドを有さない。〈その他〉 炭化材が広く分布している。炭化材は丸木の材を主体としており、建築材と考えられる。したがって S120 焼失した竪穴建物跡であると想定される。〈出土遺物〉 遺物は散逸した炭化材に紛れて少数出土した。掲載し得る出土遺物は土師器羽釜 (310・311) と灰軸陶器碗 (312) の口縁部破片が出土した。出土遺物が極端に少ないことや焼失竪穴建物であることを考慮し、焼失前にすでに建物内が整理された状態であったと考えられる。〈時期〉 11 世紀代 (甲斐型Ⅰ期)

竪穴建物跡 S121 (遺構：図 32、遺物：図 88)

〈位置・主軸〉 Q・R-8・9 区に位置している。主軸方位 N-21°-E。〈形状・規模〉 東西 4.55 m × 南北 3.7 m と推定される。検出面からの深度は 0.15 m。壁面は皿形を呈する。〈床面〉 全体的に地山の細粒砂層であり軟弱である。〈柱穴〉 検出しなかった。〈カマド〉 明確にカマドとわかる構造は認められないが、南東隅が不整形に突出していることから、カマドがあった可能性がある。〈出土遺物〉 出土遺物は南東隅に集中する。出土遺物は土師器羽釜 (313)、甕? (314)、灰軸陶器碗 (315)、壺 (316) が出土した。図化に耐えるほどの土師器環は出土しておらず、廃絶時に整理されていた可能性がある。〈時期〉 11 世紀代 (甲斐型Ⅰ期)

竪穴建物跡 S122 (遺構：図 33、遺物：図 88)

〈位置・主軸〉 L・K-12 区に位置している。主軸方位 N-25°-E。〈形状・規模〉 東西 5.5 m × 南北 1.5 m 以上の不整形方形を呈する。検出面からの深度は 0.15 m。壁面は皿形を呈する。〈床面〉 全体的に地山の細粒砂層であり軟弱である。〈柱穴〉 検出しなかった。調査区外に位置している可能性がある。〈カマド〉 検出しなかった。調査区外に位置している可能性がある。〈出土遺物〉 土師器鉢 (317)、灰軸陶器碗 (318 ~ 321) が出土した。〈時期〉 11 世紀代 (甲斐型Ⅰ期)

竪穴建物跡 S123 (遺構：図 33、遺物：図 88)

〈位置・主軸〉 F・G-11 区に位置している。主軸方位 N-23.5°-E。〈形状・規模〉 東西 3.3 m × 南北 2.75 m 以上の方形を呈する。検出面からの深度は 0.3 m。壁面はほぼ直立する。〈床面〉 全体的に地山の細粒砂層であり軟弱である。〈柱穴〉 検出しなかった。〈カマド〉 南東隅に構築されている。袖石の一部が原位置を留めている状態で検出した。焚口部分の掘り込みは認められず、床面から平坦に作られている。〈出土遺物〉 遺物はカマド西側に集中している。土師器皿 (322)、坏 (323 ~ 327)、土師器裏 (328)、須恵器裏 (330)、灰軸陶器碗 (331・332) が出土した。327 は体部下半に斜行ヘラケズリが施されており他の土器に比べて古く位置付けられ、混在したものの可能性がある。〈時期〉 11 世紀前半 (甲斐型Ⅰ期)

竪穴建物跡 S124 (遺構：図 34、遺物：図 89)

〈位置・主軸〉 C・D-10・11 区に位置している。主軸方位 N-15°-E。〈形状・規模〉 東西 3.9 m × 南北 4.00

mの方形を呈する。検出面からの深度は0.15 m。壁面はやや皿形を呈する。〈床面〉全体的に地山の細粒砂層であり軟弱である。〈柱穴〉建物内から7基のピットが検出している。〈カマド〉カマドを有さない。〈出土遺物〉遺物は建物の北東側に集中して出土した。いずれも破片資料であり、土師器甕(333～335)、羽釜(336)、灰軸陶器壺(337)を掲載した。は336、体部外面に把手部が剥がれた痕跡が見える。〈時期〉11世紀代(甲斐型Ⅰ期)

竪穴建物跡 SI25 (遺構：図 34、遺物：図 89)

〈位置・主軸〉B・C-12・13区に位置している。主軸方位N-15°-E。〈形状・規模〉東西3.65 m×南北3.75 mの隅丸方形を呈する。検出面からの深度は0.2 m。壁面はほぼ直立する。〈床面〉全体的に地山の砂礫層であり、貼り床は検出しなかった。床面はこぶし大の礫が全体に広がっている。〈柱穴〉検出しなかった。〈カマド〉明確にカマドと判断できないが、東壁中央やや南寄りに突出する部分がある。微妙な掘り込みが認められ、炭化物が他より多い。カマドの痕跡の可能性がある。〈出土遺物〉遺物は北東隅に集中して出土した。土師器皿(338～341)、坏(343～347)、内黒土器(348・349)、羽釜(352)、灰軸陶器壺(353・354)が出土した。349は口径が非常に大きく、内面に黒色処理が施されており、同時期の坏としては特異的である。352はハケメが比較的細かく丁寧な作りである。〈時期〉10世紀前半(甲斐型Ⅰ期)

竪穴建物跡 SI26 (遺構：図 35・36、遺物：図 89)

〈位置・主軸〉D-12・13区に位置している。主軸方位N-24°-E。〈形状・規模〉東西3.75 m×南北3.85 m以上の隅丸方形を呈する。SI27とSI28の間にあり、SI26が切っている。配石遺構SS3001に切られている。検出面からの深度は0.4 m。壁面は皿形を呈する。〈床面〉貼り床が建物のほぼ全域に貼られている。貼り床は黄褐色粘質土であり、焼土、炭化物、灰などを粗く混ぜたものが使われている。〈柱穴〉検出しなかった。〈カマド〉カマドを有さない。SI27の南東隅(SI26の北東隅に当たる)において人頭大の礫が集中しておりカマド様に見えるが、SI26床面から20cm程度高い位置のSI27床面直上において検出しており、焼いた痕跡などが認められなかったため、SI26のカマドではないと判断している。〈出土遺物〉遺物は建物の東側に集中している。土師器坏(355～361)、甕(363・364・366～369)、羽釜(365)、灰軸陶器碗(371・372)が出土した。食膳具が比較的良好な残存率であるのに対して、煮炊具は破片資料が主体であり、遺存の状況に差が認められる。〈時期〉11世紀代(甲斐型Ⅰ期)

竪穴建物跡 SI27 (遺構：図 35～37、遺物：図 90)

〈位置・主軸〉C・D-13・14区に位置している。主軸方位N-16°-E。〈形状・規模〉東西4.85 m×南北約4.1 mの方形を呈する。SI26に切られた状態で検出した。検出面からの深度は0.2 m。壁面はほぼ直立する。〈床面〉全体的に地山の細粒砂層であり軟弱である。〈柱穴〉検出しなかった。〈カマド〉北東隅に痕跡が認められる。袖石の一部が原位置を留めている状態で検出したが、煙道は検出できず、焚口の掘り込みのみ検出した。〈その他〉東壁沿いにこぶし大の礫が集中して検出した。用途不明である。〈出土遺物〉遺物は遺構内に散在して出土した。土師器皿(373)、坏(374～378)、甕(379)、羽釜(380)、灰軸陶器碗(383～385)が出土した。373中世のカワラケか。〈時期〉11世紀前半(甲斐型Ⅰ期)

竪穴建物跡 SI28 (遺構：図 35・36、遺物：図 90)

〈位置・主軸〉D-12区に位置している。主軸方位N-14°-E。〈形状・規模〉東西5.05 m×南北4.2 mの方形を呈する。SI26に切られて検出した。検出面からの深度は0.3 m。壁面はほぼ直立する。〈床面〉全体的に地山の細粒砂層であり軟弱である。〈柱穴〉検出しなかった。〈カマド〉カマドを有さない。また、南東隅に礫が集中していることからSI26によって切られている可能性もある。〈出土遺物〉遺物は建物内全体に散在している。土師器坏(386～392)、鉢(393)、甕(394～396)、須恵器甕破片(397～399)、灰軸陶器碗(400～402)、壺(403)が出土した。土師器坏は、体部下半に斜行ヘラケズリを施すものと、底部から体部の境界が突出する断面形状を持つものの2種類が混在する。〈時期〉11世紀代(甲斐型Ⅰ期)

竪穴建物跡 SI29 (遺構：図 37・38、遺物：図 91)

〈位置・主軸〉C・D-14・15区に位置している。主軸方位N-13°-E。〈形状・規模〉東西6.35 m×南北4.65

m以上の長方形を呈する。SI31に切られている。検出面からの深度は0.35m。壁面はほぼ直立する。〈床面〉全体的に地山の細粒砂層であり軟弱である。〈柱穴〉検出しなかった。〈カマド〉検出しなかったが東壁が調査区外にあるため、不明である。〈出土遺物〉遺物は建物内全体に散在している。土師器環(404～411)、高台付環(412)、小型甕(413～418)、灰釉陶器皿(419)、壺(420)が出土した。410は有孔の環である。用途不明。411は内面に放射状の暗文を持つ環である。〈時期〉11世紀代(甲斐型Ⅰ期)

竪穴建物跡 SI30 (遺構：図 39、遺物：図 91・92)

〈位置・主軸〉H-11・12区に位置している。主軸方位N-15°-E。〈形状・規模〉東西6.6m×南北6.4m以上の不整形を呈する。北壁は調査区外にある。NR3001を切っている。検出面からの深度は0.3m。壁面はやや皿形を呈する。〈床面〉こぶし大の礫を主体とする地山層を掘り込んで形成されている。したがって、床面全体に礫が広がっている。〈柱穴〉検出しなかった。〈カマド〉南東隅に構築されている。袖石の一部が原位置を留めている状態で検出した。カマドは建物のやや内側に構築されている。煙道は確認できなかった。〈その他〉建物の南東が突出した平面形状を呈している。北東隅に棚状遺構が付属する可能性がある。〈出土遺物〉カマド周辺及び北側に集中して出土した。出土遺物の量は非常に多く、遺存状態も良好なものが多い。出土遺物はカワラケ(421～434)、柱状高台付環(435～444)、羽釜(445～449)、鉢(452)、小壺(453)、灰釉陶器碗(457・458)、灰釉陶器壺(459)破片が見られる。柱状高台付環は、底部から台部の境界が突るもの(439～441)と面取りされるもの(436～438、442～443)、台部の立ち上がりが急で高いもの(444)に細分できる。457は高台が高く、腰張り形で口縁端部が外反する。漬け掛けで高台は高い。百代寺窯式と思われる。〈時期〉12世紀前半(甲斐型Ⅰ期)

竪穴建物跡 SI31 (遺構：図 37・38、遺物：図 92・93)

〈位置・主軸〉C-14・15区に位置している。主軸方位N-11°-E。〈形状・規模〉東西3.7m×南北2.7mの方形を呈する。SI31を切っている。検出面からの深度は0.5m。壁面はやや皿形を呈する。〈床面〉全体的に地山の細粒砂層であり軟弱である。床面上に亜角礫が散在している。規則性は認められず、投棄されたものと想定される。〈柱穴〉検出しなかった。〈カマド〉東辺やや南寄りに作られている。袖石の一部が遺存した状態で検出した。焚口の掘り込みは若干認められるものの、ほぼ床面から見て平坦である。〈出土遺物〉遺物は建物内全域に散在して出土した。土師器環(460～467)、土師器甕(468)、羽釜(469)、須恵器甕(472)破片、灰釉陶器碗(473・474)、壺(475)が出土した。〈時期〉10世紀後半(甲斐型Ⅰ期)

竪穴建物跡 SI32 (遺構：図 40、遺物：図 93)

〈位置・主軸〉I-14・15区に位置している。主軸方位N-13.5°-E。〈形状・規模〉東西5.15m×南北2.45m以上の方形を呈する。南半は調査区外にある。検出面からの深度は0.35m。壁面はほぼ直立する。〈床面〉こぶし大の亜円礫を主体とする地山の砂礫層を掘り込んで構築されている。床面には礫が広がっている状態である。〈柱穴〉検出しなかった。〈カマド〉カマドを有さない。〈その他〉覆土には炭化材が非常に多く含まれており、堆積土層が単層であり分厚い。出土遺物は被熱しているものが主体的であることから、焼失した建物跡である可能性が高い。〈出土遺物〉476は分厚い高台を持つ土師器碗。その他には土師器甕(477～479)、灰釉陶器碗(480・481)が出土した。479は口縁部から体部が寸胴形を呈する。非常に細かいハケメによって調整されている。481は口縁部の屈曲がS字を呈するほど極端であり特徴的である。SI30の457と形態的特徴が酷似している。〈時期〉11世紀代(甲斐型Ⅰ期)

竪穴建物跡 SI33 (遺構：図 40、遺物：図 93・94)

〈位置・主軸〉E-13区に位置している。主軸方位N-6.5°-E。〈形状・規模〉東西2.35m×南北2.25mの方形を呈する。検出面からの深度は0.35m。壁面はほぼ直立する。〈床面〉全体的に地山の細粒砂層でありやや軟弱である。〈柱穴〉検出しなかった。〈カマド〉南東隅に構築されている。袖石は原位置をほぼ留めた状態で検出した。また、天井石が1石遺存している。カマド焚口からは、灰釉陶器壺の底部(508)が突っ込まれた状態で出土した。〈その他〉新町前遺跡(第1次)において最も小さい規模の建物跡である。カマドを有していることから住居として使用されたものと想定されるが、居住人数は少なかったものと推測される。〈出土遺物〉カマド前面～建物中央部において集中している。出土量は床面積に対して非常に多く、土師器環(482～

488)、皿(489～494)、柱状高台付坏(495)、土師器甕(496)、羽釜(497)、須恵器甕(499～500)、灰軸陶器碗(501～504)、壺(505～508)が出土した。484は墨書土器。釈文は「刀」。495は、他の土器に比べて時期的に明確な差が見られ、混在したものと思われる。<時期> 10世紀前半(甲斐型Ⅹ期)

竪穴建物跡 S134 (遺構：図 41、遺物：図 95)

<位置・主軸> J・K-16・17区に位置している。主軸方位 N-12°-E。<形状・規模> 東西 3.25 m×南北 3.25 mの方形を呈する。南西隅はサブトレンチにより掘り抜いている。検出面からの深度は 0.3 m。壁面はほぼ直立する。<床面> 全体的に地山の細粒砂層であり非常に軟弱である。<柱穴> 検出しなかった。<カマド> 南東隅に構築されている。構築材と思われる礫が散在して検出した。焚口は薄く掘り込まれており、煙道は明確ではない。<出土遺物> 遺物はカマドに集中している。出土量は少ない。土師器坏(509～511)、羽釜(512)が出土した。512の把手部は遺存していなかったが、接合部の欠損状況から外周を一周巡るものではない。<時期> 11世紀前半(甲斐型Ⅹ期)

竪穴建物跡 S135 (遺構：図 41、遺物：図 95)

<位置・主軸> I-12・13区に位置している。主軸方位 N-20°-E。<形状・規模> 東西約 3.5 m×南北約 3.25 m以上の方形を呈する。北壁から東壁のプランが明確ではなかった。検出面からの深度は 0.1 m。壁面はやや外反する。<床面> 全体的に地山の細粒砂層であり非常に軟弱である。<柱穴> 検出しなかった。<カマド> 南東隅に突出部があるが、構造材や掘り込み、焼土等の堆積等は認められず、カマドと判断しなかった。<出土遺物> 土師器坏(513)、皿(514)、高台付坏(516)、甕(518～520)、灰軸陶器碗(521～524)、壺(525)が出土した。518は内面に種実圧痕が確認できる。<時期> 11世紀代(甲斐型Ⅹ期)

竪穴建物跡 S136 (遺構：図 42・43、遺物：図 95～97)

<位置・主軸> K・L-21・22区に位置している。主軸方位はほぼ真北を向く。<形状・規模> 東西 3.7 m×南北 3.7 mの隅丸方形を呈する。北東隅及び西辺南側のプランが明確ではなかった。検出面からの深度は 0.2 m。壁面はやや外反する。<床面> 全体的に地山の細粒砂層であり軟弱である。<柱穴> 検出しなかった。<カマド> 東壁やや南寄りに構築されている。カマドの遺存状態は良好であり、袖石及び支柱石がほぼ原位置を留めている状態で検出した。カマドの北側には径 0.7 mの土坑が付属しており、貯蔵穴と思われる。貯蔵穴内からは遺物は出土しなかった。貯蔵穴の上には土師器坏、皿が集中して出土している。貯蔵穴に木板等の蓋をかけ、その上に食器をまとめていた状況と推測する。土師器皿(528)内には焼骨を含む土が含まれていたことから、食事後の状態のまま埋没した可能性がある。<出土遺物> 遺物はカマド西側に集中している。土師器坏(526～541)、皿(542～557)、高台坏(559・560)、甕(561～570)、灰軸陶器碗(572)が出土した。571は弥生時代後期の口縁端部にキザミを持つ壺破片である。流れ込み。出土量は多く残存度は良好なものが多い。なお、カマド西側から出土した図 42 カマド横土器集中に示した一群は集積状況から一括資料である。口縁端部は玉縁状に肥厚しており、体部下半は斜行ヘラケズリが施される。底部は手持ちヘラケズリまたは回転糸切り痕を残すものがある。558は墨書がある破片であるが、釈文不明。<時期> 10世紀前半(甲斐型Ⅹ期)

竪穴建物跡 S137 (遺構：図 43、遺物：図 98)

<位置・主軸> D・E-17・18区に位置している。主軸方位 N-16.5°-E。<形状・規模> 東西 2.9 m×南北 3.15 mの隅丸方形を呈する。検出面からの深度は 0.2 m。壁面は皿形を呈する。<床面> 全体的に地山の細粒砂層であり軟弱である。<柱穴> 検出しなかった。<カマド> 南東隅に構築されている。構築材と思われる人頭大の礫が集中している状態で検出した。原位置を留めているものはない。焚口の掘り込みのみ認められ、煙道は確認できなかった。<出土遺物> 破片資料のみであり、少量のみ出土した。土師器坏(573・574)、甕(575)、須恵器甕(576)、灰軸陶器壺(577)を掲載した。<時期> 11世紀代(甲斐型Ⅹ期)

竪穴建物跡 S138 (遺構：図 44～46、遺物：図 98)

<位置・主軸> D-17・18区に位置している。主軸方位 N-23°-E。<形状・規模> 東西 3.65 m×南北 3.5 mの隅丸方形を呈する。S141に切られている。検出面からの深度は 0.1 m。壁面はほぼ直立する。<床面> 全体的に地山の細粒砂層であり軟弱である。<柱穴> 検出しなかった。<カマド> 南東隅に構築されている。袖石

の一部が立位で検出したが、大半は検出しなかった。焚口の掘り込みは認められなかったが、焚口と思われる位置が焼土化していた。〈出土遺物〉遺物はカマド西側に集中している。遺存状態が良好なものが多い。土師器環(578～581)、脚高台付環(582)、甕(583～588)、灰軸陶器碗(589・590)が出土した。甕は、口縁部の形状が緩く外反しながら先細るもの(583)、くの字状に屈曲し肥厚するもの(584)、S字に屈曲し先細るもの(585)、S字状に屈曲し肥厚するもの(586)などバリエーションが豊かである。〈時期〉 11世紀前半(甲斐型IX期)

竪穴建物跡 S139 (遺構：図 47、遺物：図 99)

〈位置・主軸〉F-19・20区に位置している。主軸方位N-13°-E。〈形状・規模〉東西3.9m×南北3.45m以上の方角を呈する。検出面からの深度は0.15m。壁面は皿形を呈する。〈床面〉全体的に地山の細粒砂層であり軟弱である。〈柱穴〉検出しなかった。〈カマド〉東壁の南寄りに構築されている。構造材は遺存していなかった。〈出土遺物〉遺物量は少なく、南壁付近から集中して出土した。土師器環(591～593)、脚高台付環(594・595)、甕(596)、羽釜(597)、須恵器甕(598・599)、灰軸陶器碗(600)が出土した。597の把手部は2本の粘土帯を上下に配置して、断面三角形になるように貼り合わせて作られている。そのため、把手の内部は空洞になっている。〈時期〉 11世紀前半(甲斐型IX期)

竪穴建物跡 S140 (遺構：図 47、遺物：図 99・100)

〈位置・主軸〉F・G-19区に位置している。主軸方位N-20°-E。〈形状・規模〉東西3.8m×南北3.0m以上の方角を呈する。北壁のプランはやや不明瞭である。検出面からの深度は0.2m。壁面はほぼ直立する。〈床面〉全体的に地山の細粒砂層であり軟弱である。〈柱穴〉検出しなかった。〈カマド〉南東隅に構築されていると思われるが、構造材の遺存は認められず、土坑様の掘り込みが見られるのみである。〈出土遺物〉遺物はカマド及びカマド前面に集中しており、そのほかからの出土はほとんど認められない。出土量は多く、土師器環(601～606)、脚高台付環(607・608)、甕(609～615、617～619)、羽釜(616)、須恵器甕(620)、灰軸陶器碗(621)が出土した。608は体部から口縁部にかけて内湾し、非常に高い脚高台を持つ。土師器甕は口縁部が肥厚するもので統一感があり、S138とは対照的である。〈時期〉 10世紀末～11初頭(甲斐型IX期)

竪穴建物跡 S141 (遺構：図 44～46、遺物：図 101・102)

〈位置・主軸〉C・D-16・17区に位置している。主軸方位N-23.5°-E。〈形状・規模〉東西3.9m×南北3.95mの隅丸方角を呈する。北東隅は調査区外にある。検出面からの深度は0.3m。壁面はほぼ直立する。〈床面〉北東側は地山の細粒砂層で、南西に向かって地山の礫層が顕著になる。〈柱穴〉検出しなかった。〈カマド〉東壁の中央やや南寄りに構築されている。袖石がほぼすべて原位置を留めている状態で検出した。天井石、支脚石は遺存していない。焚口の掘り込みは薄く認められ、上部構造は壊されているものの、煙道と思われる土層堆積が認められる。カマド構造材には、粗い粒子の砂岩製砥石が利用されているものがある(1365)。〈その他〉南西隅には、長さ1.05m×幅0.55m、厚さ0.5mの巨礫が配されている。周囲には掘り込みが認められ、巨礫の下から土師器環破片が出土した。表面に使用痕跡は認められなかったため、用途は不明である。〈出土遺物〉遺物はカマド周辺に集中している。出土量は非常に多く、残存度が高いものが多い。土師器環(622～633)、高台環(634)、皿(635～640)、甕(641・642)、羽釜(643・644)、須恵器甕(647)、灰軸陶器碗(648～650)が出土した。環及び皿は口縁部が玉縁を呈し、体部下半に斜行ヘラズリが施される。634は高台に沿って体部外周が人為的に削られている。高台付の高台部を逆位にして小皿として転用したものと考えられる。〈時期〉 10世紀前半(甲斐型IX期)

竪穴建物跡 S142 (遺構：図 44～46、遺物：図 102)

〈位置・主軸〉C-16区に位置している。主軸方位N-22°-E。〈形状・規模〉東西2.35m以上×南北2.85mの隅丸方角を呈する。検出面からの深度は0.1m。壁面は皿形を呈する。〈床面〉全体的に地山の細粒砂層であるがやや締まっている。〈柱穴〉検出しなかった。〈カマド〉北東隅または北壁の中央やや東寄りに構築されている。袖石等の構造材は認められなかった。煙道が長く、建物の主軸に対して東偏して検出している。〈出土遺物〉遺物は中央部に集中している。土師器環(651～653)、皿(654～656)、甕(657)、須恵器甕(659・650)が出土した。650は口径50cmを測る大型品である。〈時期〉 10世紀後半(甲斐型IX期)

竪穴建物跡 SI43 (遺構：図 48、遺物：図 103)

＜位置・主軸＞ J・K-18・19区に位置している。主軸方位 N-15°-E。＜形状・規模＞ 東西 2.15 m 以上×南北 2.75 m 以上の方形を呈する。検出面からの深度は 0.1 m。壁面はほぼ直立する。＜床面＞ 全体的に地山の砂礫層である。＜柱穴＞ 検出しなかった。＜カマド＞ 東壁中央に構築されている。焚口と思われる掘り込みのみ認められた。＜出土遺物＞ 遺物はカマド周辺に集中している。土師器高台付環、(661) 甕 (662～667) が出土した。甕の口縁部は肥厚するものが主体的であるが、屈曲部から口縁端部にかけて短いものが多い。＜時期＞ 11 世紀代(甲斐型Ⅰ期)

竪穴建物跡 SI44 (遺構：図 48、遺物：図 103)

＜位置・主軸＞ D・E-19区に位置している。主軸方位 N-13.5°-E。＜形状・規模＞ 東西 4.4 m×南北 3.0 m 以上の長方形を呈する。SK4003 に切られている。検出面からの深度は 0.25 m。壁面はほぼ直立する。＜床面＞ 全体的に地山の細粒砂層であり軟弱である。＜柱穴＞ 検出しなかった。＜カマド＞ カマドを有さない。＜その他＞ 建物の中央部に鍛冶炉と思われる土坑を擁する。鍛冶炉は西側に突出部を持つ楕円形をしており、底面が被熱して焼土化している。SI44 は鉄製品及び鉄滓の出土が多く (1369、1382、1408、1419、1466、1471、1448、1483)、椀型の鍛冶滓を含む。カマドを有さない建物であることから、小鍛冶工房として使用された建物であると想定される。＜出土遺物＞ 遺物は建物内全体に点在している。土師器環 (668～671)、甕 (672)、灰軸陶器碗 (673)、壺 (674) が出土した。＜時期＞ 10 世紀後半 (甲斐型Ⅰ期)

竪穴建物跡 SI45 (遺構：図 49、遺物：図 104)

＜位置・主軸＞ B・C-18・19区に位置している。主軸方位 M-16.5°-E。＜形状・規模＞ 東西 3.15 m 以上×南北 4.35 m の方形を呈する。SI45 は主に 4 工区において検出したが、検出時にすでに埋め戻していた 3 工区目の調査時点で確認できていなかった。そのため、東壁が未検出の状態である。検出面からの深度は 0.2 m。壁面はほぼ直立する。＜床面＞ 全体的に地山の細粒砂層であり軟弱である。＜柱穴＞ 検出しなかった。＜カマド＞ カマドは確認できなかったが、東壁が未調査となつているため未検出の可能性がある。＜出土遺物＞ 遺物量は少ない。建物内に散在している。土師器環 (675～684)、皿 (685・686)、甕 (688)、羽釜 (689)、高環 (687)、灰軸陶器碗 (690・691)、壺 (692) が出土した。687 は古墳時代後期に附属しており、流れ込みによるものである。土師器環は口縁部が玉縁を呈するものが主体であり、体部のヘラケズリはほとんど見られない。底部を残す資料が微量であるが、回転系切り痕が残るものがある。＜時期＞ 10 世紀後半 (甲斐型Ⅰ期)

竪穴建物跡 SI46 (遺構：図 49、遺物：図 104)

＜位置・主軸＞ A-19・20区に位置している。主軸方位はほぼ真北を向く。＜形状・規模＞ 東西 3.0 m×南北 4.1 m の長方形を呈する。検出面からの深度は 0.1 m。壁面はほぼ直立する。＜床面＞ 全体的に地山の細粒砂層であり軟弱である。＜柱穴＞ 検出しなかった。＜カマド＞ カマドを有さない。＜その他＞ SI46 はカマドを有していないが、建物の中央やや南西寄りに土坑を有する。当該土坑からは溶融土器が出土しており鍛冶炉の可能性が疑われるが、土坑内には被熱の痕跡は認められない。底面は地山の礫層が見える。＜出土遺物＞ 土師器環 (693～696)、高台付環 (697)、甕 (698・699)、灰軸陶器碗 (700・701) が出土した。破片資料が主体的である。701 は腰弧形で口縁端部が外反する。漬け掛けによる施軸。＜時期＞ 11 世紀前半 (甲斐型Ⅰ期)

竪穴建物跡 SI47 (遺構：図 50、遺物：図 104)

＜位置・主軸＞ ZZ・A-22区に位置している。主軸方位 N-12°-E。＜形状・規模＞ 東西 3.1 m×南北約 2.9 m の方形を呈する。検出面からの深度は 0.05 m。掘り込みは非常に薄く、東壁と西壁の一部でプランが明瞭に確認できたが、それ以外は不明瞭であった。そのため、全体規模は推定である。＜床面＞ 全体的に地山の細粒砂層であり軟弱である。＜柱穴＞ 検出しなかった。＜カマド＞ 南東隅に構築されていると思われるが、袖石等の構造物は遺存していない。＜出土遺物＞ 遺物量は少ない。土師器環 (702)、甕 (703～705) を掲載した。703 は口縁部の屈曲が明瞭で短い。＜時期＞ 11 世紀代 (甲斐型Ⅰ期)

竪穴建物跡 SI48 (遺構：図 50、遺物：図 105・106)

＜位置・主軸＞ B・C-19・20区に位置している。主軸方位 N-11°-E。＜形状・規模＞ 東西 2.4 m×南北 3.15

mの方形を呈する。検出面からの深度は0.3m。S148は主に4工区において検出したが、検出時にすでに埋め戻していた3工区目の調査時点では確認できていなかった。そのため、東壁が未検出の状態である。壁面はほぼ確認できなかったが、壁面沿いに周溝が巡っていたため、全体プランが確認できた。〈床面〉カマド周辺からカマド前面にかけて、貼り床が貼られている。〈柱穴〉検出しなかった。〈カマド〉南東隅に構築されている。袖石や天井石等の部材は遺存していなかったが、構造物と思われる黄褐色粘質土が集中していた。カマド内部の土層堆積はやや明瞭に遺存しており、煙道の立ち上がりも明確である。〈出土遺物〉遺物はカマド西側に集中している。遺物の出土量は多く、土師器杯(706～716)、甕(717～722)、羽釜(723・724)、灰釉陶器碗(725)が出土した。杯は口縁部が玉縁を呈しており、体部下半のヘラケズリを持つものが少ない。712・713は内黒土器。甕は口縁部の屈曲が明瞭で短い。〈時期〉10世紀後半(甲斐型Ⅱ期)

竪穴建物跡 S149・50 (遺構：図 51、遺物：図 106)

〈位置・主軸〉ZY・ZZ-25区に位置している。主軸方位N-17°-E。〈形状・規模〉S149は東西2.9m以上×南北5.75m以上の方角を呈する。S150は東西1.1m以上×南北4.0m以上の方角を呈する。S149に大半を切られている。東壁及び南壁は調査区外にある。検出面からの深度は0.2m。壁面はやや直立する。〈床面〉地山の礫層が全体的に見られており、こぶし大程度の礫が床面に広がっている。〈柱穴〉検出しなかった。〈カマド〉東壁が調査区外にあり未確認である。〈出土遺物〉土師器杯(726～731)、皿(732～735)、小型鉢(736)、甕(737)、須恵器甕(738～740)、灰釉陶器碗(742・743)、壺(744)が出土した。736は古墳時代後期に属するものである。流れ込み。〈時期〉10世紀後半(甲斐型Ⅱ期)

第2項 掘立柱建物跡(SB)

掘立柱建物跡 SB01 (遺構：図 52、遺物：図 114)

〈位置・主軸〉B・C-17～19区に位置している。主軸方位N-4°-E。〈桁行・梁間〉桁行5間×梁間2間の竪柱掘立柱建物跡である。桁行10.2m、梁間5.1m程度と推測される。〈柱穴・芯心距離〉柱穴内には礎盤石が設置されているが、抜き取られている柱穴もある。礎盤石には花こう岩の亜円礫が用いられており、検出時点ではうっすらと柱の接地痕跡が見えた。接地痕跡から、柱の寸法は15cm角の角材が用いられていたと想定される。芯心距離は約2.4～2.6m。〈出土遺物〉柱穴内からは土師器杯(933)、灰釉陶器皿(934)(山茶碗か?)、陶器甕(935)、碗(936・937)が出土している。〈時期〉中世前半(13世紀頃か)

掘立柱建物跡 SB02 (遺構：図 53)

〈位置・主軸〉B・C-17～19区に位置している。主軸方位N-4°-E。〈桁行・梁間〉桁行5間×梁間1間の掘立柱建物跡である。検出できなかった柱穴が多いが、桁行10.2m、梁間2.7m程度と推測される。〈柱穴・芯心距離〉SP5014は柱根と思われる土層堆積が残存している。SP5029は柱根と思われる土層が残存もしくは抜き取り穴が観察できる。芯心距離は約2.8m。〈出土遺物〉遺物は出土しなかった。〈時期〉中世前半?

掘立柱建物跡 SB03 (遺構：図 54)

〈位置・主軸〉J・K-14・15区に位置している。主軸方位N-19°-E。〈桁行・梁間〉桁行2間×梁間2間の掘立柱建物跡である。柱穴の並びは不整。〈柱穴・芯心距離〉芯心距離は約5.2m。SP3067が建物構成する柱穴の可能性があり、その場合は2.8m。〈出土遺物〉遺物は出土しなかった。〈時期〉中世前半か?

第3項 溝(SD)

溝 SD1004 (遺構：図 54)

〈形状・規模等〉長さ4.8m、幅0.7m、深さ0.17mの直線に伸びる溝。西端は調査区外に延伸している。SD1005と平行して位置しており、同時期に存在していた可能性が高い。SK1017に切られている。〈遺構概要〉S101、S102、S103、S108等の竪穴建物跡の主軸に直交する軸を有している。このことから、集落の土地区画に起因する機能を持つ溝の可能性が想定される。〈出土遺物〉遺物は出土しなかった。〈時期〉平安時代後半か?

溝 SD1005 (遺構：図 54)

<形状・規模等> 長さ 7.95 m、幅 0.45 m、深さ 0.3 mの直線に伸びる溝。SD1004 と平行して位置しており、同時期に存在していた可能性が高い。<遺構概要> SD1004 と同様に SI01、SI02、SI03、SI08 等の竪穴建物跡の主軸に直交する軸を有している。<出土遺物> 遺物は出土しなかった。<時期> 平安時代後半か？

溝 SD1006 (遺構：図 54、遺物：図 107)

<形状・規模等> 長さ 9.5 m以上、幅 1.15 m、深さ 0.1 mの直線に伸びる溝。SI01 に切られており、東端は検出しなかった。<遺構概要> SI05 の主軸に直交する軸を有している。直線的かつ幅広く浅い溝であることから、水を流下する目的ではなく、土地区画の機能を持った溝と想定される。<出土遺物> 土師器坏、須恵器裏破片が出土した。749 は底部から体部にかけての稜が丸みを持つ。750 は口縁部が外湾する。<時期> 11 世紀後半頃 (甲斐型VI期)

溝 SD1007 (遺構：図 55)

<形状・規模等> 長さ 8.35 m以上、幅 1.1 m、深さ 0.65 mの溝。北端は調査区外に延伸している。SI04 を切っている。<遺構概要> 全体的な線形は直線的であるがプランは不整形であり、所々に枝状に伸びている箇所がある。埋土は砂を主体とする水成堆積であり、水が流下していたと想定される。氾濫流路の一部の可能性はある。<時期> 不明。

溝 SD1009 (遺構：図 55)

<形状・規模等> 長さ 3.8 m以上、幅 0.3 m、深さ 0.3 mの直線に伸びる溝。西端に向かって次第に浅くなっていき、遺構プランが不明瞭になる。<遺構概要> SD1004、SD1005 に近い主軸を有しているが、やや北偏している。明確な機能は不明。<出土遺物> 遺物は出土しなかった。<時期> 平安時代後半か？

溝 SD1010 (遺構：図 55、遺物：図 107)

<形状・規模等> 長さ 3.0 m以上、幅 0.8 m、深さ 0.15 mの北西に向かって曲線的に伸びる溝である。SX1003 を切っているが、南端の遺構プランは不明瞭であった。<遺構概要> 機能は不明であるが、SD1007 の延長の可能性はある。遺構プランが人為的でなく (崩落した可能性もあるが)、埋土が水成堆積であることから SD1007、SD1010 は自然流下した氾濫流路の可能性が示唆される。隣接区域では、SX1001 とした柱状高台付坏を主体とする筋状の遺物集中区が平行している。SX1001 は明確な掘り込みを有していないことから、SD1007、SD1010 のような溝を由来とする可能性がある。<出土遺物> 遺物は出土しなかった。<時期> 平安時代後半か？

溝 SD2001 (遺構：図 55、遺物：図 107)

<形状・規模等> 長さ 8.3 m、幅 1.8 m、深さ 0.15 mの直線に伸びる溝。<遺構概要> II期遺構面の大畦畔の直下であり、同一の軸を持つ。<出土遺物> 遺物は出土しなかった。<時期> 平安時代後半か？

溝 SD3002 (遺構：図 56、遺物：図 107)

<形状・規模等> 長さ 4.2 m以上、幅 0.8 m、深さ 0.15 mの不整形の溝。北端は調査区外に延伸している。<出土遺物> 遺物は出土しなかったが、検出面上面においては完形の小型壺 (1084) が出土した。覆土中からではないため、遺構外出土遺物として掲載してある。<時期> 平安時代後半か？

溝 SD3003 (遺構：図 56)

<形状・規模等> 長さ 1.35 m以上、幅 0.55 m、深さ 0.1 mの溝。北端は SK3003 に切られている。<出土遺物> 遺物は出土しなかった。<時期> 平安時代後半か？

溝 SD3004 (遺構：図 56)

<形状・規模等> 長さ 2.05 m以上、幅 0.4 m、深さ 0.1 mの溝。<出土遺物> 遺物は出土しなかった。<時期> 平安時代後半か？

溝 SD4001・SX2003 (遺構：図 56、遺物：図 107)

<形状・規模等> 長さ 38.2 m、幅 3.8 m、深さ 1.4 m の直線的に伸びる大溝。溝断面は V 字状を呈している。
<遺構概要> II 区調査においては、人頭大の礫が集中していたことから人為的な石積みの可能性を考慮して、礫の検出に努めた。そのため、石垣のような遺構を想定して不明遺構 (SX) として調査を行った。延伸する III 区の調査では、溝の対岸が検出されたため、改めて溝として調査を行い、土層確認用のサブトレンチを 2 本設定して、バックホーを用いて掘削を行った。その結果、溝は断面 V 字状の人為的な溝であることが分かり、II 区で検出した礫は溝の埋没過程において投棄されたものと分かった。礫は溝の西側から投棄されたようで、西から東に向かって傾斜して検出している。また、礫が投棄されたタイミングは 2 度あることが分かった。礫の大きさは人頭大が主体的であるが大小の規則性は認められない。そのため、流れ込みではないと判断した。<出土遺物> 遺物量は少量であるが、中層の人頭大の礫の投棄層から多く出土した。762～764 は土師皿。765～768 は土師器杯、766 は底部、体部とも分厚く作り出されており、口縁部の歪みが著しい。769～771 は灰軸陶器。769 は鉢、770、771 は壺。<時期> 大溝の底付近からの遺物の出土はほとんどなく、構築時期を決定づける遺物は出土しなかったが、中層の礫層から出土した土師皿 (カワラケ) の年代傾向から、中世前半頃に構築された遺構であると考えられる。

溝 SD4002 (遺構：図 57)

<形状・規模等> 長さ 28.6 m、幅 3.5 m、深さ 1.1 m の直線に伸びる大溝。SD4001 に直交する軸を有している。
<遺構概要> 大溝 SD4001 と直交する軸を有していることから、SD4001 がくの字に屈曲する堀状を呈する可能性が高いと推測される。しかしながら、調査区南東部は町民会館建設に伴う攪乱を受けており、屈曲部の検出は出来なかった。また、SD4002 の基盤層は河川氾濫に由来すると思われる礫層であり、遺構の検出は困難であった。調査終了直前に遺構の存在を確認し、サブトレンチを 2 本設定して SD4001 に似た堀状の遺構であることを確認したが、青洲高校の起工式に向けた埋め戻しの期限に間に合わず、学術文化財課 (現文化振興・文化財課) 担当と協議したうえで遺構全体を掘削することなく埋め戻すこととなってしまった。大きな後悔と反省をすべき遺構である。SD4002 は東端部で NR4001 を切っているが、その西側には続いている。SD4002 の構築時点では、NR4001 は埋没していたか埋没過程にあったため、同地点において地形の変化点又は土地境界等のポイントがあったのかもしれない。<出土遺物> 772 は土師皿。773 は土師器杯、774・775 は灰軸陶器。774 は皿、775 は長頸壺の頸部破片。776 は須恵器裏の破片。<時期> SX2003、SD4001 と出土傾向は同様で、溝覆土の中層域からの出土が大半を占める。年代観も SX2003・SD4001 の遺物と酷似していることから、矩形に曲がる区画溝として認識する。時代は中世前半頃。

第 4 項 流路 (NR)

流路 NR1001・3001・4001 (遺構：図 58・59、遺物：図 107～111)

<形状・規模等> NR1001：長さ 26.5 m 以上、幅 4.0 m、深さ 0.9 m、NR3001：長さ 12.5 m 以上、幅 3.7 m、深さ 0.6 m、NR4001：長さ 23.9 m、幅 2.3 m、深さ 0.7 m の断面皿形を呈する溝。それぞれの流路は検出した線形及び幅、深さの規模から同一の遺構であると捉えられ、推定延長を含む全体の規模は長さ 95 m 以上になる。
<遺構概要> 初めて検出した I 区の調査段階では、調査区中央部で北進する流路が北西に進路を変えていたことやプランが不整形であったことを踏まえて自然流路としたが、III 区の調査ではほぼ直線的に検出している。埋土の観察から流水があったことが想定されるが、人為的な掘削によるものか、自然流路かは今一度検討の余地は残されている。出土遺物は主として 10 世紀代のものが埋土中に含まれており、埋没後に跡地に竪穴建物跡が構築されていることから、流路の存続期間は 10 世紀代における 100 年程度と考えられ、埋没後も集落経営は続いていたことが分かる。竪穴建物跡の配置を見てみると、この自然流路から西側には流路沿いに竪穴建物が密集して切り合っており、一方東側では広範囲に点在して、切り合っているものは少ない傾向がうかがえる。このことは、西側に展開する建物群は建物の構築場所に規制があった可能性を示唆しており、この自然流路が土地区画の機能を有していた可能性を指摘できる。2 次調査～4 次調査に至るまで、平安期の集落は広く展開していることが分かるため、より広域な土地利用の傾向を把握して検討が必要である。<出土遺物> NR1001.3001.4001 は同一遺構として捉えられるが、分断された調査地点ごとに報告する。NR1001：777～803 は土師器杯。777～782 は体部下半に斜行ヘラケズリが施されるもので底部は回転系切り後ヘラケズリされる。783～803 は底部が回転系切りの切りっぱなしである。いずれも底部が体部に対して厚く作り出されている。底部から体部に

かけての境界に着目すると、783、784、793、794、795のように稜が無く丸みを帯びているもの(①)と、785、786、788、791、797～798のように角があり底部から体部にかけて鈍角に立ち上がるもの(②)、それ以外の底部から体部にかけて鋭角に立ち上がり、外反しながら体部になっていくもの(③)の3パターンに区分できる。783・791は内面に黒色処理が施されるものである。804は柱状高台付土器か。805・806は高台碗。806は高台部の接続にハケ調整が施されている。807～812は土師器皿。807～810は体部下半に斜行ヘラケズリが施されるもの。811は土師器環の②のパターン、812は③のパターンに区分される。813は土師器小鉢。内外面に横方向のミガキが密に施される。814は小壺か。815～816は土師器羽釜。817は裏か羽釜の底部。818は須恵器裏の体部破片。819～825は灰軸陶器。822～824は碗。漬け掛けにより施釉され、高台の断面形状はやや三角形を呈する。826～828は緑軸陶器碗と皿。いずれも内外面に細かいミガキが施されている。826は4～5枚の花弁状になるように、体部外面に稜が施される。827は口縁部に花卉文が刻まれている。NR3001：829～840は土師器環。841は高台付杯。内面に黒色処理が施される。842は小壺。843～846は土師器裏。847は須恵器裏。848・849は灰軸陶器壺。850は緑軸陶器。NR4001：851～858は土師器環。859は土師器裏。860は土師器羽釜。861・862は緑軸陶器皿。内面に花弁状の模様が施されているようであるが、摩耗が著しく明確には読み取れない。863は彩軸陶器鉢の破片。胎土はやや粗い陶土が用いられ、色調は肌色に近い。外面に施される緑軸は発色が良好であり、緑軸陶器とは異なる。ここでは彩軸陶器として貿易陶磁の一群として捉えたが、産地の判別には至らなかった。<時期> 10世紀前半～11世紀前半頃。

第5項 集石遺構(SS)

集石遺構 SS2001 (遺構：図60、遺物：図111)

<位置> N-9区において検出した。地山の暗褐色細粒砂層において検出した。<形状・規模等> 形状は不整形。<遺構概要> 明確な掘り込みを有しておらず、規模を捉えることはできない。こぶし大の亜円礫～亜円礫が集中し、周辺に焼土及び遺物がまぎらって検出したものである。<出土遺物> 864は土師器環。865は土師質の裏底部か。底部から体部にかけての稜が丸みを帯びるようにハケにより調整されている。<時期> 11世紀代。

集石遺構 SS3001 (遺構：図60、遺物：図111)

<位置> C-14区に位置する。SI26を切って構築されている。<形状・規模等> 平面プランは径2.2mの円形で断面形状は浅い皿状を呈する。深さ0.25m。<遺構概要> 円形の掘り込みに対して、外周を人頭大の礫を用いて囲み、その内側をこぶし大の礫で充填した様相を呈する。西側の礫は取り除かれている。礫には被熱の痕跡は認められない。用途・機能は不明である。<出土遺物> 866は土師器環。867は陶器裏の体部破片であり、外面に叩き工具の痕跡が残る。<時期> 放射性炭素年代測定の結果では、10世紀後半頃の年代が示されている。

集石遺構 SS3002 (遺構：図60)

<位置> D-11区に位置する。<形状・規模等> 長さ2.3m、幅0.6mの楕円形の平面プランを有する。深さ0.2m。<遺構概要> 掘り込み内にこぶし大の亜円礫を充てんし、敷き並べたものであり、礫の基質には炭化材が多量に含まれている。礫には被熱した痕跡が認められる。用途・機能は判然としない。<出土遺物> 遺物は出土しなかった。<時期> 時期の特定に至る遺物は出土しなかったが、放射性炭素年代測定の結果では、10世紀末頃の年代が示されている。

第6項 土坑・ピット (遺構：図61～74、遺物：図111～114)

第1次調査では土坑84基、ピット162基を検出した。数量が多いため、その計測一覧を土坑は表3、ピットは表4に示し、個別の様態の報告はページ数の都合から省略する。第1次調査では、径約70cmを基準として、70cm以上のものを土坑、それ未満をピットとして名称を付した。検出した土坑及びピットは検出段階で遺構番号を付し、遺構半裁時点で遺構と判断しなかったものが多く、遺構番号の数字が欠番になっているものが多くある。

土坑の分布傾向としては、竪穴建物跡の分布傾向と有機的であり、集落の経営に際して使用されたものと思定される。ただし、C-14～17区にかけて、SI26～29、31を切った土坑が集中する一群(SK3010、3011、3013～3020、3022、3023、3025～3027、3037)があり、これらの土坑は包含層上面から掘り込まれた竪穴建物跡よりも新しい時期の遺構として捉えられる。これらの土坑の大半は遺物をほとんど伴わず、配置に規則

性も認められない。用途は不明である。その他、SK4001、4003、4004、5009のような径2mに及ぶ大規模な土坑が検出した。これらは断面形状が皿形で非常に浅い。SK4001・4003からは901・908のようなカワラケ、SK4003では910といった非常に上部が高い柱状高台土器が出土していることから、13世紀頃の所産と考えられ、同様の規格性を有する4004、5009も同様の時期に構築されたものかもしれない。

ピットの分布傾向は比較的顕著であり、例えばG-4区～J-6区、N-15区～P-16区、C-10区～G-12区、J-14区～K-16区、B-16区～D-14区である程度まとまった分布傾向を示している。これらのピット群で掘立柱建物の規模が想定できるかは検討の余地があるが、いずれの群も竪穴建物跡が密集する区域で検出されている。このことは、竪穴建物跡が構築される居住域としての空間利用と同様の土地利用の思想の中で構築されていると考えられる。このことを踏まえ、当該集落の経営時期において、竪穴建物跡から掘立柱建物に居住建屋の構造が変化したと推測することができる。

第7項 不明遺構・竪穴状遺構

竪穴状遺構 SX1001 (遺構：図75、遺物：図114・115)

<位置> H-8区に位置する。<形状・規模等> 長さ3.25m、幅2.5m、深さ0.6mの隅丸方形を呈する。断面形状は漏斗状を呈している。<遺構概要> II期水田水路跡の下から検出した。埋土は鉄分が多く泥分を多く含む粘質土が主体的であり、水が溜まって埋没した形跡がみられる。用途・機能は不明。<出土遺物> 遺構底部付近において多く出土する傾向がある。939はカワラケ。ロクロ作りによるものであり、胎土は灰白色。非常に浅いものである。940～945は土師器環、946～950は柱状高台付土器、951は古墳時代高環。流れ込みによるものである。952～954は灰釉陶器碗。955～962は陶器破片である。平安時代後半以降の遺物を主体的に含んでいるが、939のようなカワラケや陶器の組成から、比較的新しい時期に構築されたものと考えられる。<時期> 12世紀代。

不明遺構 SX1002 (遺構：図76、遺物：図115・116)

<位置> H～I-6～8区に位置する。<形状・規模等> SX1002では地上上に堆積した砂礫層中において土器が大量に含まれていた。この砂礫層中の出土遺物では柱状高台付土器が主体的に認められたことから、遺構として認識して遺物の分布状況を記録した。当該位置において掘り込みは認められず、また、掘削時点の砂礫層の分布の把握が間に合わなかったため、取り上げ層位の記録を基に遺物分布を図化した。遺構の形状としては南北方向やや西偏の軸で筋状に展開する概形を呈するが、全体の規模は不明である。<遺構概要> 出土遺物はほぼ水平分布を示しており、若干北側に傾斜する傾向がある。柱状高台付土器、カワラケが主体的であり、若干土師質煮炊具、陶器類、脚高高台付土器が混じる。それぞれの種別の土器は散在的であり、分布に偏りは見られない。<出土遺物> 963～976は土師質土器環または皿。いずれも体部に対して底部が分厚いものである。978～993は柱状高台付土器。柱状高台の形状により、①底部から上部にかけての稜が尖るもの(980～983)、②上部の下部に一段稜が付くもの(985～989)、③上部の下部に一段稜を持ち、かつ上部が直立するものに細分できる。994～996は土師質甕。995は口縁部が折り返して肥厚する。997～999は須恵器または須恵質の陶器。1000～1008は陶器類である。<時期> 12世紀代。

竪穴状遺構 SX1003 (遺構：図75、遺物：図117)

<位置> J-6区に位置する。<形状・規模等> 長さ3.1m、幅2.6m、深さ0.15mの不整形方形を呈する竪穴状の遺構である。<遺構概要> 平面プランは竪穴建物跡に似ているが、平面プランが不整形であるため竪穴状遺構として遺構名を付した。掘り込みは浅く、用途・機能を推定する特徴は認められない。<出土遺物> 1009～1016は土師器環である。1010は脚高高台付環。脚部は直線的で断面形状は三角形を呈している。<時期> 10世紀後半頃か。

竪穴状遺構 SX2005 (遺構：図75、遺物：図117)

<位置> L-7区に位置する。<形状・規模等> 長さ2.95m、幅2.7m、深さ0.2mの方形を呈する竪穴状の遺構である。<遺構概要> SX2005内には土坑が密集しており、いずれも0.45m程度の深さを持つ。土層断面の観察では、土坑が切っていることから、竪穴状遺構と土坑の構築及び埋没の時間差はある。<出土遺物> 土師器環(1017、1018)が出土した。<時期> 11世紀代。

第8項 遺構外出土遺物

(1) 土器、陶磁器 (図117～124)

遺構外出土遺物の掲載に当たっては、可能な限り分類を行ったうえで掲載を行ったが、時期区分により並べたものではないことに留意されたい。1019～1042は土師器坏。1019～1021は体部下半に斜行ヘラケズリが施されるものであり、底部は回転糸切り後ヘラケズリが施されている。1021は口縁端部が玉縁状に肥厚する。1020は黒書土器で「後」が書かれている。筆の入りや払いの様子から、普段から書き慣れた人物によるものと考えられる。1022～1032は外面にヘラケズリの調整がみられないものである。1026～1032は底部が分厚いものであり、底部から体部にかけて稜の状態から、①角が無く丸みを帯びているもの、②鈍角に立ち上がるもの、③やや垂直気味に立ち上がり体部にかけて外反していくものの3パターンに細分できる。1037～1054はカワラケ。口径はいずれも似通った寸法を示しているが、体部の線形や全体的な厚さ、口縁部形状など統一感は見られない。1043～1051は非常に浅い皿。ロクロ作りであり、胎土は灰白色。1044は静止糸切りにより切り出されている。1056～1074は柱状高台付土器。SX1002で示したように台部形状、稜のつくり方でパターン化できる。1075・1076は脚高高台付土器、1077は土師器皿。口縁部が玉縁状に肥厚する。1078～1082は土師器甕。1083は土師器坏であるが、内面が溶融している。鍛冶作業において使用されたものだろう。1084は土師器小壺の完形品である。1085・1086は土師質土器の鉢類。1085の内面は煤でおおわれている。1087～1092は須恵器。坏、甕、壺が少量出土している。1093～1127は陶器類である。1093～1103は碗または皿である。1093～1097は漬け掛けによる施釉。高台形状は、1096・1098・1099は台状を呈し、1097は三日月形を呈する。1103は高台の接地部分に靱殻が付着した痕跡が見られる。山茶碗か。1104～1106は灰釉陶器鉢。口縁端部に平坦面を作る三角形状を呈している。1107～1110は灰釉陶器壺。1111～1114は緑釉陶器の壺または皿。1111は段皿で口縁部に花卉状の文様が施されている。1115～1127は滑溜の甕である。いずれも破片資料。1123～1125の外面にはそれぞれ刻印が施されている。1128～1133は古墳時代の土器である。1128は高坏。1129は台付甕の台部。1133は須恵器のハソウ。1134は瓦質土器花皿。体部外面に稜が施されており、全体形を花形に成形している。内面には水平方向の磨きが施されている。

新町前遺跡では遺跡発見時点から貿易陶磁器の存在が明らかになっていたが、発掘調査において、多量の青磁・白磁破片が出土した。総数は179点に及ぶ。いずれも破片資料であるが全点掲載した。図化に当たっては可能な限り積極的に器形の推定復元を行っている。なお、青磁・白磁の分類に当たっては、『史跡大宰府跡Ⅴ』・・・に準拠した。1135～1195は白磁。1135～1154は白磁碗。ほぼ全て口縁端部が外側に肥厚しているが、1143～1145は外反しているものもある。口径は13～19cm。器高を復元できるものは無かった。1155～1159は白磁小碗。1155・1156は口縁部が内湾し、1157～1159は外反する。口径は14～16cm。1162～1169は白磁皿。底部から体部にかけての立ち上がりの作り出しに統一感がなく、形状も区々である。1170は白磁壺口縁部である。端部は折り返されてくの字状を呈している。1171は耳壺の耳部である。図化に際しては3ヶ所に耳が図化されているが、実際は耳の個数は不明である。1175・1176は器壁が非常に薄く、口縁端部が外反する形状を呈する。ここでは鉢として報告した。1177～1195は破片資料である。1196～1314は青磁。1196～1275は龍泉窯系青磁であり、本遺跡において最も高率で出土する。1196～1201は内面に蓮弁紋が見られるものである。1204～1206は見込み部に文様が施されているもの。1208～1241は外面に鎬蓮弁文が見られるものである。その他、1282～1285は小碗、1286～1287は皿、1288～1290は壺である。1291～1295は同安窯系青磁碗である。1296～1314は器種不明の青磁である。1315～1319は輸入彩釉陶器とした。胎土に粗い陶土を用いており、やや橙色がかっている。緑釉の発色が良好であることが特徴である。

第9項 その他の遺物

(1) 土製品 (図125)

土製品では土鍾、土製円盤、鞆羽口を掲載した。1320～1329は土鍾。土鍾はH～J・5・6区において集中して出土している。1322は小型の土鍾であり、他のものとは用途が異なる可能性がある。1329は丸くふっくらした形状を呈している。1330はSX1002から出土したものであり、中央に孔が穿たれている。土製円盤は土師器坏の破片を転用したものであり、外周を丁寧にうち欠いて、中央よりやや偏った位置に孔が穿たれている。1332～1360は鞆羽口である。1332～1336は羽口の口部破片であり、溶融して発泡が見られる。1337～1360は溶融が見られない部位の破片資料であるが、掲載したものは壁厚が分かるものを選んで報告している。このほか、鞆羽口と思われる破片が多量に出土しており、SI44やSI46で検出した鍛冶が遺構の存在や鉄渣の多

さから相当数の鍛冶作業が行われていたことが示唆される。

(2) 石製品 (図 126)

1361～1363は砥石。軟質の砂岩系の石材を用いたものである。1362はSI39から出土したものである。1366も砥石としたが、再考の余地はある。黒色の頁岩を磨き上げて作られたものであり、全体の形状は硯状を呈している。ただし、中心の凹んでいる部分に孔が開いていることから、硯としての機能を果たさない。端部には幾条かの平行する擦り痕見えることや磨き上げてある状況から砥石としてある。1367は軽石製の凹み石。1365はSI41のカマド構造材として使用されていたものである。粗い砂岩製であり、中央に砥石として使用されたと思われるスリットが見られる。全体的に被熱しているため、検出時点でボロボロに剥離していた。

(3) 金属製品 (図 127～129)

金属製品では、刀子(1368～1379)、鎌(1380・1381)、鋸(1382～1385)、火箸(1386)、釘(1387～1416)、鋸(1417・1418)、毛抜き状鉄製品(1419～1423)、その他棒状鉄製品(1424～1442)を報告する。1368の刀子は大型で、茎との境界が厚く肥厚している。1369は刀身～茎にかけての破片。1380は概ね完形の鎌であり、柄の装着部は折れ曲がっている。この折り曲げは柄の装着後の固定のために行われたものと思われ、1381にも同様の折曲がりが見られる。1382～1384は雁股鋸。1382はほぼ完形品であり、SI44から出土したものである。火箸は鍛冶作業において使用されたものの可能性がある。釘は断面が四角形を呈する棒状鉄製品を分類している。1417・1418は鋸。断面四角形で、くの字に曲がっているものを分類した。1417は2つの鋸が錆により癒着している。1419～1423は毛抜き状鉄製品。断面が四角形かつ円弧を描いて屈曲しているものである。1424～1442は棒状鉄製品。断面が丸いもの、断面四角形であるが太いもので、釘か鉄鋸の茎か区分できなかったものを含む。1451～1485は鉄滓。1451～1460は断面が椀型を示す椀型滓。当該調査区においては相当量の椀型滓を含む鉄滓が出土しており、活発に小鍛冶作業が行われていたことを示す根拠資料である。1486～1489は銅製品。1486は銅碗。非常に薄く、取り上げ時点ではバラバラに破損していた。1487は銅滓とした。表面には何かの型が写し取られているようであるが、元型は読み取れなかった。1488、1489は不明の銅製品。1488は両側が若干立ち上がる札状のもの。1489は不明の銅塊である。

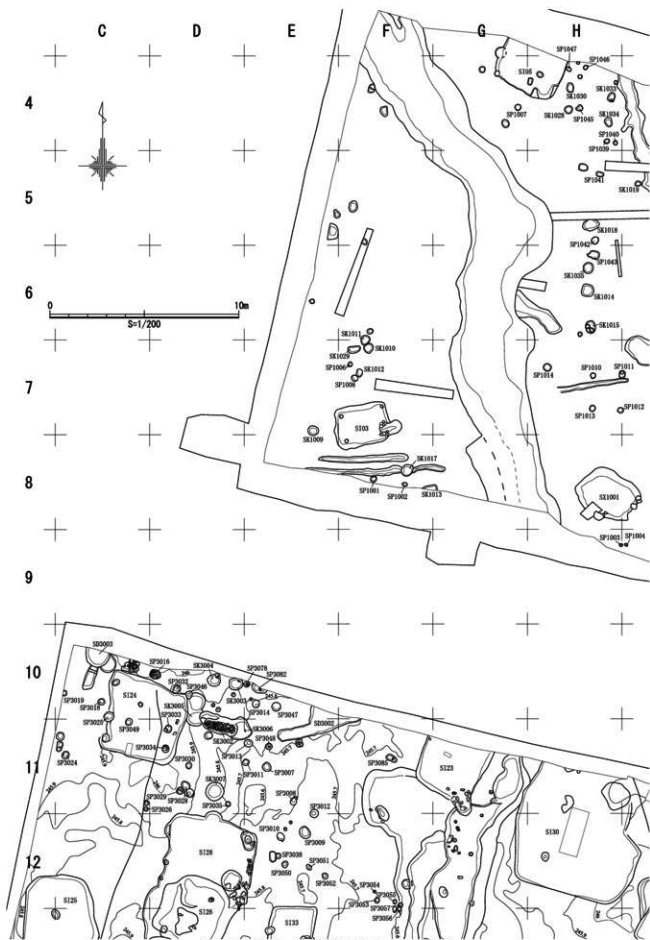


図6 1次調査 I期遺構配置図(分割図①)

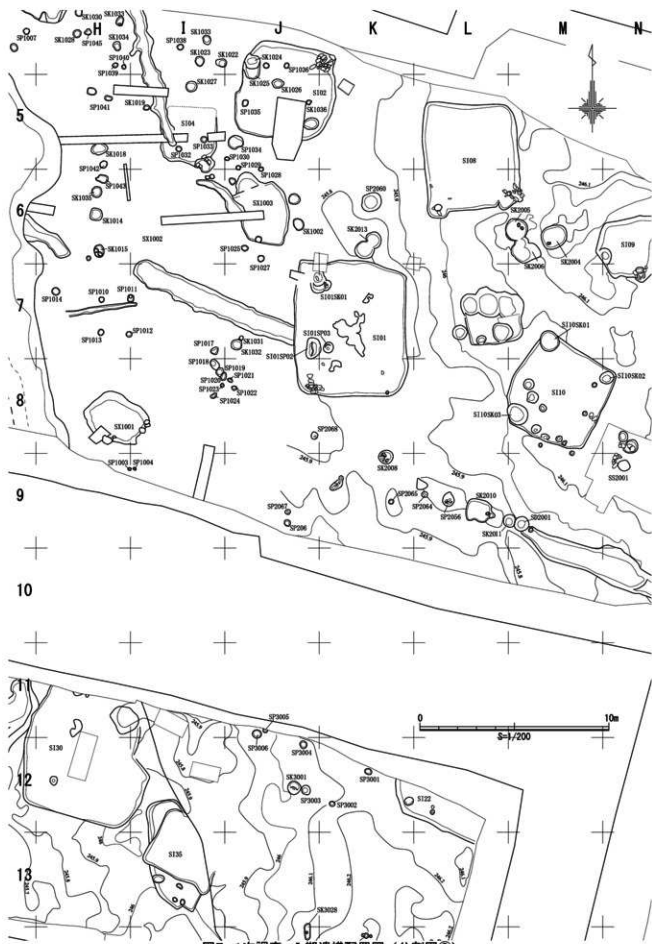


図7 1次調査 I期遺構配置図(分割②)

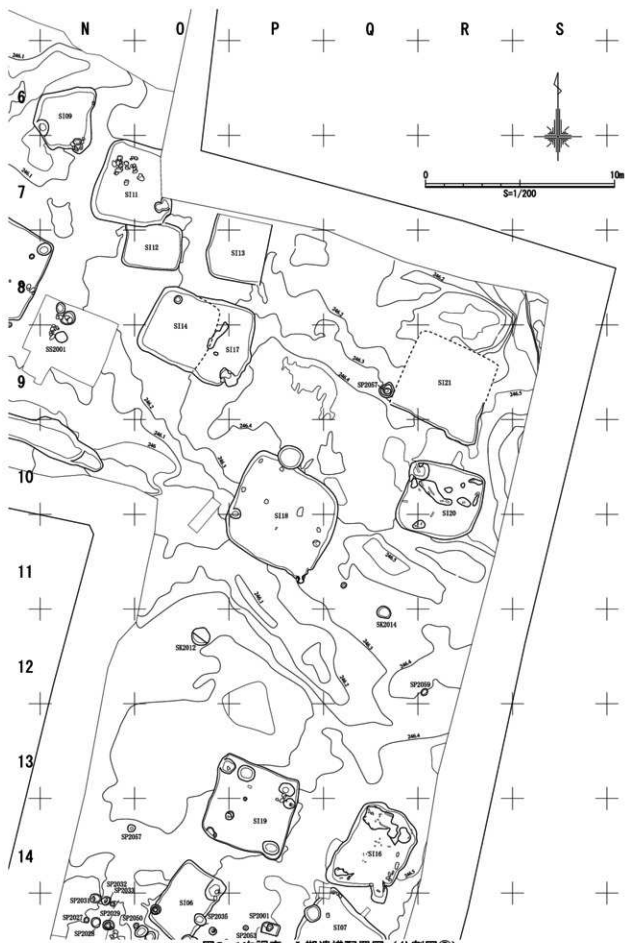


図8 1次調査 I期遺構配置図(分割図③)



図9 1次調査 I期遺構配置図(分割図④)

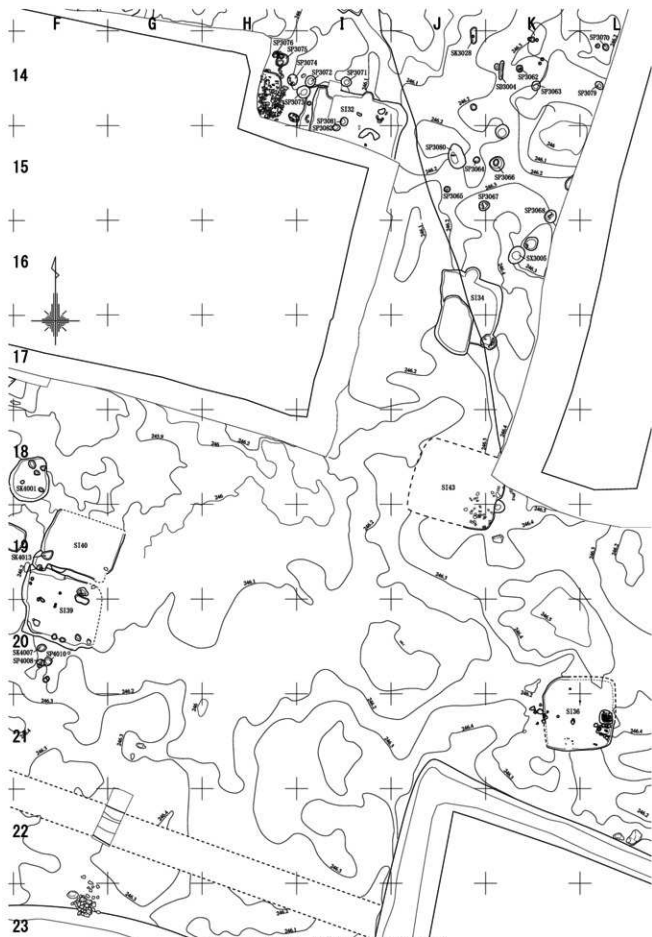
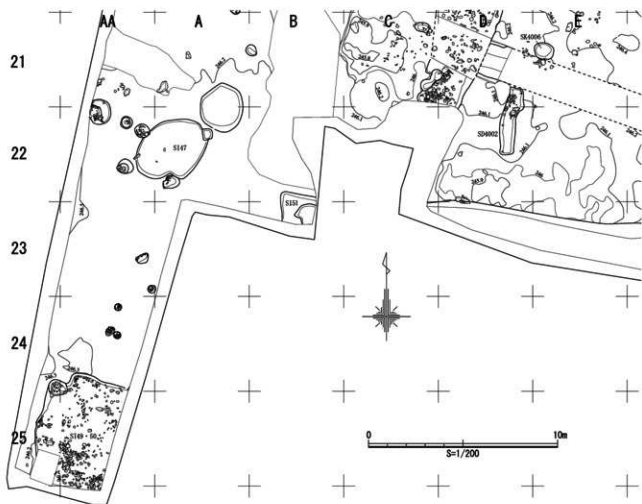


図10 1次調査 遺構配置図 (分割図⑤)



図 11 1次調査 遺構配置図 (分図⑥)



26

図 12 1次調査 遺構配置図 (分割図⑦)

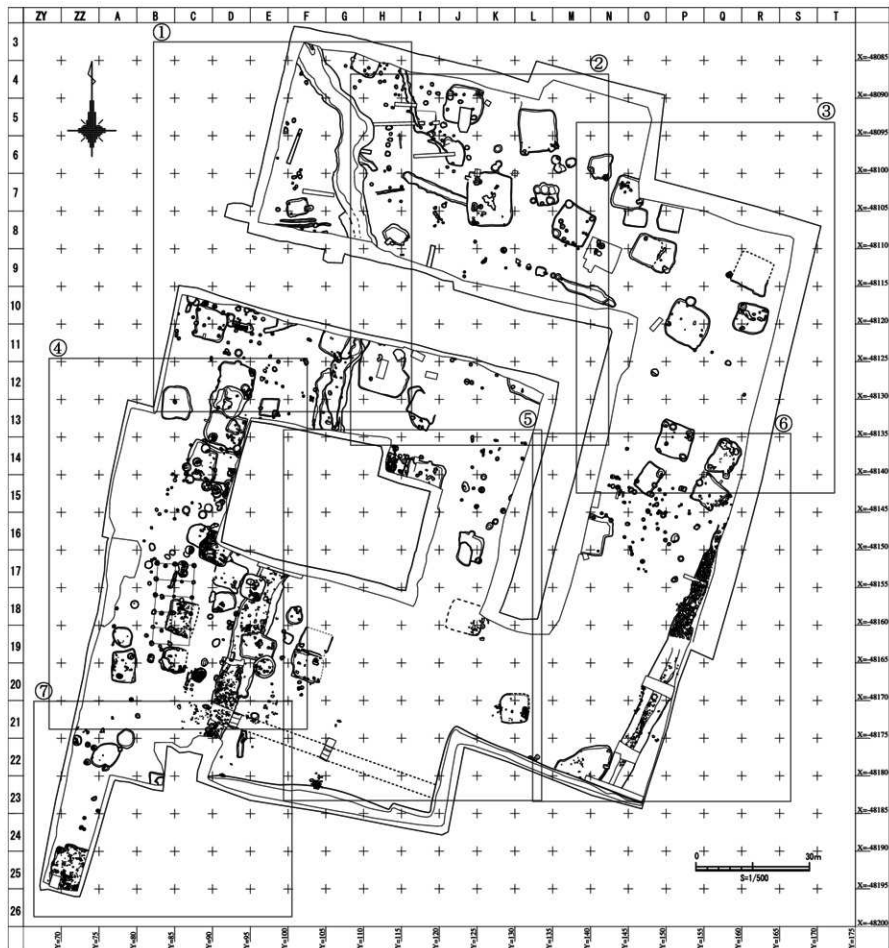
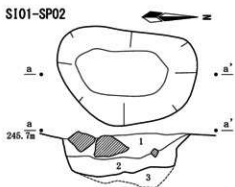
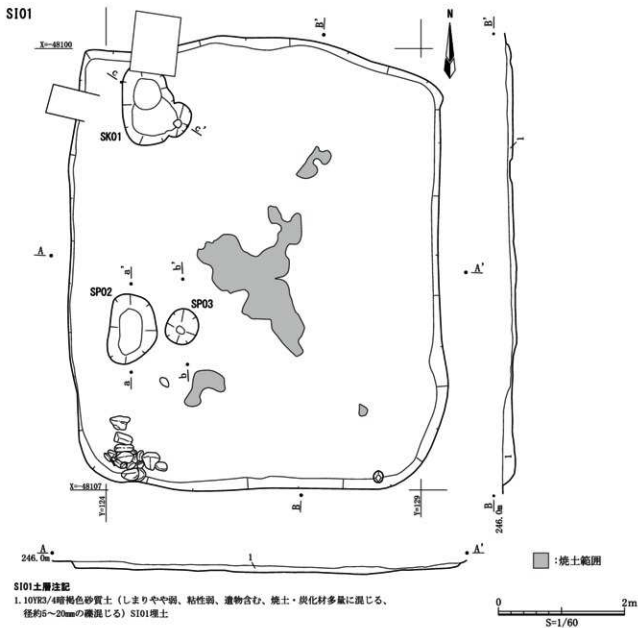
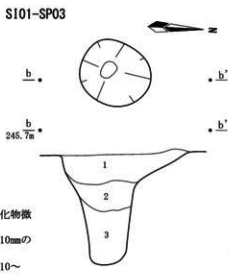


図 13 1次調査 遺構全体図 (I期)



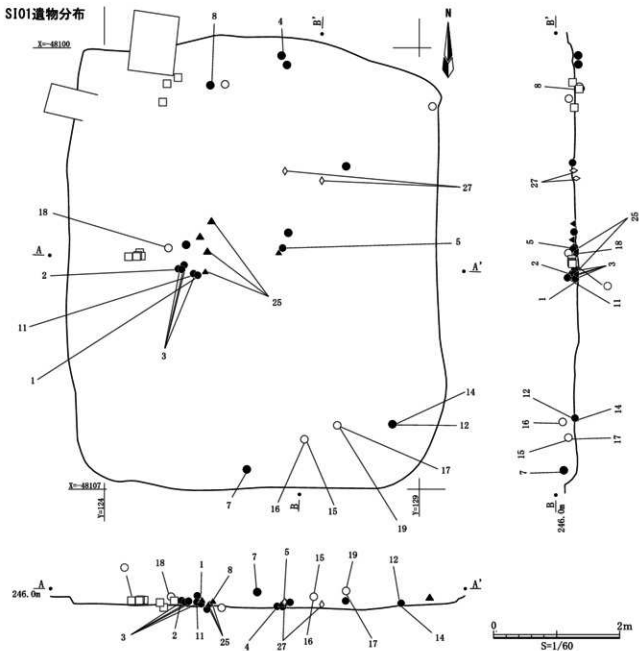
- SI01-SP02土層注記**
1. 10YR3/2黒褐色砂質土（しまり強、粘性やや強、炭化物微量混じる、径約30mmの礫混じる）
 2. 10YR3/2黒褐色砂礫層（しまり強、粘性なし、径約10mmの礫多く混じる）
 3. 10YR4/4褐色砂質土（しまりやや強、粘性弱、径約10～20mmの礫混じる）地山層



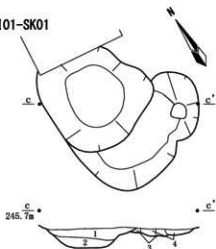
- SI01-SP03土層注記**
1. 10YR3/2黒褐色砂質土（しまり強、粘性弱、径約10～20mmの礫混じる）
 2. 10YR3/2黒褐色砂礫層（しまり弱、粘性やや強、炭化物少量含む）
 3. 10YR3/2黒褐色砂質土（しまり弱、粘性弱）

図14 竪穴建物跡SI01平面図、SI01内ピット

S101遺物分布



S101-SK01



S101-SK01土層注記

1. 10YR2/2黒褐色砂質土（しまりやや強、粘性やや強、焼土・炭化物微量混じる、黄褐色砂質土をブロック状に含む、径約10～20mmの礫少量混じる）
2. 10YR3/3暗褐色砂質層（しまりやや弱、粘性やや強、径約10mmの礫微量混じる）
3. 10YR4/4褐色砂質土（しまりやや強、粘性やや弱）地山由来ブロック
4. 10YR3/3暗褐色砂質土（しまりやや強、粘性やや強、炭化物混じる、径約10mmの礫混じる）

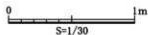
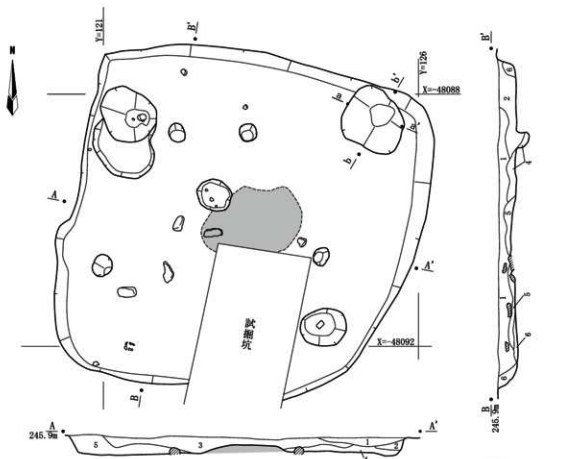


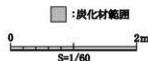
図15 竪穴建物跡S101遺物分布図、S101内土坑

S102

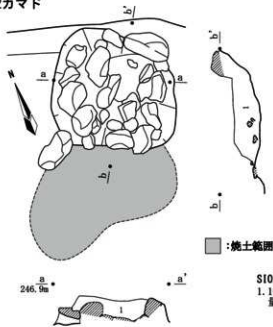


S102土層注記

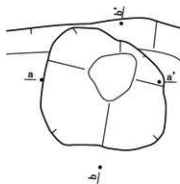
1. 10YR3/3暗褐色砂質土 (しまりやや強、粘性弱、炭化物多く含む)
2. 10YR3/3暗褐色砂質土 (しまりやや強、粘性弱、径30mmの礫を少量含む、炭化物少量含む)
3. 10YR3/4暗褐色砂質土 (しまりやや強、粘性弱、炭化物含む)
4. 10YR2/3黒褐色砂質土 (しまりやや強、粘性弱、炭化物、焼土少量含む)
5. 10YR3/4暗褐色砂質土 (しまりやや強、粘性弱、炭化物、焼土多く含む)
6. 10YR3/3暗褐色砂質土 (しまりやや強、粘性弱、炭化物少量含む、径10mmの礫を少量含む)



S102カマド



S102カマド完掘



S102カマド土層注記

1. 10YR3/2黒褐色砂質土 (しまりやや弱、粘性やや強、炭化物多量を含む、焼土粒少量含む、径50mmの礫を多く含む)

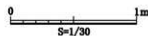
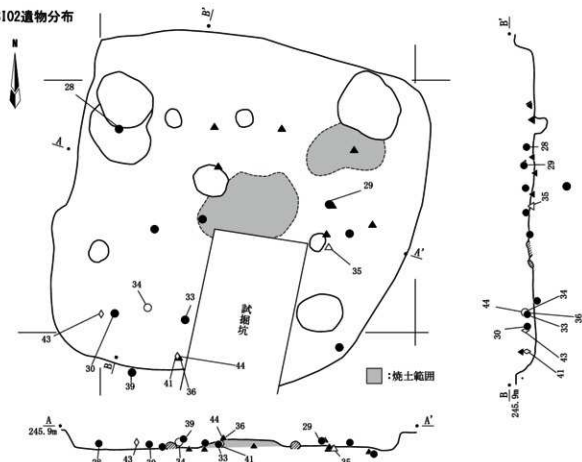
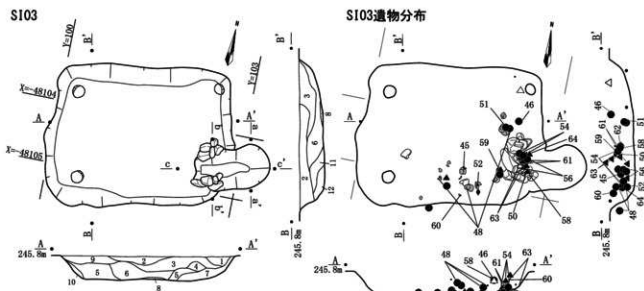


図16 竪穴建物跡S102、S102カマド

S102遺物分布



S103



S103遺物分布

S103土層注記

1. 7.5YR4/3 褐色砂質土 (しまりやや強、粘性やや強、炭化物少量、鉄分含む)
2. 10YR3/2 暗褐色粘質土 (しまりやや弱、粘性やや強)
3. 10YR3/2 黒褐色粘質土 (しまりやや弱、粘性強、焼土極少量、炭化物含む)
4. 10YR3/2 黒褐色粘質土 (しまりやや弱、粘性強、焼土極少量含む、3層よりやや暗い)
5. 10YR3/2 黒褐色粘質土 (しまりやや弱、粘性やや強、炭化物含む)
6. 7.5YR3/2 暗褐色粘質土 (しまりやや強、粘性やや弱、焼土少量含む)
7. 10YR3/3 暗褐色粘質土 (しまりやや強、粘性やや強、焼土、炭化物多く含む)
8. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 (しまりやや強、粘性強) 貼床か
9. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 (しまりやや強、粘性弱)
10. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 (しまりやや弱、粘性やや強、炭化物含む)
11. 7.5YR3/4 暗褐色粘質土 (しまりやや弱、粘性やや強、焼土、炭化物多く含む)
12. 10YR3/3 暗褐色粘質土 (しまりやや弱、粘性強、焼土、炭化物多く含む、11層より暗い)

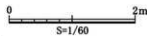
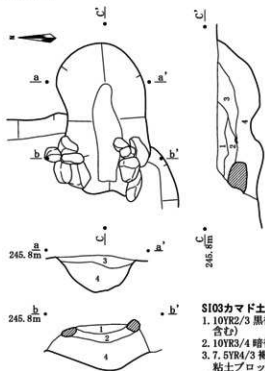
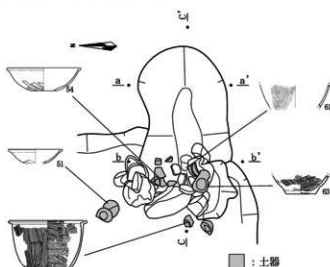


図17 竪穴建物跡S102遺物分布、S103、S103遺物分布

S103カマド



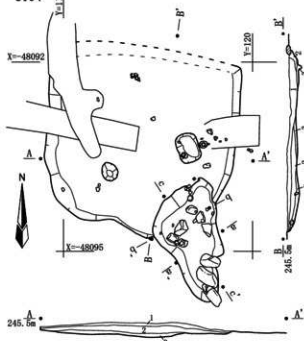
S103カマド周辺遺物出土状況



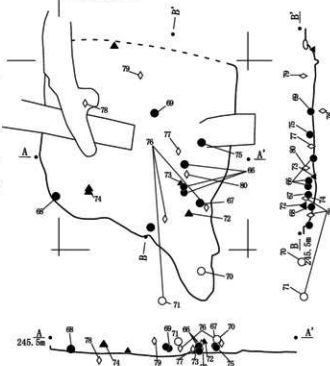
S103カマド土層注記

1. 10YR2/3 黒褐色粘質土 (しまりやや弱、粘性強、焼土ブロック状に多く、炭化物少量含む)
2. 10YR3/4 暗褐色粘質土 (しまり強、粘性やや強、焼土、炭化物少量含む)
3. 7.5YR4/3 褐色粘質土 (しまりやや弱、粘性強、焼土多く混じる、炭化物多く含む、粘土ブロック混じる)
4. 10YR2/2 黒褐色粘質土 (しまりやや強、粘性やや弱、粘土ブロック混じる、焼土少量含む)

S104



S104遺物分布

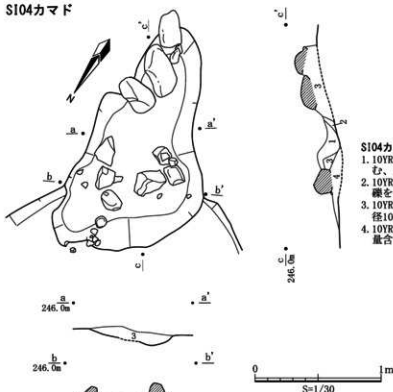


S104土層注記

1. 10YR4/4 褐色粘質土 (しまりやや弱、粘性弱、炭化物 微量含む、小礫を微量含む)
2. 10YR3/4 暗褐色粘質土 (しまりやや強、粘性やや強、炭化物微量含む、径2~15mmの礫を微量含む)
3. 10YR3/4 暗褐色粘質土 (しまりやや強、粘性やや強 (2層より強)、炭化物微量含む)

図18 竪穴建物跡S103カマド、S104、S104遺物分布

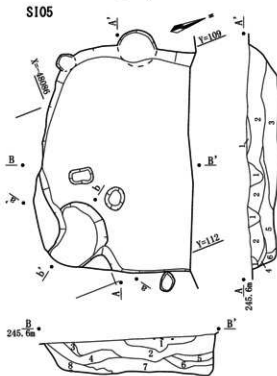
S104カマド



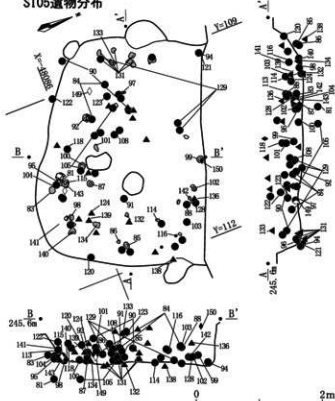
S104カマド土層注記

1. 10YR3/4暗褐色砂質土 (しまり強、粘性弱、焼土含む、炭化物少量含む)
2. 10YR3/3暗褐色砂質土 (しまり弱、粘性弱、径30mmの礫を含む)
3. 10YR3/4暗褐色粘質土 (しまりやや強、粘性やや強、径10mmの礫を含む)
4. 10YR3/3暗褐色粘質土 (しまり弱、粘性強、炭化物多量含む)

S105



S105遺物分布

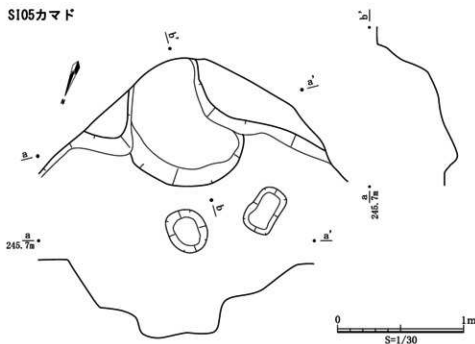


S105土層注記

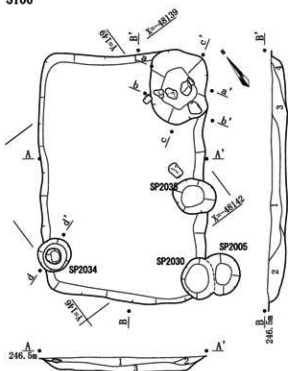
1. 10YR3/3暗褐色粘質土 (しまりやや強、粘性やや強、径1mmの礫を少量含む、遺物、炭化物含む)
2. 10YR4/3にぶい暗褐色粘質土 (しまりやや強、粘性やや強、径30mmの砂礫を含む、遺物、炭化物を含む)
3. 10YR3/4暗褐色砂質土 (しまりやや強、粘性やや強、径10~20mmの礫を含む)
4. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土 (しまりやや強、粘性やや強、炭化物含む、黄色粘質土ブロック含む、遺物含む)
5. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土 (しまり強、粘性強、遺物多く含む、炭化物、焼土混じる、黄色粘質土ブロック含む)
6. 10YR4/3暗褐色砂質土 (しまりやや強、粘性強、炭化物、黄色粘質土ブロック含む)
7. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土 (しまりやや強、粘性強、炭化物含む、径20~30mmの礫を含む、遺物含む)
8. 10YR3/4暗褐色砂質土 (しまりやや強、粘性やや弱、遺物含む、黄色粘質土ブロック多く混じる、径40~50mmの礫を含む)

図19 竪穴建物跡S104カマド、S105、S105遺物分布

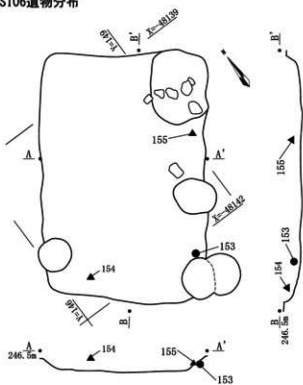
S105カマド



S106



S106遺物分布

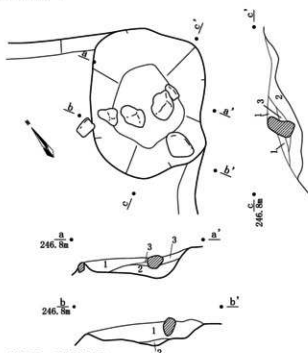


S106土層注記

1. 10TR3/3暗褐色砂質土（しまりやや弱、粘性強、炭化物含む、焼土粒微量含む、径10mm程の小石混じる、細砂混じる）
2. 10TR4/3にぶい黄褐色砂質土（しまり弱、粘性弱、炭化物含む、焼土粒微量含む、径5mm程の小石混じる）地山への漸移層
3. 10TR4/4褐色砂（しまり弱、粘性弱、炭化物微量含む）地山への漸移層
4. 10TR4/4褐色砂（しまり弱、粘性弱、炭化物微量含む）3層より、より地山の割合が増加する
5. 10TR4/4褐色砂（しまり弱、粘性弱）砂純層

図20 竪穴建物跡S105カマド、S106、S106遺物分布

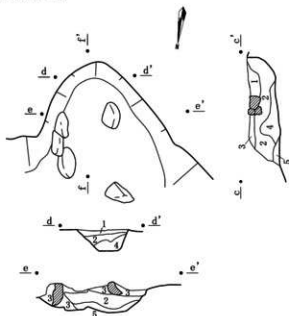
S106カマド



S106カマド土層注記

1. 10YR4/6褐色砂質土 (しまり弱、粘性弱、炭化物少量含む)
2. 10YR3/2黒褐色砂質土 (しまりやや弱、粘性やや弱、炭化物多く含む、焼土微量含む)
3. 10YR4/6褐色砂質土 (しまり弱、粘性弱、炭化物微量含む)

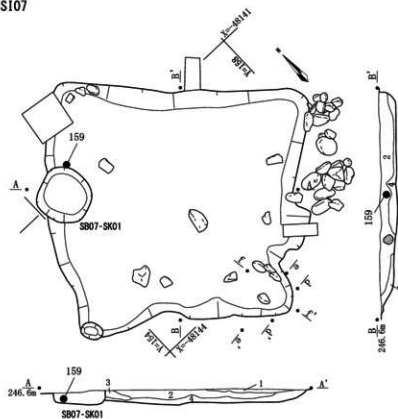
S107カマド



S107カマド土層注記

1. 5YR4/6赤褐色焼土 (しまり強、粘性弱)
2. 10YR3/4暗褐色砂質土 (しまり強、粘性やや強、径10~20mm程の小石混じる)
3. 2層とほぼ同じ (炭化物混じる、焼土混じる)
4. 10YR3/3暗褐色砂質土 (しまりやや強、粘性強、焼土微量混じる)
5. 10YR4/4褐色砂質土 (しまりやや強、粘性やや強、径5mm程の小石混じる)

S107

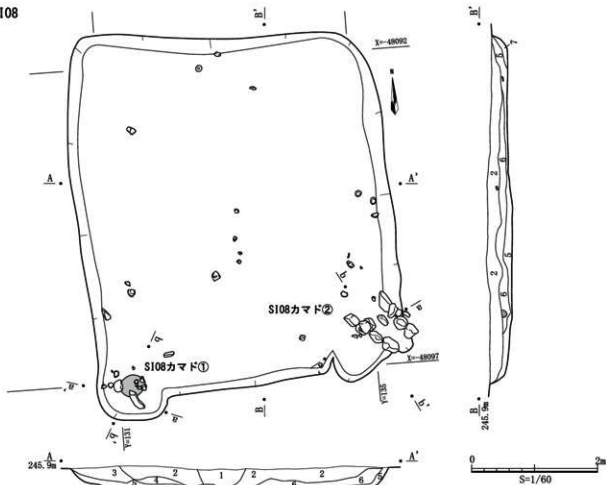


S107土層注記

1. 10YR3/4暗褐色砂質土 (しまり強、粘性やや弱、焼土多く含む、炭化物少量混じる、径5mmの小礫多く混じる)
2. 10YR3/3暗褐色粘質土 (しまり強、粘性やや強、焼土少量混じる、炭化物少量混じる)
3. 10YR3/4暗褐色砂質土 (しまり弱、粘性弱、炭化物多量混じる、地山への漸移)
4. 10YR4/2灰黄褐色砂質土 (しまり弱、粘性弱、炭化物微量混じる、地山プロック混じる) 地山への漸移
5. 10YR3/3暗褐色粘質土 (しまりやや弱、粘性強、焼土多量含む、炭化物多量含む、径50mmの小石混じる) 土坑埋土

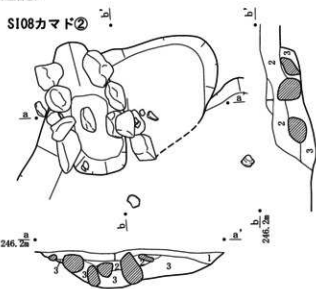
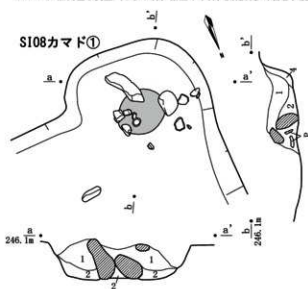
図21 竪穴建物跡S106カマド、S107、S107カマド

S108



S108土層注記

1. 10TR3/3暗褐色砂質土（しまり強、粘性弱、炭化物多く含む、径50mmの小礫含む、砂含む）
2. 10TR3/4暗褐色砂質土（しまり強、粘性やや弱、炭化物少量含む、径50mmの小礫含む、地山ブロック微量含む）
3. 10TR3/3暗褐色砂質土（しまり強、粘性弱、炭化物少量含む、焼土多く含む、地山ブロック微量含む）
4. 10TR3/3暗褐色砂質土（しまりやや弱、粘性弱、炭化物微量含む、径20mmの小礫混じる）
5. 10TR4/4褐色砂（しまり弱、粘性弱、炭化物微量含む）地山の積移
6. 10TR3/2黒褐色砂質土（しまり弱、粘性やや弱、炭化物多く含む、焼土微量含む）

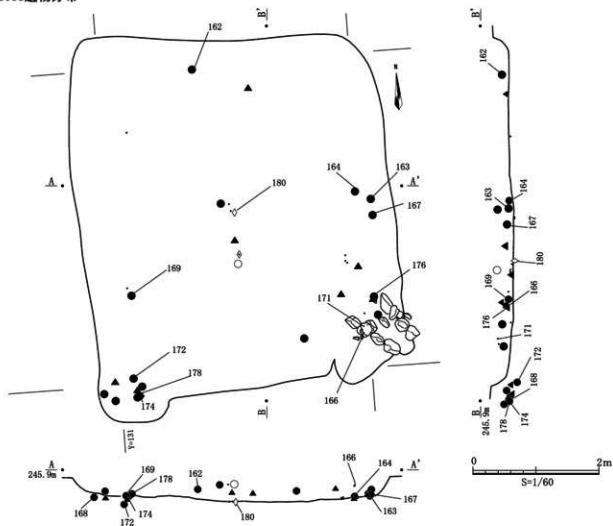


S108カマド土層注記

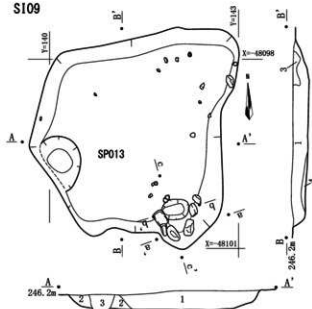
1. 10TR2/3黒褐色砂質土（しまりやや強、粘性弱、炭化物含む、焼土粒微量含む）
2. 10TR3/3黒褐色砂質土（しまりやや弱、粘性やや弱、焼土含む、炭化物微量含む、小礫多く含む）
3. 10TR4/3にぶい黄褐色（しまり弱、粘性やや強、焼土多量含む、炭化物多量含む、炭化物の多い）
4. 10TR3/4暗褐色砂質土（しまりやや弱、粘性やや弱、炭化物多く含む）

図22 竪穴建物跡S108、S108カマド①、②

S108遺物分布



S109



S109遺物分布

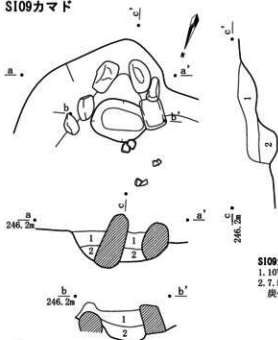


S109土層注記

1. 10TR3/3層褐色砂質土 (しまり強、粘性やや強、炭化物微量含む、径10~20mmの小礫含む)
2. 10TR2/3層褐色砂質土 (しまりやや強、粘性やや強、炭化物少量含む)
3. 10TR4/2層褐色砂質土 (しまり弱、粘性やや強、炭化物多く含む)

図23 竪穴建物跡S108遺物分布、S109、S109遺物分布

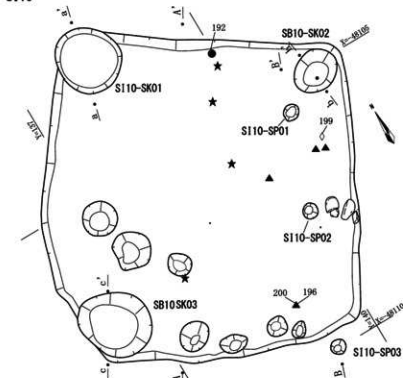
S109カマド



S109カマド土層注記

1. 10YR3/3暗褐色砂質土 (しまり強、粘性やや強、炭土粒微量含む)
2. 7.5YR2/3極暗褐色砂質土 (しまりやや弱、粘性弱、炭土粒多く含む、炭化物微量含む)

S110



S110土層注記

1. 2.5Y4/3オリーブ褐色砂まじりシルト (しまりやや強、粘性強、炭化物混じる、径10mmの小礫混じる)
2. 2.5Y3/2黒褐色砂まじりシルト (1層に黒褐色土が混じる)



S110内土坑土層注記

1. 10YR2/2黒褐色砂質土 (しまり強、粘性弱、炭土微量混じる、炭化物微量混じる、径10mm程の小石少量混じる)
2. 10YR3/2黒褐色砂質土 (しまり強、粘性強、炭化物微量に混じる)

1. 10YR2/2黒褐色砂質土 (しまり強、粘性弱、径10~20mm程の小石混じる)
2. 10YR3/3暗褐色砂質土 (しまりやや強、粘性弱、径20mm程の小石微量混じる)
3. 10YR3/3暗褐色砂質土 (しまり2層と同じ、粘性弱、黄色ブロック混じる)
4. 10YR3/3暗褐色砂質土 (しまり2層より弱、粘性弱)

1. 10YR2/1黒色粘質土 (しまりやや強、粘性強、炭化物混じる、径10~20mm程の小石混じる)
2. 10YR3/4暗褐色砂質土 (しまりやや強、粘性強、上層による黒色ブロック混じる、炭化物1層より少量混じる)

図24 竪穴建物跡S109カマド、S110

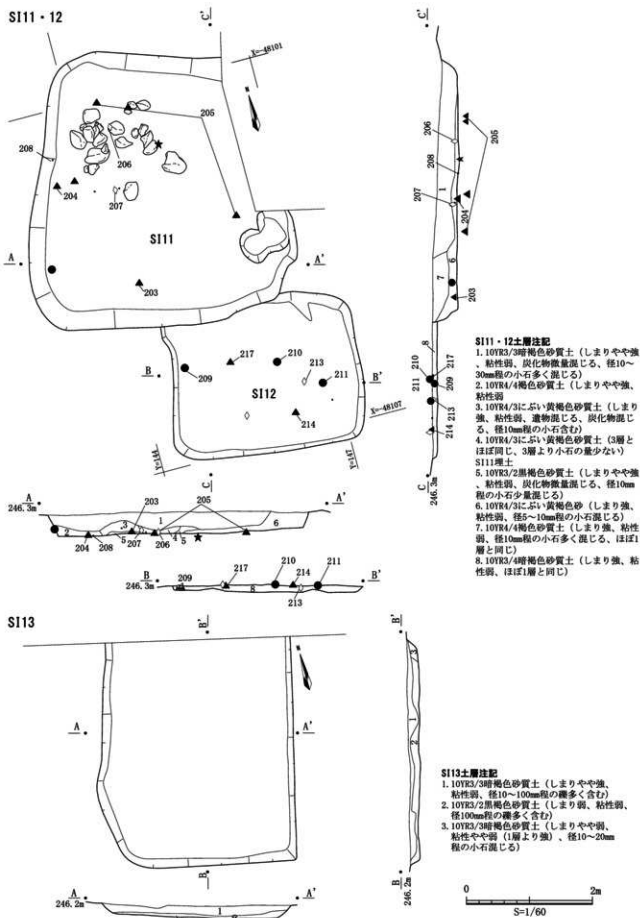
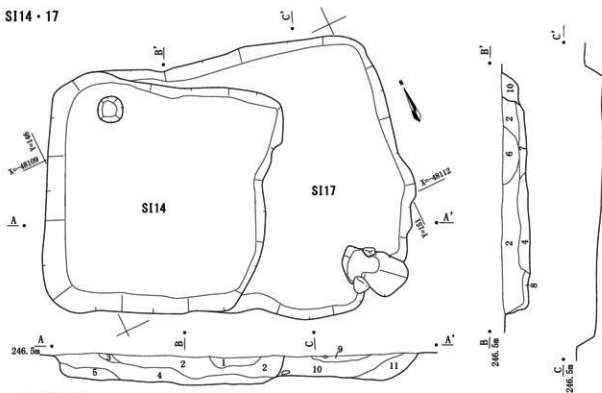


図25 竪穴建物跡SI11～SI13

SI14・17



SI14・17土層注記

1. 10YR2/2黒褐色細砂 (しまり弱、粘性弱、炭化物含む、粘土含む、径20mm以下の礫含む、黄褐色砂ブロック含む)
2. 10YR3/2黒褐色細砂 (しまり弱、粘性弱、炭化物少量含む、粘土少量含む、径10~50mmの礫多く含む、黄褐色砂ブロック含む)
3. 10YR4/3いぶい黄褐色粗砂 (しまり弱、粘性弱、径10mm以下の礫多く含む)
4. 10YR4/3いぶい黄褐色粗砂 (しまり弱、粘性弱、炭化物含む、径10mm以下の礫多く含む)
5. 7.5YR4/3褐色粗砂 (しまり弱、粘性弱、径5mmの礫多く含む) SI14堀土
6. 10YR3/2黒褐色細砂 (しまり弱、粘性弱、径5~50mmの礫多く含む)
7. 2.5Y5/3黄褐色中砂 (しまり強、粘性弱、径2mm以下の礫少量含む)
8. 10YR2/2黒褐色細砂 (しまり弱、粘性弱、径5~20mmの礫含む)
9. 10Y2/2黒褐色細砂 (しまり弱、粘性弱、炭化物多く含む、粘土多く含む、径10~50mmの礫含む)
10. 2.5Y4/2黄灰褐色細砂 (しまり弱、粘性やや強、炭化物含む、粘土含む、径10mmの礫含む)
11. 2.5Y4/2黄灰褐色細砂 (しまり弱、粘性弱、炭化物少量含む、礫少量含む)

SI14・17遺物分布

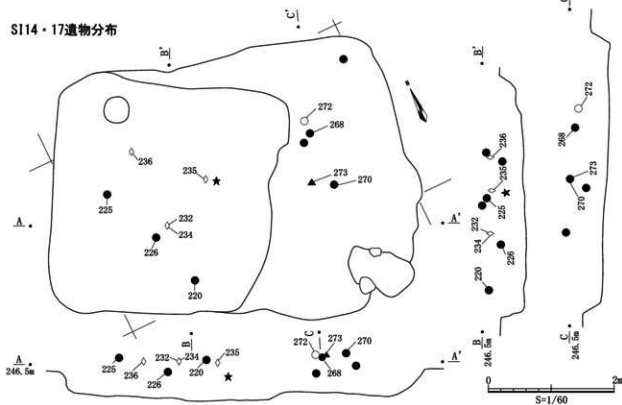
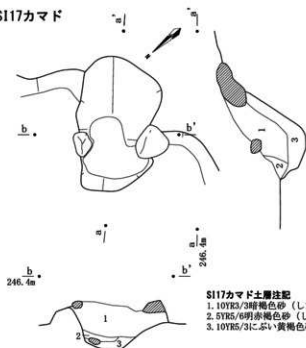


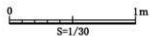
図26 竪穴建物跡SI14・17、SI14・17遺物分布

S117カマド

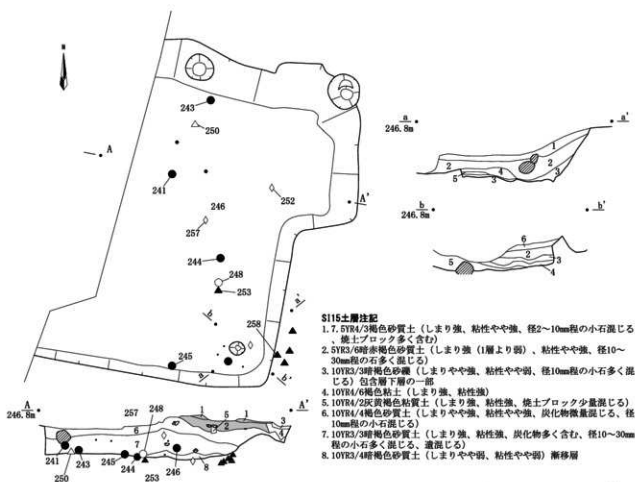


S117カマド土層注記

1. 10YR3/3暗褐色砂 (しまり弱、粘性弱、炭化物含む、焼土含む)
2. 5YR5/6明赤褐色砂 (しまり強、粘性弱、焼土60~70%)
3. 10YR5/3にぶい黄褐色砂 (しまり強、粘性強、焼土少量含む)



S115



S115土層注記

1. 7. 5YR4/3褐色砂質土 (しまり強、粘性やや強、径2~10mm程の小石混じる、焼土ブロック多く含む)
2. 5YR5/6暗赤褐色砂質土 (しまり強 (1層より弱)、粘性やや強、径10~30mm程の石多く混じる)
3. 10YR3/3暗褐色砂礫 (しまりやや強、粘性やや弱、径10mm程の小石多く混じる) 包含層下層の一部
4. 10YR4/6褐色粘土 (しまり強、粘性強)
5. 10YR4/2灰黄褐色粘質土 (しまり強、粘性強、焼土ブロック少量混じる)
6. 10YR4/4褐色砂質土 (しまりやや強、粘性やや強、炭化物微量混じる、径10mm程の小石混じる)
7. 10YR3/3暗褐色砂質土 (しまり強、粘性強、炭化物多く含む、径10~30mm程の小石多く混じる、濃混じる)
8. 10YR3/4暗褐色砂質土 (しまりやや弱、粘性やや弱) 漸移層

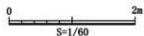
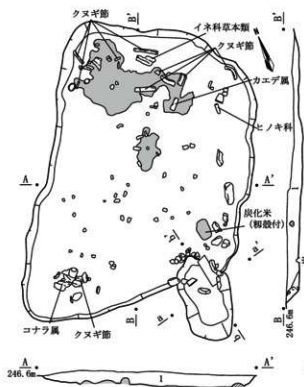


図27 竪穴建物跡S117カマド、S115

SI16



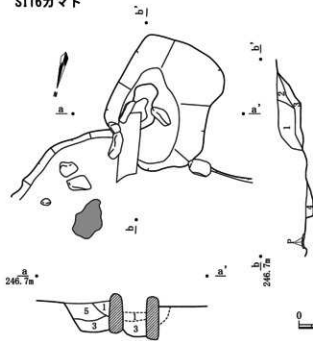
SI16遺物分布



SI16土層注記

1. 10YR3/3暗褐色砂質土 (しまり強、粘性弱、炭化物多量を含む、焼土多量を含む、遺物混じる、径10~20mm程の小石混じる)
2. 10YR4/4褐色砂質土 (しまり強、粘性弱、焼土混じる、径10mm程の小石含む)

SI16カマド

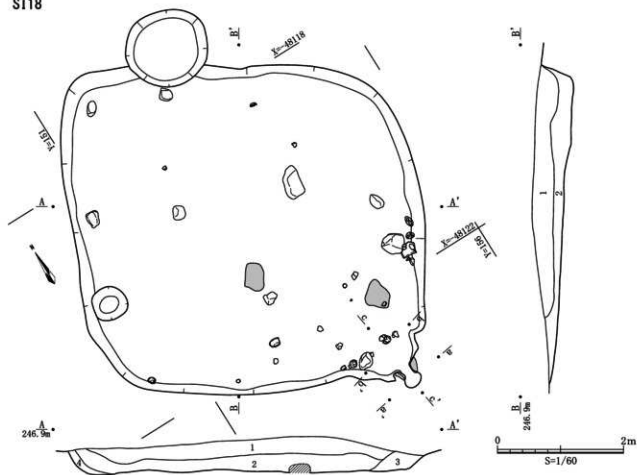


SI16カマド土層注記

1. 10YR3/3暗褐色砂質土 (しまり強、粘性弱、炭化物多量を含む、焼土多量を含む、遺物混じる、径10~20mm程の小石混じる)
2. 10YR4/4褐色砂質土 (しまり強、粘性弱、焼土混じる、径10mm程の小石含む)
3. 暗褐色砂質土 (しまり弱、粘性やや弱、炭化物多く含む、焼土少量含む、細礫混じる)
4. 3層と同様 (同一層の可能性もある)
5. 暗褐色砂質土 (しまりやや弱、粘性やや強、炭化物多く含む、径5mm程の礫多く含む)

図28 竪穴建物跡SI16、SI16遺物分布、SI16カマド

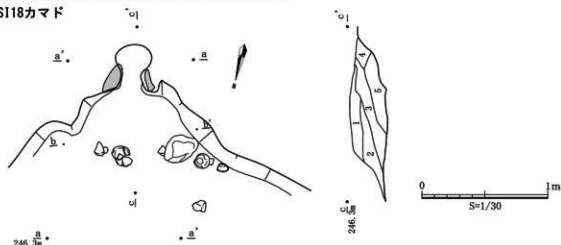
S118



S118土層注記

1. 10YR3/3暗褐色砂質土（しまり強、粘性やや弱、炭化物多く含む、焼土粒微量含む、径10~20mmの小石含む）
2. 10YR4/4褐色砂質土（しまりやや強、粘性弱、炭化物多く含む（1層より少ない）、焼土粒多く含む、地山ブロック状に混じる）
3. 10YR3/3暗褐色粘質土（しまり弱、粘性強、炭化物多量を含む）
4. 10YR4/4褐色砂質土（しまり弱、粘性弱、地山ブロック多く混じる）

S118カマド

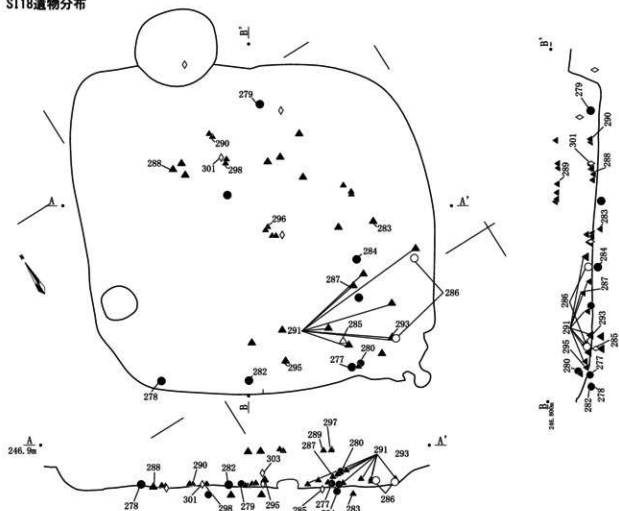


S118カマド土層注記

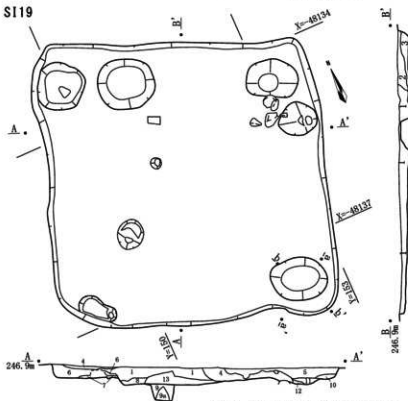
1. 10YR3/4暗褐色粘質土（しまりやや弱、粘性やや強、炭化物微量含む、焼土粒微量含む）
2. 10YR3/4暗褐色粘質土（しまり弱、粘性やや強、炭化物少量含む、焼土粒少量含む）
3. 10YR3/3暗褐色粘質土（しまりやや弱、粘性強、炭化物多く含む、焼土粒多く含む）
4. 10YR4/3いり黄褐色粘質土（しまり弱、粘性強、焼土粒多く含む）
5. 10YR3/3暗褐色粘質土（しまりやや強、粘性強、炭化物多く含む、焼土多量含む）
6. 10YR3/3暗褐色砂質土（しまり強、粘性やや弱、炭化物多く含む、焼土粒微量含む、径10~20mmの小石含む）
7. 10YR4/4褐色砂質土（しまりやや強、粘性弱、炭化物多く含む（6層より少ない）、焼土粒多く含む、地山ブロック状に混じる）

図29 竪穴建物跡S118、S118カマド

SI18遺物分布



SI19



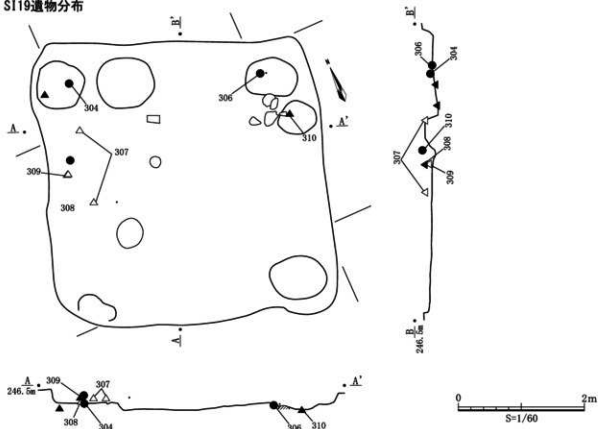
SI19土層注記

1. 10YR4/4褐色砂質土（しまり強、粘性やや強、径5mm程の小石混じる、黒褐色ブロック混じる）
2. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土（しまり強、粘性弱、炭化物少量含む、黄土少量含む）
3. 10YR4/4褐色砂質土（しまり強、粘性弱、炭化物微量混じる）
4. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土（しまりやや強、粘性やや強、径5mm程の小石混じる）
5. 10YR3/3暗褐色砂質土（しまりやや強、粘性強、炭化物含む）
6. 10YR3/3暗褐色砂質土（しまりやや強、粘性強、5層とほぼ同じ、黄土少量混じる）
7. 10YR4/6褐色砂質土（しまり強、粘性弱）地山
8. 10YR3/2黒褐色砂質土（しまりやや弱、粘性やや弱、径5~10mm程の小石微量混じる）土坑埋土
9. 10YR4/4褐色砂（しまりやや弱、粘性弱）地山
- 9a. 10YR4/4褐色砂 地山内の变化
10. 10YR3/3暗褐色砂質土（しまりやや弱、粘性やや弱、5層とほぼ同じ、炭化物を含まない）
11. 10YR3/2黒褐色砂質土（しまりやや弱、粘性強、炭化物微量含む）土坑埋土
12. 10YR3/3暗褐色砂質土（しまり弱、粘性やや強、黄色ブロック混じる）土坑埋土
13. 10YR4/4褐色砂質土（しまりやや弱、粘性弱、径5~10mm程の小石少量混じる）

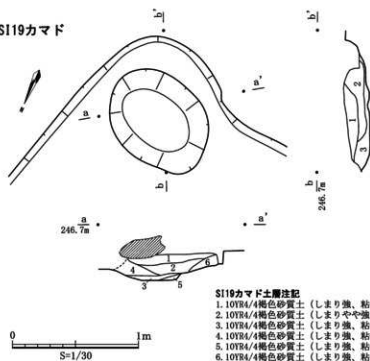
0 2m
S=1/60

図30 竪穴建物跡SI18遺物分布、SI19

SI19遺物分布



SI19カマド

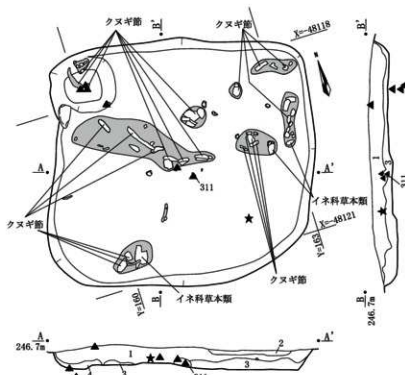


SI19カマド土層注記

1. 10TR4/4褐色砂質土 (しまり強、粘性弱、炭化物多く含む、焼土多く含む)
2. 10TR4/4褐色砂質土 (しまりやや強、粘性1層より強、炭化物少量含む、焼土少量含む)
3. 10TR4/4褐色砂質土 (しまり強、粘性2層とほぼ同じ、10mm程の小石混じる)
4. 10TR4/4褐色砂質土 (しまり強、粘性弱、5mm程の小石混じる、黒褐色ブロック混じる)
5. 10TR4/4褐色砂質土 (しまり強、粘性弱)
6. 10TR4/4褐色砂質土 (しまり強、粘性1層くらい、焼土微量に混じる、径5mm程の小石混じる)

図31 竈穴建物跡SI19遺物分布、SI19カマド

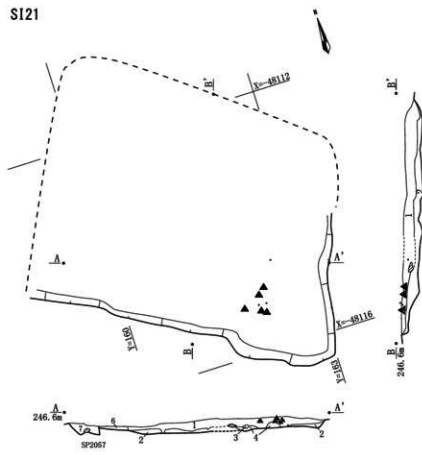
SI20



SI20土層注記

1. 10YR3/4暗褐色砂質土（しまり強、粘性弱、炭化物多く含む、遺物多く含む、径10mm程の小石混じる）
2. 10YR3/4暗褐色砂質土（1層とほぼ同じ、1層より若干明るく、炭化物が少ない）
3. 10YR4/6褐色砂質土（しまり強、粘性弱、炭化物が混じる、1層のブロックが少量混じる、径10～20mm程の小石混じる）
4. 10YR4/4褐色砂質土（しまり強、粘性弱、3層より炭化物が多く混じる、1層由来のブロック多く含む）

SI21



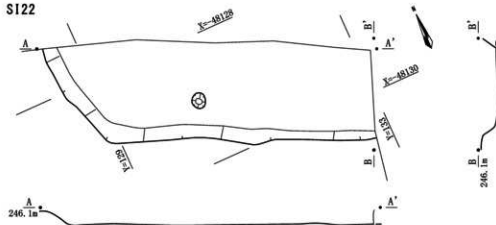
SI21土層注記

1. 10YR3/3暗褐色砂（しまり弱、粘性やや強、径10～20mmの礫含む）
2. 10YR4/3いびい黄褐色砂（しまり弱、粘性弱、黄褐色砂混じる、径20～50mmの礫含む）
3. 10YR3/1黒褐色土（しまり弱、粘性弱、炭化物多く含む、焼土少量含む）
4. 10YR3/3暗褐色土（しまりやや強、粘性弱、径20mmの礫含む）
5. 10YR3/2黒褐色砂、シルト混じる（しまり弱、粘性弱、径20mmの礫多く含む）

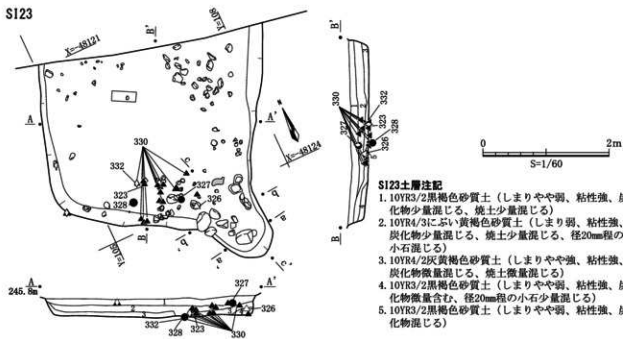


図32 竪穴建物跡SI20、SI21

S122



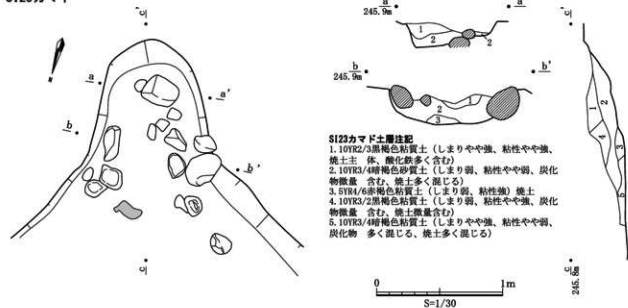
S123



S123土層注記

1. 10YR3/2黒褐色砂質土（しまりやや弱、粘性強、炭化物少量混じる、焼土少量混じる）
2. 10YR4/3いびい黄褐色砂質土（しまり弱、粘性強、炭化物少量混じる、焼土少量混じる、径20mm程の小石混じる）
3. 10YR4/2灰黄褐色砂質土（しまりやや強、粘性強、炭化物微量混じる、焼土微量混じる）
4. 10YR3/2黒褐色砂質土（しまりやや弱、粘性強、炭化物微量含む、径20mm程の小石少量混じる）
5. 10YR3/2黒褐色砂質土（しまりやや弱、粘性強、炭化物混じる）

S123カマド

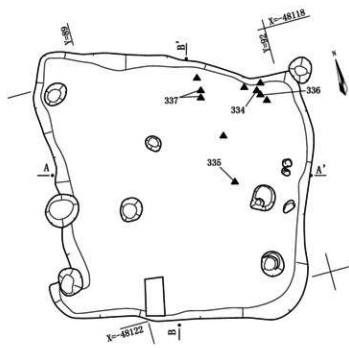


S123カマド土層注記

1. 10YR2/3黒褐色粘質土（しまりやや強、粘性やや強、焼土主体、酸化鉄多く含む）
2. 10YR3/4暗褐色粘質土（しまり弱、粘性やや弱、炭化物微量含む、焼土多く混じる）
3. 5YR4/6赤褐色粘質土（しまり弱、粘性強）焼土
4. 10YR3/2暗褐色粘質土（しまり弱、粘性やや強、炭化物微量含む、焼土微量含む）
5. 10YR3/4暗褐色粘質土（しまりやや強、粘性やや弱、炭化物多く混じる、焼土多く混じる）

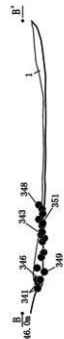
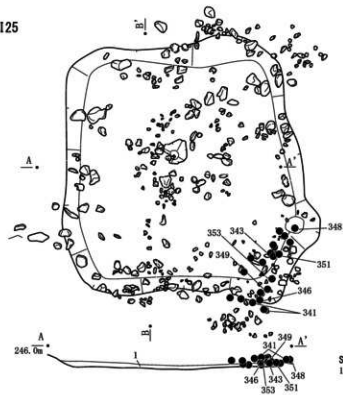
図33 竪穴建物跡S122、S123、S123カマド

S124



S124土層注記
1. 10YR3/2黒褐色粘質土（しまり強、粘性強、炭化物微量混じる）

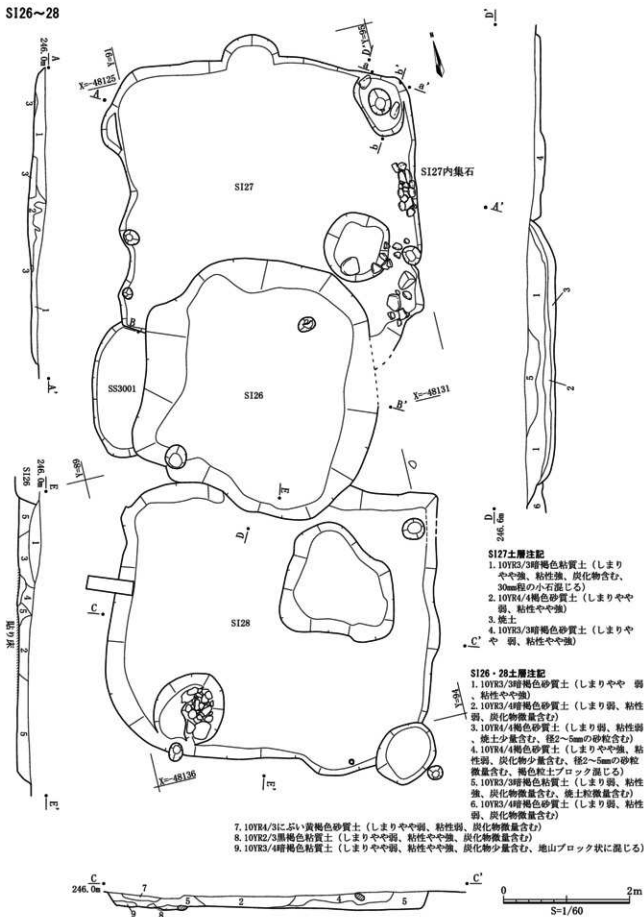
S125



S125土層注記
1. 10TR4/4褐色砂質土（しまりやや強、粘性弱、炭化物多く含む、細砂多く含む）



図34 竪穴建物跡S124、S125



S127土層注記

1. 10YR3/3暗褐色粘質土（しまりやや強、粘性強、炭化物含む、30mm程の小石混じる）
2. 10YR4/4褐色砂質土（しまりやや弱、粘性やや強）
3. 焼土
4. 10YR3/3暗褐色砂質土（しまりやや弱、粘性やや強）

S126・28土層注記

1. 10YR3/3暗褐色砂質土（しまりやや弱、粘性やや強）
2. 10YR3/4暗褐色砂質土（しまり弱、粘性弱、炭化物微量含む）
3. 10YR4/4褐色砂質土（しまり弱、粘性弱、焼土少量含む、径2~5mmの砂粒含む）
4. 10YR4/4褐色砂質土（しまりやや強、粘性弱、炭化物少量含む、径2~5mmの砂粒微量含む、褐色粘土ブロック混じる）
5. 10YR3/3暗褐色粘質土（しまり弱、粘性強、炭化物微量含む、焼土粒微量含む）
6. 10YR3/4暗褐色砂質土（しまり弱、粘性弱、炭化物微量含む）
7. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土（しまりやや弱、粘性弱、炭化物微量含む）
8. 10YR2/3黒褐色粘質土（しまりやや弱、粘性やや強、炭化物微量含む）
9. 10YR3/4暗褐色粘質土（しまりやや弱、粘性やや強、炭化物少量含む、地山ブロック状に混じる）

図35 竪穴建物跡S126~28

S126~28遺物分布

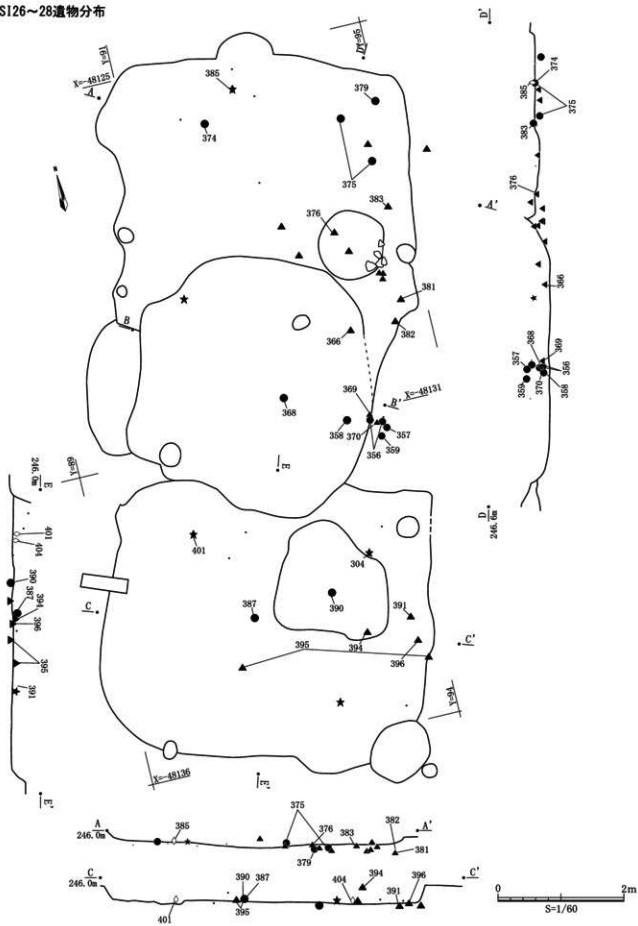
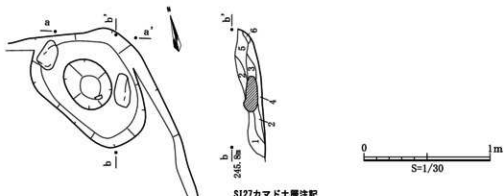


圖36 竪穴建物跡S126~28遺物分布

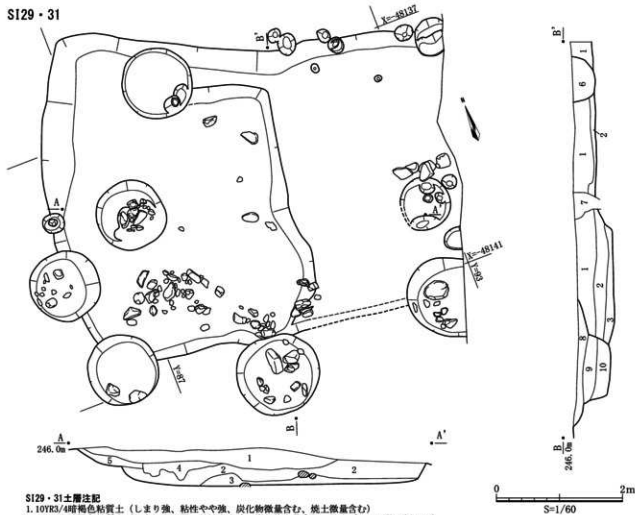
S127カマド



S127カマド土層注記

1. 10YR3/4暗褐色砂質土 (しまりやや弱、粘性弱、炭化物少量含む、焼土微量含む)
2. 10YR3/2暗褐色粘質土 (しまりやや弱、粘性やや強、炭化物多く含む、焼土微量含む)
3. 10YR4/2灰黄褐色粘質土 (しまりやや弱、粘性強、炭化物主体層 (90%)、焼土多く含む)
4. 10YR4/6褐色砂質土 (しまり弱、粘性弱) 地山
5. 10YR4/3いり黄褐色砂質土 (しまりやや弱、粘性やや強、炭化物微量含む、焼土粒多く含む、地山ブロック含む)
6. 10YR4/3いり黄褐色砂質土 (5層に比べて焼土少ない、地山ブロック含まない)

S129・31

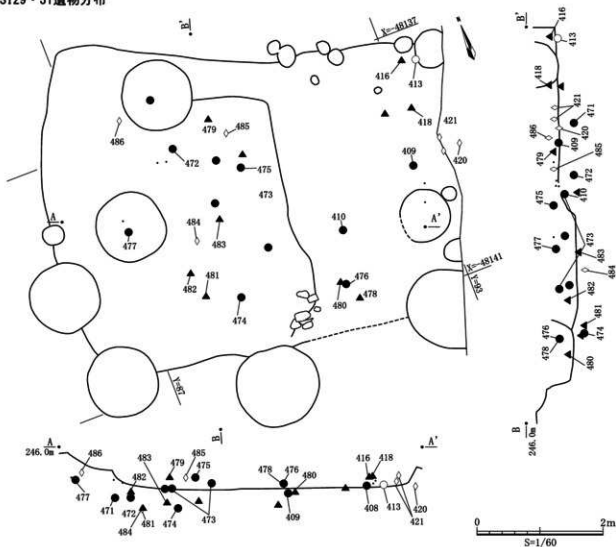


S129・31土層注記

1. 10YR3/4暗褐色粘質土 (しまり強、粘性やや強、炭化物微量含む、焼土微量含む)
2. 10YR3/4暗褐色粘質土 (しまりやや弱、粘性やや強、炭化物少量含む、地山ブロック状に混じる)
3. 10YR4/6褐色砂質土 (しまりやや強、粘性弱、炭化物微量含む、焼土微量含む、地山の土多く混じる)
4. 10YR3/4暗褐色砂質土 (しまりやや弱、粘性弱、炭化物微量含む)
5. 10YR3/4暗褐色砂質土 (しまり弱、粘性弱、炭化物微量含む)
6. 10YR4/4褐色粘質土 (しまりやや弱、粘性やや強、炭化物少量含む) 中世墓壙か
7. 10YR3/4暗褐色砂質土 (しまりやや弱、粘性弱、炭化物微量含む、径2~5mmの砂粒含む)
8. 10YR4/4褐色粘質土 (しまり弱、粘性弱、焼土少量含む、径2~5mmの砂粒含む)
9. 10YR4/4褐色砂質土 (しまりやや強、粘性弱、炭化物少量含む、径2~5mmの砂粒微量含む、褐色粒土ブロック混じる)
10. 10YR3/4暗褐色粘質土 (しまりやや弱、粘性やや強、炭化物微量含む、径2~5mmの砂粒微量含む)

図37 竪穴建物跡S127カマド、S129・31

S129・31遺物分布



S131カマド

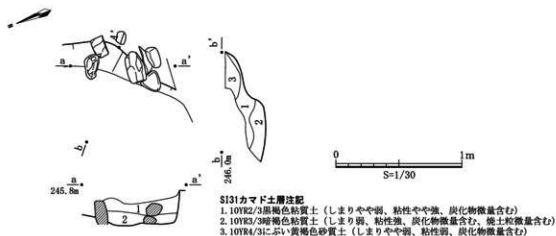
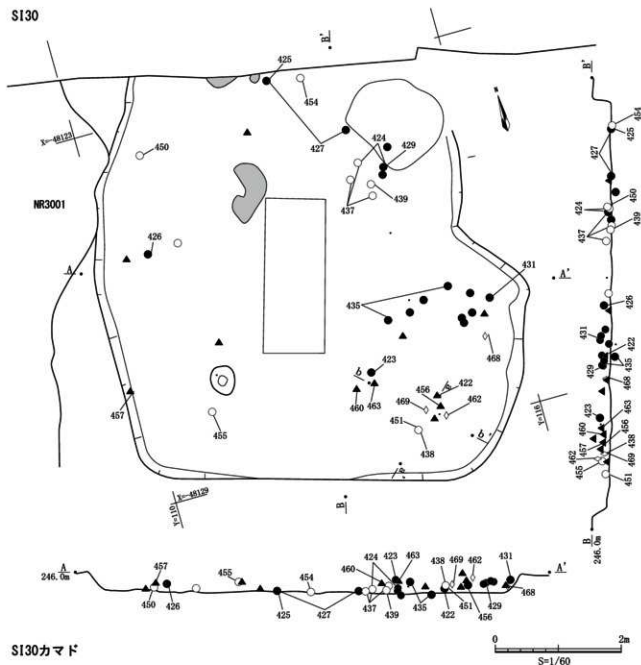
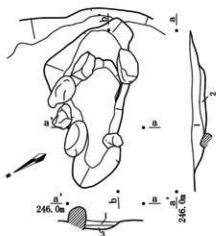


図38 竪穴建物跡S129・31遺物分布、S131カマド

S130



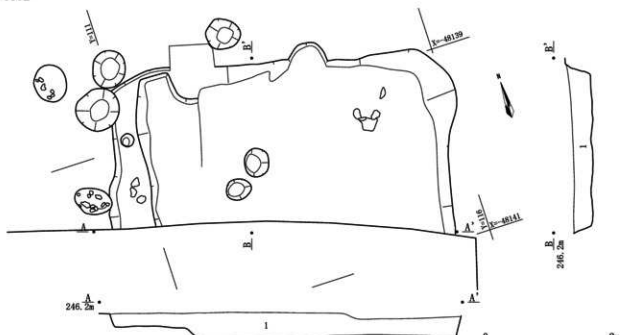
S130カマド



S130カマド土層注記

1. 10YR2/3 黒褐色粘質土 (しまり強、粘性強、炭化物多く含む、焼土少量含む)
2. 10YR3/3 暗褐色粘質土 (しまりやや強、粘性強、炭化物多く含む (1層より多)、焼土少量含む)
3. 7.5YR4/6 褐色粘質土 (しまり弱、粘性やや強、焼土主体)

図39 竪穴建物跡S130、S130カマド

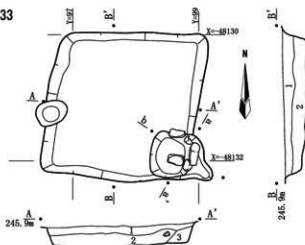


S132土層注記

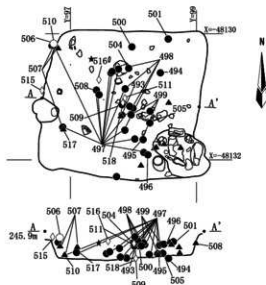
1. 10YR3/4暗褐色粘質土（しまり弱、粘性やや強、炭化物多く含む）

S=1/60

S133



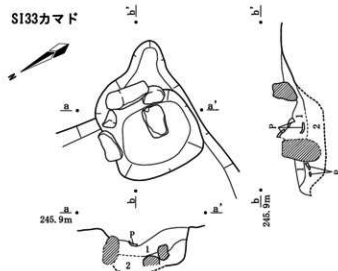
S133遺物分布



S133土層注記

1. 10YR3/2黒褐色砂質土（しまり強、粘性強、炭化物少量含む）
2. 10YR3/3暗褐色砂質土（しまり強、粘性やや強、炭化物微量含む、遺物多く含む）
3. 10YR3/3暗褐色砂質土（ほぼ2層と同じ、2層より暗い）

S133カマド

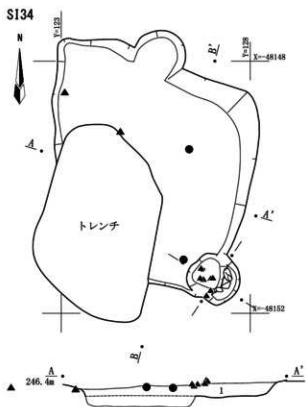


S133カマド土層注記

1. 10YR3/2黒褐色砂質土（しまりやや弱、粘性強、炭化物微量混じる、粘土微量混じる、遺物多く含む）
2. 10YR3/3暗褐色砂質土（しまり弱、粘性やや弱、炭化物1層より少量混じる）

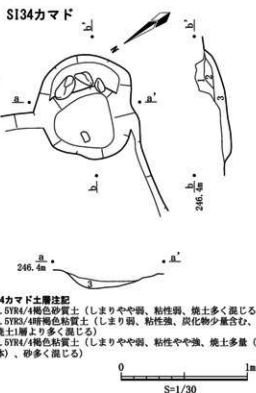
S=1/30

図40 竪穴建物跡S132、S133、S133カマド、S133遺物分布



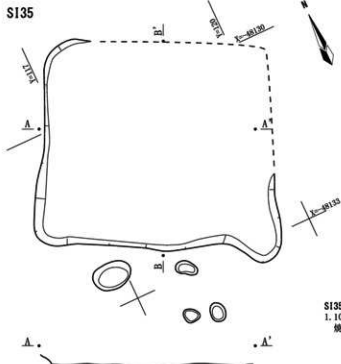
S134土層注記

1. 10YR4/4褐色砂質土（しまりやや強、粘性弱、炭化物少量混じる、焼土多く混じる、径50mmの小礫含む、砂較多く混じる）
2. 10YR3/4暗褐色粘質土（しまりやや強、粘性弱、炭化物微量混じる、砂多く混じる）
3. 10YR4/2灰黄褐色粘質土（しまりやや弱、粘性やや強、炭化物微量混じる、焼土多く混じる）
4. 10YR3/4暗褐色粘質土（しまり弱、粘性強、炭化物多く混じる、焼土多く混じる、砂多く混じる）
5. 10YR4/3いり黄褐色粘質土（しまり強、粘性弱、炭化物多く混じる、焼土多く混じる、酸化鉄多く含む）
6. 地山（砂礫主体）



S134カマド土層注記

1. 7.5YR4/4褐色砂質土（しまりやや弱、粘性弱、焼土多く混じる）
2. 7.5YR3/4暗褐色粘質土（しまり弱、粘性強、炭化物少量含む、焼土層より多く混じる）
3. 7.5YR4/4褐色粘質土（しまりやや弱、粘性やや強、焼土多量（主体）、砂多く混じる）

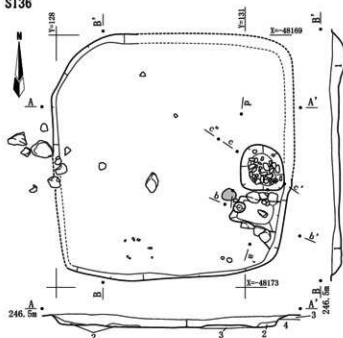


S135土層注記

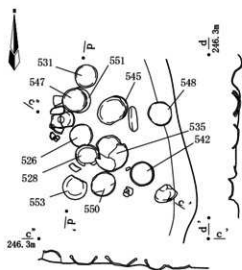
1. 10YR3/1黒褐色粘質土（しまり強、粘性強、炭化物多く混じる、焼土多く混じる、径100mm程の礫多く含む）1層下に貼り床

図41 竪穴建物跡S134・S134カマド、S135

S136



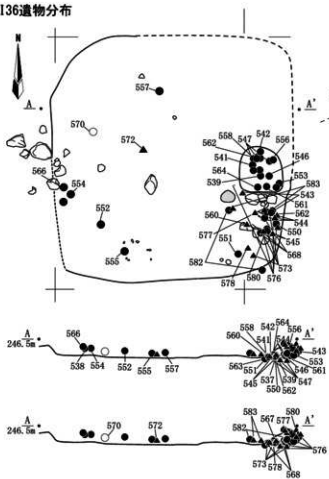
S136カマド横土器集中



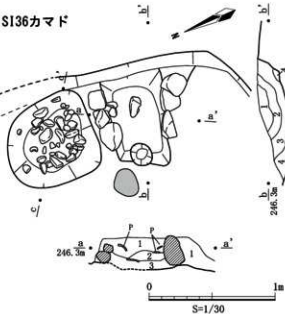
S136土層注記

1. 10YR4/4褐色粘質土（しまりやや弱、粘性やや強、炭化物微量含む、径50mmの砂粒微量含む、細砂多く含む）
2. 10YR4/6褐色砂質土（しまりやや強、粘性弱、炭化物微量含む）
3. 10YR4/6褐色砂（しまり弱、粘性弱）地山
4. 砂礫層（河川氾濫）（径50～100mmの砂礫主体、人頭大の礫多く混じる）地山

S136遺物分布



S136カマド



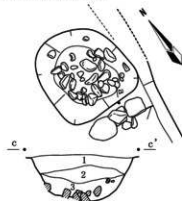
S136カマド土層注記

1. 10YR3/4暗褐色粘質土（しまり強、粘性やや強、炭化物少量含む、焼土多く含む）
2. 10YR3/3暗褐色粘質土（しまりやや弱、粘性強、炭化物少量含む、焼土多く含む（1層より多い））
3. 10YR3/3暗褐色粘質土（しまりやや強、粘性強、炭化物微量含む、焼土多く含む）
4. 10YR2/3暗褐色砂質土（しまりやや弱、粘性弱、炭化物微量含む、焼土多く含む）



図42 竪穴建物跡S136、S136遺物分布、S136カマド

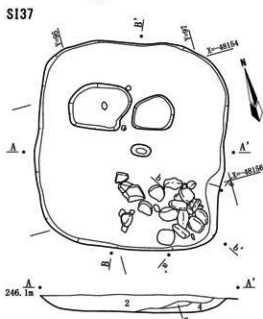
S136カマド横土坑



S136カマド横土坑土層注記

1. 10YR3/3暗褐色粘質土 (しまりやや強、粘性強、径1cmの小礫少量含む)
2. 10YR3/4暗褐色粘質土 (しまりやや強、粘性やや強、炭化物微量含む)
3. 10YR3/3暗褐色砂質土 (しまり弱、粘性弱、細砂多く混じる、こぶし大の重円礫を多く含む)

S137



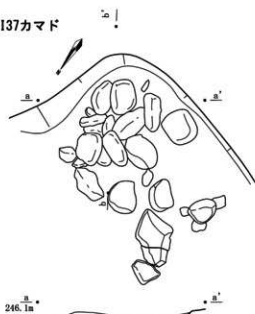
S137土層注記 南北

1. 10YR3/3暗褐色粘質土 (しまりやや強、粘性強、炭化物微量含む、焼土微量含む)
2. 10YR3/4暗褐色粘質土 (しまりやや強、粘性やや強、炭化物微量含む)
3. 10YR3/3暗褐色砂質土 (しまり弱、粘性弱、細砂多く混じる)

S137土層注記 東西

2. 10YR3/3暗褐色粘質土 (しまりやや強、粘性強、炭化物微量含む、焼土微量含む)
3. 10YR3/4暗褐色粘質土 (しまり強、粘性弱、焼土多く混じる)
4. 10YR3/4暗褐色粘質土 (しまりやや強、粘性やや強、炭化物微量含む)

S137カマド



S137カマド土層注記

1. 7.5YR4/4褐色粘質土 (しまりやや弱、粘性やや強、炭化物少量含む、焼土粒多く混じる)
2. 7.5YR4/4褐色粘質土 (しまり弱、粘性強、炭化物微量含む、焼土粒多く混じる)
3. 10YR3/4暗褐色砂質土 (しまり弱、粘性弱、炭化物微量含む、鉄分多く混じる)

図43 竪穴建物跡S136カマド横土坑、S137、S137カマド

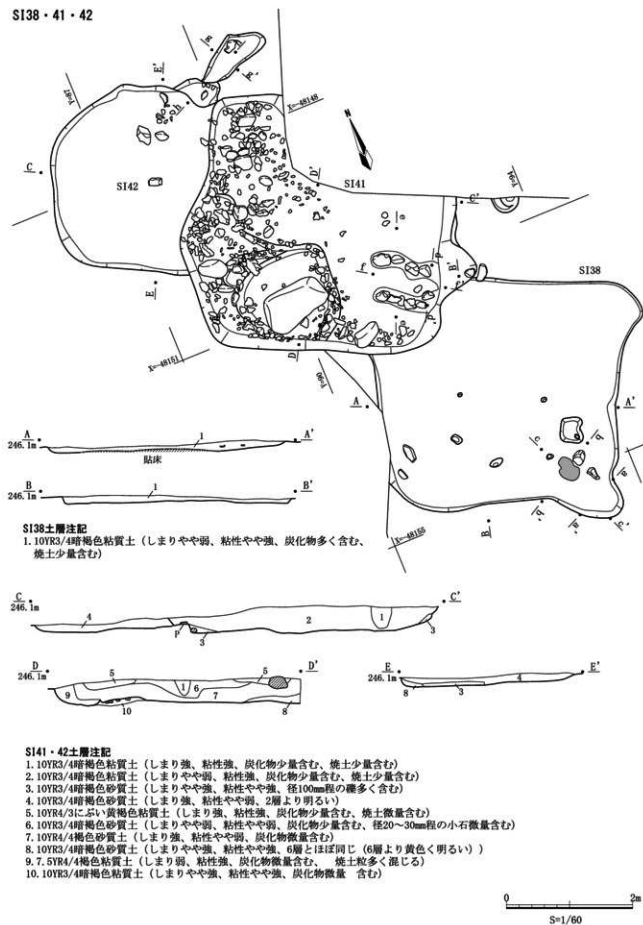


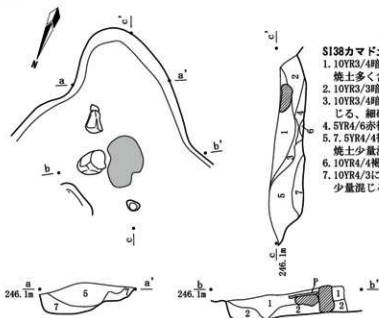
図44 竪穴建物跡S138・41・42

S138・41・42遺物分布



図45 竪穴建物跡S138・41・42遺物分布

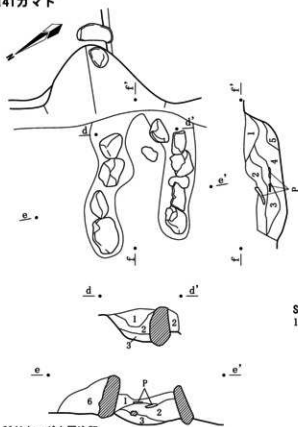
S138カマド



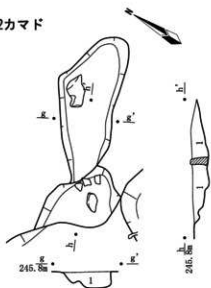
S138カマド土層注記

1. 10YR3/4暗褐色粘質土 (しまり弱、粘性強、炭化物多く含む、焼土多く含む)
2. 10YR3/3暗褐色粘質土 (しまり弱、粘性強、炭化物主体)
3. 10YR3/4暗褐色粘質土 (しまりやや強、粘性弱、炭化物多く混じる、細砂多く混じる)
4. 5YR4/6赤褐色砂質土 (しまり弱、粘性弱、焼土主体)
5. 7. 5YR4/4褐色粘質土 (しまり弱、粘性弱、炭化物多く含む、焼土少量混じる)
6. 10YR4/4褐色砂質土 (しまり弱、粘性弱) 地山
7. 10YR4/3こぶい黄褐色砂質土 (しまりやや弱、粘性弱、炭化物少量混じる)

S141カマド



S142カマド



S142カマド土層注記

1. 10YR3/4暗褐色粘質土 (しまり強、粘性強、炭化物少量含む、焼土少量含む)

S141カマド土層注記

1. 7. 5YR3/4暗褐色粘質土 (しまり弱、粘性やや強、炭化物少量含む、焼土多く含む、灰微量含む)
2. 10YR4/4褐色粘質土 (しまり弱、粘性やや弱、焼土多量含む (1層より多)、細砂多く含む)
3. 10YR4/4褐色粘質土 (しまり弱、粘性強、炭化物微量含む、焼土多量含む (2層より多)、焼土主体) カマド内土
4. 7. 5YR3/4暗褐色粘質土 (しまり弱、粘性強、炭化物少量含む、焼土多量含む (1層<2層<4層<3層の順に多い) カマド内土)
5. 10YR3/4暗褐色粘質土 (しまりやや弱、粘性やや弱、炭化物微量含む、焼土微量含む)
6. 10YR4/4褐色粘質土 (しまりやや弱、粘性やや強、炭化物多く含む、焼土少量含む) カマド外 (袖石おさえ土)

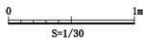
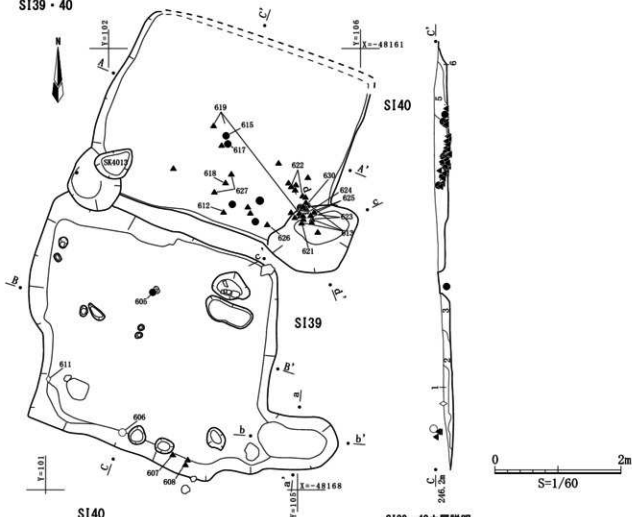


図46 竪穴建物跡S138カマド、S141カマド、S142カマド

S139・40



S139・40土層説明

1. 褐色砂質土（しまりやや強、粘性弱、炭化物微量含む）
2. 増褐色砂質シルト（しまり弱、粘性やや強、炭化物多く含む、粘土微量混じる）
3. 暗褐色砂質土（しまりやや強、粘性弱、炭化物多く含む）
4. 暗褐色砂質土（しまりやや強、粘性弱、繊維多く含む、炭化物微量含む）
5. 褐色砂質土（しまり弱、粘性弱、地山ブロック多く混じる）

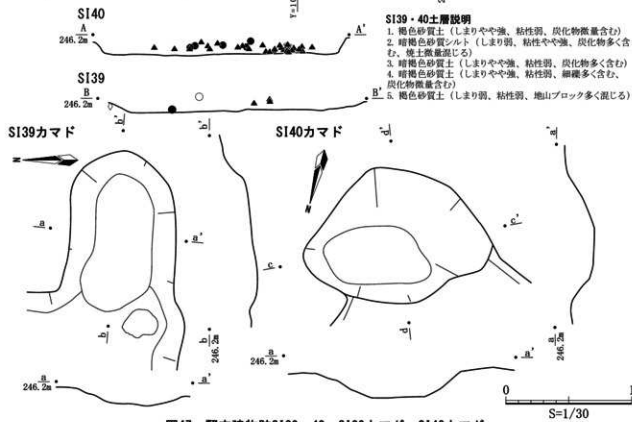
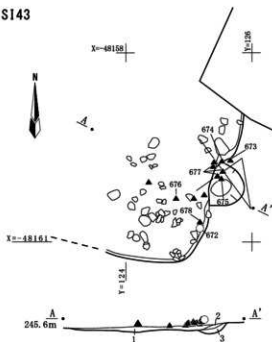
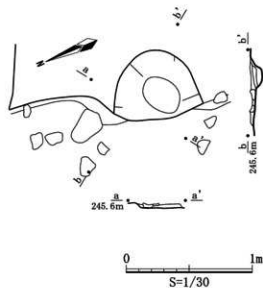


図47 竪穴建物跡S139・40、S139カマド、S140カマド

S143



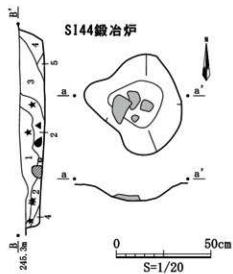
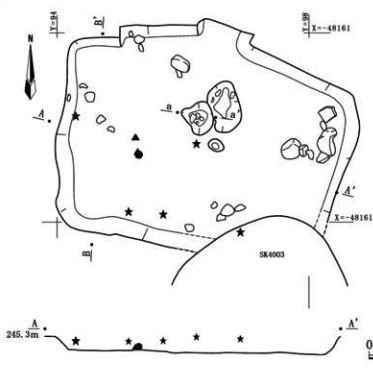
S143カマド



S143 カマド土層注記

1. 暗褐色砂質土（しまりやや強、粘性弱、炭化材多く含む）
2. 1層に焼土多く混じる
3. 暗褐色砂質土（しまり弱、粘性やや弱、地山ブロック多く混じる、礫多く含む）

S144

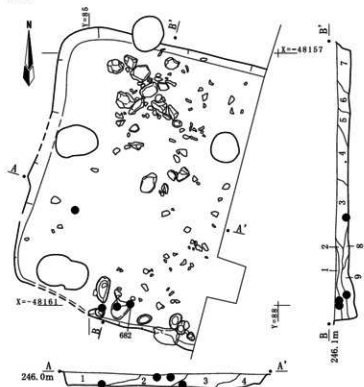


S144土層説明

1. 褐色砂質土（しまりやや強、粘性弱、炭化物微量含む）
2. 暗褐色砂質土（しまりやや強、粘性弱、炭化材多く含む）
3. 暗褐色砂質シルト（しまり弱、粘性やや強、炭化物多く含む、焼土微量混じる）
4. 暗褐色砂質土（しまりやや強、粘性弱、細礫多く含む、炭化物微量含む）
5. 褐色砂質土（しまり弱、粘性弱、地山ブロック多く混じる）

図48 竪穴建物跡S143・S143カマド、S144・S144鍛冶炉

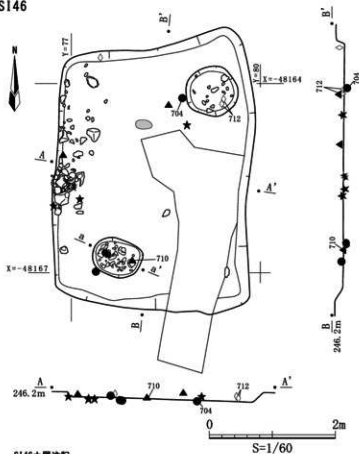
S145



S145土層説明

1. 褐色砂質土 (しまりやや強、粘性弱、炭化物微量含む)
2. 暗褐色砂質土 (しまりやや強、粘性弱、細礫多く含む、炭化物微量含む)
3. 暗褐色砂質土 (しまり弱、粘性やや弱、地山ブロック多く混じる、礫多く含む)
4. 暗褐色砂質シルト (しまり弱、粘性やや強、炭化物多く含む、焼土微量混じる)
5. 暗褐色砂質土 (しまりやや強、粘性弱、炭化材多く含む)
6. 暗褐色砂質土 (しまり弱、粘性やや弱、地山ブロック多く混じる、礫多く含む)
7. 褐色砂質土 (しまり弱、粘性弱、地山ブロック多く混じる)

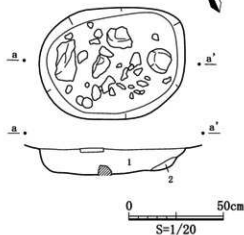
S146



S146土層注記

1. 10YR3/4暗褐色砂質土 (しまりやや強、粘性弱、炭化物多く混じる、焼土少量混じる)

S146鍛冶炉?

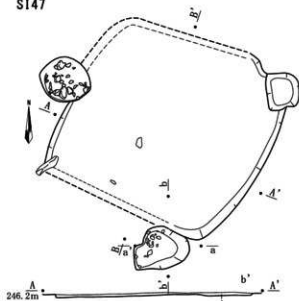


S146鍛冶炉土層注記

1. 10YR3/4暗褐色砂質土 (しまり強、粘性やや強)
- 2.

図49 竪穴建物跡S145、S146・S146鍛冶炉?

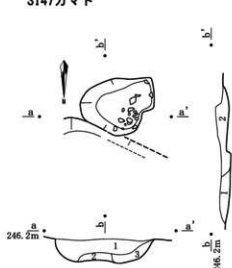
S147



S147土層注記

1. 10YR3/4暗褐色砂質土（しまり弱、粘性弱、炭化物多く混じる）

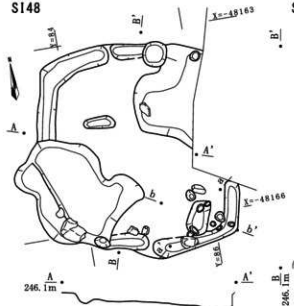
S147カマド



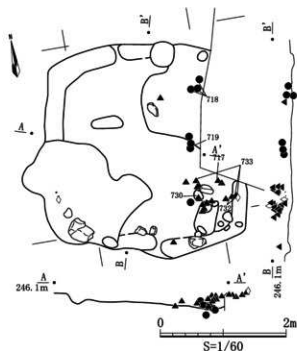
S147カマド土層注記

1. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土（しまりやや強、粘性やや強、焼土微量混じる）
2. 7.5YR3/4暗褐色砂質土（しまりやや弱、粘性やや強、焼土多く含む）
3. 10YR3/4暗褐色砂質土（しまりやや弱、粘性やや弱、炭化物少量含む）

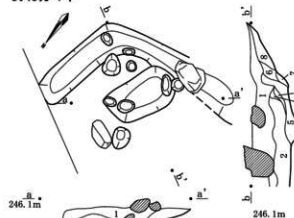
S148



S148遺物分布



S148カマド

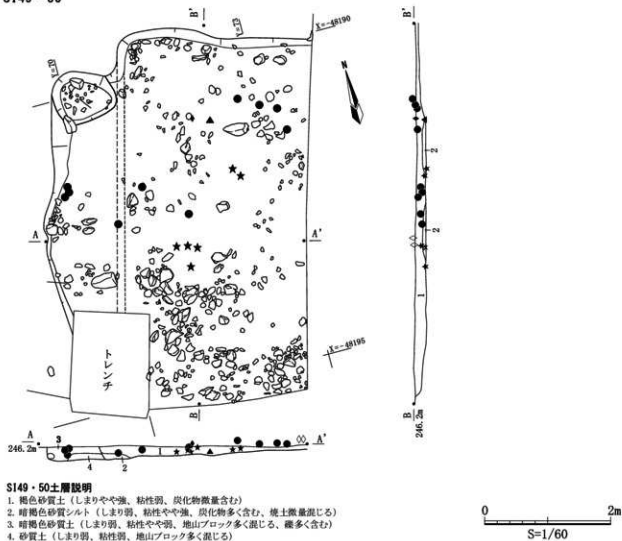


S148カマド土層注記

1. 10YR3/4暗褐色砂質土（しまり弱、粘性やや弱、炭化物少量含む、焼土大量含む）
2. 10YR3/4暗褐色砂質土（しまりやや強、粘性弱、1層に比べて炭化物・焼土が入らない）
3. 7.5YR4/6褐色砂質土（しまりやや弱、粘性強、焼土主体）
4. 10YR3/3暗褐色砂質土（しまりやや強、粘性弱、炭化物微量混じる、焼土少量混じる）
5. 10YR4/4褐色砂質土

0 1m
S=1/30

図50 竪穴建物跡S147・S147カマド、S148、S148遺物分布、S148カマド

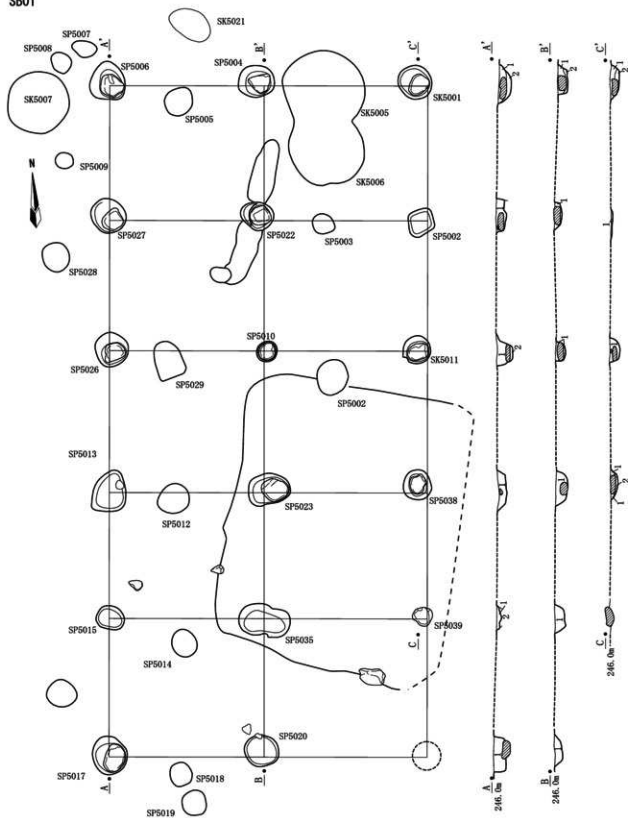


S149・50土層説明

1. 褐色砂質土（しまりやや強、粘性弱、炭化物微量含む）
2. 暗褐色砂質シルト（しまり弱、粘性やや強、炭化物多く含む、焼土微量混じる）
3. 暗褐色砂質土（しまり弱、粘性やや弱、地山ブロック多く混じる、糞多く含む）
4. 砂質土（しまり弱、粘性弱、地山ブロック多く混じる）

図51 竪穴建物跡S149・50

SB01



SB01 土層注記

1. 暗褐色砂質シルト (しまり弱、粘性やや強、炭化物少量含む)
2. 暗褐色砂質土 (しまり弱、粘性やや弱、地山ブロック多く混じる、礫多く含む)

図52 掘立柱建物跡SB01

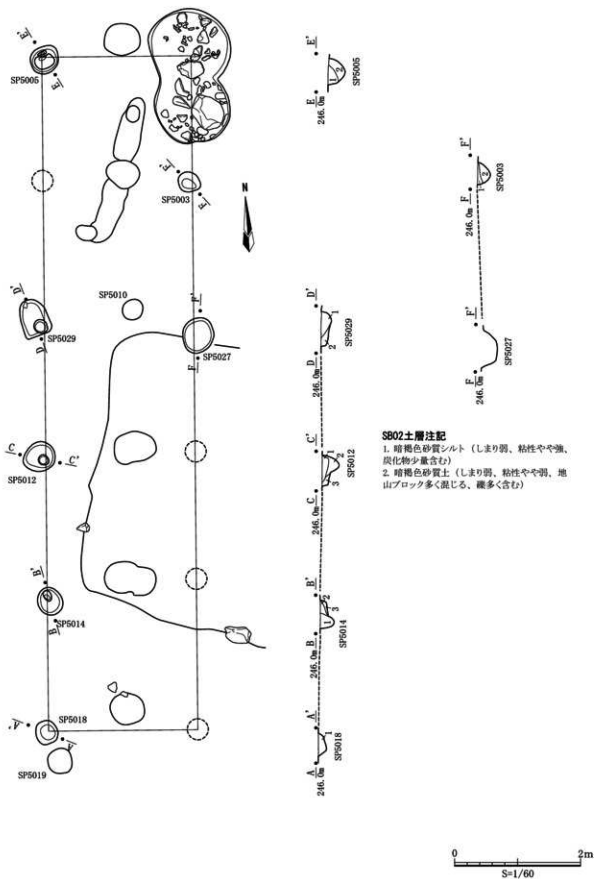


図53 掘立柱建物跡SB02

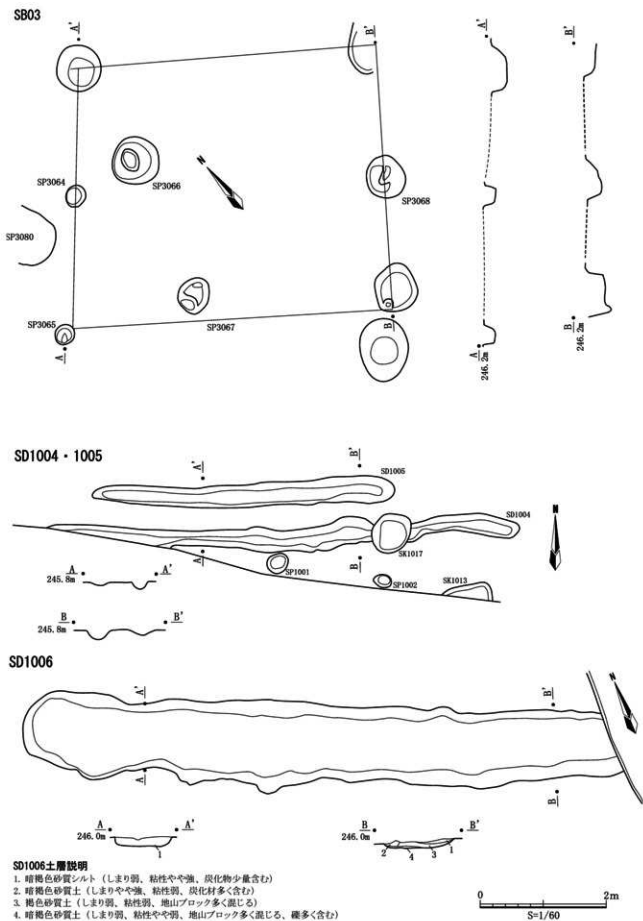
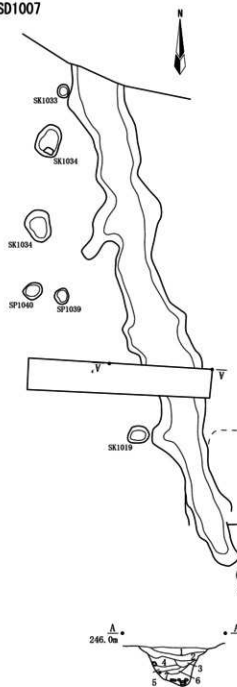
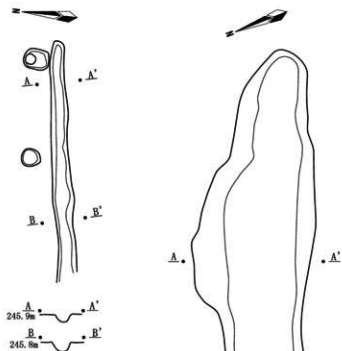


図54 掘立柱建物跡SB03、溝SD1004・1005、SD1006

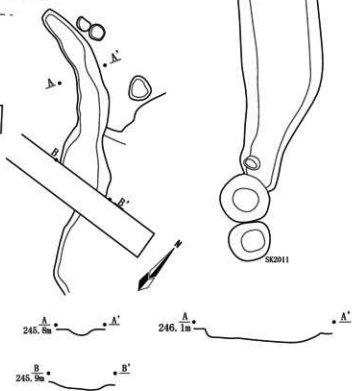
SD1007



SD1009



SD1010



SD1007土層説明

1. 暗褐色砂質シルト（しまり弱、粘性やや強、炭化物少量含む）
2. 暗褐色砂質土（しまりやや強、粘性弱、炭化材多く含む）
3. 褐色砂質土（しまり弱、粘性弱、薬理構造）
4. 暗褐色砂質土（しまり弱、粘性やや弱）
5. 暗褐色砂質シルト（しまり弱、粘性やや強）
6. 暗褐色砂質土（しまりやや強、粘性弱、薬理構造）
7. 暗褐色砂質土（しまり弱、粘性やや弱、地山ブロック多く混じる、礫多く含む）

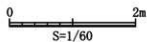
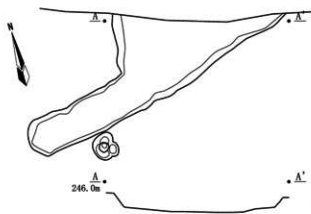
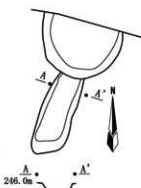


図55 溝SD1007・SD1009、SD1010

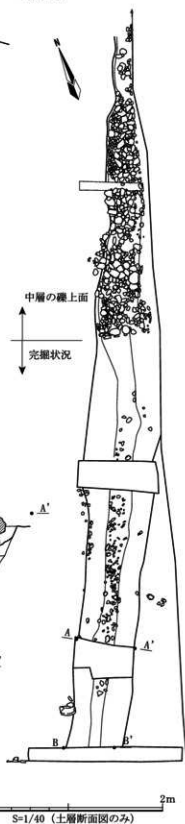
SD3002



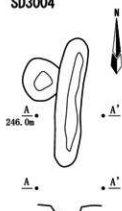
SD3003



SD4001



SD3004



0 2m
S=1/60

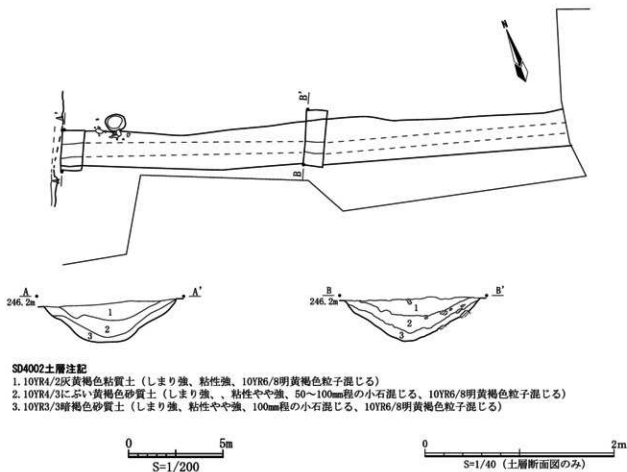


SD4001土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色砂質土 (しまりやや強、粘性弱、炭化物含む、10～30mm程の礫少量含む)
2. 10YR4/3 に近い黄褐色シルト (しまりやや弱、粘性やや強、50mm程の小石混じる、上面で大粒大の礫散在)
3. 10YR4/4 暗褐色シルト (しまり弱、粘性やや強、炭化物微量含む)
4. 10YR4/4 褐色砂質土 (しまり弱、粘性強、炭化物含む、10～30mm程の礫含む)
5. 10YR3/3 暗褐色砂質土 (しまり強、粘性やや強、100mm程の小石混じる)
6. 赤褐色シルト～砂質土 (しまりやや強、粘性強、グライ化層)
7. 10YR4/3 に近い黄褐色砂礫層 (しまりやや弱、粘性弱) 礫(大)
8. 10YR4/4 褐色砂質土 (しまり強、粘性強、褐色ブロック含む、10～30mm程の礫含む)
9. 10YR3/3 暗褐色砂質土 (しまりやや弱、粘性やや弱、10～30mm程の礫含む)
10. 10YR4/4 褐色砂質土 (しまり弱、粘性弱、10～20mm程の礫含む、やや土壌化)
11. 10YR2/4 暗褐色砂質土 (10層より粘性強、礫を微量含む)
12. 10YR4/4 褐色砂質土 (しまり弱、粘性弱、10～30mm程の礫含む)
13. 10YR3/4 暗褐色砂質土 (しまりやや強、粘性弱)

図56 溝SD3002、SD3003、SD3004、SD4001

SD4002

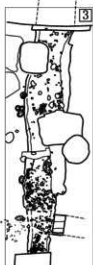
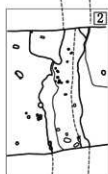
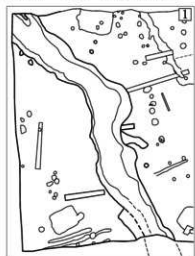


SD4002土層注記

1. 10YR4/2灰黄褐色粘質土（しまり強、粘性強、10YR6/8明黄褐色粒子混じる）
2. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土（しまり強、粘性やや強、50～100mm程の小石混じる、10YR6/8明黄褐色粒子混じる）
3. 10YR3/3暗褐色砂質土（しまり強、粘性やや強、100mm程の小石混じる、10YR6/8明黄褐色粒子混じる）

図57 溝SD4002

NR1001・3001・4001割付図



NR1001



NR1001土層注記

1. 10YR2/2黒褐色砂質土しまりやや強、粘性やや強、炭化物混じる
2. 0YR3/3暗褐色砂質層（しまりやや弱、粘性やや強炭化物混じる）
3. 10YR3/3暗褐色砂質土しまりやや強、粘性やや強、径約10~20mmの礫少量混じる
4. 10YR2/2黒褐色砂質土しまりやや強、粘性やや強、炭化物混じる
5. 10YR2/2黒褐色砂質土しまりやや強、粘性やや強、炭化物混じる
6. 0YR3/3暗褐色砂質層（しまりやや強、粘性やや弱、炭化物混じる）
7. 10YR4/4褐色砂質土（しまりやや強、粘性やや弱、炭化物混じる）
8. 10YR2/2黒褐色砂質土（しまりやや弱、粘性やや強、炭化物混じる）
9. 10YR4/4褐色砂質土（しまりやや強、粘性やや弱、炭化物混じる）
10. 10YR2/2黒褐色砂質土（しまりやや強、粘性やや弱、炭化物混じる）
各層ともやや均質、細礫を少量含む層

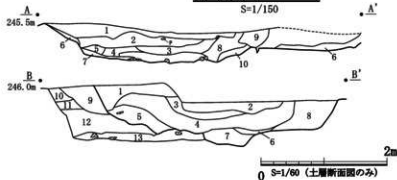


図58 自然流路NR1001・3001・4001割付図、NR1001

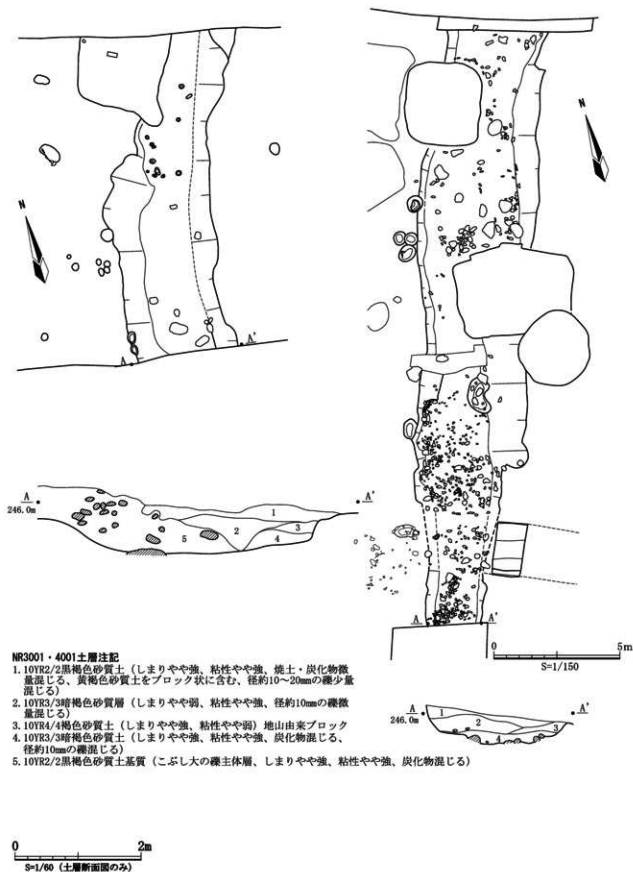
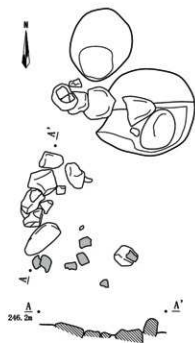
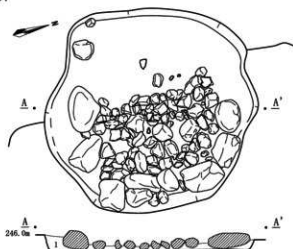


図59 自然流路NR3001・4001

SS2001



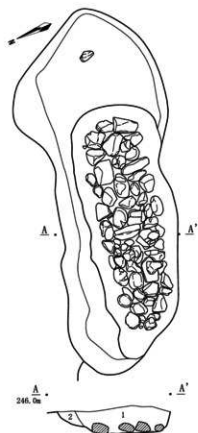
SS3001



SS3001土層注記

1. 10YR2/2黒褐色砂質土（しまりやや強、粘性やや強、焼土・炭化物微量混じる、黄褐色砂質土をブロック状に含む、径約10~20mmの礫少量混じる）

SS3002



0 2m
S=1/40

図60 配石遺溝SS2001、SS3001、SS3002

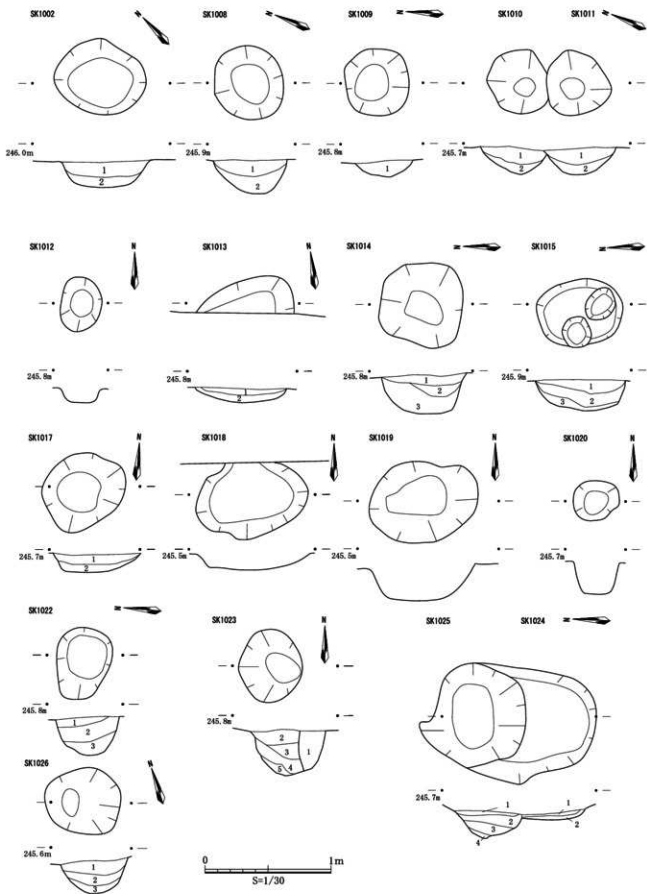


图61 土坑 (SK) ①

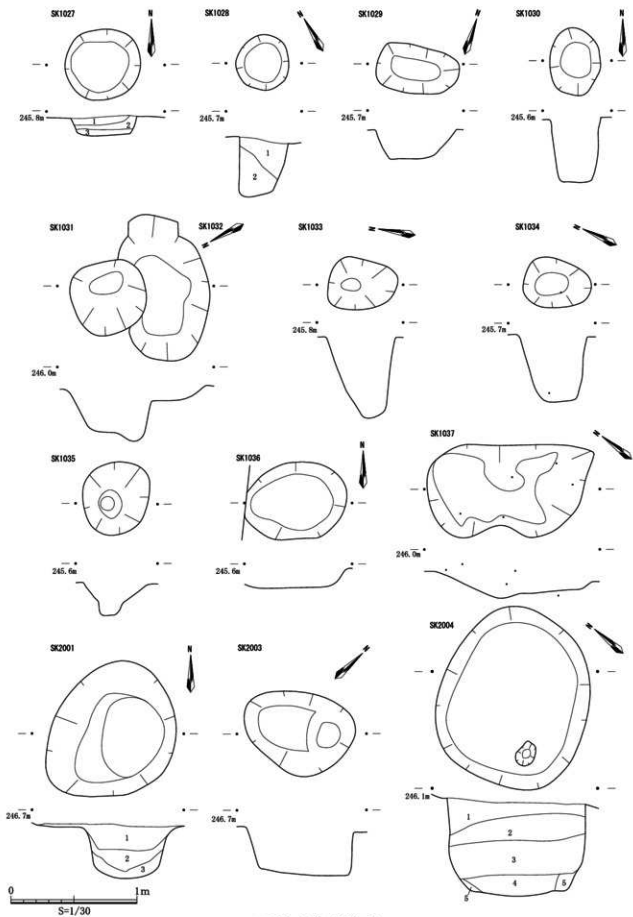


图62 土坑 (SK) ②

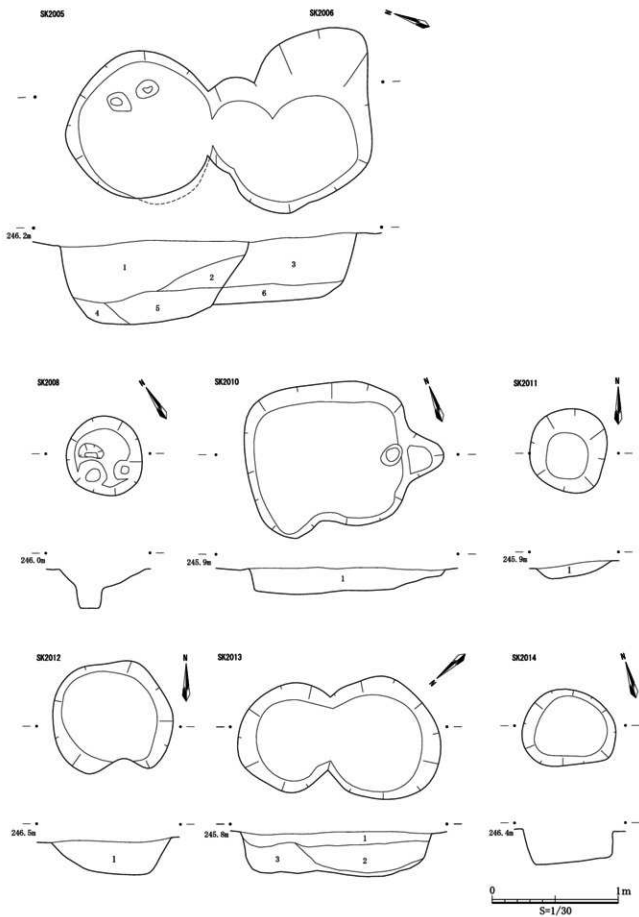


图63 土坑 (SK) ③

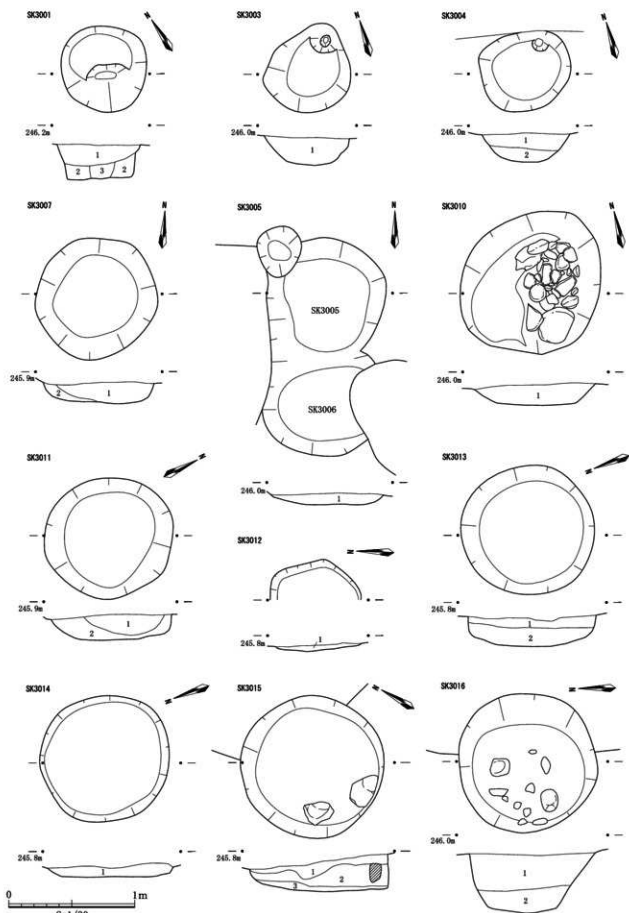


图64 土坑 (SK) ④

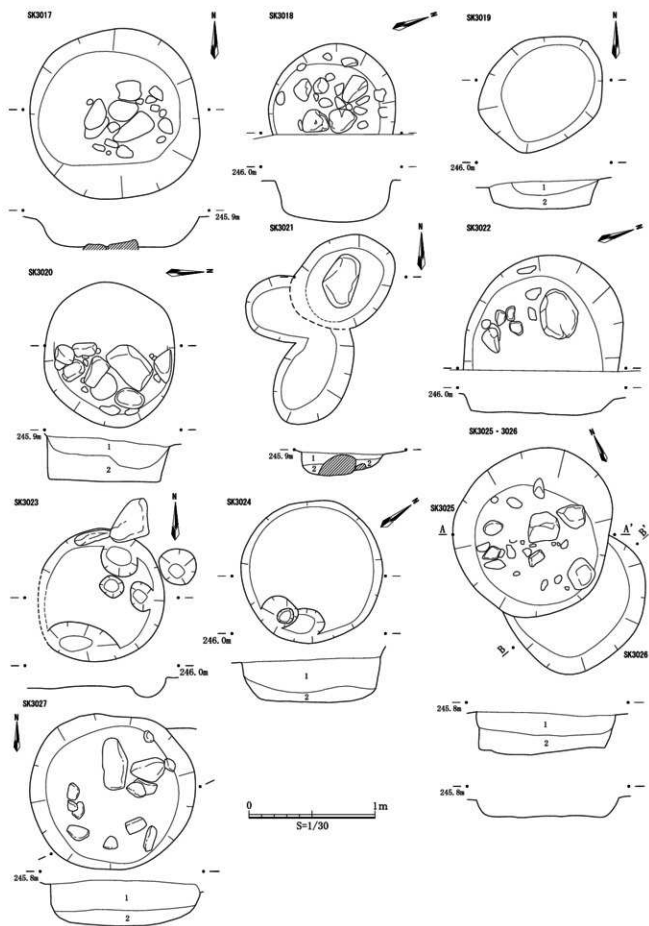


图65 土坑 (SK) ⑤

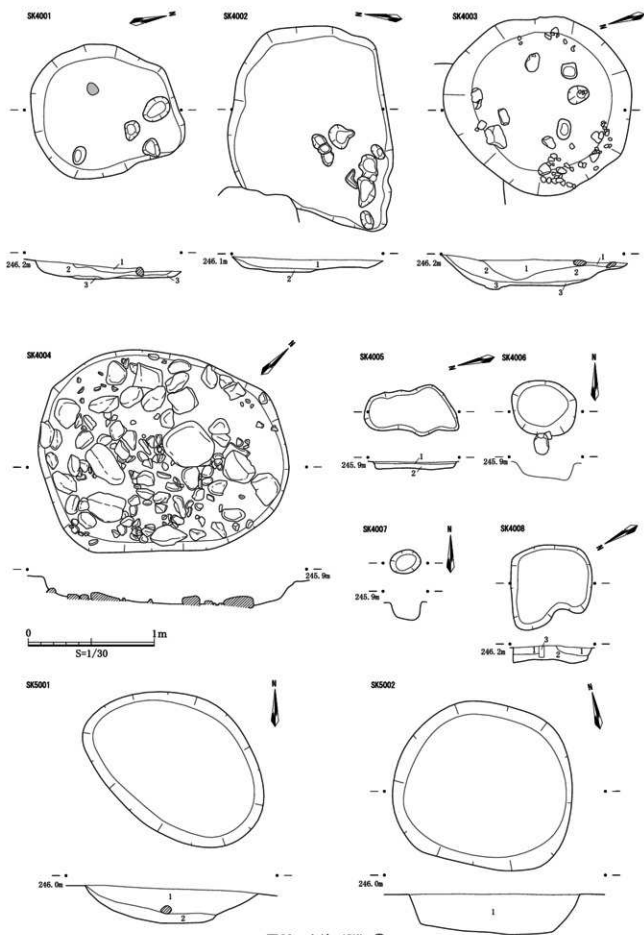


图66 土坑 (SK) ⑥

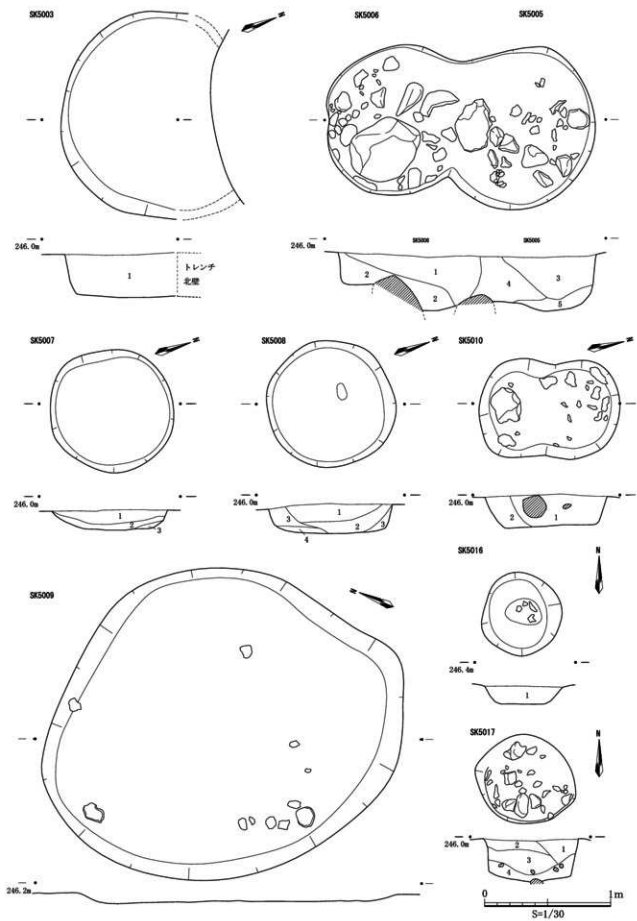


図67 土坑 (SK) ⑦

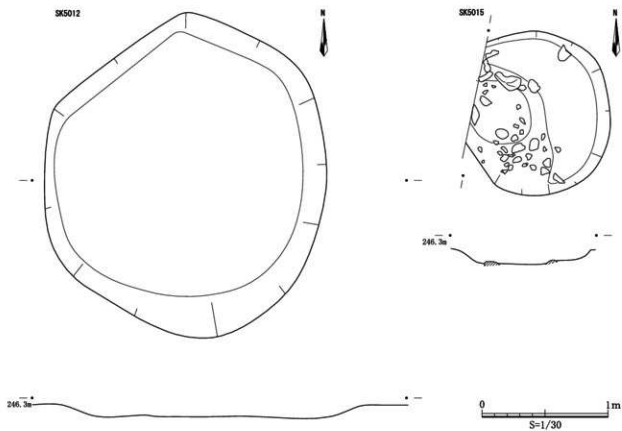


图68 土坑 (SK) ⑧

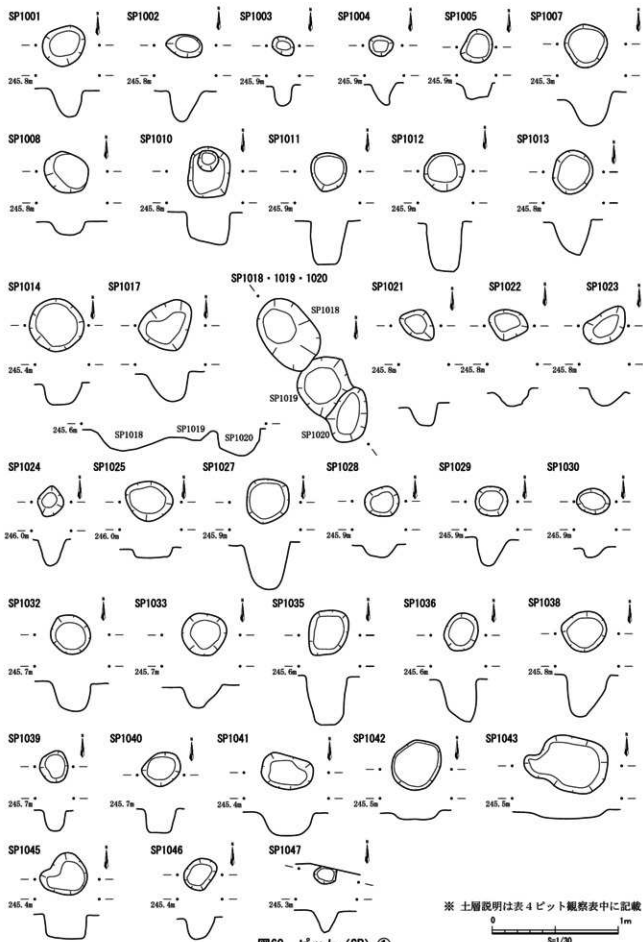
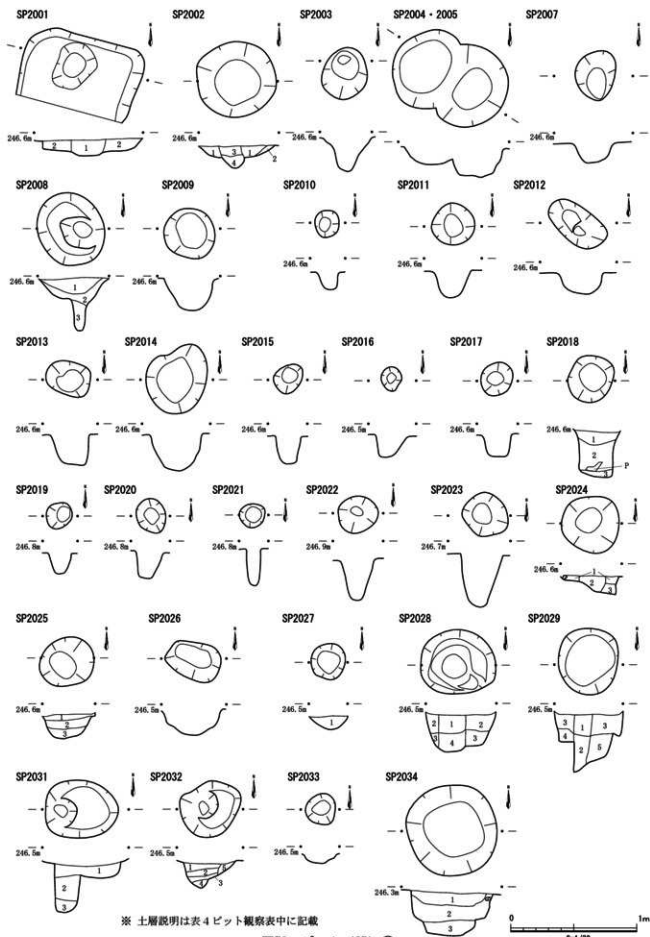
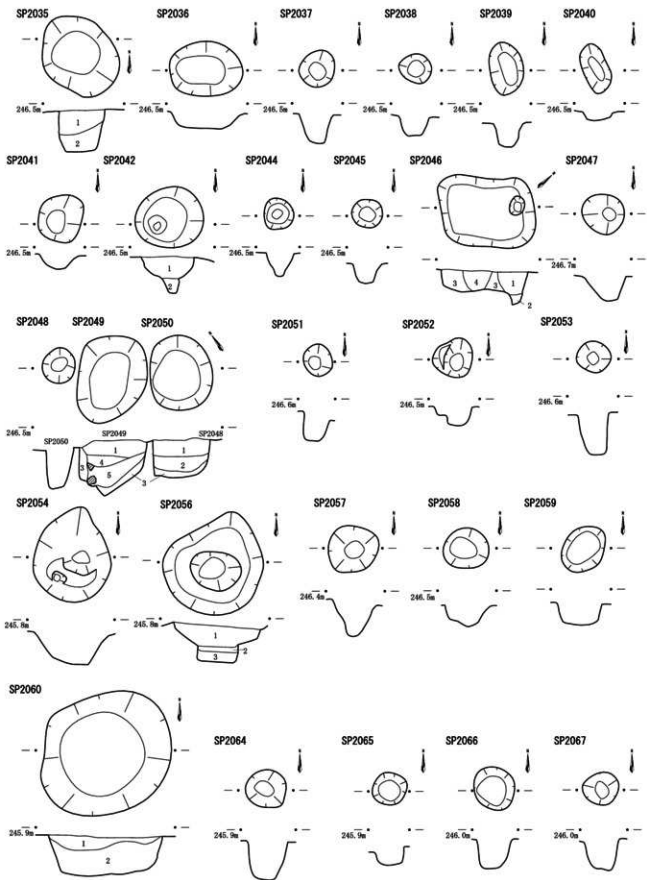


図69 ビット (SP) ①





※ 土層説明は表4ピット観察表中に記載

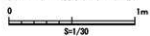


図71 ピット (SP) ③

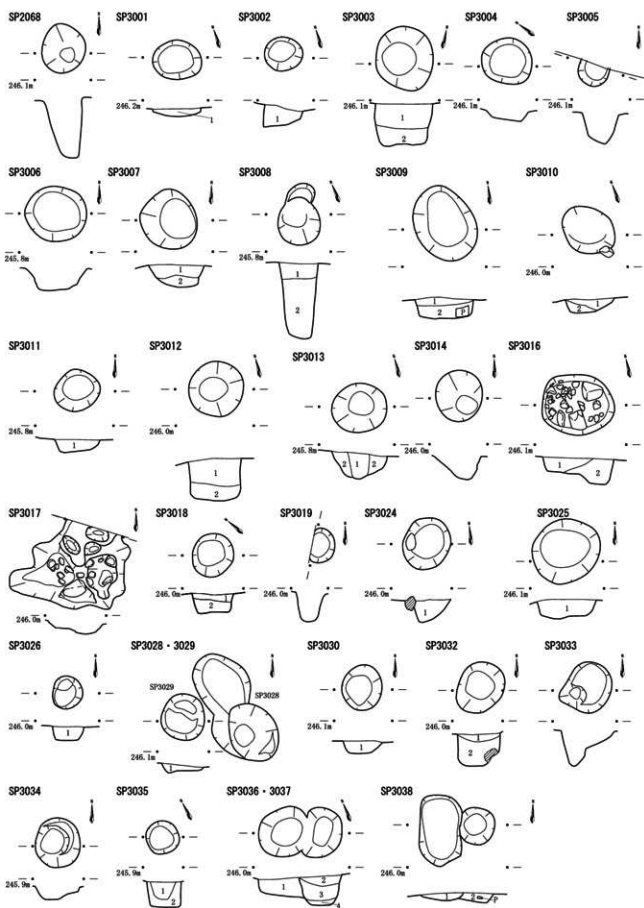
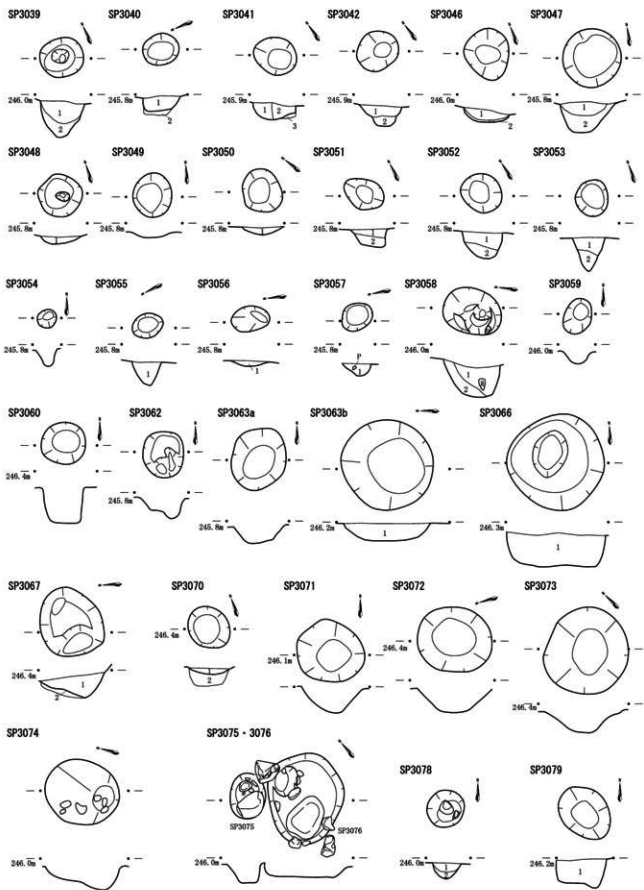


図72 ピット (SP) ④



※ 土層説明は表4ピット観察表中に記載

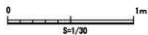
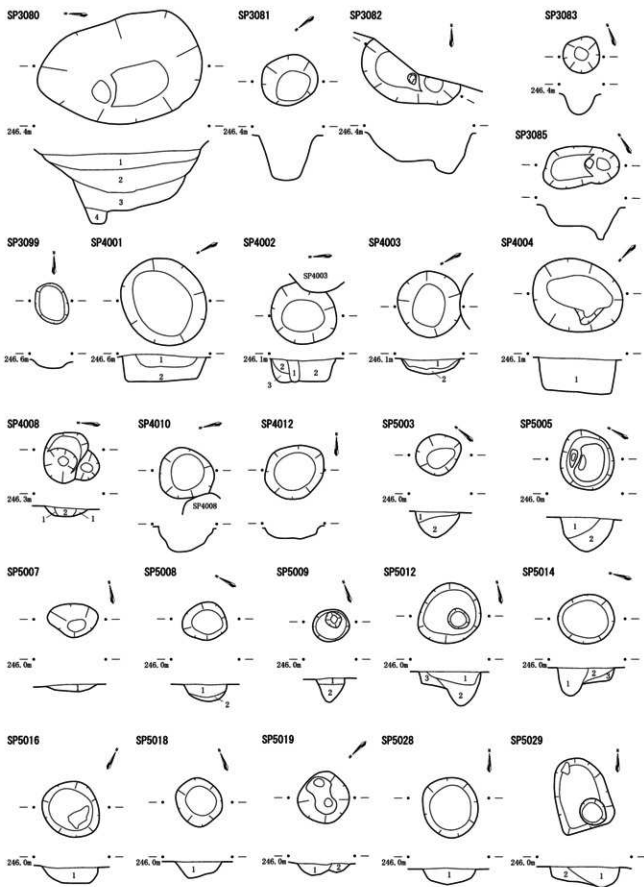


図73 ピット (SP) ⑤

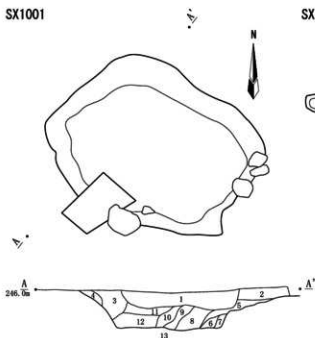


※ 土層説明は表4ピット観察表中に記載

図74 ピット (SP) ⑥

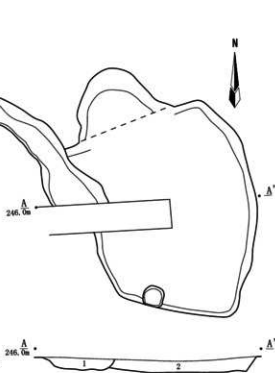


SX1001

**SX1001南ベルト土層注記**

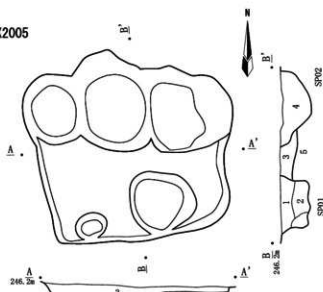
1. 10YR4/2灰黄褐色粘質土（しまりやや弱、粘性強、鉄分多く含む、径20mm程の小礫少量混じる、炭化物少量混じる）
2. 1層に細砂混じる、炭化物1層より少ない、径5mm程に小さくなる
3. 1層に細砂混じる 1層より明るい（しまりやや強、粘性強、炭化物微量含む、鉄分多）
4. 10YR3/4暗褐色粘質土（しまり弱、粘性強、炭化物多く含む、鉄分少量含む）
5. 10YR3/4暗褐色土（しまりやや強、粘性弱、鉄分多く含む）
6. 10YR4/6暗褐色粘質土（しまり弱、粘性強、炭化物微量含む、鉄分多く含む）
7. 10YR5/2灰黄褐色砂（しまり弱、粘性弱、鉄分多く含む）
8. 10YR3/3暗褐色粘質土（しまり弱、粘性強、炭化物微量含む、鉄分少量含む）
9. 10YR3/1黒褐色粘質土（しまりやや弱、粘性強、炭化物少量含む、鉄分微量含む）
10. 10YR3/3暗褐色粘質土（しまりやや弱、粘性強、炭化物少量含む、鉄分多く含む）
11. 10YR2/3黒褐色粘質土（しまり強、粘性強、炭化物多く含む、鉄分多く含む）
12. 10YR3/3暗褐色粘質土（しまり強、粘性やや弱、炭化物多く含む、鉄分少量含む、径150mm程の礫あり）
13. 10YR4/6褐色粘質土（しまり弱、粘性弱）遺構確認面 地山

SX1003

**SX1003土層説明**

1. 黒褐色細粒砂層（しまり弱、粘性弱、炭化物少量含む、遺物包含）SD1010礫土
2. 黒褐色細粒砂層（しまり弱、粘性やや強、炭化物多く含む、遺物多く包含）

SX2005

**SX2004土層注記**

1. 10YR3/2黒褐色粗砂（しまり弱、粘性弱径20mm以下の礫含む）SP01表土
2. 10YR3/2黒褐色砂（しまり弱、粘性弱、径50mmの礫含む、黄褐色土混じる）SP01裏土
3. 2.5Y4/2暗灰黄色細砂（しまり弱、粘性弱、径10mm以下の礫含む）1号穴穴埋土
4. 10YR3/2黒褐色細砂（しまり弱、粘性弱、径20～60mmの礫含む）SP02埋土
5. 2.5Y5/3黄褐色細砂（しまり弱、粘性弱）地山層



図75 性格不明遺構SX1001、SX1003、SX2005

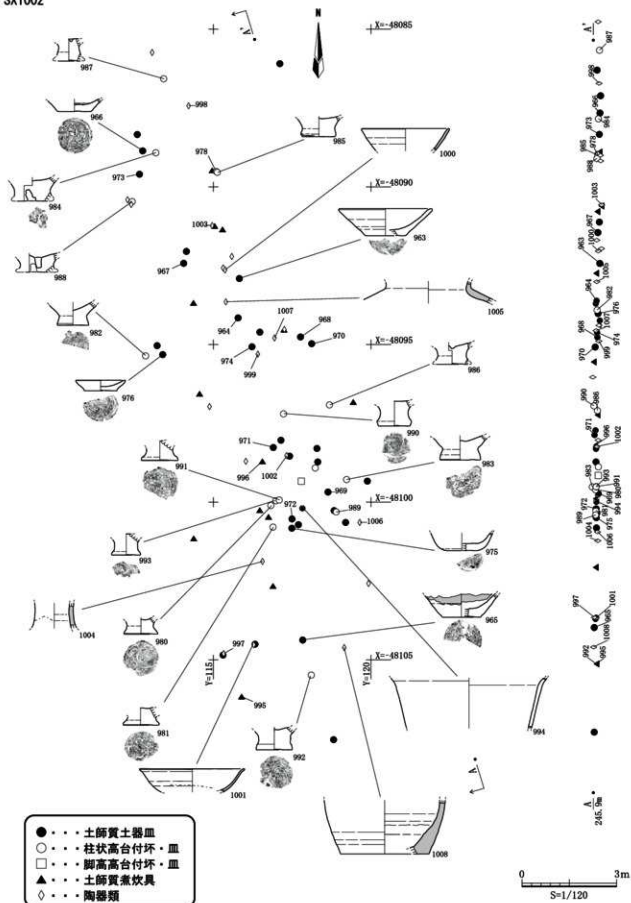


图76 性格不明遺構SX1002遺物分布

S101

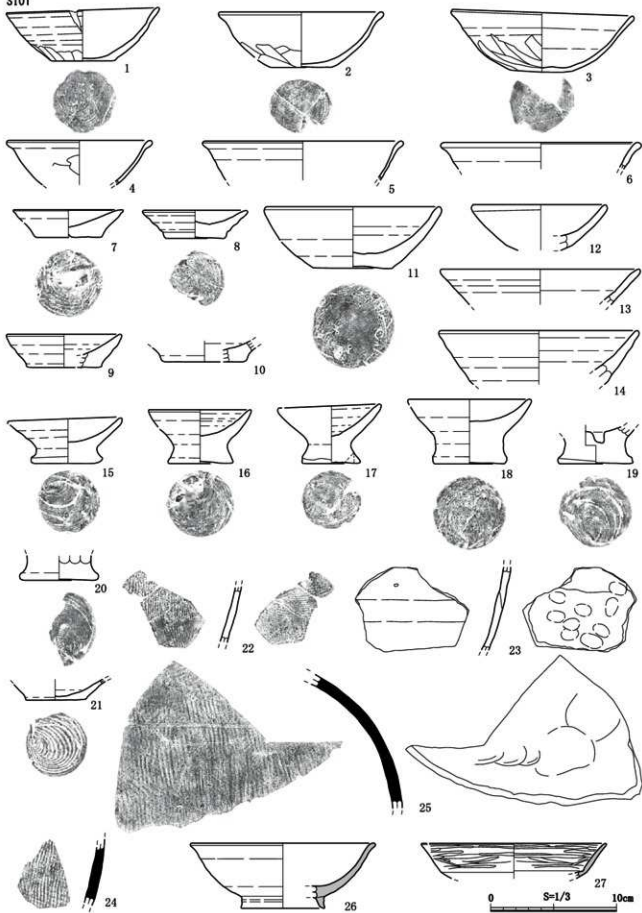
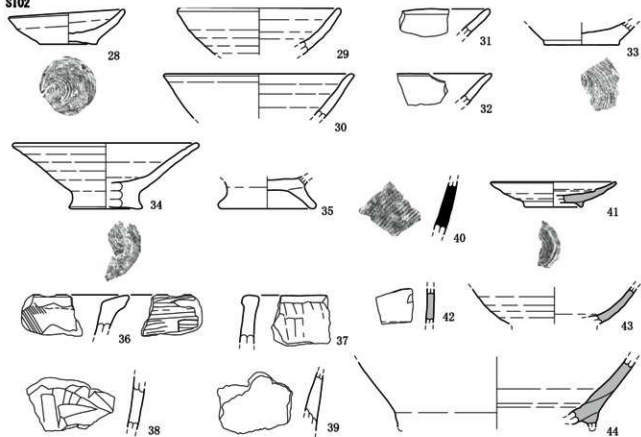


图77 S101出土土器

S102



S103

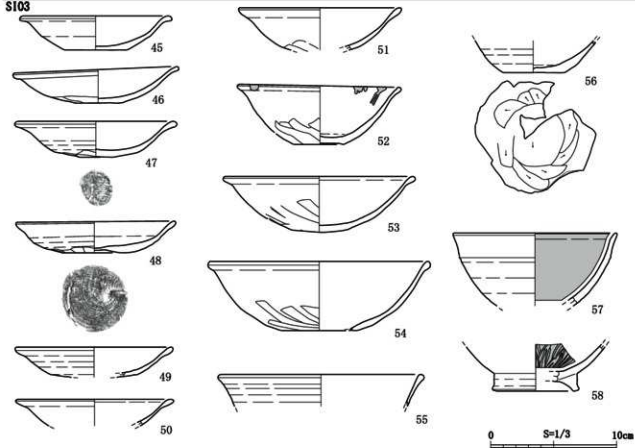
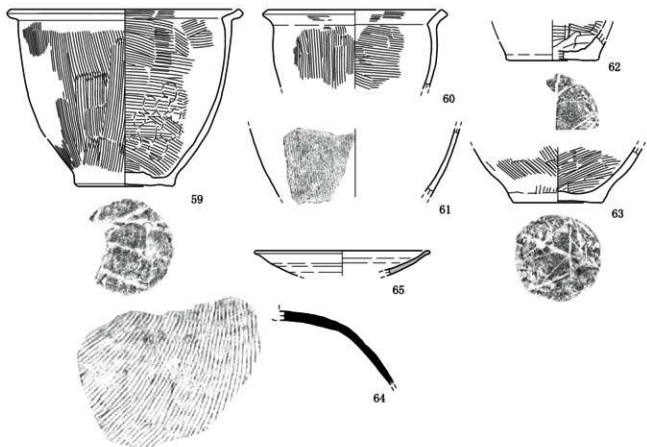


圖78 S102·S103出土土器



S104

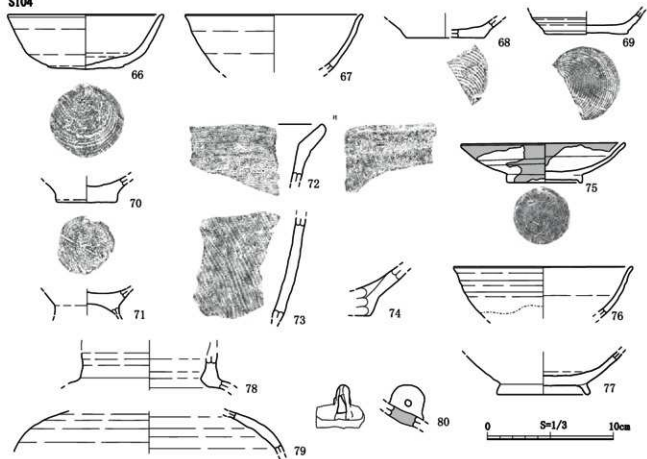


图79 S103②、S104出土土器

S105

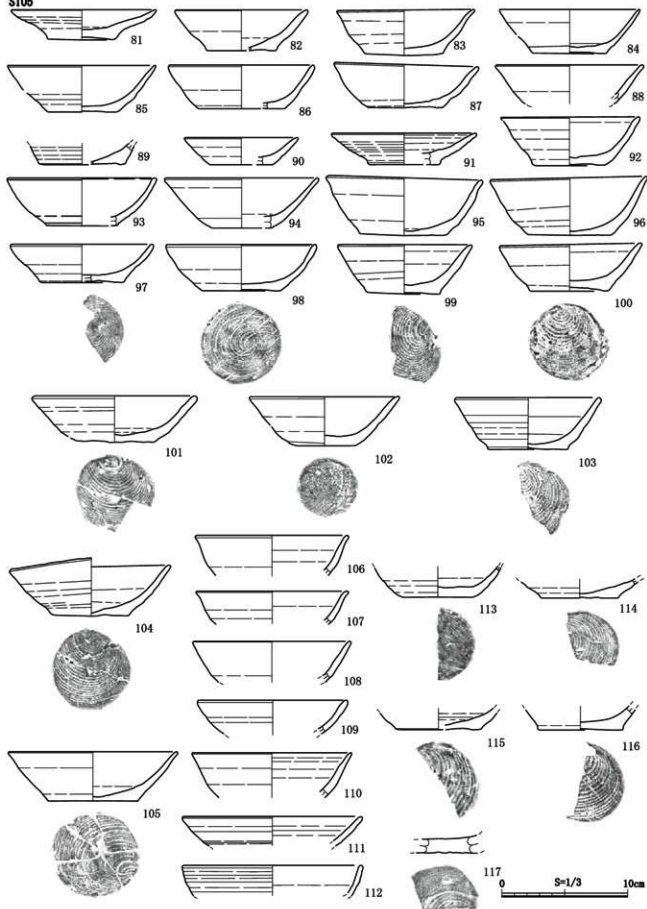


圖80 S105出土土器

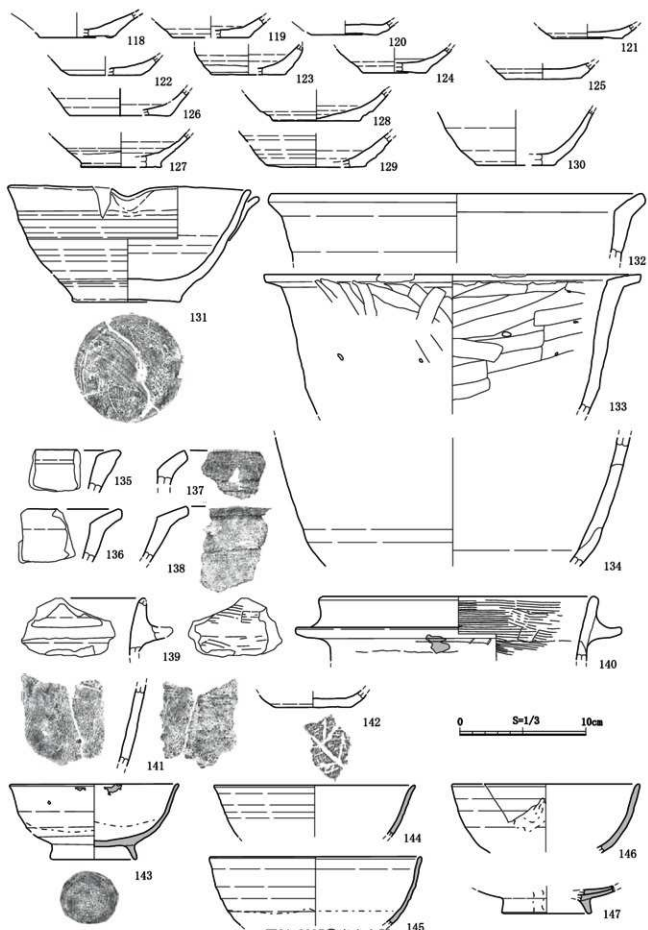


图81 S105②出土土器

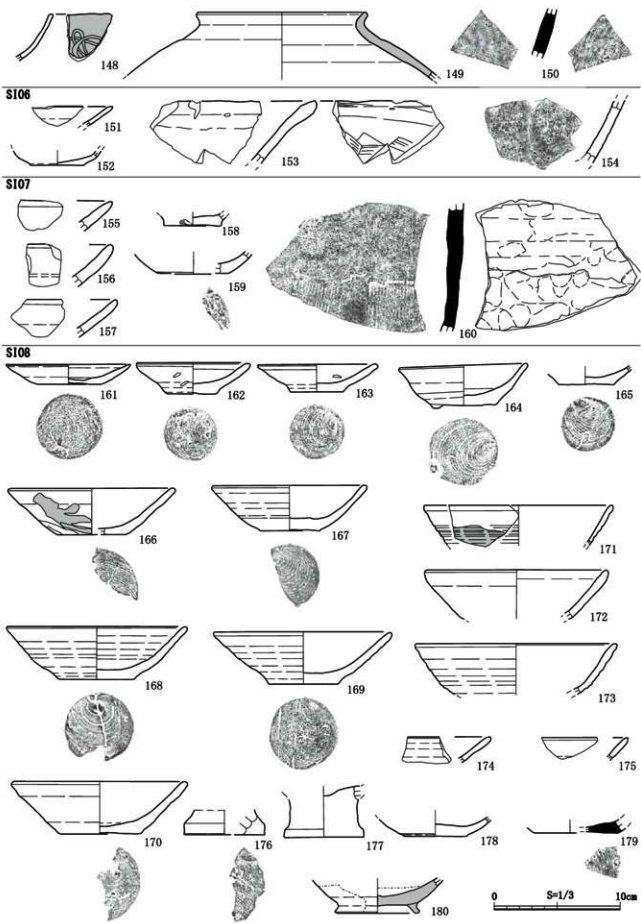


图82 S105③、S106~08出土土器

S109



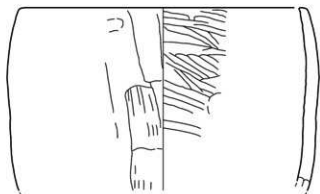
181



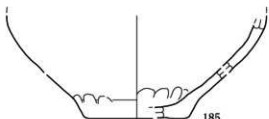
182



183



184



185



186



187



188



189

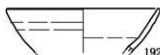


190

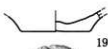
S110



191



192



193



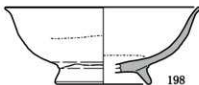
194



195



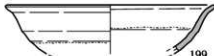
197



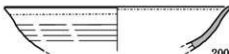
198



196



199

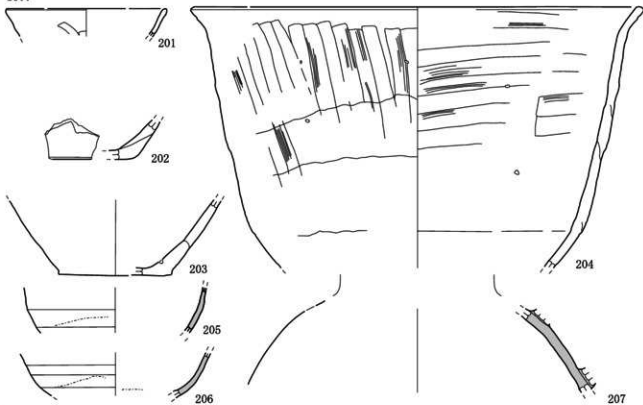


200

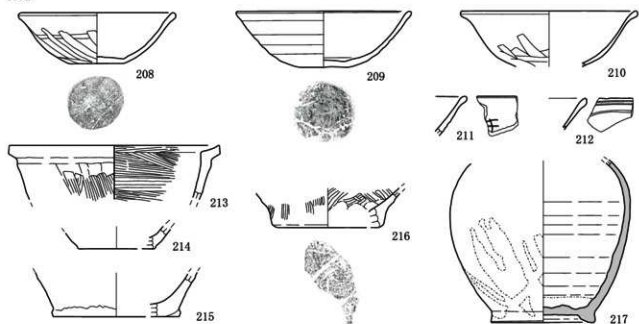
0 S=1/3 10cm

图83 S109、S110出土土器

S111



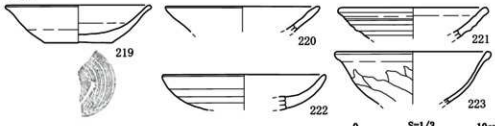
S112



S113

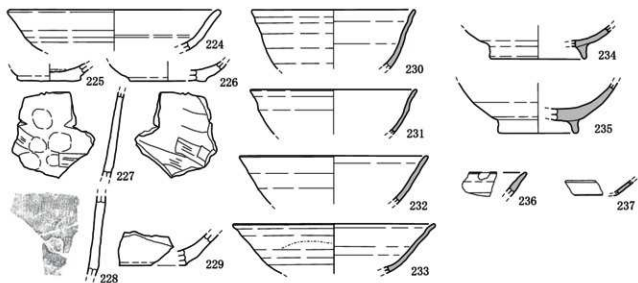


S114



0 S=1/3 10cm

图84 S111~S113、S114①出土土器



S115

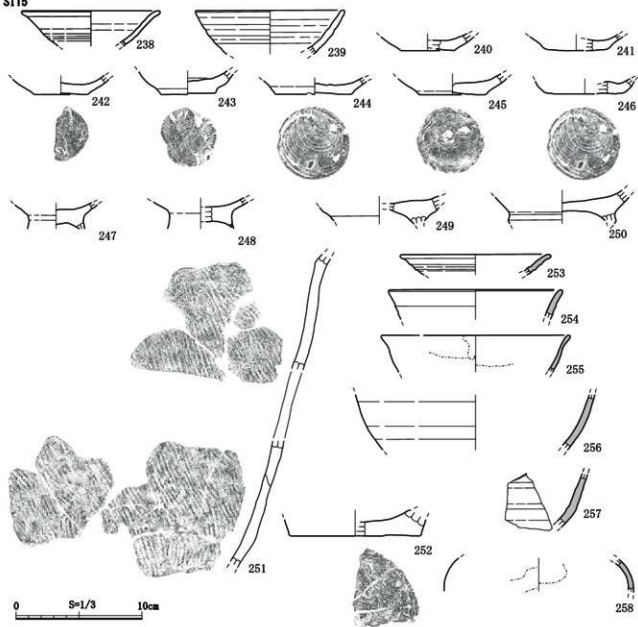
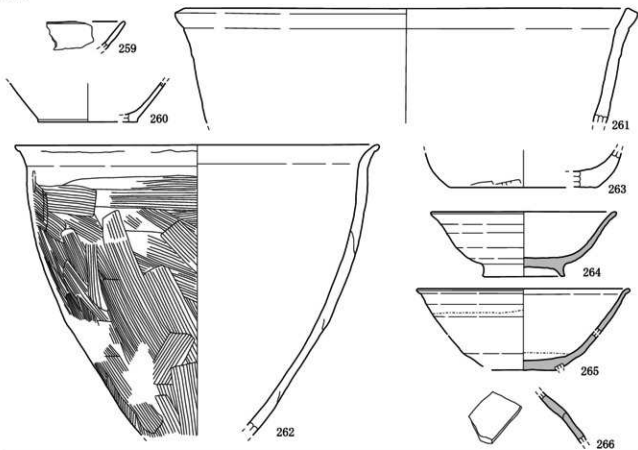
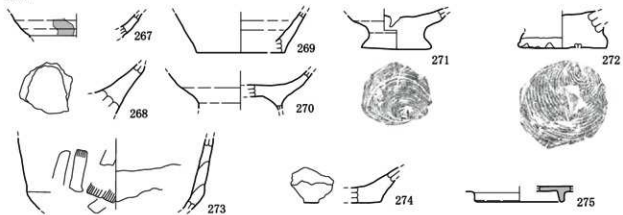


图85 S114②、S115出土土器

S116



S117



S118

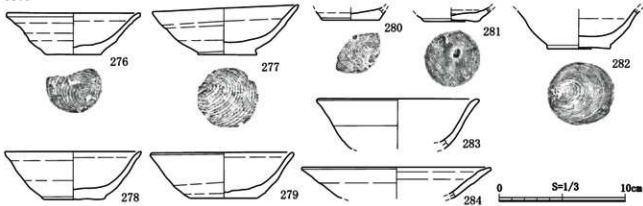


圖86 S116、S117、S118出土土器

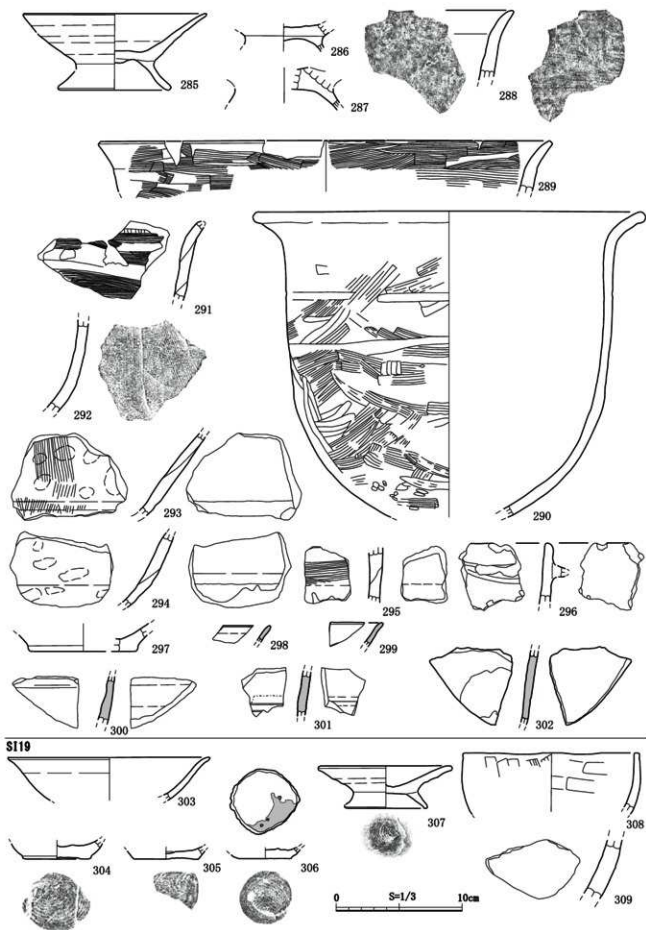
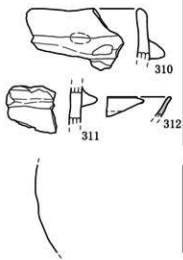
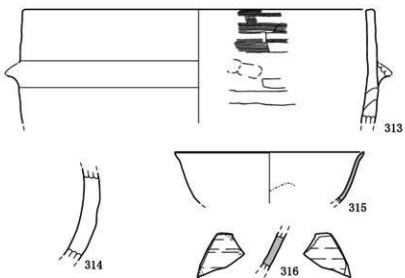


图87 S118②、S119出土土器

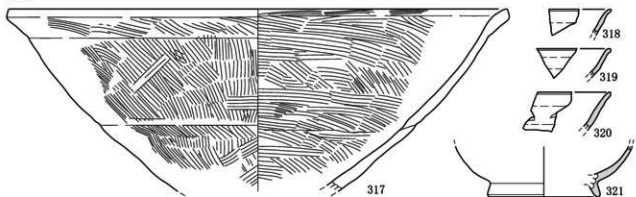
S120



S121



S122



S123

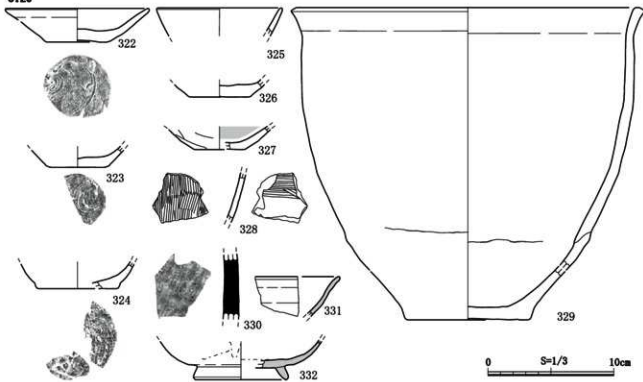
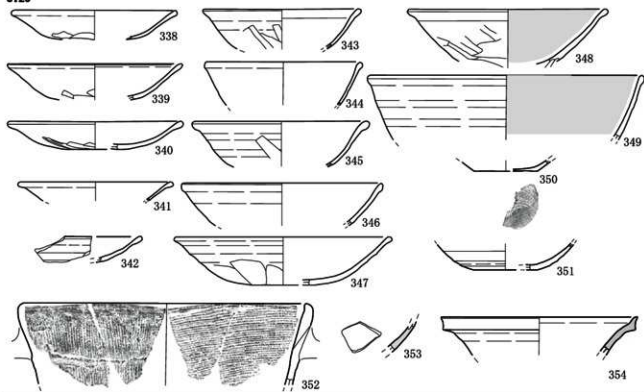


圖88 S120~S123出土土器

S124



S125



S126

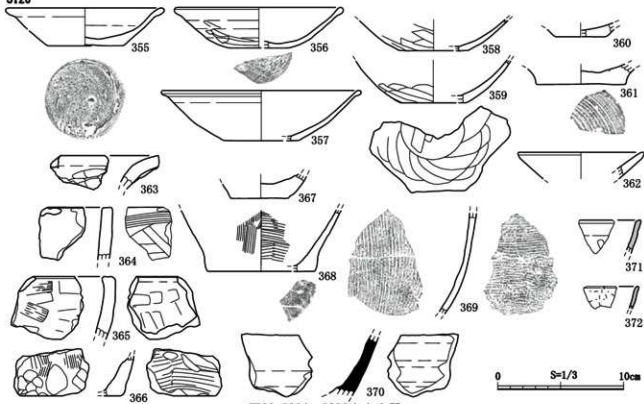
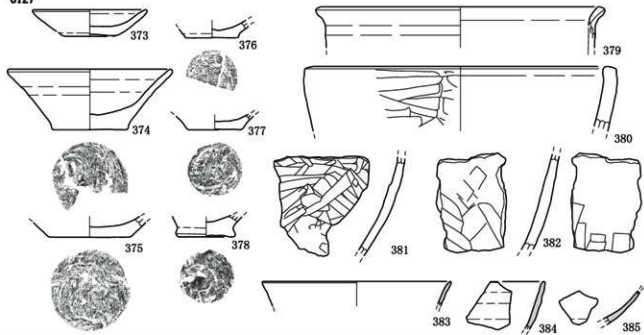


图89 S124~S126出土土器

S127



S128

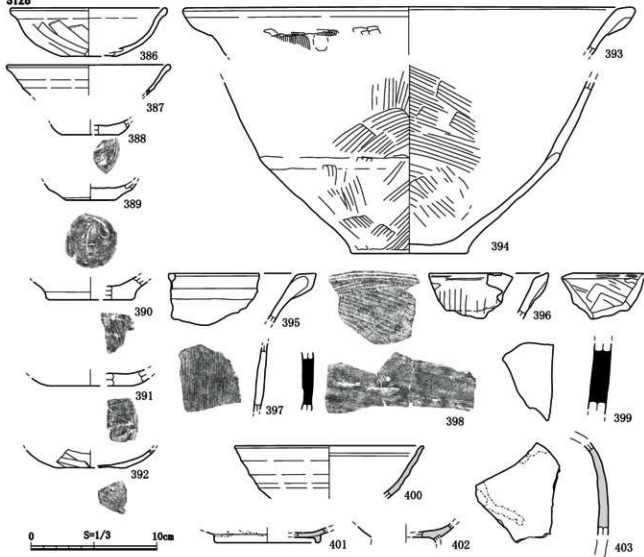
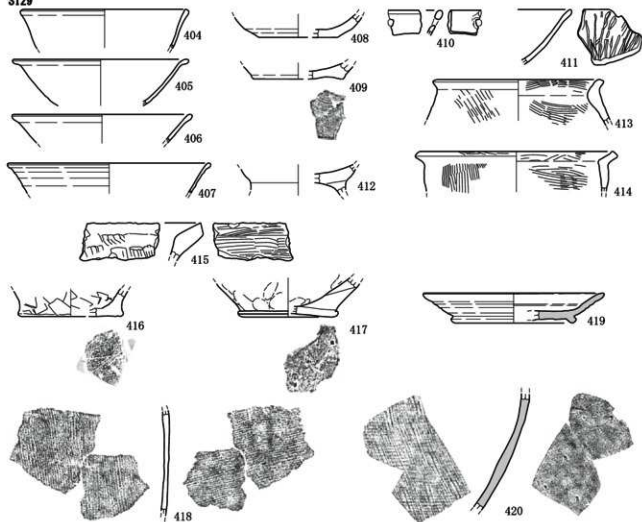


图90 S127、S128出土土器

S129



S130

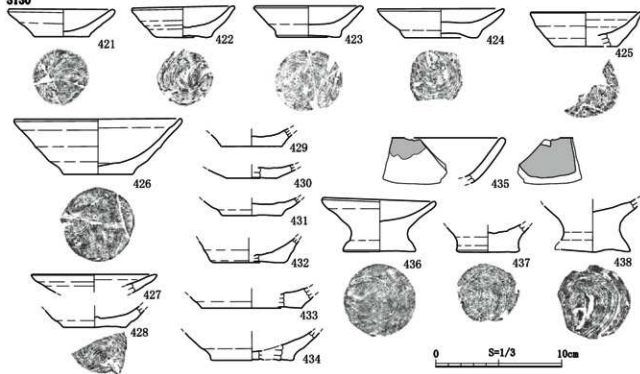
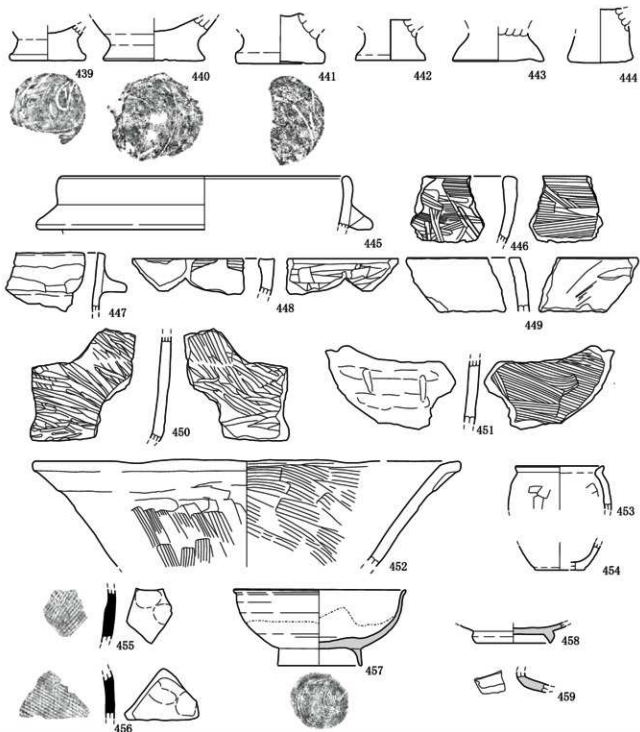


图91 S129、S130出土土器



S131

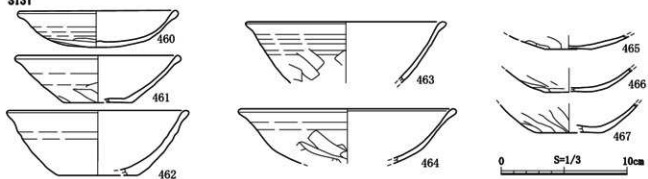
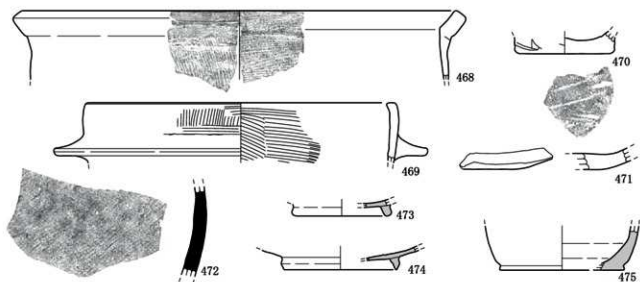
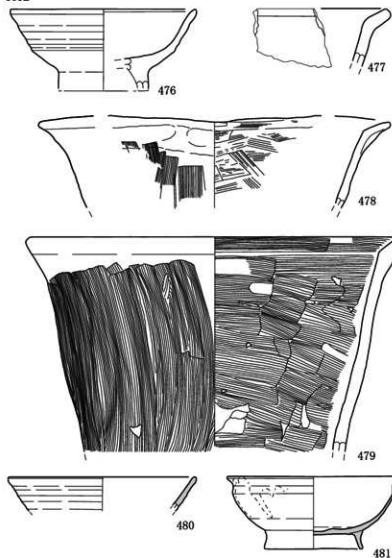


图92 S130②、S131①出土土器



S132



0 S=1/3 10cm

S133

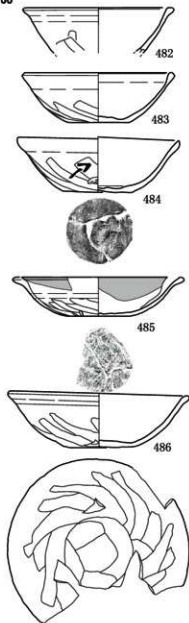


图93 S131②、S132、S133①出土土器

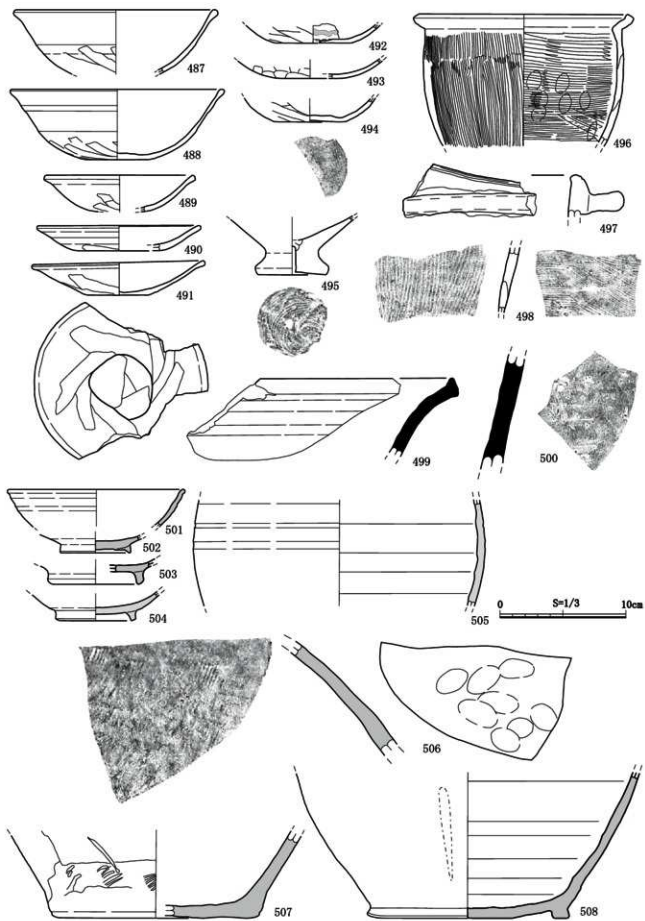
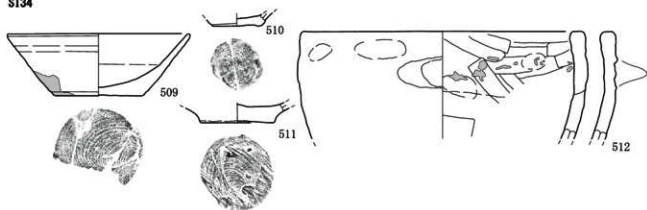
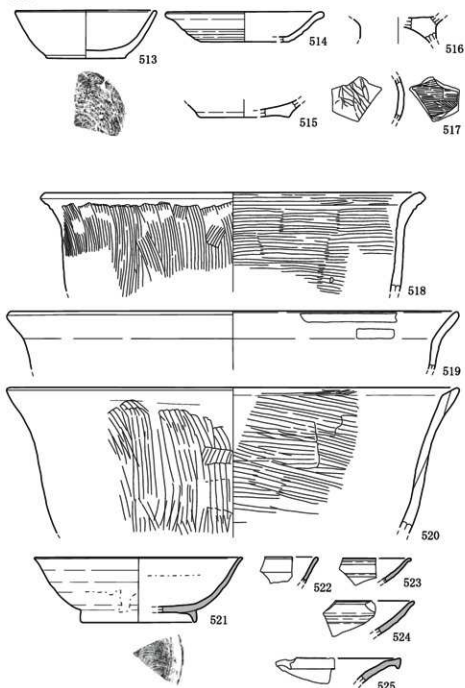


图94 S133②出土土器

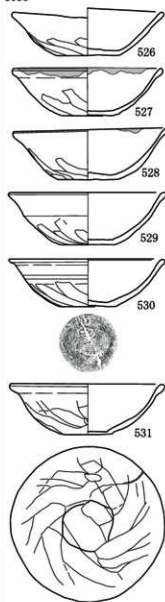
S134



S135



S136



0 S=1/3 10cm

图95 S134、S135、S136出土土器

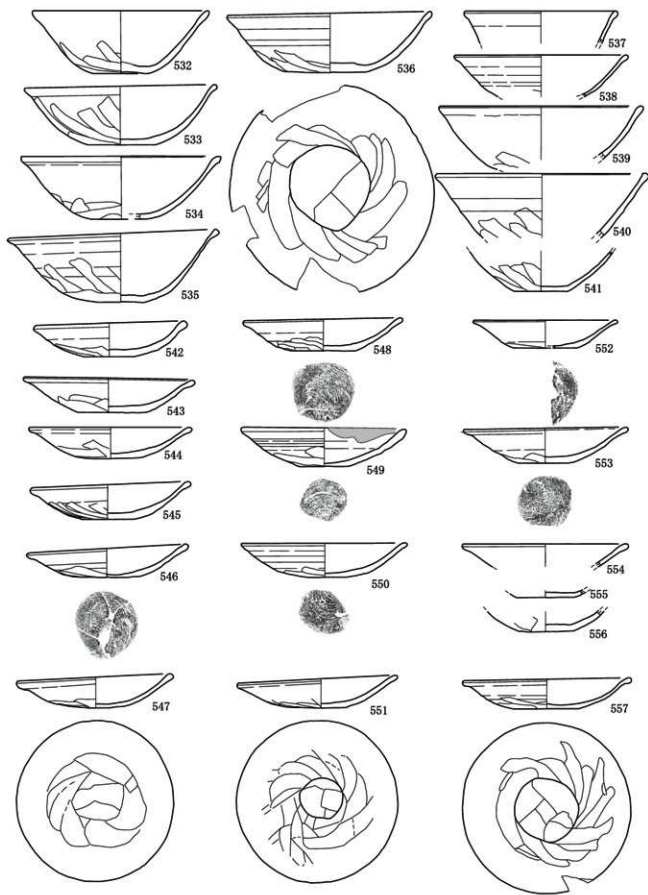


图96 S136②出土土器

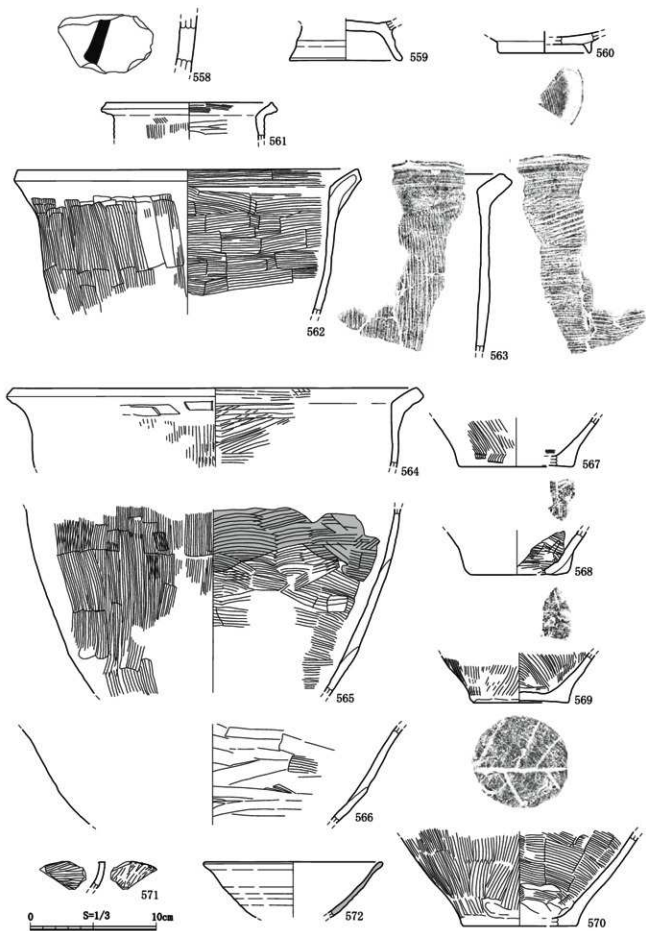
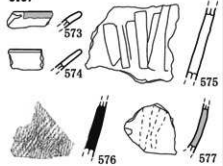
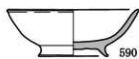
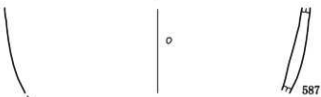
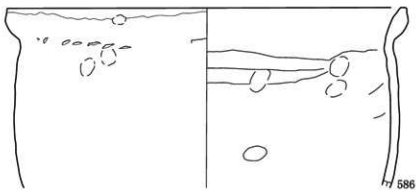
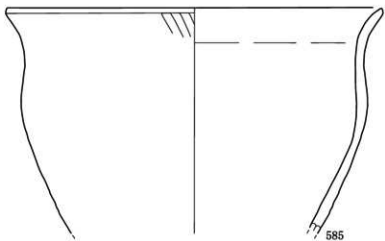
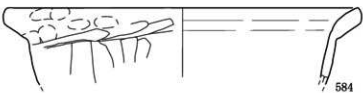
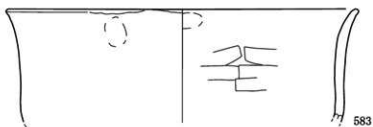
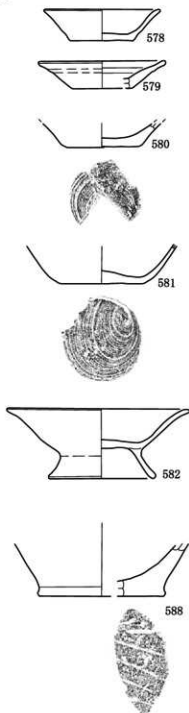


图97 S136③出土土器

S137



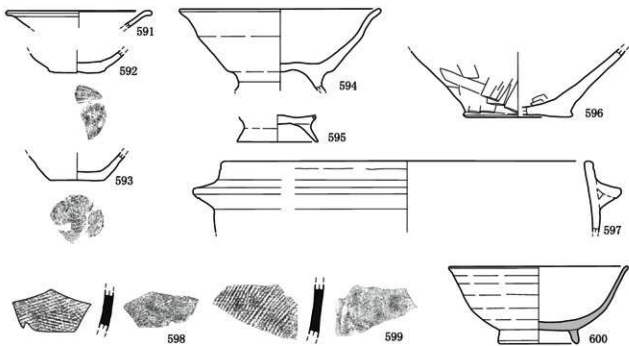
S138



0 S=L/3 10cm

图98 S134、S135出土土器

S139



S140

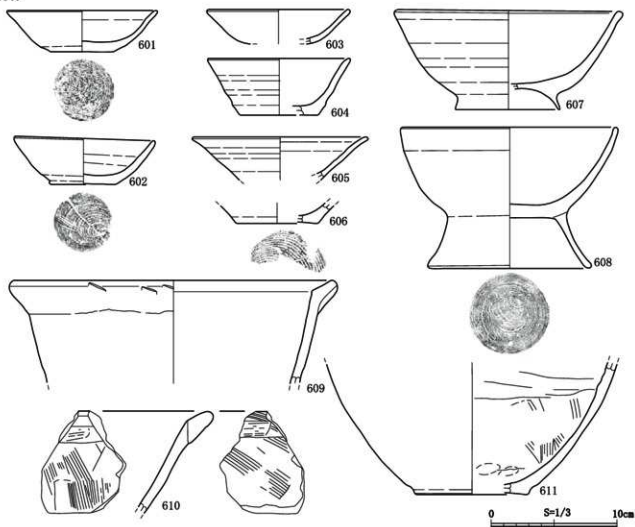


图99 S139、S140出土土器

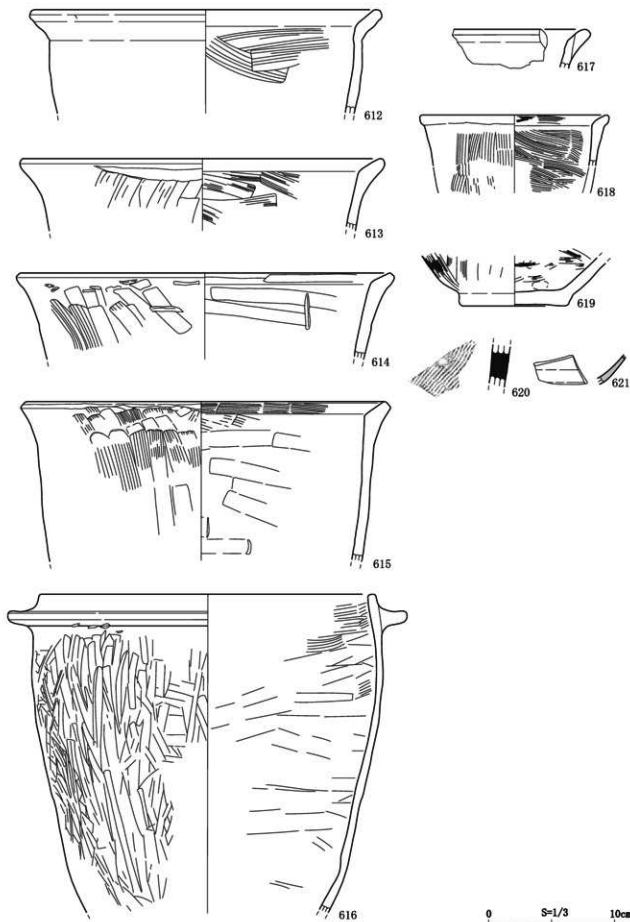


图100 S140②出土土器

S141

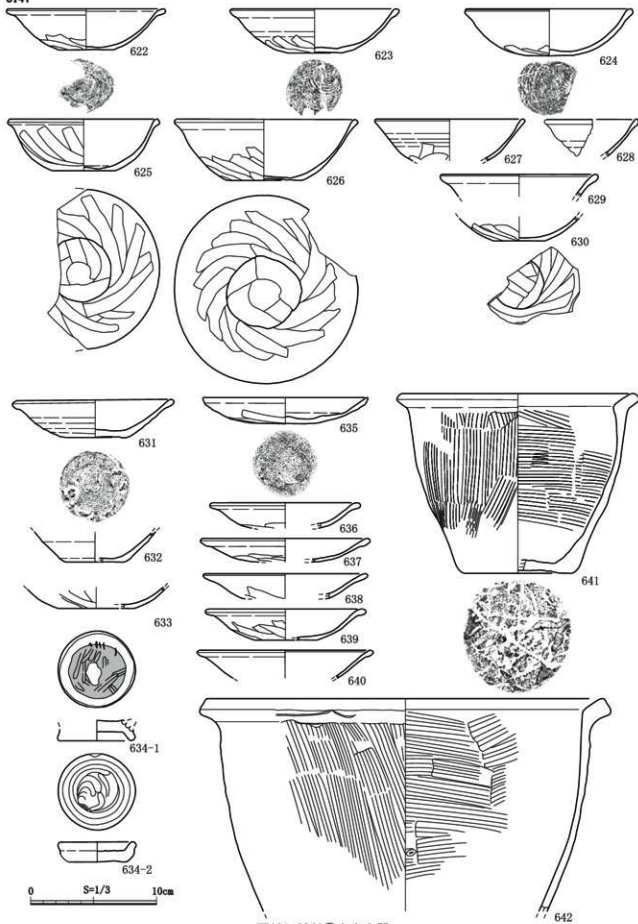
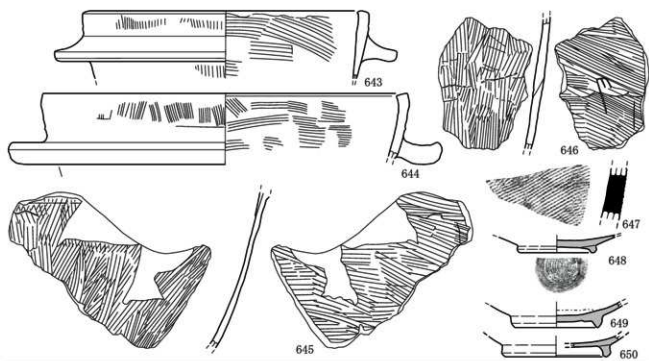


图101 S141①出土土器



S142

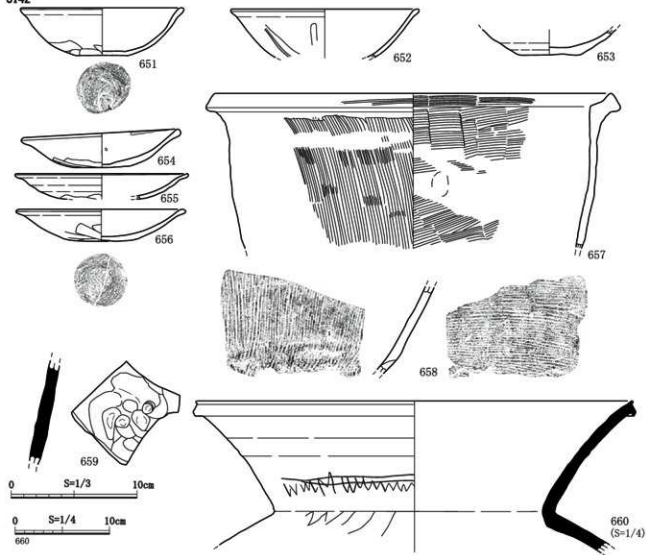
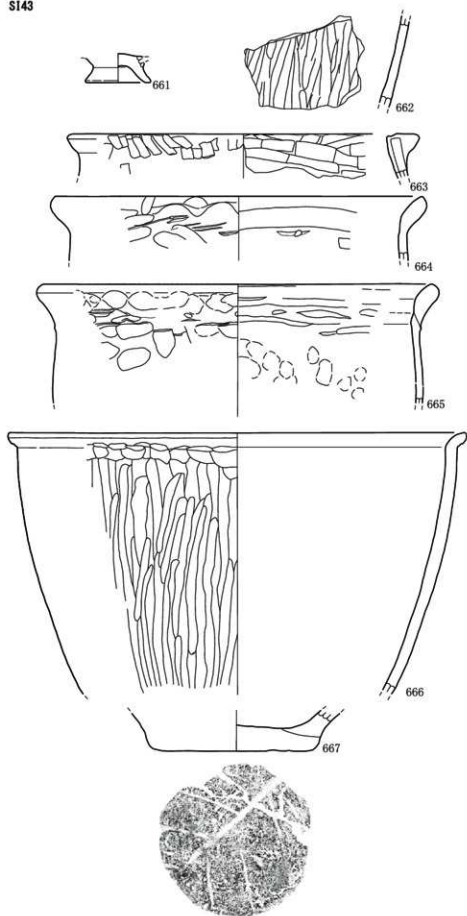
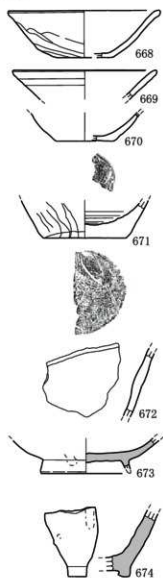


图102 S141②、S142出土土器

S143



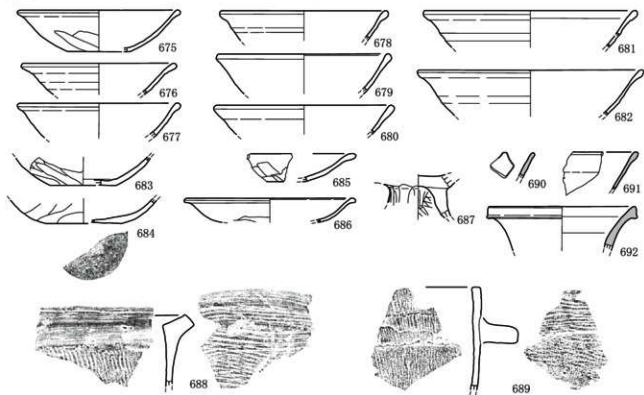
S144



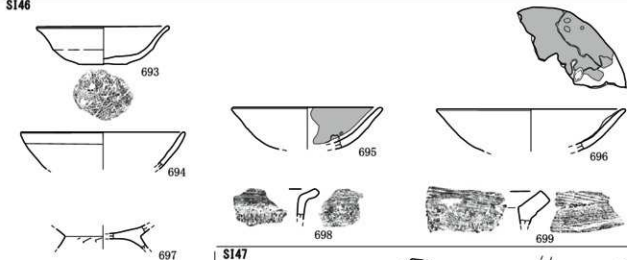
0 S=1/3 10cm

圖103 S143、S144出土土器

S145



S146



S147

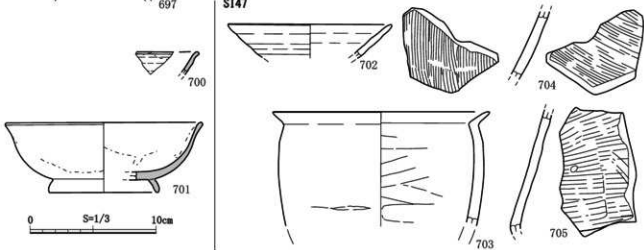


圖104 S145~S147出土土器

S148

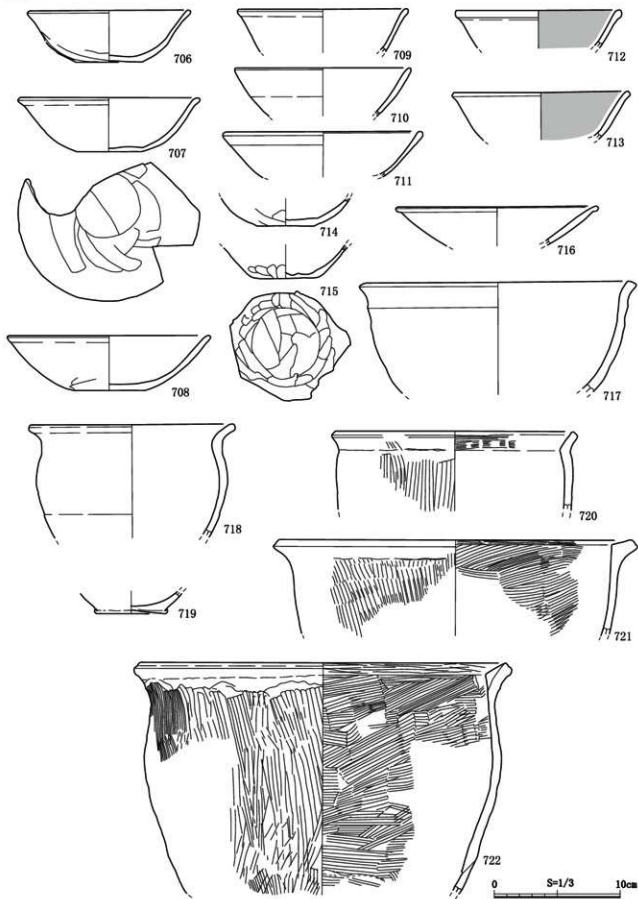


圖105 S148①出土土器

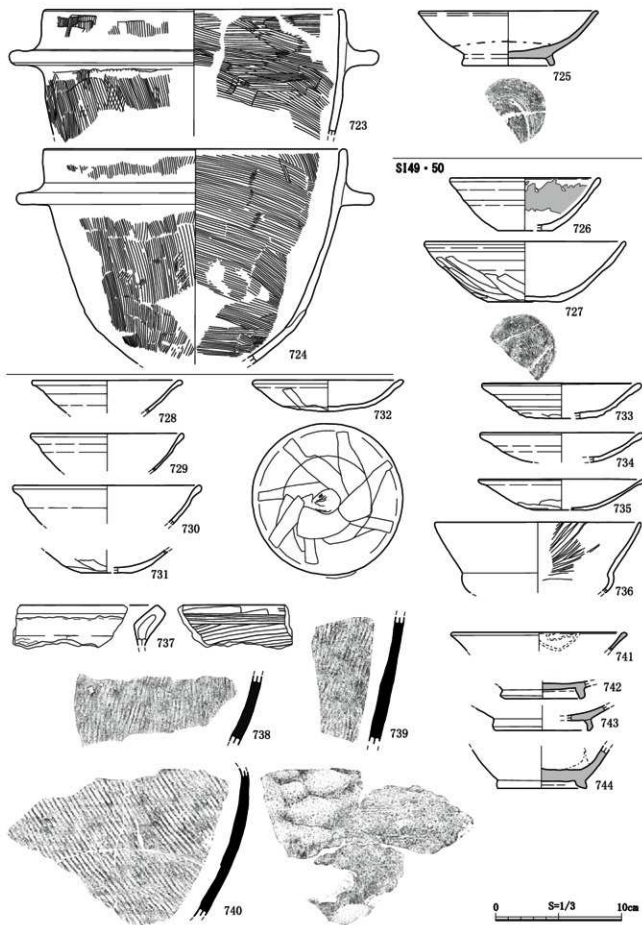


图106 S148②、S149·50出土土器

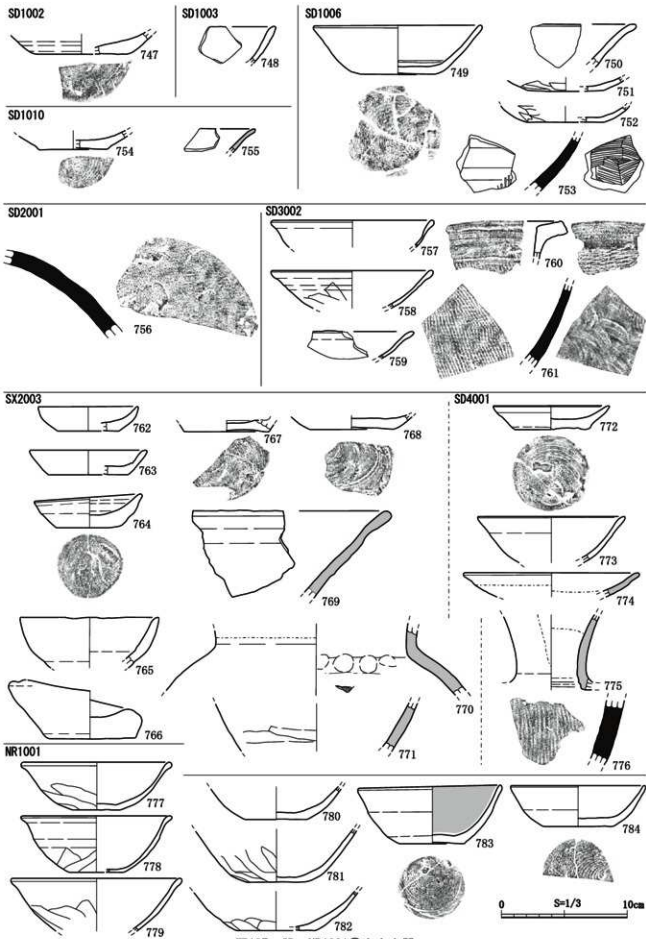


图107 SD、NR1001①出土土器

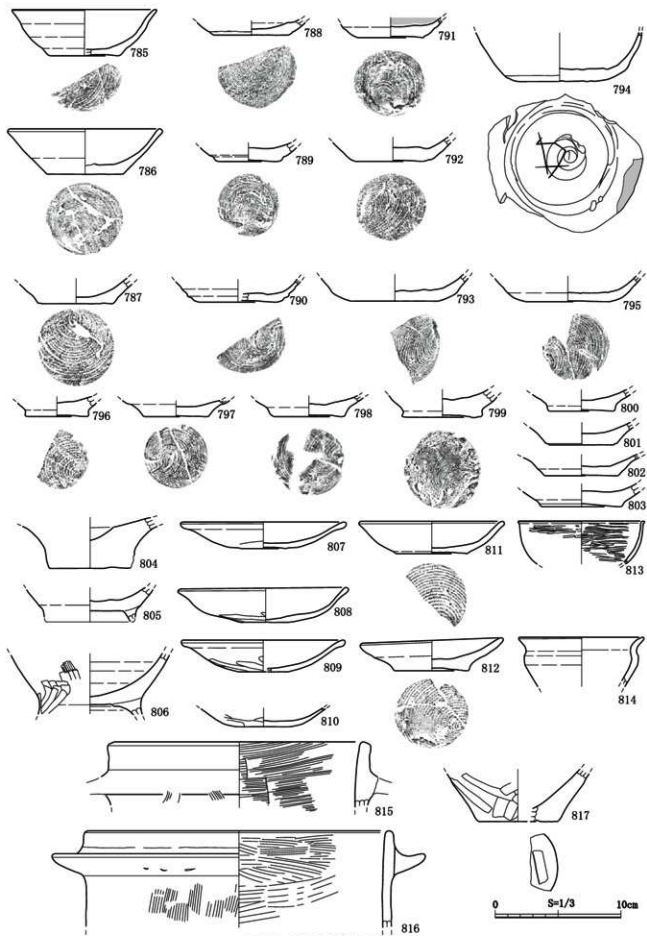


图108 NR1001②出土土器

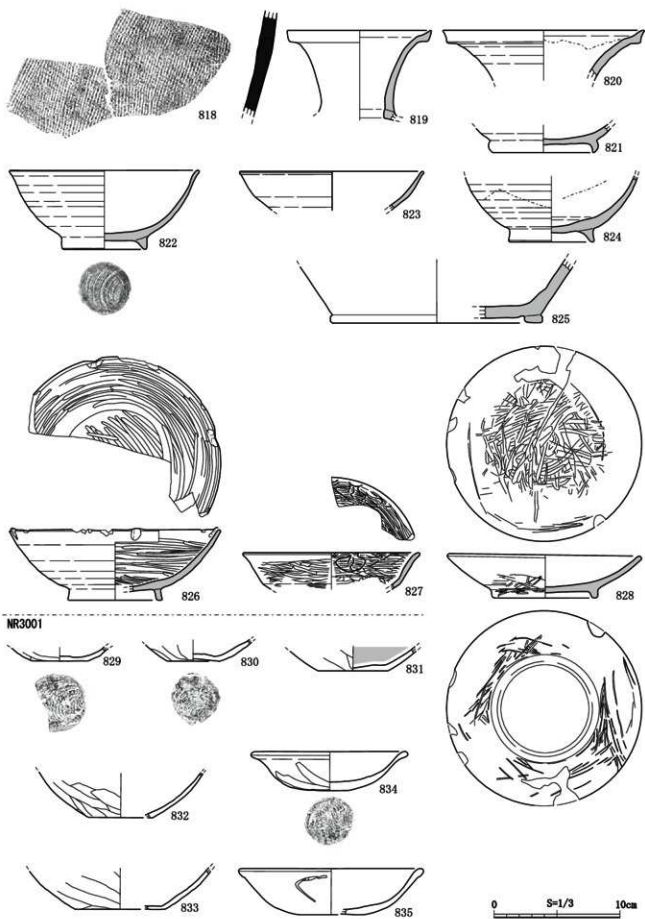
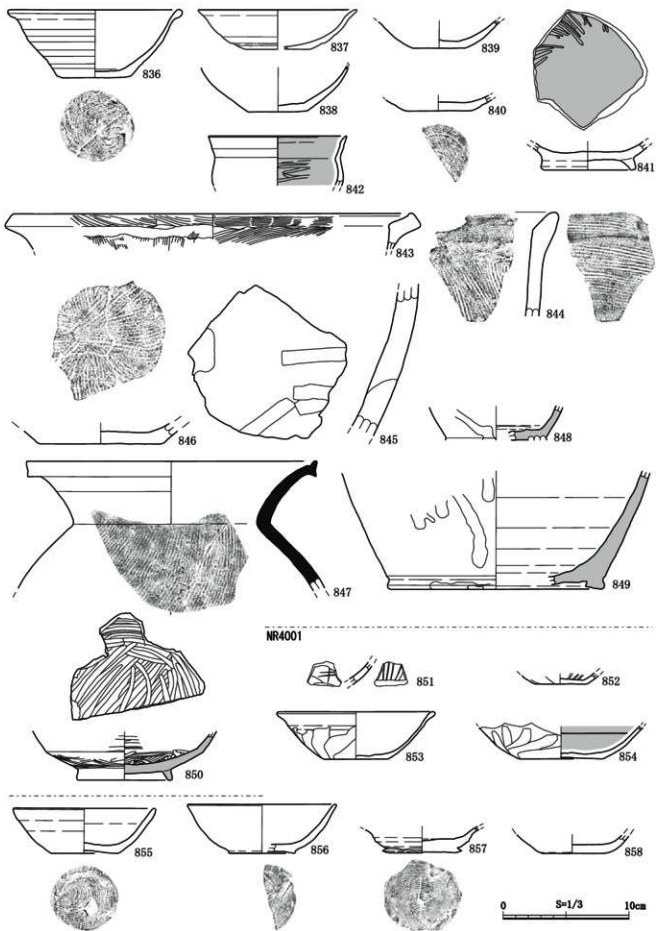


图109 NR1001③、NR3001①出土土器



NR4001

图110 NR3001②、NR4001①出土土器

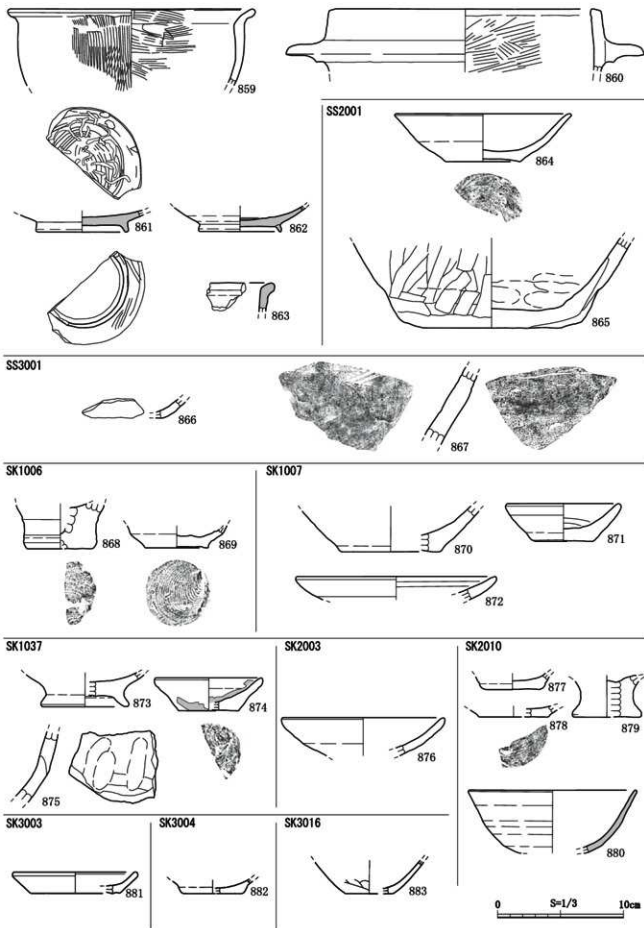
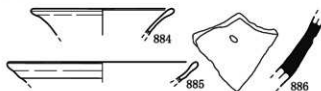
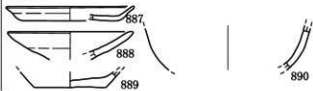


圖111 NR4001②、SS2001、SS3001、SK①出土土器

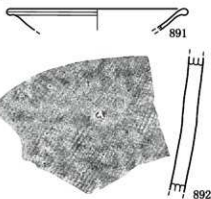
SK3017



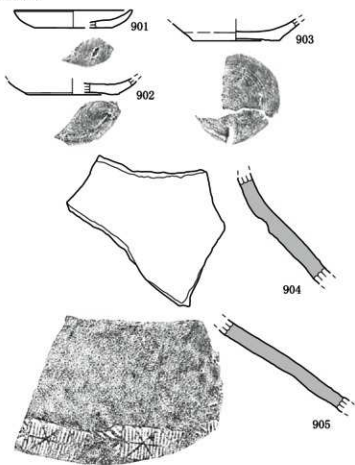
SK3018



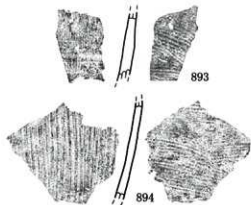
SK3022



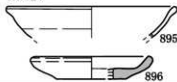
SK4001



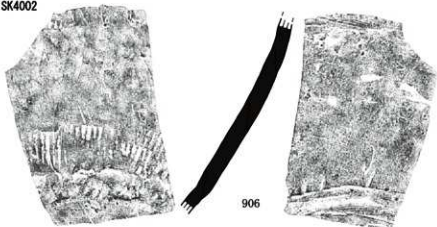
SK3023



SK3024



SK4002



SK3025



SK3026



SK3027



SK3082

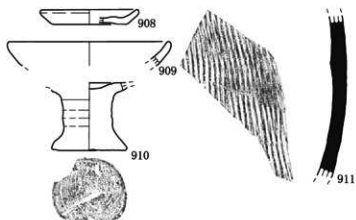


0 S=1/3 10cm

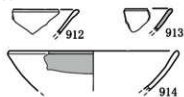


图112 SK②出土土器

SK4003



SK4004



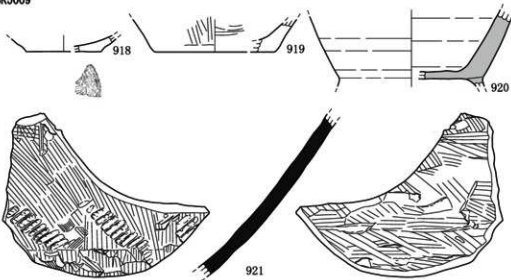
SK5001



SK5005



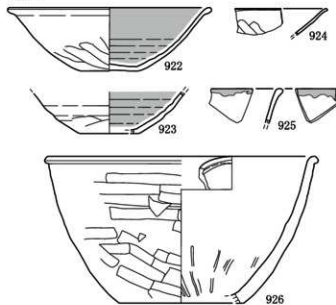
SK5009



SK5010



SK5012



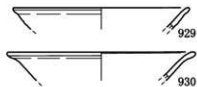
SP2018



SP2057



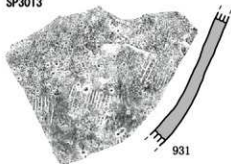
SP3012



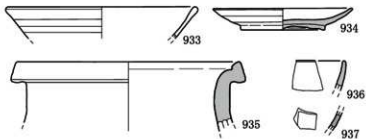
0 S=1/3 10cm

图113 SK③、SP①出土土器

SP3013



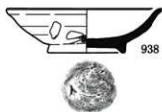
SP5011 · 5020 · 5035 (SB01柱穴)



SP5009



SP5041



SX1001

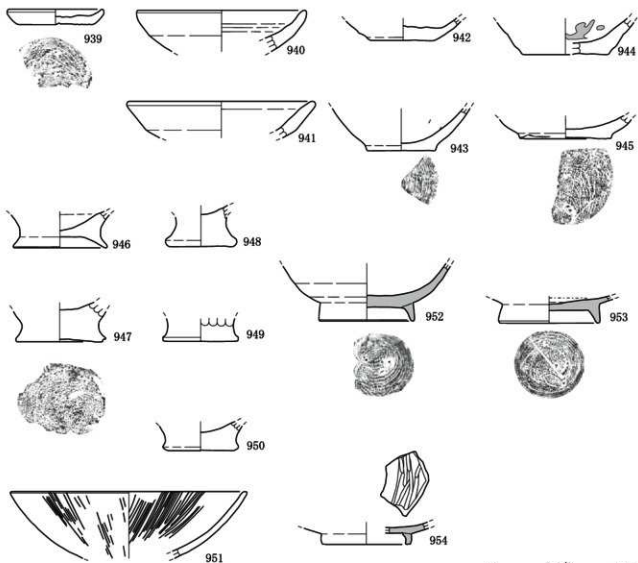
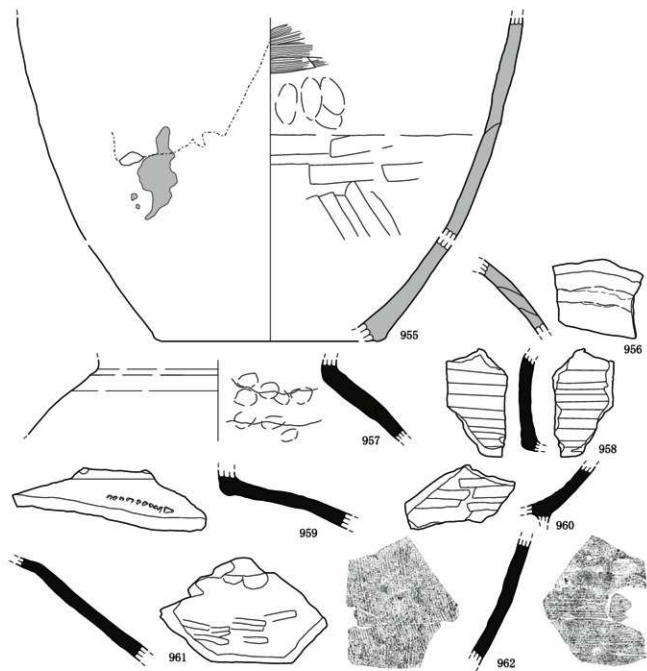


圖114 SP②、SX1001①出土土器



SX1002

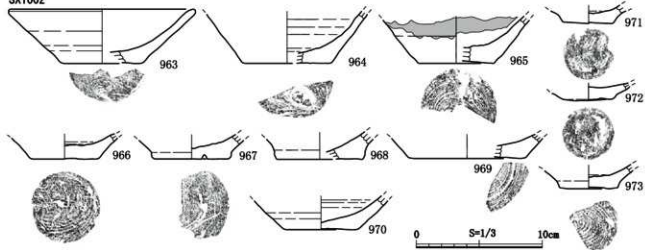


图115 SX1001②、SX1002①出土土器

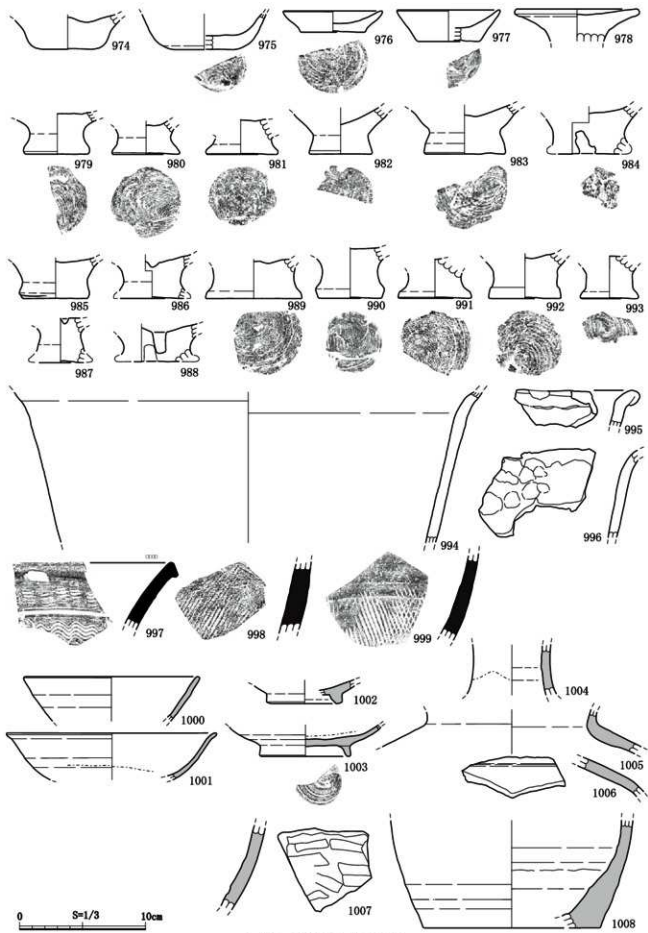
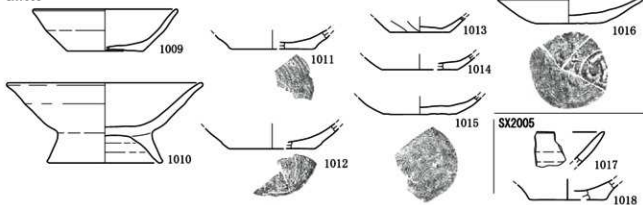


图116 SX1002②出土土器

SK1003



遺構外

土師器坏

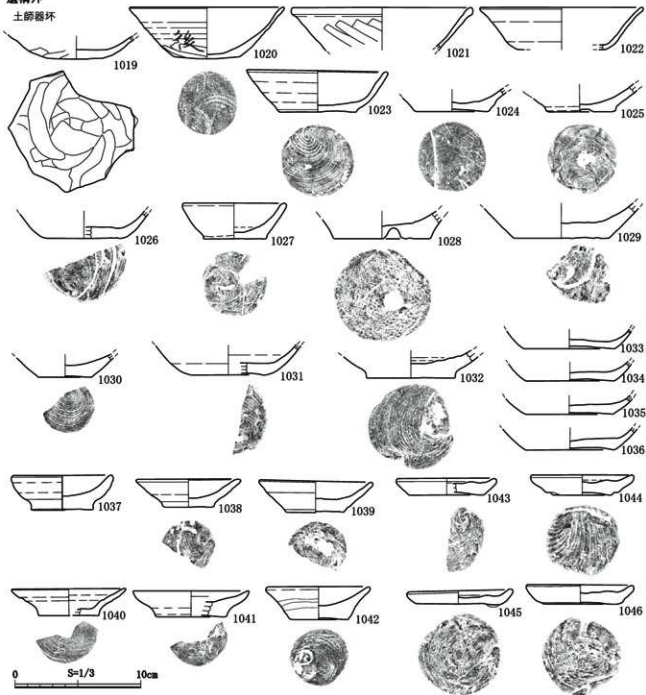
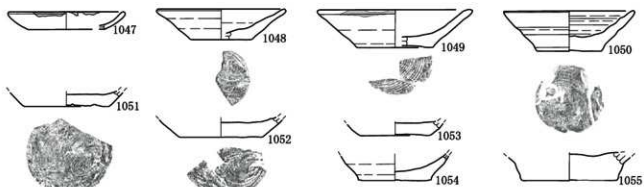
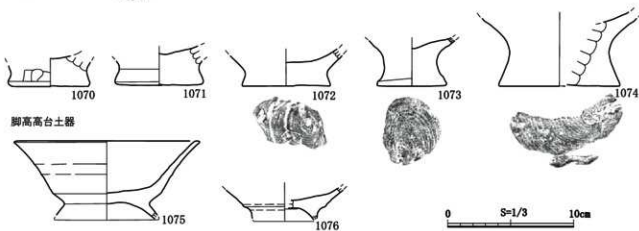
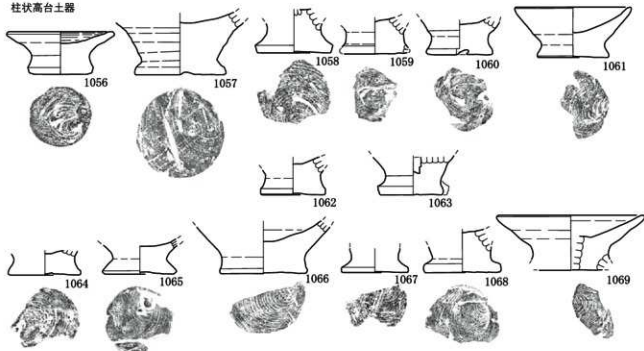


图117 遺構外出土土器①



柱状高台土器



土師器皿



土師器臺

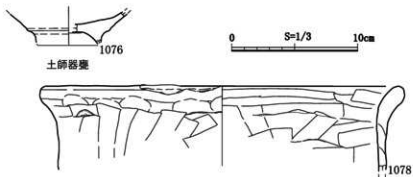


图118 遺構外出土土器②

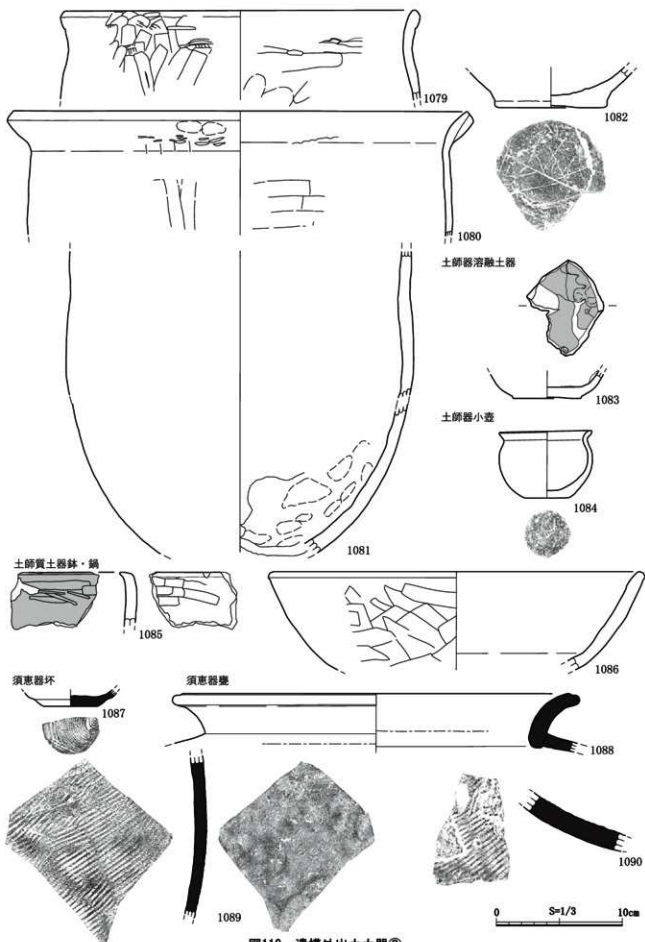


圖119 遺構外出土器③

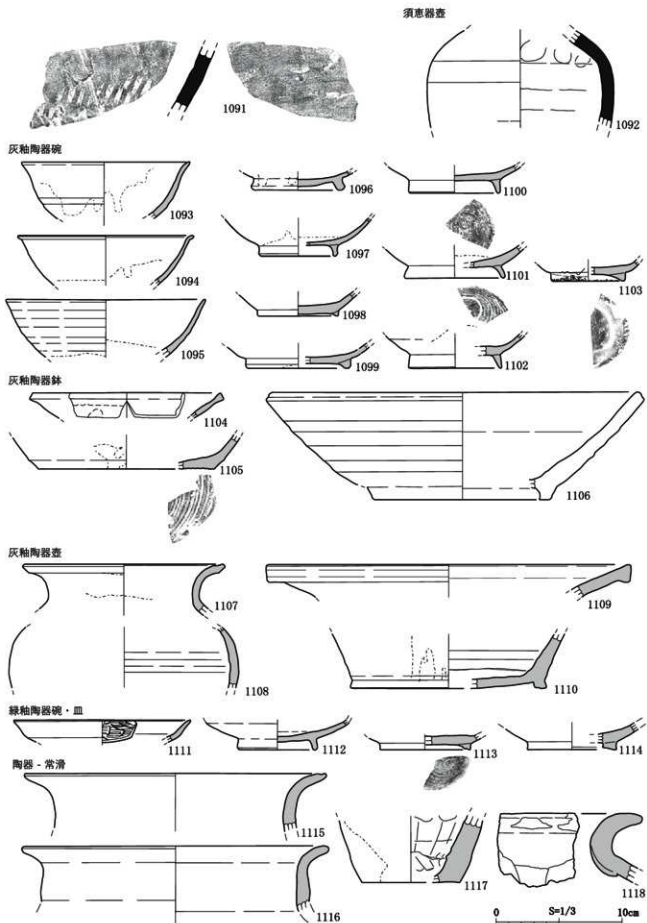


图120 遺構外出土土器④

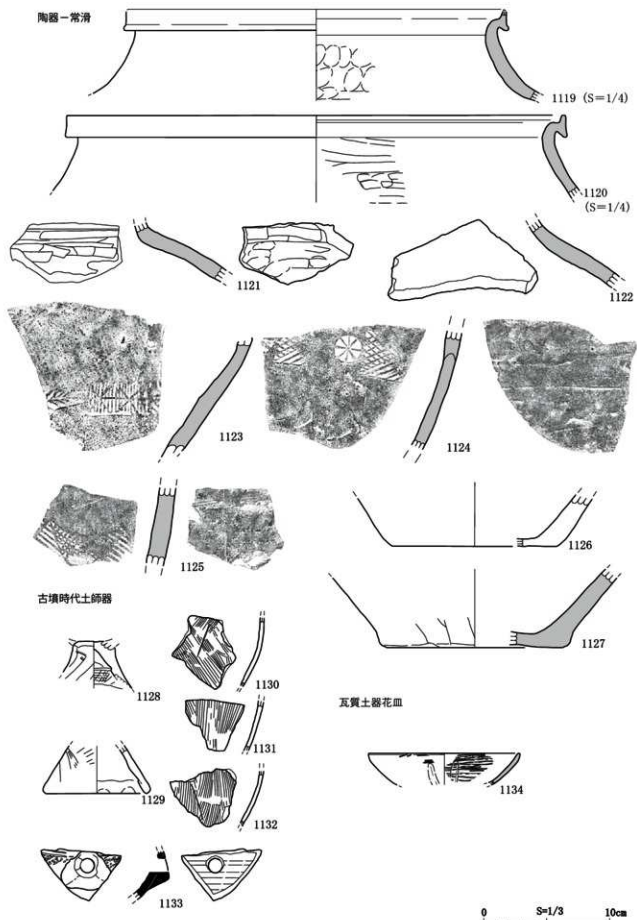
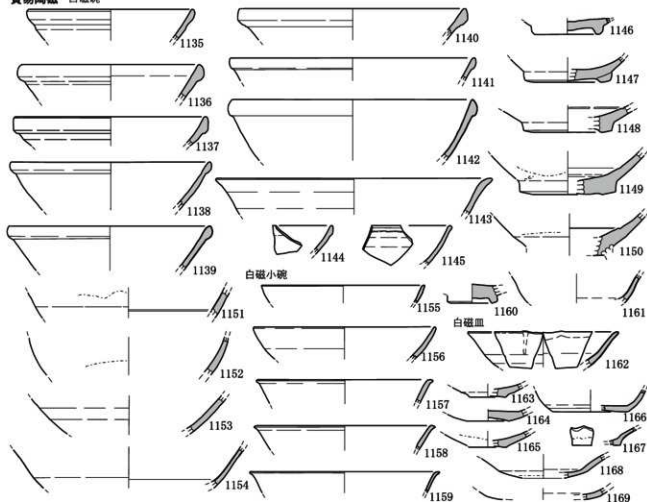


圖21 遺構外出土土器⑤

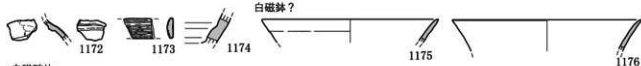
貿易陶磁 白磁碗



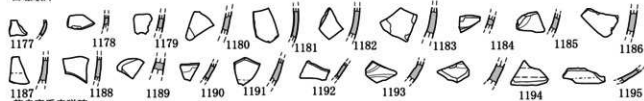
白磁四耳香



白磁鉢?



白磁破片



龍泉窯系青磁碗

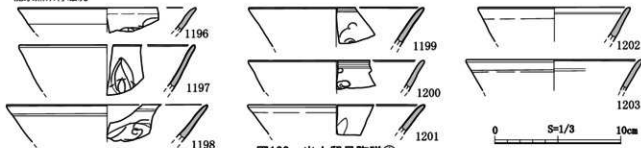


圖122 出土貿易陶磁①

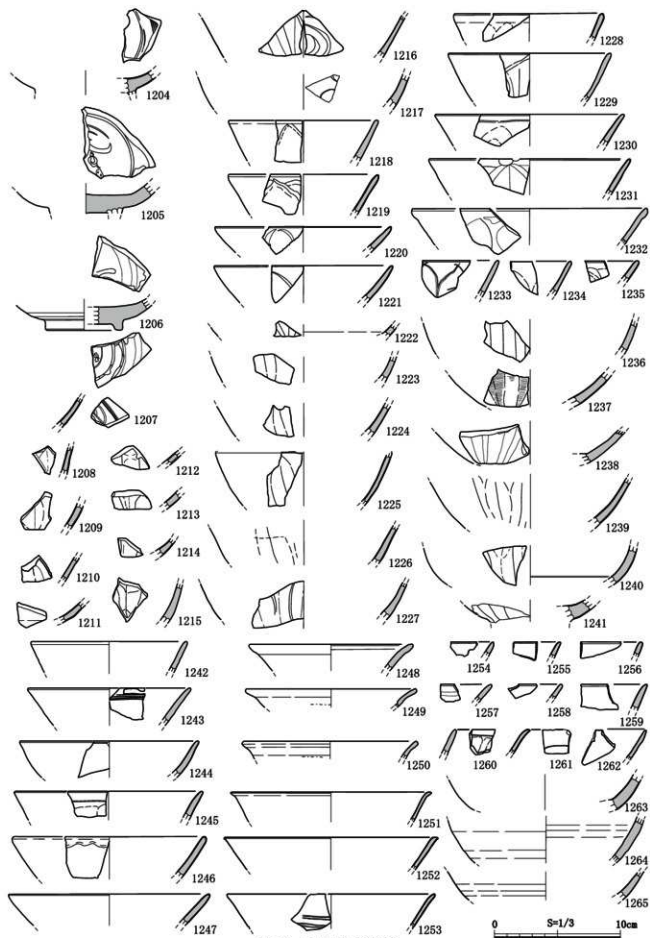


圖123 出土貿易陶磁②

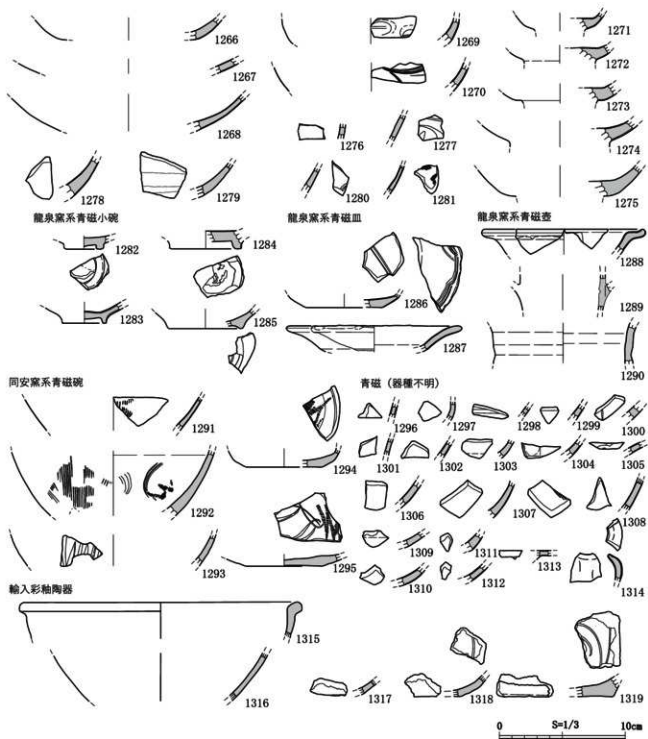
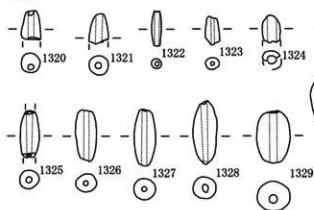


圖124 出土貿易陶磁③

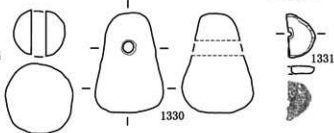
種別	種別名	面積	坪単価	延床面積	用途	用途	色調	備上	備上の特長	備考
101	32.08	52.08	0.00	52.08	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0
102	32.08	52.08	0.00	52.08	102.0	102.0	102.0	102.0	102.0	102.0
103	32.08	52.08	0.00	52.08	103.0	103.0	103.0	103.0	103.0	103.0
104	32.08	52.08	0.00	52.08	104.0	104.0	104.0	104.0	104.0	104.0
105	32.08	52.08	0.00	52.08	105.0	105.0	105.0	105.0	105.0	105.0
106	32.08	52.08	0.00	52.08	106.0	106.0	106.0	106.0	106.0	106.0
107	32.08	52.08	0.00	52.08	107.0	107.0	107.0	107.0	107.0	107.0
108	32.08	52.08	0.00	52.08	108.0	108.0	108.0	108.0	108.0	108.0
109	32.08	52.08	0.00	52.08	109.0	109.0	109.0	109.0	109.0	109.0
110	32.08	52.08	0.00	52.08	110.0	110.0	110.0	110.0	110.0	110.0
111	32.08	52.08	0.00	52.08	111.0	111.0	111.0	111.0	111.0	111.0
112	32.08	52.08	0.00	52.08	112.0	112.0	112.0	112.0	112.0	112.0
113	32.08	52.08	0.00	52.08	113.0	113.0	113.0	113.0	113.0	113.0
114	32.08	52.08	0.00	52.08	114.0	114.0	114.0	114.0	114.0	114.0
115	32.08	52.08	0.00	52.08	115.0	115.0	115.0	115.0	115.0	115.0
116	32.08	52.08	0.00	52.08	116.0	116.0	116.0	116.0	116.0	116.0
117	32.08	52.08	0.00	52.08	117.0	117.0	117.0	117.0	117.0	117.0
118	32.08	52.08	0.00	52.08	118.0	118.0	118.0	118.0	118.0	118.0
119	32.08	52.08	0.00	52.08	119.0	119.0	119.0	119.0	119.0	119.0
120	32.08	52.08	0.00	52.08	120.0	120.0	120.0	120.0	120.0	120.0
121	32.08	52.08	0.00	52.08	121.0	121.0	121.0	121.0	121.0	121.0
122	32.08	52.08	0.00	52.08	122.0	122.0	122.0	122.0	122.0	122.0
123	32.08	52.08	0.00	52.08	123.0	123.0	123.0	123.0	123.0	123.0
124	32.08	52.08	0.00	52.08	124.0	124.0	124.0	124.0	124.0	124.0
125	32.08	52.08	0.00	52.08	125.0	125.0	125.0	125.0	125.0	125.0
126	32.08	52.08	0.00	52.08	126.0	126.0	126.0	126.0	126.0	126.0
127	32.08	52.08	0.00	52.08	127.0	127.0	127.0	127.0	127.0	127.0
128	32.08	52.08	0.00	52.08	128.0	128.0	128.0	128.0	128.0	128.0
129	32.08	52.08	0.00	52.08	129.0	129.0	129.0	129.0	129.0	129.0
130	32.08	52.08	0.00	52.08	130.0	130.0	130.0	130.0	130.0	130.0

土製品

土罐



土製円盤



0 S=1/3 10cm

鷲羽口

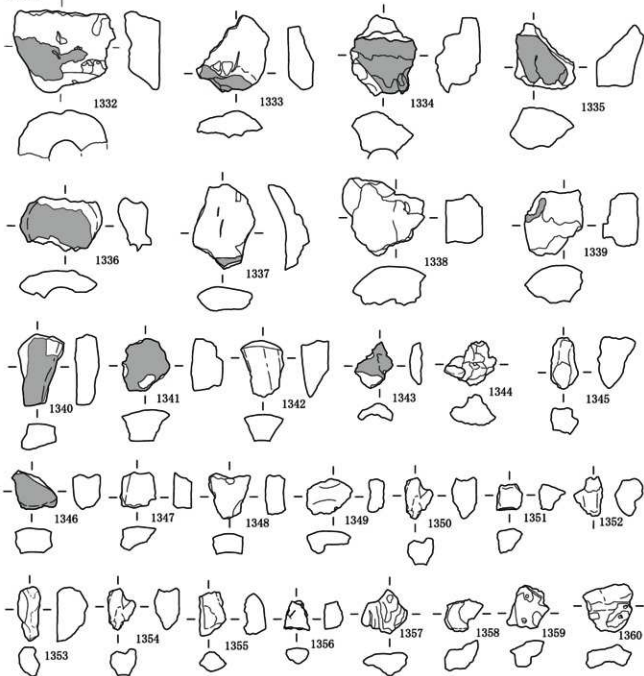
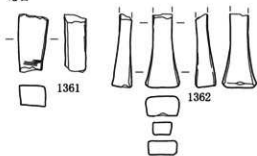


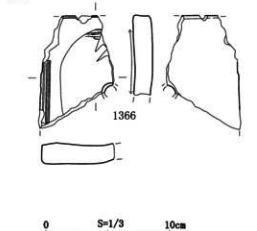
圖125 出土土製品

石製品

砥石



砥石



0 S=1/3 10cm

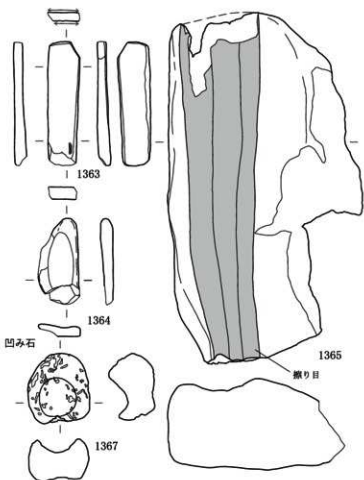


表7 出土土製品観察表 (図125)

報告番号	遺構・層位	距離	寸法 (cm)			色調	粘土	備考	
			長さ	幅	厚さ				
1320	I区 595-1	土層	02.31	1.6	1.65	2.574/1 黄灰色	紫 白色粘土		
1321	I区 583001	土層	02.43	1.58	1.68	2.574/4 白土・黄褐色	紫 白色粘土		
1322	I区 9-16区 583011 砂層	土層	2.75	0.75	0.75	0.35			
1323	I区 581011 砂層	土層	02.21	1.10	0.9	0.3	7.574/7 黄褐色	紫 黄色粘土	
1324	I区 5902 1-6区 伴土	土層	02.207	1.80	0.6	0.60	7.574/2 黄褐色	紫 白色・黄褐色粘土	
1325	I区 20-2 未出土	土層	03.71	1.00	1.45	0.5			
1326	I区 1-1 層位伴土	土層	4.10	1.40	1.4	0.40	7.574/6 黄褐色	紫 白色・黄色粘土	
1327	I区 5902 1-6区 伴土	土層	4.5	1.20	1.7	0.4	7.574/7 4 白土・黄褐色	紫 白色・黄褐色・灰色粘土	
1328	I区 20-3 未出土	土層	5.00	1.90	1.7	0.60	1974/7 4 白土・黄褐色	紫 白色粘土	
1329	Ⅱ区 5179	土層	4.2	1.60	2.4	0.4	2.574/4 白土・黄褐色		
1330	I区 583002	土層	7.90	3.60	3.5	1.19	7.574/4 白土・黄褐色		
1331	Ⅱ区 5179	土層汚泥	3.5	02.103	0.6	0.43	7.574/6 黄褐色	紫 黄色粘土 注19	

図126 出土石製品

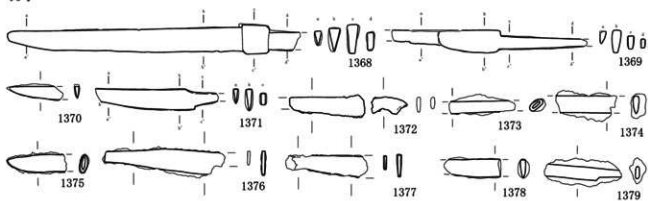
表8 出土縄羽口計測表 (図125)

報告番号	遺構名	寸法 (cm)			P番号	備考
		長さ	幅	厚さ		
1322	Ⅱ区 5116	55.11	16.53	3.75	P-18	高橋 2.5 cm 塚付着
1323	I区 5305	66.03	15.73	3.2	P-23	塚付着
1324	Ⅱ区 583002	66.40	15.23	3.5	P-1	塚付着
1325	Ⅱ区 9-16区 下層位伴土	65.20	14.80	3.3		塚付着
1326	Ⅱ区 584003	60.50	14.25	3.3	P-2	塚付着
1327	Ⅱ区 583003	66.73	14.90	3.10		塚付着
1328	Ⅱ区 5115	66.20	16.20	3.4		塚付着
1329	Ⅱ区 581011 伴土・黄土	65.20	14.60	2.9	P-11	塚付着
1340	I区 5902-6区 未出土	65.60	15.75	3.10		塚付着
1341	Ⅱ区 584003	64.13	13.90	3.5		塚付着
1342	I区 1-5区 5501 伴土	64.50	13.40	3.1		塚付着
1343	Ⅱ区 581011 伴土	62.75	13.00	3.0		塚付着
1344	Ⅱ区 5816	63.60	14.11	3.2		塚付着
1345	I区 9-16区 下層位伴土	64.11	13.25	3.13		塚付着
1346	I区 5305	63.20	13.60	3.4		塚付着
1347	I区 581001	62.80	13.90	3.2		塚付着
1348	Ⅱ区	63.60	13.30	3.5		塚付着
1349	Ⅱ区 9-11区 下層位伴土	62.90	13.60	3.11		塚付着
1350	Ⅱ区 5110	63.20	13.20	3.1		塚付着
1351	I区 581001	63.10	13.00	3.09		塚付着
1352	Ⅱ区 9-18区 下層位伴土	63.00	13.20	3.2		塚付着
1353	Ⅱ区 9-15区 下層位伴土	64.30	11.80	3.40		塚付着
1355	I区 1-7区 下層位伴土	63.50	13.10	3.15		塚付着
1356	Ⅱ区 5328	63.40	12.10	3.1		塚付着
1357	Ⅱ区 5179	63.40	13.80	3.10		塚付着
1358	Ⅱ区 9-16区 下層位伴土	63.13	12.60	3.1		塚付着
1359	Ⅱ区 5116	63.40	13.30	3.2		塚付着
1360	Ⅱ区 584003	63.90	13.90	3.10		塚付着

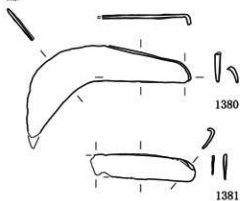
表9 出土石製品観察表 (図126)

報告番号	遺構・層位	寸法 (cm)			重量 (g)	
		長さ	幅	厚さ		
1361	Ⅱ区 5116	砥石	14.70	2	2.1	30
1362	Ⅱ区 5139	砥石	13.90	3	1.6	26
1363	I区 530001	砥石	13.40	3	1.4	26
1364	Ⅱ区 9-16区 下層位伴土	砥石	11.60	2	1.0	30
1365	Ⅱ区 5141	砥石	126.50	16.63	2.4	2266
1366	I区 9-1下層位伴土	砥石	10.103	10.3	1.6	142
1367	I区 西サツト内	砥石	5.7	5	3.3	45

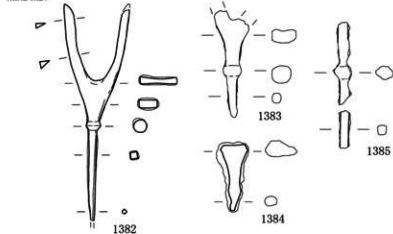
刀子



鏃



雁股鏃



火箸? 釘

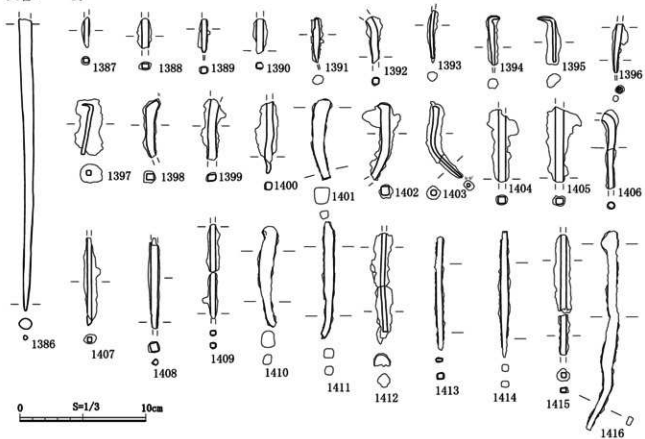
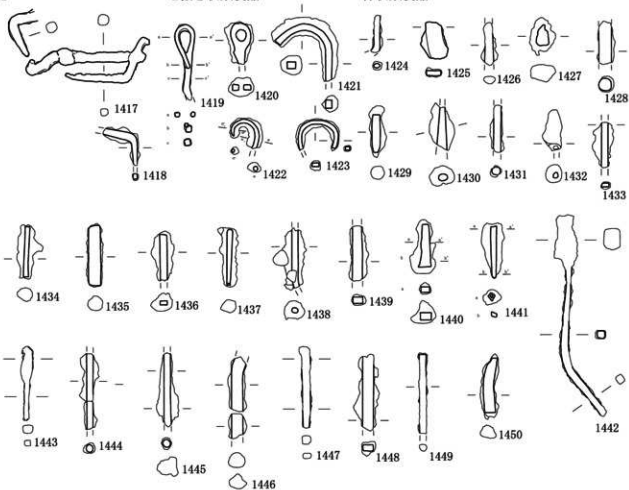


圖127 出土金屬製品①

鑑

毛抜き状鉄製品

棒状鉄製品



鉄滓 (塊型)

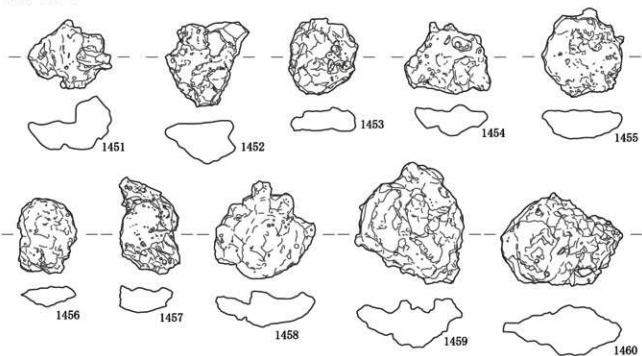


図128 出土金属製品②

鉄滓

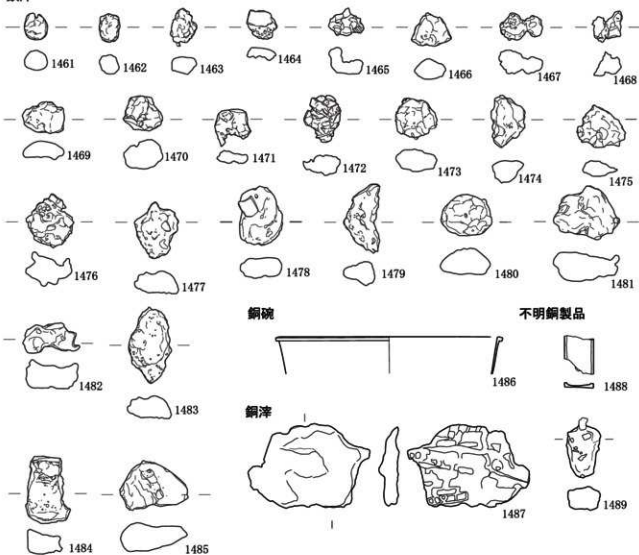


图129 出土金屬製品③

表 10 第1次調査出土金属製品観察表 (図 127 ~ 129)

報告番号	遺構・層位	器種	寸法 (cm)			備考
			長さ	幅	厚さ	
1268	S120	刀子	125.25	2	1	保存処理済
1269	S144	刀子	115.35	2	1	保存処理済
1270	F-6区	刀子	14.73	1	0	保存処理済
1271	S110	刀子	19.77	2	1	保存処理済
1272	L-8区下層	刀子	18.90	2	0	
1273	塚1001/中央	刀子	15.71	2	1	
1274	SK1002	刀子	14.90	3	1	
1275	S110	刀子	14.720	2	1	
1276	S114	刀子	19.75	2	0	
1277	S102	刀子	16.40	1	0	
1278	S105	刀子	14.450	1	1	
1279	G-5区下層	刀子	16.31	2	1	
1280	S120	鏃	115.17	2	1	
1281	S120	鏃	108.29	2	0	
1282	S144	鏃	117.29	2	1	保存処理済
1283	K区 S110	鏃	108.50	2	0	
1284	K-6区下層	鏃	115.503	3	1	
1285	S120	鉄鏃	109.50	2	1	
1286	S110	次等鏃	125.11	1	1	保存処理済
1287	F層	釘	12.40	1	1	
1288	S100	釘	12.40	1	1	
1289	S101	釘	12.40	1	1	
1290	L-7区下層	釘	12.75	1.1	0.55	
1291	S110 鉄釘	釘	13.203	1	0.57	
1292	F層	釘	12.75	1	1	
1293	S110	釘	14.13	1	1	
1294	G-9区下層	釘	12.903	1	1	
1295	H-6区下層	釘	12.90	2	1	
1296	F層	釘	12.90	1	1	
1297	F層	釘	14.51	2	1	
1298	F-7区下層	釘	14.71	1	1	
1299	H-9区 S10111下層	釘	14.81	2	1	
1300	P-15区下層	釘	15.71	2	1	
1301	L-8区下層	釘	16.51	1	1	
1302	調査区北側下層	釘	16.21	3	1	
1303	SK2017	釘	16.27	2	1	
1304	S111	釘	15.71	3	1	
1305	SK1001/中央	釘	15.91	3	1	
1306	F-7区下層	釘	16.31	2	1	
1307	S122	釘	17.41	2	1	
1308	S144	釘	17.21	1	1	
1309	S108	釘	17.51	1	1	
1310	F層	釘	18.01	1	1	
1311	G-5区下層	釘	19.21	1	1	
1312	F-6区下層	釘	18.21	2	1	
1313	SK2001	釘	19.01	1	0	
1314	S127	釘	19.03	1	1	
1315	S119	釘	19.43	1	1	
1316	G-15区	釘	115.43	1	1	
1317	SK3000	釘	19.21	4	1	
1318	S114	釘	13.01	1	0	
1319	S144	毛抜針状鉄製品	16.91	2	1	
1320	S126	毛抜針状鉄製品	13.41	2	2	
1321	H-6区下層	毛抜針状鉄製品	15.11	0	1	
1322	F-9区下層	毛抜針状鉄製品	12.41	2	1	
1323	H-5区下層	毛抜針状鉄製品	12.503	3	1	
1324	L-9区 S10111上層	棒状鉄製品	11.903	1	1	
1325	S107	棒状鉄製品	12.91	2	1	
1326	S146	棒状鉄製品	13.01	1	1	
1327	SK2005	棒状鉄製品	13.91	2	1	
1328	P-18区下層	棒状鉄製品	13.51	1	1	
1329	SK2010	棒状鉄製品	14.11	2	1	
1330	SK2010	棒状鉄製品	13.91	2	2	
1331	SK2005	棒状鉄製品	13.81	1	1	
1332	SK3001	棒状鉄製品	13.31	2	1	
1333		棒状鉄製品	13.01	2	1	
1334	F-5区下層	棒状鉄製品	4.21	2	1	
1335	SK3001	棒状鉄製品	5.05	1	1	
1336	F区 S110	棒状鉄製品	14.01	2	1	
1337	F-2区下層	棒状鉄製品	4.71	2	1	
1338	P-14区下層	棒状鉄製品	14.81	2	2	
1339	S107 SK301	棒状鉄製品	14.51	2	1	
1340	F-3区	棒状鉄製品	4.51	2	2	
1341	F層	棒状鉄製品	4.35	2	1	
1342	S144	棒状鉄製品	115.71	2	2	
1343	S117	棒状鉄製品	13.91	1	1	
1344	SK4001	棒状鉄製品	16.11	2	1	
1345	SK3014	棒状鉄製品	16.01	2	2	
1346	S149	棒状鉄製品	14.31	2	1	
1347	G-8区下層	棒状鉄製品	6.51	1	1	
1348	F層	棒状鉄製品	16.11	2	1	
1349	F-6区下層	棒状鉄製品	16.41	1	1	
1350	SK3002	棒状鉄製品	5.21	1	1	

報告番号	遺構・層位	器種	寸法 (cm)			備考
			長さ	幅	厚さ	
1451	S146	鉄片	6.6	5	4	
1452	SK2027	鉄片	6.7	7	3	
1453	P-19区下層	鉄片	2.4	6	3	
1454	S146	鉄片	6.9	6	3	
1455	S131	鉄片	6.03	7	2	
1456	S146	鉄片	6.0	5	1	
1457	S141	鉄片	7.2	5	2	
1458	S149	鉄片	7.7	8	3	
1459	S111	鉄片	8.7	10	3	
1460	SK2002	鉄片	7.3	10	3	
1461	F-8区下層	鉄片	2.1	2	2	
1462	S146	鉄片	2.2	2	2	
1463	SK3005	鉄片	3.0	2	1	
1464	SK3007-7区出土	鉄片	2.2	2	1	
1465	H-8区 S10111	鉄片	2.2	2.55	2.9	
1466	S144	鉄片	2.6	2.2	1.6	
1467	F層	鉄片	2.2	2.05	1.9	
1468	S141	鉄片	2.5	2.4	1.9	
1469	SK2026	鉄片	3.25	3.5	1.2	
1470	L-5区下層	鉄片	2.75	3.1	2.35	
1471	S144	鉄片	2.9	2.9	1.0	
1472	O-17区下層	鉄片	3.7	2.9	1.6	
1473	SK1002	鉄片	3.25	3.3	1.8	
1474	L-2区下層	鉄片	4.2	2.7	1.8	
1475	S122	鉄片	2.2	2.9	1.25	
1476	G-5区下層	鉄片	4.35	2.8	2.8	
1477	S149	鉄片	4.5	2.5	1.5	
1478	S149	鉄片	4.7	2.4	1.6	
1479	S149	鉄片	5.5	2.9	1.9	
1480	S144	鉄片	3.3	4.0	2.1	
1481		鉄片	6.3	5.25	2.3	
1482	SK3002	鉄片	2.5	4.6	2.3	
1483	S144	鉄片	6.0	3.4	2.1	
1484	SK3002	鉄片	5.3	3.6	2.0	
1485	S146	鉄片	5.3	3.3	2.3	
1486	SK2026	銅板	112.21	12.0		
1487	1号銅土層出土区	銅片	9.7	6.7	1.8	
1488	S115	銅	3.1	2.3	0.45	
1489	P-15区下層	銅片	4.7	2.7	1.9	

第2節 II期の遺構と遺物

第1項 水田跡(SN)(図130～136)

水田跡概要 第1次調査では、地表面下約1.5mにおいて、分厚い砂礫層にバックされた状態で調査区一面に水田跡を検出した。水田をバックしている砂礫層は、北側が最も厚く、南に行くにつれて薄くなり、南東隅部においては砂礫層が見られなくなる。この水田面では、北東から南西方向に向かう氾濫流路が3筋以上検出しており、そのその復旧痕跡は認められないことから、廃絶原因を河川氾濫と推定できる。原因となる氾濫河川は、現行芦川流路とは異なる方向から流路が進行しているため、当時の流路の検討または別の河川が氾濫した可能性を考慮しなければならない。

水田跡 SN01 東西26.5m×南北19.0m以上。標高約246.5～246.6m。SN05との間にある畦畔を境に30～40cm下がっている。主軸N-9°～11°-E。南側で中央に水路を有する大畦畔に接する。SN01南東隅において氾濫流路により大畦畔が破壊され、SN01内を北西方向に向かって水田面を削りながら進んでいる。また、調査区北端部では、西から東に向かう氾濫流路があり、SN01を深く削っている。

水田跡 SN02 東西7.3m×南北10.4～12.0m以上。標高約246.5～246.6m。主軸N-9°-E。南側で大畦畔に接する。SN02南東隅において、大畦畔の水路から取水する石組みの取水口を有する。取水口から導水する溝が大畦畔沿いに作られている。SN02南側は大畦畔を破壊した氾濫流路によって削られている。

水田跡 SN03 東西13.0m以上、南北12.5m以上。標高約246.5～246.6m。主軸N-10°-E。南側で大畦畔に接する。SN03南側では、大畦畔沿いに溝が掘られており、取水時の水回りを良くする役割を持つものと思われる。

水田跡 SN04 東西15.0m以上、南北8.3m以上。標高約246.5～246.6m。主軸N-11°-E。北側で大畦畔に接する。SN04の東端部では、大畦畔の水路を構築する石組みを破壊して、こぶし大の礫が充填されている落ち込みがある。この落ち込みはSN07の南東部から北西方向に向かって流れる氾濫流路の到達点と考えられる。

水田跡 SN05 東西14.0m、南北13.4～20.0m以上。標高約246.9m。主軸N-9°-E。南側で大畦畔に接する。SN05の西側の畦畔は盛り上がりが見え明瞭ではないが、隣接するSN01との間に30～40cmの高低差が生じており、水田を区画していたと考えられる。新町前遺跡は芦川扇状地の左岸に位置しており、自然地形上、北東から南西に向かって低い土地になっていることが想定され、この自然地形に対して棚田状の水田区画を設定していたと考えられる。

水田跡 SN06 東西7.0m以上、南北29.5m以上。標高約246.9m。主軸N-9°-E。南側で大畦畔に接する。

水田跡 SN07 東西13.3m以上、南北30.0m。標高247.1～246.9m。主軸N-12°-E。北側で大畦畔に接する。SN07では、南東から北西に向かう2条の氾濫流路によって水田面が削られている。

水田跡 SN08 東西21.0m以上、南北25.3m。標高247.2～247.3m。主軸N-11°-E。攪乱が著しい。西接するSN14との間に約10cmの段差がある。今回検出した水田面の中で最も標高が高く、自然地形を反映していると考えられる。

水田跡 SN09 東西21.4m以上、南北7.4m以上。標高246.5m。主軸N-8°-E。水田面で数多くの足跡を検出した。足跡の傾向では、東西方向に移動したと考えられるものが主体的である。

水田跡 SN10 東西11.8m以上、南北7.2m以上。調査区外の北側にも畦畔が延伸して、大畦畔まで到達するのであれば、南北18.0mとなり、今回検出した水田面では、唯一全体面積が推定できる。標高246.5m。主軸N-10°-E。水田面で数多くの足跡を検出した。足跡の傾向では、東西方向に移動したと考えられるものが主体的であり、SN09からの延長で動線があったと考えられる。SN09とSN10の間には幅約0.6mの水口が設定され

ており、標高の関係から SN10 から SN09 に導水したものと考えられる。また、SN10 の南東隅にも水口がみられる。隣接する SN11 との標高差はほとんどないため、水懸り方向は不明である。

水田跡 SN11 東西 37.2 m 以上、南北 11.0 m 以上。標高 246.5 m。主軸 N-11° -E。水田面において、南北方向に並ぶ足跡を多数検出した。いくつかの足跡筋は東西方向に向かうものもある。

水田跡 SN12 東西 15.1 m 以上、南北 23.8 m 以上。標高 246.8 m。主軸 N-3° -E。SN12 の水田面は大半が北西方向に向かう二筋の氾濫流路によって破壊されている。

水田跡 SN13 東西 34.4 m 以上、南北 23.2 m 以上。標高 246.8 m。主軸 N-10° -E。SN13 の北部、南東部において足跡を多数検出した。足跡の向きは東西方向に向かうものが多いが、北東から南西に並ぶものなどややランダム性がある。

水田跡 SN14 東西 23.2 m 以上、南北 34.4 m 以上。標高 247.1 m。主軸 N-11° -E。南北に長く広い区画を検出したが、広く攪乱されている。水田面には南北方向を主体とする足跡が多く検出した。

水田跡 SN15 東西 25.2 m 以上、南北 13.0 m。標高 246.9 m。主軸 N-10° -E。水田面において、東西方向に並ぶ足跡を水田面北部にて検出した。

第2項 大畦畔 SD1001 (図 137～139)

調査区東壁中央から調査区西壁北寄りに向かって蛇行しながら設定された中央に水路を持つ大畦畔である。当該大畦畔は第2次調査Ⅲ区においても同一のものが検出している。水路兩岸の畦畔には骨材として人頭大の礫が用いられ、一部 SN01～03,04 の間は石組みの護岸を持つ。水流によって削られて露出したものと想定されたが、石組みが内側に面を持つもので構成されていることから、護岸施設と判断した。J-9 区以東ではこの石組は見られなくなる。この大畦畔の土層断面の観察では、少なくとも3度の作り替えがあったことが分かる。また、H-8～I-9 区にかけての屈曲部分では、水路の線形を変えている痕跡が見られる。護岸施設が作られている箇所に該当し、屈曲部分の水流により削られてしまう影響が大きかったと考えられ、長期にわたり同一の区画を用いて継続して耕作がされていたと考えられる。

第3項 畑跡 SN16 (図 139)

調査区最南部に位置する。水田の畦畔と同様の主軸を有する。N-13° -E。水田跡でみられる水田床土の下層に当たる黒褐色細粒砂層（平安時代遺物包含層）を掘り込んで畝を形成している。検出はやや困難であったため、畝の高さは残存で約 0.1 m 程度しかなかった。

第4項 II期出土遺物 (図 140・141)

II期遺構面における遺物の出土量は極めて少量であり、かつ出土遺物の大半は原位置を留めていると判断されるものは無く、水田耕作によって破損、移動してしまっただと考えられる破片資料で占められている。ここでは残存度が比較的良好なものに加え、時期比定に関連する遺物を掲載した。

1490～1529 は水田床土層から出土したものである。ただし、水田床土層の人力掘削作業は、作業工程上 SN01～04 までしか行っておらず、SN06 以降は表面精査の段階で出土したものに限られる。

出土遺物には、古代集落期の土師器坏や脚高台付坏、須恵器裏破片、灰陶器破片等が含まれるが、主体的に見られるものはカワラケである。カワラケは底部を回転糸切りにより切り離し、底部から体部にかけての器壁はほぼ均一なものが多い。口縁部はやや端部にかけて尖るものも多く、立ち上がりは内湾するものと直線的に立ち上がるものがある。その他、播鉢 (1508、1509、1518) や天目茶碗 (1511、1512)、宗銭 (1536～1543) などの遺物破片が出土しており、その様相から 15 世紀代までの遺物で構成されている。これらのことから、この水田は集落廃絶後の 13 世紀?～15 世紀代の経営時期であったと想定される。

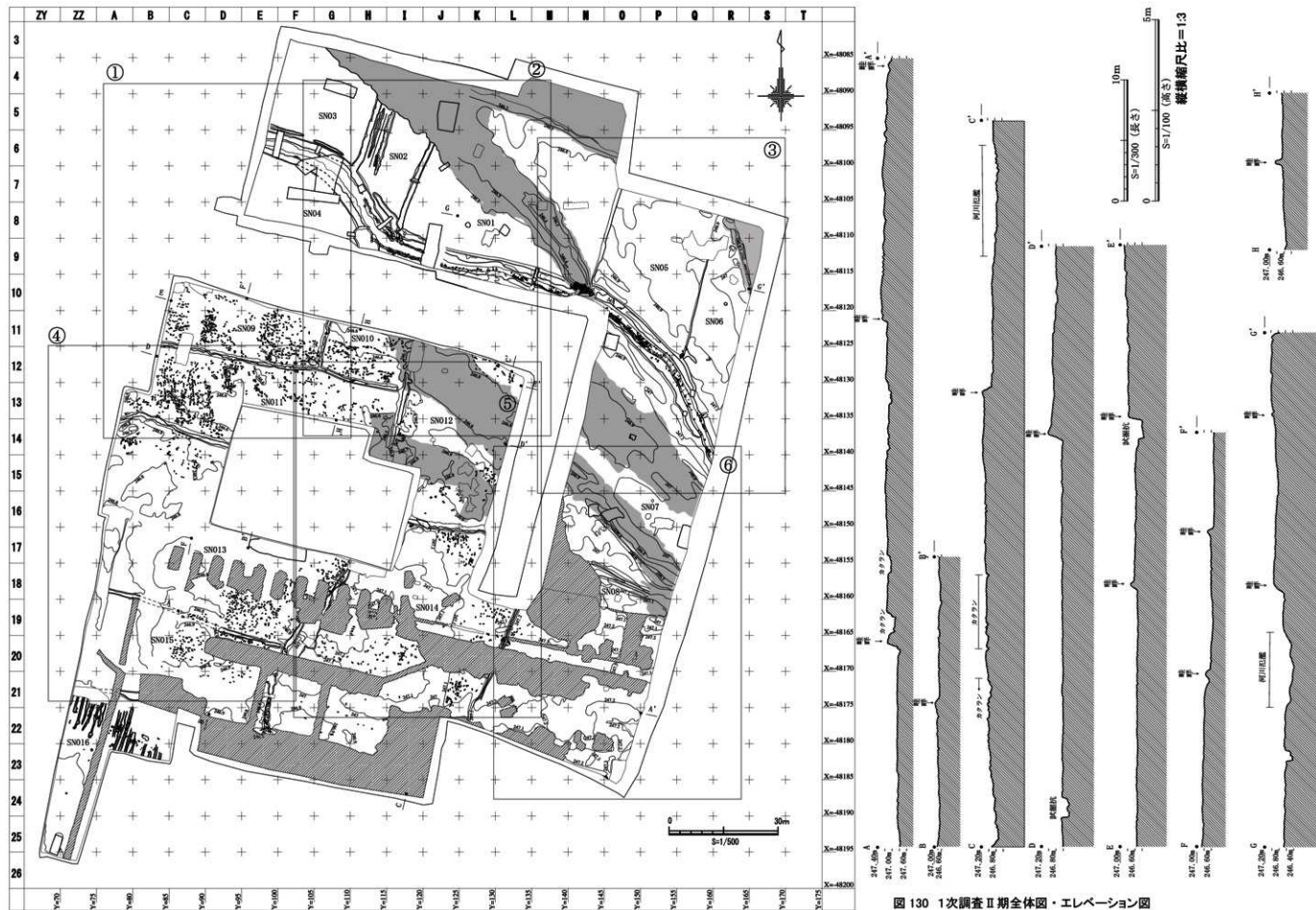


図 130 1次調査Ⅱ期全体図・エレベーション図



图131 1次調査Ⅱ期分割图①



図132 1次調査Ⅱ期分割図②



图133 1次調査Ⅱ期分割图③



图134 1次調査Ⅱ期分割图④

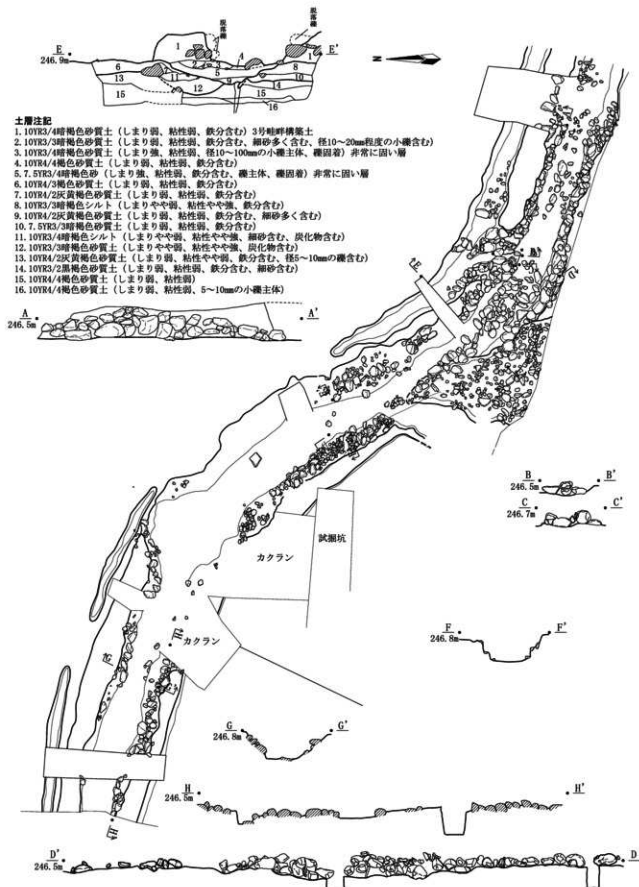


图135 1次調査Ⅱ期分割图⑤



図136 1次調査Ⅱ期分割図⑥

大陸群SD1001南



土層注記

1. 10YR3/4暗褐色砂質土（しまり弱、粘性弱、鉄分含む）3号船群構瓦土
2. 10YR3/3暗褐色砂質土（しまり弱、粘性弱、鉄分含む、細砂多く含む、径10~20mm程度の小礫含む）
3. 10YR3/4暗褐色砂質土（しまり強、粘性弱、径10~100mmの小礫主体、礫固着）非常に固い層
4. 10YR4/4褐色砂質土（しまり弱、粘性弱、鉄分含む）
5. 7.5YR3/4暗褐色砂（しまり強、粘性弱、鉄分含む、礫主体、礫固着）非常に固い層
6. 10YR4/3褐色砂質土（しまり弱、粘性弱、鉄分含む）
7. 10YR4/2灰黄褐色砂質土（しまり弱、粘性弱、鉄分含む）
8. 10YR3/3暗褐色シルト（しまりやや弱、粘性やや強、鉄分含む）
9. 10YR4/2灰黄褐色砂質土（しまり弱、粘性弱、鉄分含む、細砂多く含む）
10. 7.5YR3/4暗褐色砂質土（しまり弱、粘性弱、鉄分含む）
11. 10YR3/4暗褐色シルト（しまりやや弱、粘性やや強、細砂含む、炭化物含む）
12. 10YR3/3暗褐色砂質土（しまりやや弱、粘性やや強、炭化物含む）
13. 10YR4/2灰黄褐色砂質土（しまり弱、粘性やや弱、鉄分含む、径5~10mmの礫含む）
14. 10YR3/2黒褐色砂質土（しまり弱、粘性弱、鉄分含む、細砂含む）
15. 10YR4/4褐色砂質土（しまり弱、粘性弱）
16. 10YR4/4褐色砂質土（しまり弱、粘性弱、5~10mmの小礫主体）

図137 大陸群SD1001南

大睦峠SD1001中央

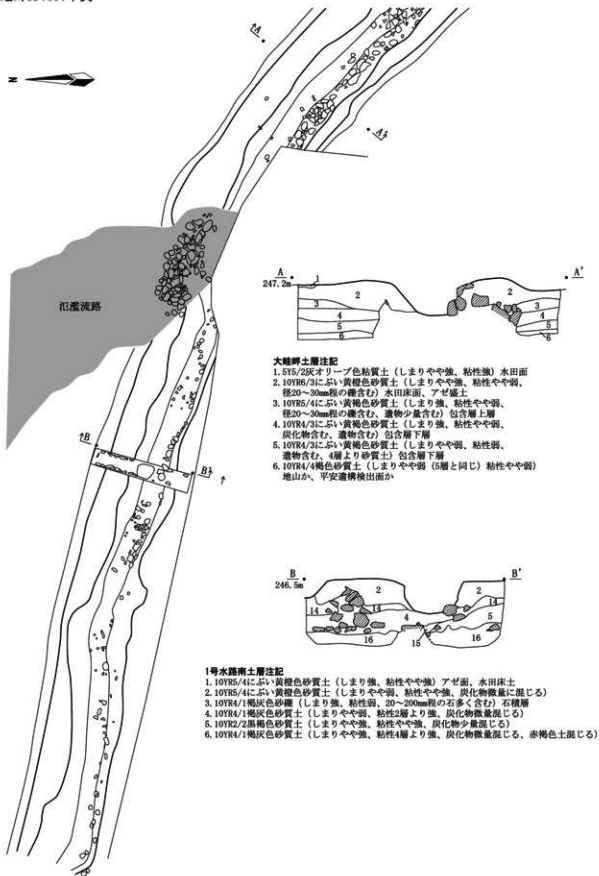
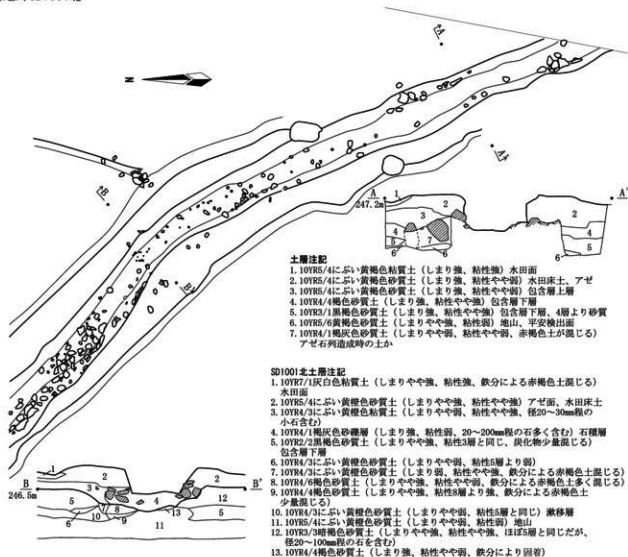


図138 大睦峠SD1001中央



SN16

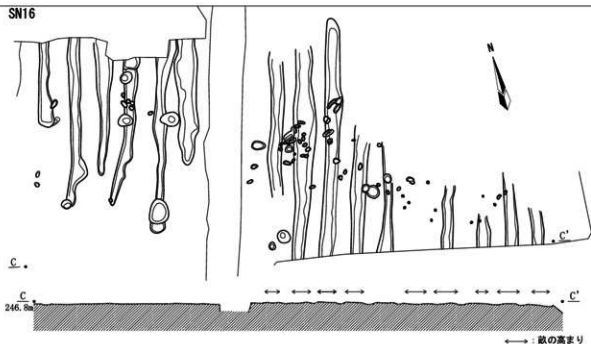
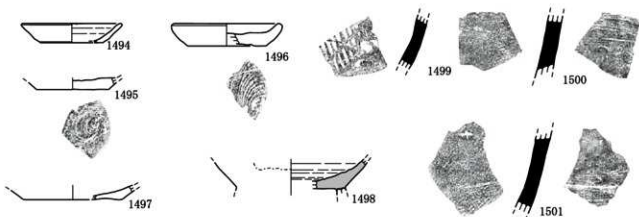


図139 大睦群SD1001北、畑跡SN16

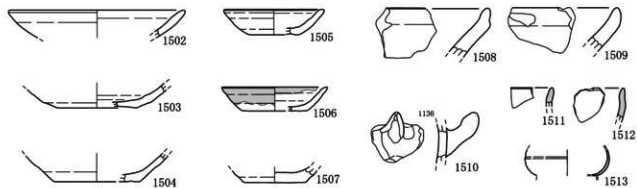
SN01



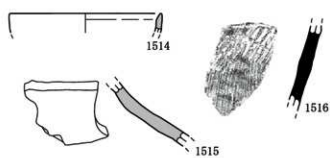
SN02



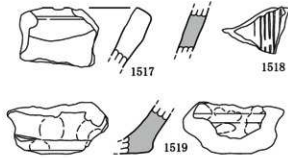
SN03



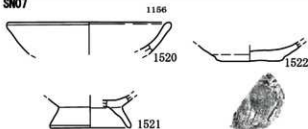
SN04



SN06



SN07



SN13

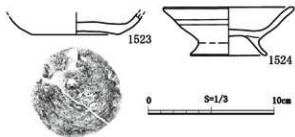
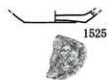


图140 SN出土土器①

SN14

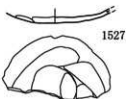


1525

SN16



1526



1527



1528

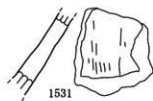


1529

水田覆土



1530

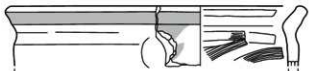


1531

水田床土



1532



1534



1535

0 S=1/3 10cm



1533

古銭



1536



1537



1538



1539



1540



1541



1542



1543

0 S=2/3 5cm

图141 SN出土土器②、出土古銭

第5章 第2次調査の調査成果

第1節 I区I期の遺構と遺物

第1項 竪穴建物跡(SI)

竪穴建物跡SI01(遺構:図143、遺物:図148)

<位置・主軸> ZO-29区に位置している。主軸方位はN-40°-E。<形状・規模> 東西3.15m×南北1.95m以上の隅丸方形を呈する。検出面からの深度は0.15m。壁の立ち上がりは明瞭に把握できず、掘り込み面を明確に判断できなかった。遺構面を地山まで掘り込んで検出した。建物跡プランの北西隅は調査区外にある。<床面> 床面は地山の礫層が露出した状態で検出した。貼り床は検出しなかった。<柱穴> SI01に明確に伴う柱穴は検出しなかった。<カマド> SI01の東壁やや北寄りに位置している。カマドの長軸は東壁の南北軸に対して南方向に傾いている。検出時点では構築材の礫が散在した状態であった。<出土遺物> 遺物の出土は建物跡内に散在して検出した。1544は土師器環底部破片。底部から体部にかけて垂直に若干立ち上がる。1545は土師器置き蓋の破片。内面はランダムなハケメで調整される。<時期> 10世紀後半頃?(甲斐型X期)

竪穴建物跡SI02(遺構:図143・144、遺物:図148)

<位置・主軸> ZM-29～30区に位置している。主軸方位はN-11.2°-W。<形状・規模> 東西2.45以上×南北4.55mの不整形を呈する。建物跡プランの西側は調査区外にある。掘り込み面は明確に捉えることができなかったため、地山まで掘り進めて検出した。検出面からの深度は0.1m。壁面はやや皿状に立ち上がる。<床面> 地山の砂礫層が露出しており、貼り床、硬化面等は検出しなかった。<柱穴> 柱穴は検出しなかった。<カマド> 建物跡北東隅に位置しており、調査区際で検出した。構造材の礫、粘土等は検出できず、掘方のみ検出した。<出土遺物> 遺物の出土はカマド周辺及び建物跡南東隅に集中する傾向がある。1546は土師器皿。1547～1549は土師器環。1548、1549は体部下半に斜行ヘラケズリが見られる。1550～1553は土師器甕。体部外面は縦方向のハケメ、体部内面は横方向のハケメ調整が施される。1553は口縁端部が内面に折り返されている。<時期> 10世紀後半頃?(甲斐型X期)

竪穴建物跡SI03(遺構:図144)

<位置・主軸> ZP-31区に位置している。主軸方位はN-6.5°-E。<形状・規模> 東西2.25m以上×南北3.85mの方形を呈する。SI04と重複するが、切り合い関係の把握には至らなかった。検出面からの深度は0.1m。建物跡の東側は調査区外にある。<床面> 地山の砂礫層が露出しており、貼り床、硬化面等は検出しなかった。<柱穴> 柱穴は検出しなかった。<カマド> カマドは調査区内においては検出しなかった。当該期及び当該遺跡における傾向では、東壁に構築されるため、調査区外に位置している可能性がある。<出土遺物> 建物跡の西壁沿いに集中して出土する傾向がある。1546は土師器皿。1547～1549は土師器環。1548、1549は体部下半に斜行ヘラケズリが見られる。1550～1553は土師器甕。体部外面は縦方向のハケメ、体部内面は横方向のハケメ調整が施される。1553は口縁端部が内面に折り返されている。<時期> 10世紀後半頃?(甲斐型X期)

竪穴建物跡SI04(遺構:図145、遺物:図149)

<位置・主軸> ZO～ZP-31区に位置している。主軸方位はN-5.7°-E。<形状・規模> 東西4.25m×南北3.85mの方形を呈する。検出面からの深度は0.2m。建物跡の南側はSI05とSI06に切られている。壁面はやや垂直に立ち上がっている。<床面> 建物跡北東隅及び南側は地山の砂礫層が露出し、中央部は筋状に堆積した地山の河川堆積物の砂礫層に挟まれて堆積した細粒砂層で構成されている。貼り床、硬化面等は検出しなかった。<柱穴> 建物跡に明確に伴うピットは検出しなかった。<カマド> カマドを有さない。またはSI06に切られて破壊された可能性がある。<出土遺物> 遺物は建物跡内に散在して多く出土するが、特に南東隅に集中して出土している。1554は土師器環。口縁部から体部にかけて稜がある。1555・1556は灰陶陶器碗。高台は、1555は直線的で1556はやや三日月形を呈する。<時期> 10世紀後半頃?(甲斐型X期)

竪穴建物跡SI05(遺構:図145)

<位置・主軸> ZO-31区に位置している。主軸方位はN-15.2°-E。<形状・規模> 東西2.75m×南北0.6m以上の方形を呈する。検出面からの深度は0.45m。建物跡の北側ではSI04切り、東側ではSI06を切っている。建物跡の南側の大半は調査区外にある。壁面は皿状に立ち上がっている。<床面> 土層堆積状況では2層及び5層上面で平坦になるが、当該層上で床面とする堆積構造は把握できなかった。建物跡の大半が調査区外であるため推測になるが、掘方は壁面に付近で深くっており周溝が巡っていた可能性がある。<柱穴> 建物跡に明

確に伴うピットは検出しなかった。〈カマド〉カマドを有さない。〈出土遺物〉〈時期〉10世紀後半頃? (甲斐型X期)

竪穴建物跡 S106 (遺構: 図 145)

〈位置・主軸〉ZO・ZP-31区に位置している。主軸方位はN-18.4°-E。〈形状・規模〉東西4.45m×南北0.8m以上の方形を呈する。検出面からの深度は0.1m。建物跡の北側でS104切り、東側ではS105に切られている。建物跡の南側の大半は調査区外にある。壁面は皿状に立ち上がっている。遺構の精査段階では検出が困難であり、地山まで掘り上げた段階で建物跡の壁面の立ち上がりを確認し、かつ遺物の出土状況を鑑みて建物跡と認定した。〈床面〉床面は中央部がく柱穴。建物跡に明確に伴うピットは検出しなかった。〈カマド〉カマドを有さない。〈出土遺物〉〈時期〉10世紀後半頃? (甲斐型X期)

第2項 土坑 (SK)・ピット (SP)

検出した土坑及びピットの規模、形状については表12に示した。第2次調査では、遺構種別として土坑としたものは概ね50～70cm以上の平面規模を持つものとした。

土坑及びピットが構築される場所は、概ね竪穴建物跡が近接する場所又は竪穴建物跡の内部に集中する傾向が認められ、土坑及びピットの用途については集落の住環境と有機的に関連すると考えられる。またSK07やSP01、SP09では柱痕と思われる土層堆積状況が見られることから掘立柱の構造を持つ建物があったと考えられるが、建物プランを検討できるほどの柱穴の検出には至らなかった。

第3項 性格不明遺構 (SX・SZ)

性格不明遺構 SX01 (遺構: 図 147)

〈位置〉ZM-30区に位置している。〈規模・形状〉東西0.73m×東西0.83mの不整形円形を呈する。東側に突出部を有する。〈遺構概要〉周辺から遺物が多く出土している。

性格不明遺構 SZ01 (遺構: 図 147)

〈位置〉ZP-30区に位置している。〈規模・形状〉東西1.0m×東西2.18mの長方形を呈する。〈遺構概要〉調査の最終段階に検出しており、地山砂礫層を掘り込んで構築されている。遺構名称は検出時点での平面プランが墓状であったことから、SZを冠したが、調査終了時点で明確に墓遺構と判断できなかったため、性格不明遺構として報告する。土層堆積状況では、遺構プランに対して南北1.0mの掘り込みが確認できたが、当該掘り込みの平面プランは確認できなかった。遺物の出土は無く、時期、用途・機能ともに不明である。

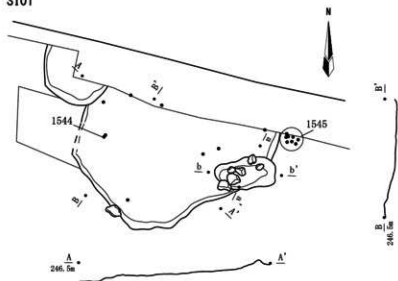
第4項 遺構外出土遺物 (図 149)

遺構外から出土した遺物はいずれも遺物包含層の黒褐色細粒砂層から出土したものである。土師器環 (1558～1564)、脚高台付環 (1565)、土師器甕 (1566～1570) 銘蓮弁文を持つ龍泉窯系青磁 (1571)、鍋 (1572)、カワラケ (1573) を掲載した。出土遺物は10世紀前半～11世紀後半頃に帰属するものである。

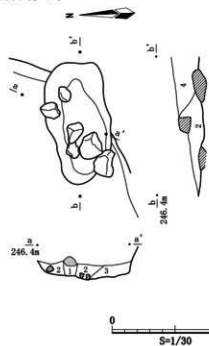
表 12 第2次I区出土土坑・ピット計測表

遺構名	位置	規模 (m)			備考
		長径	短径	深さ	
SK01	ZP-31区	0.34	0.28	0.14	S103, S104内
SK02	ZP-30区	0.5	0.46	0.18	
SK03	ZM-30区	0.62	0.51	0.12	S102に埋られる掘り込み内
SK04	ZM-30区	0.76	0.68以上	0.08	西側調査区外、レンズ状堆積
SK05	ZM-29区	0.62	0.54	0.15	
SK06	ZM-29区	0.75	0.74	0.26	レンズ状堆積
SK07	ZM-31区	0.52以上	0.68	0.5	南側調査区外、柱痕あり
SP01	ZP-30区	0.84	0.94	0.48	柱痕あり、2遺構重なり
SP02	ZP-30区	0.28	0.26	0.07	
SP03	ZP-30区	0.25	0.23	0.03	
SP04	ZM-30区	0.6	0.54	0.22	レンズ状堆積
SP05	ZM-30区	0.34	0.32	0.14	
SP06	ZP-30区	1.04	0.86	0.45	
SP07	ZP-30区	0.24	0.2	0.3	
SP08	ZP-30区	0.4	0.24	0.12	
SP09	ZP-31区	0.26	0.14	0.24	柱痕あり
SP10	ZP-30区	0.24	0.16	0.18	
SP11	ZP-30区	0.16	0.16	0.24	
SP12	ZP-31区	0.2	0.16	0.54	
SP13	ZM-29区	0.48	0.44	0.16	レンズ状堆積
SP14	ZM-29区	0.4	0.32	0.24	
SP15	ZM-29区	0.3	0.22	0.32	
SP16	ZM-29区	0.33	0.33	0.18	
SP17	ZM-29区	0.46	0.36以上	0.54	

S101



S101 カマド



S101カマド土層注記

1. 黒褐色細粒砂 (しまり弱、粘性弱、炭化物多く含む)
2. 暗褐色細粒砂 (しまりやや弱、粘性弱、小礫含む、炭化物少量含む、焼土多く含む)
3. 黒褐色細粒砂 (しまりやや弱、粘性やや強、炭化物少量含む)

S102

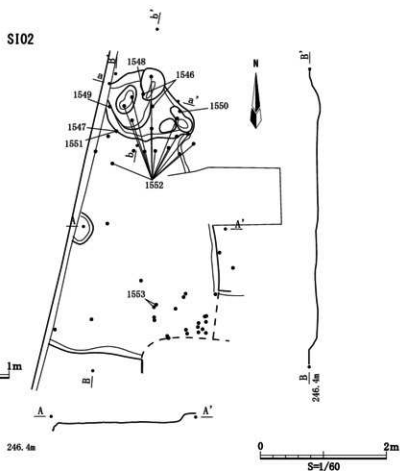
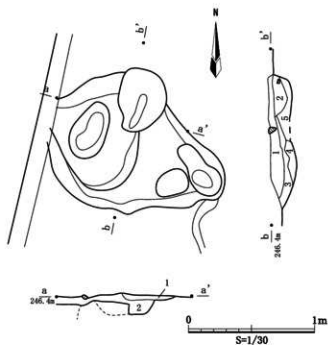


図 143 竪穴建物跡 S101、S101 カマド、S102

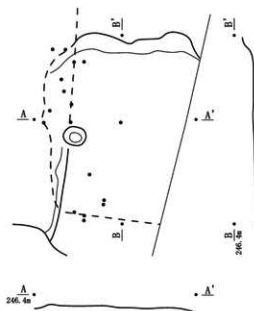
S102 カマド



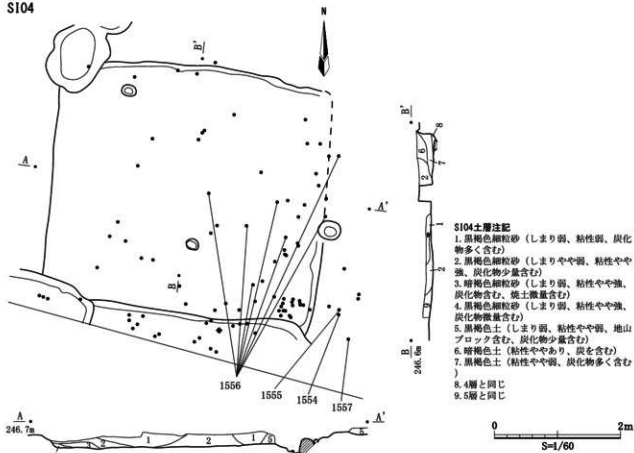
S102カマド土層注記

1. 黒褐色細粒砂（しまり弱、粘性弱、炭化物多く含む）
2. 黒褐色細粒砂（しまりやや弱、粘性やや強、炭化物少量含む）

S103



S104

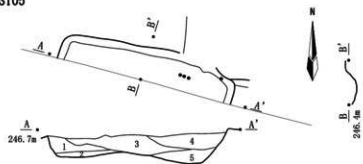


S104土層注記

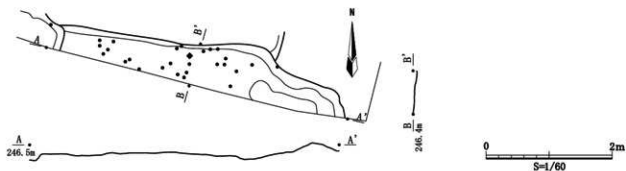
1. 黒褐色細粒砂（しまり弱、粘性弱、炭化物多く含む）
2. 黒褐色細粒砂（しまりやや弱、粘性やや強、炭化物少量含む）
3. 暗褐色細粒砂（しまり弱、粘性やや強、炭化物含む、炭化物少量含む）
4. 黒褐色細粒砂（しまり弱、粘性やや強、炭化物微量含む）
5. 黒褐色土（しまり弱、粘性やや弱、地山ブロック含む、炭化物少量含む）
6. 暗褐色土（粘性ややあり、炭を含む）
7. 黒褐色土（粘性やや弱、炭化物多く含む）
8. 4層と同じ
9. 5層と同じ

図 144 竪穴建物跡 S102 カマド、S103、S104

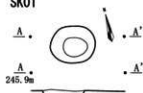
S105



S106

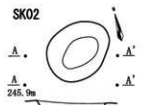


SK01



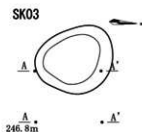
SK01土層注記
1. 10YR4/6褐色土 (粘性あり)

SK02

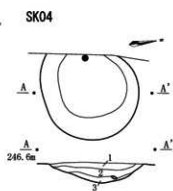


SK02土層注記
1. 7.5YR3/3暗褐色土 (粘性
ややあり、炭を含む)
2. 礫を含む

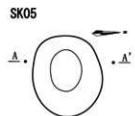
SK03



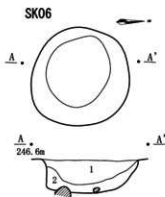
SK04



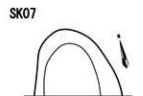
SK05



SK06



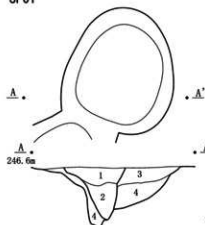
SK07



0 1m
S=1/30

図 145 竪穴建物跡 S105、S106、土坑 (SK)

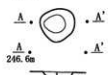
SP01



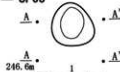
SP01土層注記

1. 7.5YR3/3暗褐色土 (粘性ややあり、炭を含む)
- 2.
3. 1.10YR4/5褐色土 (粘性あり)
4. 礫を含む

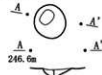
SP02



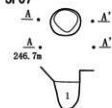
SP05



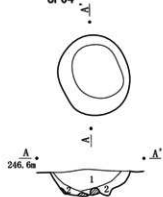
SP03



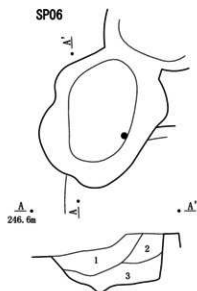
SP07



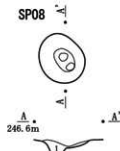
SP04



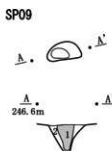
SP06



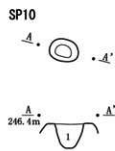
SP08



SP09



SP10

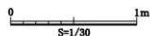


SP02~08、10土層注記

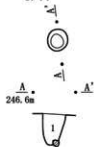
1. 7.5YR3/3暗褐色土 (粘性ややあり、炭を含む)
2. 礫を含む

SP09土層注記

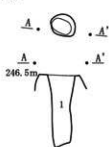
1. 黄土層
2. 7.5YR3/3暗褐色土 (粘性ややあり、炭を含む)



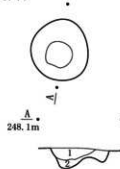
SP11



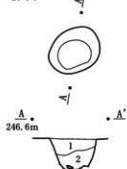
SP12



SP13



SP14

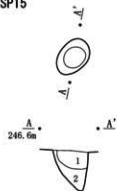


SP11~14土層注記

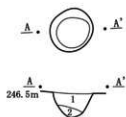
1. 7.5YR3/3暗褐色土 (粘性ややあり、炭を含む)
2. 1層に礫を含む

図 146 ビット (SP) ①

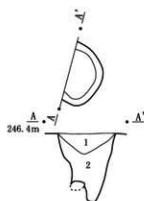
SP15



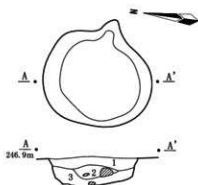
SP16



SP17



SX01



SX01土層説明

1. 5YR3/3暗褐色土 (粘性ややあり、しまり弱、炭化物を含む)
2. 10YR3/2暗褐色細粒砂層 (粘性弱、しまりやや強、炭化物多く含む)
3. 1層に鐵を含む

SP15-17土層注記

1. 7.5YR3/3暗褐色土 (粘性ややあり、炭を含む)
2. 1層に鐵を含む

SZ01

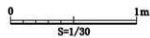
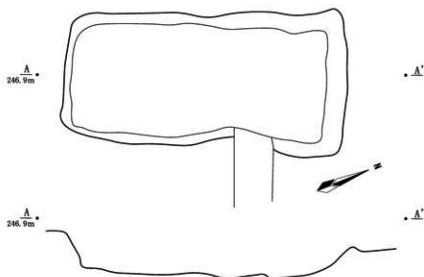
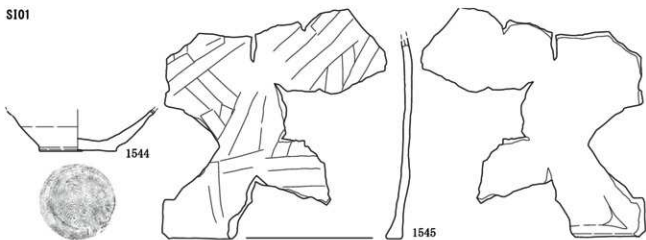


図 147 ビット (SP) ②、性格不明遺構 (SX・SZ)

S101



S102

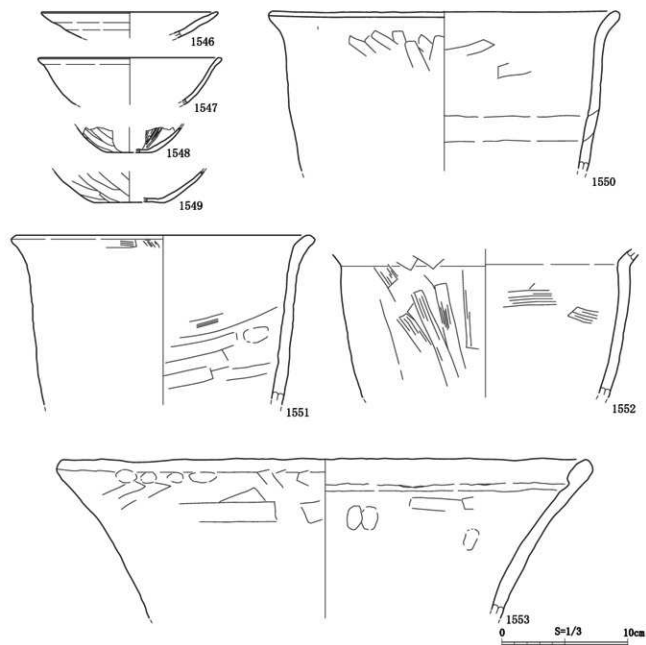
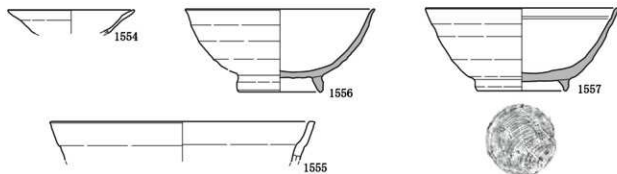


图 148 S101、S103 出土土器

S104



遺構外

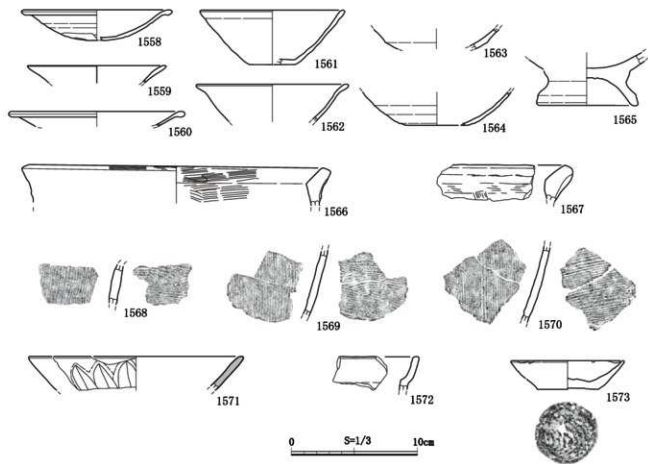
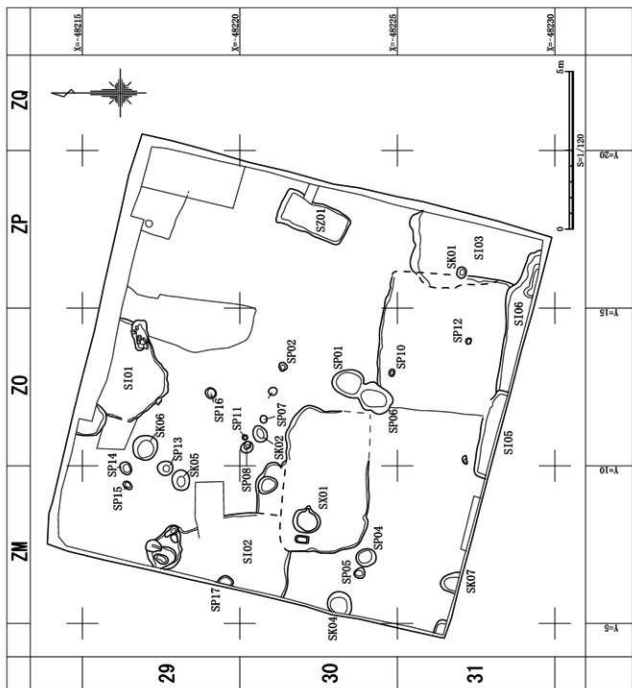


图 149 S104 遺構外出土土器

表 13 第2次Ⅰ区調査 出土器觀察表

調査 番号	遺構名	種別	器種	口径	口径	器高	調査技法	外面	内面	胎土	焼成度	備考
図148	1544	土師器	碗	φ3.3	-	0.3	口タロコナテ、蓋部印痕跡切痕	32K2上黒褐色	32K2上黒褐色	黒・赤色胎子、黒色砂粒、雲母	50%	平安
図148	1501	土師器	煎釜カマド	φ18.3	-	118.3	ヘコナテ	33K5上赤褐色	33K5上赤褐色	黒・赤色胎子、黒色砂粒、雲母	破片	平安
図149	1546	土師器	皿	φ4.0	φ2.1	0.2	口タロコナテ	2.33K7上赤褐色	2.33K7上赤褐色	赤・白色、赤色胎子、白・黒色砂粒	破片	平安
図149	1547	土師器	片	φ4.5	φ3.8	-	口タロコナテ	2.33K6赤褐色	2.33K6赤褐色	黒・赤色胎子、白・黒色砂粒、雲母	破片	平安
図148	1548	土師器	片	-	φ2.0	0.3	口タロコナテ	1933上赤褐色	2.33K4上赤褐色	黒・赤色胎子	破片	平安
図148	1549	土師器	片	-	φ2.5	0.5	口タロコナテ、蓋部ヘコナテ形 外・体部下ヘコナテ	2.33K4上赤褐色	2.33K5上赤褐色	黒・赤色胎子、黒・赤色砂粒	破片	平安
図148	1550	土師器	甕	φ23.0	φ13.0	-	外・内縁段ヘコナテ	2.33K4上赤褐色	2.33K4上赤褐色	赤・白色、赤色胎子、雲母	破片	平安
図149	1551	土師器	甕	φ23.0	φ13.0	-	外・内縁段ヘコナテ	2.33K4上赤褐色	2.33K4上赤褐色	赤・白色、赤色胎子、白・黒色砂粒、雲母	破片	平安
図148	1552	土師器	甕	φ11.8	-	111.8	外・内縁段ヘコナテ、蓋部凹痕	2.33K67赤褐色	2.33K67赤褐色	黒・赤色胎子、白・黒色砂粒、雲母	破片	平安
図148	1553	土師器	甕	φ12.7	-	112.7	外・内縁段ヘコナテ	2.33K67赤褐色	2.33K67赤褐色	赤・白色、赤色胎子、白・黒色砂粒、雲母	0.3	平安
図149	1554	土師器	片	φ9.0	φ6.9	6.5	口タロコナテ	2.08K7灰白色	2.08K6赤褐色	網罟、白色胎子、	0.7	平安
図149	1555	土師器	片	φ4.0	φ4.6	6.5	口タロコナテ	2.33K1上赤褐色	2.33K1上赤褐色	網罟、白色胎子、	0.7	平安
図149	1556	土師器	甕	φ35.2	φ6.6	7.0	口タロコナテ、蓋部印痕跡切痕	33K3上赤褐色	33K3上赤褐色	網罟、白色胎子、黒色砂粒、雲母	0.1	平安
図149	1557	土師器	甕	φ26.0	φ2.2	-	外・内縁段ヘコナテ	33K3上赤褐色	33K3上赤褐色	黒・赤色砂粒、赤土、雲母	破片	平安
図149	1558	土師器	皿	φ2.0	2.4	9	口タロコナテ	33K5赤褐色	33K5赤褐色	黒・赤色胎子、白・赤色砂粒	破片	平安
図149	1559	土師器	片	φ1.0	φ1.4	-	彫形不明	2.33K5赤褐色	2.33K5赤褐色	赤・白色、赤色胎子、赤・黒色砂粒	破片	平安
図149	1560	土師器	片	φ4.0	φ1.2	-	口タロコナテ	33K5赤褐色	33K5赤褐色	黒・赤色胎子、白・黒色砂粒、雲母	破片	平安
図149	1561	土師器	片	φ1.1	4.3	0.4	外口タロコナテ、体部下ヘコナテ形 内口タロコナテ、蓋部ヘコナテ	33K5赤褐色	33K5赤褐色	黒・赤色胎子、白・黒色砂粒、雲母	0.2	平安
図149	1562	土師器	片	φ2.0	φ3.0	-	彫痕のみ彫痕不明	33K5赤褐色	33K5赤褐色	黒・赤色胎子、白・黒色砂粒、雲母	破片	平安
図149	1563	土師器	片	-	φ1.0	-	彫形不明	2.33K67赤褐色	2.33K67赤褐色	赤・白色、赤色胎子、白・黒色砂粒、赤土	破片	平安
図149	1564	土師器	片	-	φ2.0	0.1	口タロコナテ	33K6赤褐色	33K6赤褐色	黒・赤色胎子、赤・白・黒色砂粒	破片	平安
図149	1565	土師器	脚高倉付付体	-	φ4.2	7.7	口タロコナテ	33K6赤褐色	33K6赤褐色	黒・赤・黒色砂粒、白色砂粒、雲母	破片	平安
図149	1566	土師器	甕	φ4.0	-	0.4	外ヘコナテ、内口唇部凹コナテ	33K4上赤褐色	2.33K4上赤褐色	黒・赤色胎子、白・黒色砂粒、雲母	破片	平安
図149	1567	土師器	甕	φ4.9	φ3.9	-	縁段ヘコナテ	33K5赤褐色	33K5赤褐色	黒・赤色胎子、白・黒色砂粒、雲母	破片	平安
図149	1568	土師器	甕	φ3.1	-	0.3	外縁段ヘコナテ、内縁段ヘコナテ	33K5赤褐色	33K5赤褐色	黒・赤色胎子、白・黒色砂粒、雲母	破片	平安
図149	1569	土師器	甕	φ5.3	-	0.3	外縁段ヘコナテ、内縁段ヘコナテ	33K5上赤褐色	33K5上赤褐色	黒・赤色胎子、白・黒色砂粒、雲母	破片	平安
図149	1570	土師器	甕	φ6.0	-	0.6	外縁段ヘコナテ、内縁段ヘコナテ	33K5上赤褐色	33K5上赤褐色	黒・赤色胎子、白・黒色砂粒、雲母	破片	平安
図149	1571	土師器	有蓋	φ9.0	φ4.7	-	縁段ヘコナテ	33K7灰白色	網罟	網罟	破片	平安
図149	1572	土師器	甕	φ4.0	φ2.4	4.8	口タロコナテ	33K5上赤褐色	33K5上赤褐色	赤・白色胎子、白色砂粒、雲母	破片	平安
図149	1573	土師器	片	φ8.9	2.3	4.8	口タロコナテ	2.33K5赤褐色	2.33K5赤褐色	赤・白色胎子、赤・白・黒色砂粒、赤土	0.6	平安

图 150 第 2 次 I 区 I 期全体图



第2節 I区II期の遺構と遺物

第1項 畑跡

I区では調査区南西部に南北方向の16本の畝跡を検出した。当該畑耕土は褐色～暗褐色の細粒砂層により構成されており、礫はほとんど含まない。畝間は60～80cmで高さは検出面から約15cmである。調査区北側では、南西部の畑跡に直交する軸で畝状（溝状）の遺構を検出したが判然としない。畑の主軸はN-24～26°-E。第1次調査において検出した畑または水田畦畔と比較すると、やや東偏する傾向がある。畝上では、作物の耕作痕と思われる径10cm以下の掘り込みが多数みられる。掲載し得る出土遺物は無かったものの、出土遺物の構成及び層序の比較から、第1次調査において検出した水田・畑跡と同一面と捉えて差し支えないだろう。畑の時期は、中世後半頃としておきたい。

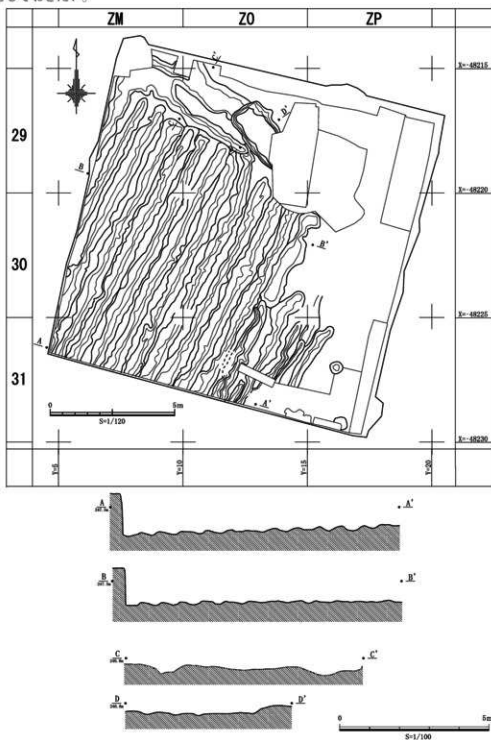


図151 第2次I区II期全体図及び畑跡エレベーション

第3節 II区の遺構と遺物

II区の調査は狭小であったことから遺物の出土はほとんど見られず、2面の遺構検出面を把握できたが調査段階では各面の時期は判別できなかった。1面目は地表面下約2.0m(図153-11層)において土坑(SK01)を検出した遺構面とし、2面目は地表面下約2.6m(図153-13層)において土坑(SK02)を検出した遺構面を指す。最大3.8mまで掘削したところで調査区法面の掘削限界となったため、調査を終了している。

土坑SK01(遺構:図152)はZW-18区にて検出。径0.3m×深さ0.2mの円形を呈する。遺物は出土しなかった。時期不明。土坑SK02(遺構:図152)はZW-18区にて検出。長径0.5m×短径0.2m以上、深さ0.2mの隅丸長方形を呈する。遺物の出土はなく、時期不明。

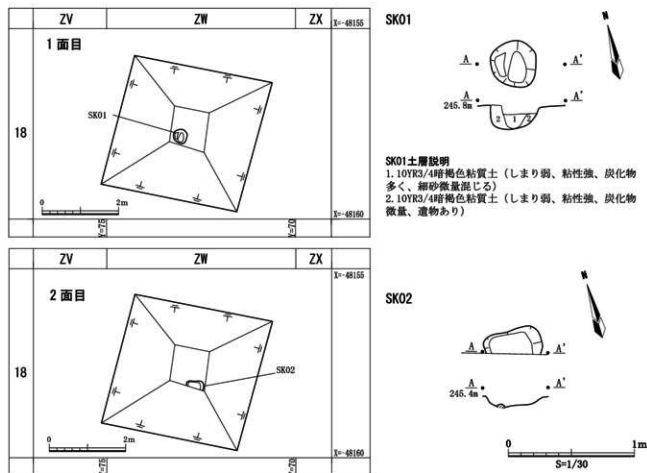


図152 第2次II区遺構平面図及び遺構図(SK01・SK02)

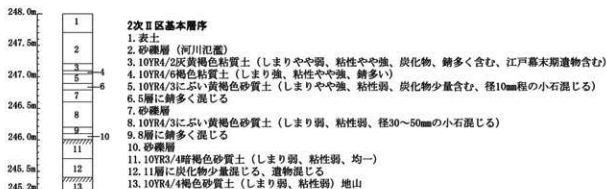


図153 第2次II区土層柱状図

第4節 Ⅲ区Ⅰ期の遺構と遺物

第1項 竪穴建物跡(SI)

竪穴建物跡SI01(遺構:図155、遺物:図163)

〈位置・主軸〉ZX・ZY-1区に位置している。主軸方位はN-11.2°-E。〈形状・規模〉東西3.2m×南北2.3mの方形を呈する。検出面からの深度は0.2m。壁面はやや皿状に立ち上がる。建物跡プランの北側は調査区北端に設定したサブトレンチにより切られている。〈床面〉床面は地山の細粒砂層であり、礫層が全体的に露出している。貼り床・硬化面等は検出しなかった。〈柱穴〉柱穴は検出しなかった。〈カマド〉SI01の南東隅に構築されている。袖石が若干遺存した状態で検出したが、天井石、支柱石は取り除かれている。焚口の掘り込みは明瞭であるが、煙道の形状・規模は判別できなかった。〈出土遺物〉1574・1575は土師器環。底部から体部の境は垂直に立ち上がり、体部は内湾する。口縁部はとがる。1576は土師器皿。厚底を呈する。1577・1578は土師器甕。口縁部は厚く肥厚し、水平に開く。1579・1580は灰釉陶器碗。〈時期〉11世紀前半頃?

竪穴建物跡SI02(遺構:図155、遺物:図163)

〈位置・主軸〉ZV-2～3区に位置している。主軸方位はN-31.3°-E。〈形状・規模〉東西3.6m×南北4.65mの方形を呈する。検出面からの深度は0.3m。壁面はやや皿状を呈する。SI02南東隅は、東西3.45m×南北2.4mの長方形の掘り込みにより切られている。〈床面〉SI02の掘方底部は、地山の細粒砂層まで達する。〈柱穴〉柱穴は検出しなかった。〈カマド〉カマドを有さない。〈出土遺物〉掲載しうる遺物は出土しなかった。〈時期〉平安時代

竪穴建物跡SI03(遺構:図156)

〈位置・主軸〉ZZ・A-2区に位置している。主軸方位はN-14.0°-E。〈形状・規模〉東西2.5m以上×南北2.8mの方形を呈する。東側は調査区外にある。検出面からの深度は0.36m。〈床面〉地山の砂礫層が露出しており、貼り床、硬化面等は検出しなかった。〈柱穴〉柱穴は検出しなかった。当該期及び当該遺跡における傾向では東壁に構築されるため、調査区外に位置している可能性がある。〈出土遺物〉掲載し得る遺物は出土しなかった。〈時期〉平安時代

竪穴建物跡SI04(遺構:図156、遺物:図163)

〈位置・主軸〉ZZ-4・5区に位置している。主軸方位はN-18.8°-E。〈形状・規模〉東西3.5m以上×南北4.6mの方形を呈する。検出面からの深度は0.3m。西側にSI07があるが、切り合い関係は不明。壁面は垂直に立ち上がっている。〈床面〉地山の砂礫層が露出しており、貼り床、硬化面等は検出しなかった。〈柱穴〉柱穴は検出しなかった。〈カマド〉カマドは調査区内においては検出しなかった。当該期及び当該遺跡における傾向では東壁に構築されるため、調査区外に位置している可能性がある。〈出土遺物〉1581は土師器環。体部は中央部で肥厚して先端部は尖っている。〈時期〉11世紀前半頃?

竪穴建物跡SI05(遺構:図157)

〈位置・主軸〉ZV・ZW-5区付近に位置している。したがって、主軸は明らかではない。〈形状・規模〉SI05は平面プランでの遺構検出は出来ず、遺物の出土分布及び1cm～数cmのやや大きめの炭化材の分布傾向から推定したものである。したがって、全体形状及び規模は不明である。〈床面〉地山の砂礫層が露出しており、貼り床、硬化面等は検出しなかった。〈カマド〉カマドを有さない。〈出土遺物〉SI05の推定される範疇から出土した遺物はすべて遺構外出土遺物として取り上げを行った。このことについては、現場段階での竪穴建物の掘り込みと遺構の明確なプランニングができておらず、遺物の一括性が不明瞭であるための措置である。したがって、SI05の出土遺物としての掲載は差し控えることとした。また、光波測距儀における取り上げ位置のデータ取得に際し、基準点の設定にミスがあったため当該遺構を推定した遺物出土位置のデータに不備が生じてしまった。そのため、出土遺物の位置データの報告ができなかった。〈時期〉平安時代

竪穴建物跡SI06(遺構:図157)

〈位置・主軸〉ZY-5区に位置している。主軸方位はN-19.7°-E。〈形状・規模〉SI06もSI05同様、平面プラン

ンでの遺構検出は出来ず、遺物の出土分布から推定したものである。したがって、全体形状及び規模は不明である。〈床面〉地山の砂礫層が露出した状態であるが、想定される建物範囲において、土坑が並んで検出した(SK48,44,45,41,46等)。したがって、調査段階では竪穴建物跡の存在を想定しているが、掘立柱建物の内部の可能性はある。〈柱穴〉建物跡に明確に伴うピットは検出しなかった。〈カマド〉カマドを有さない。〈出土遺物〉SI06の出土遺物については、SI05と同様に、推定される範囲から出土した遺物はすべて遺構外出土遺物として取り上げを行った。したがって、SI06の出土遺物としての掲載は差し控えることとした。また、光波測距儀における取り上げ位置のデータ取得に際し、基準点の設定にミスがあったため当該遺構を推定した遺物出土位置のデータに不備が生じてしまった。そのため、出土遺物の位置データの報告ができなかった。〈時期〉平安時代

竪穴建物跡 SI07 (遺構：図 156、遺物：図 163)

〈位置・主軸〉ZY-4区に位置している。主軸方位はN-18.8°-E。〈形状・規模〉東西1.3m以上×南北2.7mの方形を呈する。検出面からの深度は0.5m。東側でSI04と切り合うが、前後関係は不明。壁面は垂直に立ち上がっている。〈床面〉地山の砂礫層が露出しており、貼り床、硬化面等は検出しなかった。〈柱穴〉柱穴は検出しなかった。〈カマド〉カマドは調査区内においては検出しなかった。SI04が切っている場合、SI07のカマドはSI04構築時に破壊されている可能性がある。〈出土遺物〉遺物は西壁周辺において集中して出土する傾向がある。1582～1584は土師器皿。底部から体部にかけての稜がやや立ち上がったのち直線的に屈曲する。1585・1586は土師器杯。調整の特徴は土師器皿と同様である。〈時期〉11世紀前半頃?

竪穴建物跡 SI08 (遺構：図 156)

〈位置・主軸〉ZX-6区に位置している。主軸方位はN-23.0°-E。〈形状・規模〉東西5.1m以上×南北0.95mの方形を呈する。建物跡の南側の大半は調査区外にある。〈床面〉地山の砂礫層が露出しており、貼り床、硬化面等は検出しなかった。〈柱穴〉柱穴は検出しなかった。〈カマド〉カマドを有さない。北壁中央付近においてカマド状のプランを検出したが、焼土が分布するものの明確な構造材、掘り込みは確認できず、カマドと判断しなかった。〈出土遺物〉掲載しうる遺物は出土しなかった。〈時期〉平安時代

第2項 溝 (SD)

溝 SD01 (遺構：図 158)

〈位置・主軸〉ZZ-1区に位置している。主軸はN-19°-E。〈形状・規模〉長さ1.85m、幅0.35m。北側は調査区外にある。〈遺構概要〉平面プランは検出したが、明瞭な掘り込みはなかったため、断面情報は不明。遺物は出土しなかった。

溝 SD02・03 (遺構：図 158)

〈位置・主軸〉ZY・ZZ-2～4区にかけて位置している。主軸はN-37°-W。〈遺構概要〉SD02とSD03は幅が異なるものの並行しているため、同一項目において報告する。SD02は長さ8.65m、幅0.75m、深さ0.3mであり、SD03は長さ5.75m、幅0.45m、深さ0.1m。SD03はSI04を切っている。北側に位置している土坑群のうち、SK19、14、11、04等が同じ軸線と並んでおり、同様の規制線でプランニングされた可能性もある。

溝 SD04 (遺構：図 159)

〈位置・主軸〉ZU・ZV-100～4区にかけて位置している。主軸はN-20°-E。〈遺構概要〉長さ21.4m、幅4.6m、深さ1.52mの直線的かつ断面が緩やかなV字状を呈する大溝である。同様の主軸及び規模を持つ大溝が第1次調査において見つかり、(SD4001、4002)、同一のプランで構築されたものと考えられる。南北方向に延びるSD4001とこのSD04の間は訳110mであり、一町の単位で施工計画がなされていたと考えられる。この大溝の機能については、包茎巨漢としての防衛的な堀の可能性も想定されるが、土層堆積構造の観察からは地下水位が上昇するなかで埋没した傾向を読み取ることができ、集落空間の感想を温煦とした可能性もある。当該SD04埋没家庭及び作り替えに関しては、第8章第2節の土層堆積構造観察に詳しい。SD04からの遺物の出土はなく、時期を決定づける遺物はない。同一遺構と考えられる第1次調査SD4001では、中世前半頃(12～13世紀頃)の河原家が底部から果都度しているため、ひとまず当該機の遺構と位置付けておきたい。

溝 SD05 (遺構：図 158)

ZZ-2区に位置している。主軸はN-88°。〈形状・規模〉長さ2.2m、幅0.4m、深さ0.23m。遺物は出土しなかった。

溝 SD06 (遺構：図 158)

〈位置・主軸〉ZZ-3・4区に位置している。主軸はN-37°。〈形状・規模〉長さ1.15m、幅0.25m、深さ0.3m。SD02・03の間に位置しており、同溝に切られている。遺物は出土しなかった。

第3項 焼土 (SL)

焼土 SL01 (遺構：図 159)

ZX-4区に位置している。東西2.95m、南北2.95mの不整形形の掘り込みを有しており、掘り込みの上面に焼土が集中している。深さ0.3m。

焼土 SL02 (遺構：図 159)

21-2区に位置している。東西2.75m、南北2.75mの不整形形の掘り込みを有している。深さ0.6mで、掘り込み内に焼土が充填された層がみられる。

焼土 SL03 (遺構：図 159)

25-6区に位置している。東西1.3m、南北1.25mの不整形形の掘り込みを有している。深さ0.35mで、掘り込み内に焼土が充填された層がみられる。

第4項 土坑 (SK)

検出した土坑の規模、形状については、表14に示した。第2次調査I区においては、概ね50cm～70cm以上の平面規模を持つものを土坑として附番しているが、第2次調査III区においては、I区におけるピット、土坑の区分なく、すべてを土坑として「SK・」という形で附番している。III区調査区においては概ね3つの土坑群が認められ、(土坑群①：図160、土坑群②：図161、土坑群③：図162)それぞれの群毎に特徴を記す。ただし、この群とは併存していることを示したのではなく、土坑が集中して検出している区域を示しているので留意されたい。

土坑群①については、調査区北東に位置している。土坑の規模は比較的大きい。竪穴建物跡との切り合い関係はほぼ認められず、掘立柱建物の配置となるような配列もない。これらの土坑の機能については不明である。

土坑群②は、調査区東側やや南寄りにある。これらの土坑はやや小規模な傾向であり、SK47、34、38、41、46は等間隔に配

表 14 第2次III区出土土坑計測表

遺構名	位置	規模 (m)			備考
		長さ	短径	深さ	
SK01	Z1-2区	0.65	0.55	0.16	
SK02	Z1-2区	0.7	0.55	0.18	
SK04	Z2-3区	0.9	0.6	0.12	
SK05	Z2-2区	0.55	0.4	0.14	
SK06	Z2-2区	0.9	0.45	0.14	
SK07	Z2-2区	0.45	0.35	0.12	
SK08	Z2-2区	0.6	0.52	0.1	
SK09	Z2-2区	0.85	0.7	0.18	
SK10	Z2-2区	1	0.9	0.3	
SK11	Z2-2区	0.5	0.45	0.12	
SK12	Z1-2, Z2-2区	0.6	0.52	0.14	
SK13	Z1-2, Z2-2区	1	0.9	0.12	
SK14	Z1-2区	0.47	0.4	0.22	
SK15	Z1-2, Z2-2区	0.85	0.7	0.2	
SK16	Z1-2区	0.3	0.27	0.22	
SK17	Z2-2区	0.5	0.5	0.2	
SK18	Z1-1区	0.8	0.65	0.18	
SK19	Z1-1区	1	0.9	0.2	
SK20	Z2-1区	0.4	0.35	0.1	
SK21	Z2-1区	0.35	0.3	0.18	
SK22	Z1-1区	0.45	0.25	0.14	
SK23	Z1-1区	0.4	0.37	0.1	
SK24	Z9-4区	0.32	0.3	0.16	
SK25	Z9-4区	0.4	0.35	0.12	
SK26	Z9-4区	0.25	0.2	0.08	
SK27	Z2-2区	0.77	0.5	0.12	
SK28	Z3-6区	0.3	0.32	0.16	
SK29	Z3-6区	0.5	0.45	0.32	
SK30	Z3-6区	0.55	0.45	0.42	
SK31	Z9-5区	0.5	0.45	0.24	
SK32	Z9-5区	0.3	0.27	0.14	
SK33	Z9-5区	0.45	0.4	0.2	
SK34	Z3-6区	0.6	0.45	0.3	
SK35	Z1-5区	0.52	0.45	0.2	
SK36	Z2-1区	0.4	0.32	0.12	
SK37	Z2-5区	0.4	0.3	0.12	
SK38	Z1-5区	0.32	0.3	0.2	
SK39	Z9-5区	0.6	0.5		
SK40	Z2-5区	0.65	0.45	0.2	
SK41	Z1-5区	0.55	0.45	0.4	
SK44	Z1-5区	0.65	0.35	0.16	
SK45	Z2-5区	0.7	0.5	0.38	
SK46	Z1-5, Z2-5区	0.45	0.35	0.32	
SK47	Z3-5区	0.82	0.45	0.36	
SK48	Z1-5区	0.8	0.52	0.36	
SK49	Z1-4区	0.3	0.25	0.18	
SK50	Z3-5区	0.4	0.32	0.3	
SK51	Z3-5区	0.5	0.4	0.24	
SK52	Z3-5区	0.8	(0.32)	0.36	
SK53	Z3-5区	0.5	0.45		

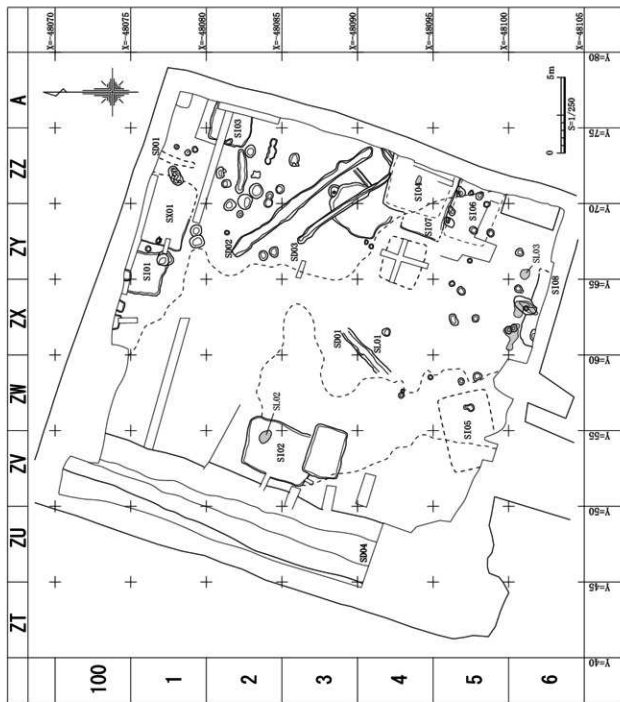
列されている。その他、SK48、44、45、37、40、46、41等は竪穴建物跡内に位置していることから、すべてではないものの竪穴建物の柱穴として機能していた可能性がある。

土坑群③としたものは調査区南側やや西よりに位置している。小規模な土坑が散在的にみられる範囲である。

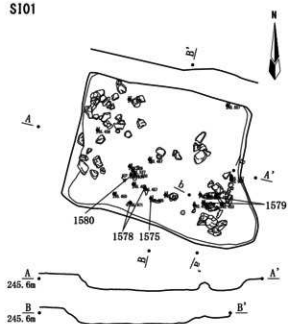
第5項 遺構外出土遺物(図163・164)

1591～1598は土師器環。底部から体部の境界に立ち上がりが見られるもの(1592、1594、1595、1598)と直線的に立ち上がるもの(1591、1593、1596、1597)の2パターンがある。1599～1605は土師器皿。1606～1611は柱状高台付環。1616を除きいずれも高台と底部の境はとがっている。1617、1618は羽釜。把手部は欠落しているが、接続部の痕跡は残っている。1619～1621は須恵器甕。1622～1625は灰釉陶器壺。1622、1623は長頸壺。1626～1630は白磁、1631～1635は青磁。いずれも破片のみである。1636は古墳時代の高環の脚部と思われる。1637は鞆羽口。先端部分と思われるが、溶融している痕跡は無く、未使用品と思われる。

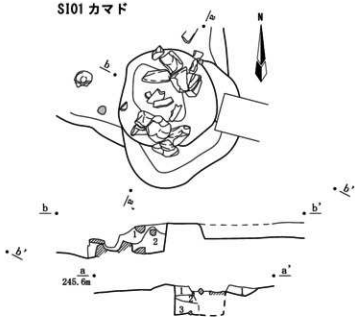
图 154 第 2 次Ⅲ区 I 期总体图



S101



S101 カマド



S102

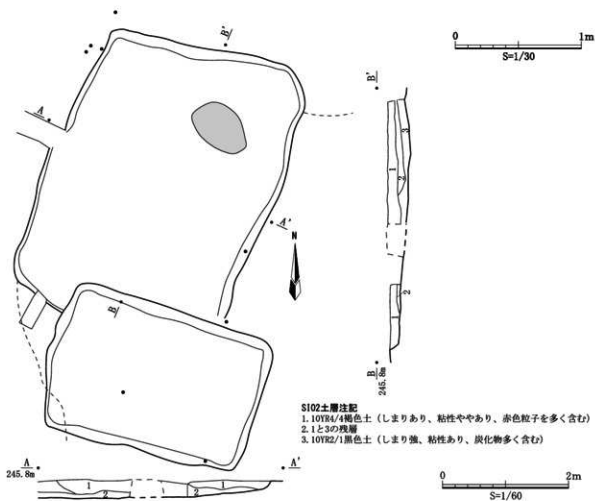
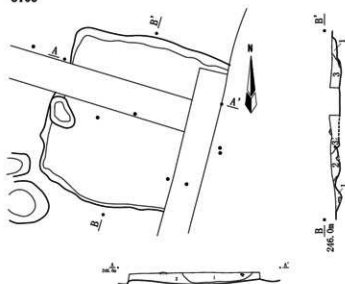


図 155 竪穴建物跡 S101、S101 カマド、S102

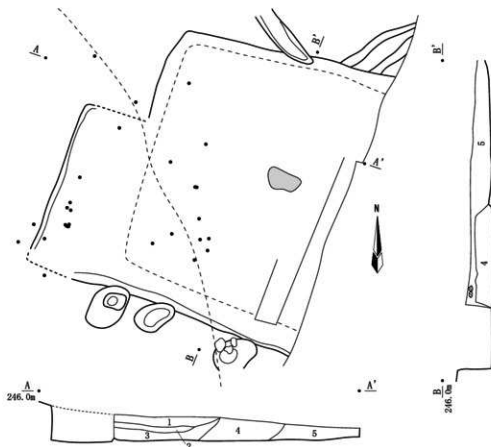
S103



S103セクション土層注記

1. 10YR4/4褐色土（しまりあり、粘性あり）
2. 10YR3/3暗褐色土（しまりあり、粘性あり、灰黄褐色シルトをまばらに含む）
3. 10YR3/3暗褐色土（しまりあり、粘性あり、赤色粒子含む、灰黄褐色シルトを2層よりもブロック状に多く含む）

S104・07



S104土層注記

1. 10YR3/3暗褐色土（しまりあり、粘性あり、灰黄褐色シルトをまばらに含む）
2. 10YR4/4褐色土（しまりあり、粘性ややあり、赤色粒子を多く含む）
3. 10YR2/1黒色土（しまり強、粘性あり、炭化物多く含む）
4. 10YR3/3暗褐色土（しまりあり、粘性あり、赤色粒子含む）
5. 10YR3/3暗褐色土（しまりあり、粘性あり、赤色粒子含む、灰黄褐色シルトをブロック状に多く含む）

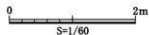
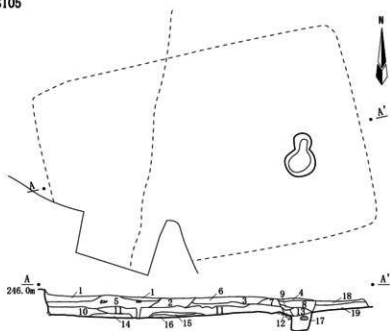


図 156 竪穴建物跡 S103、S104・07

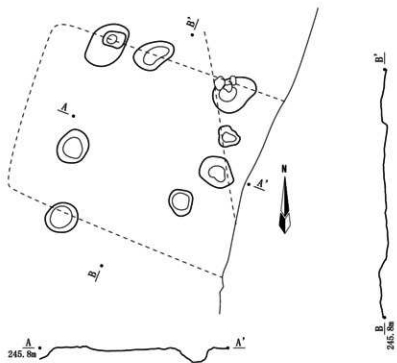
S105



S105土層注記

1. 10YR4/4褐色砂質土 (しまり弱、粘性あり、砂質土、赤色粒子含む、炭化物含む)
2. 10YR4/4褐色土 (しまり弱、粘性あり、赤色粒子をやや含む)
3. 10YR4/4褐色土 (2層と同じ、砂分を多く含む、径20mm以内の礫を多く含む)
4. 10YR4/4褐色砂質土 (1層と同じ)
5. 10YR4/4褐色砂質土 (砂質土、しまり弱、粘性弱、赤色粒子多く含む、炭化物含む、扁平な石を含む)
6. 10YR4/3にぶい黄褐色土 (砂礫、混入物は含まない、径20mm以内の礫を含む)
7. 10YR4/4褐色土 (2層と同じ)
8. 10YR4/4褐色土 (2層と同じ)
9. 10YR4/3にぶい黄褐色土 (6層と同じ)
10. 10YR4/6褐色土 (しまりあり、粘性あり)
11. 10YR4/4褐色土 (3層と同じ、粘性強、鉄分多く含む)
12. 10YR4/3暗褐色土 (しまりあり、粘性あり、粘性プロット10YR6/4を含む)
13. 10YR2/6暗褐色土 (しまりあり、粘性あり、焼土、炭化物を多量に含む)
14. 10YR3/1黒褐色土 (しまりあり、粘性あり、水分多く混入物なし)
15. 10YR5/6黄褐色シルト質土 (シルト質、混入物は含まない)
16. 10YR3/1黒褐色土 (14層と同じ)
17. 10YR2/3黒褐色土 (焼土粒子を多く含む)
18. 10YR4/6褐色土 (しまりあり、粘性あり、焼土、炭化物を含む)
19. 10YR4/6褐色土 (鉄分を多く含む、混入物なし)

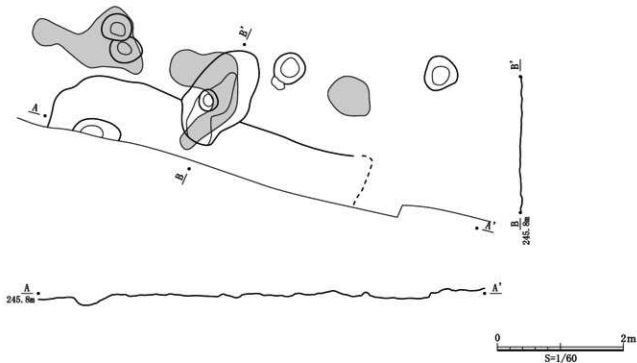
S106



0 2m
S=1/60

図 157 竪穴建物跡 S105、S106

S108



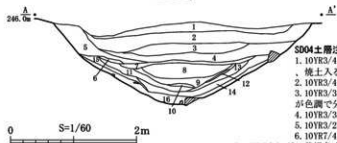
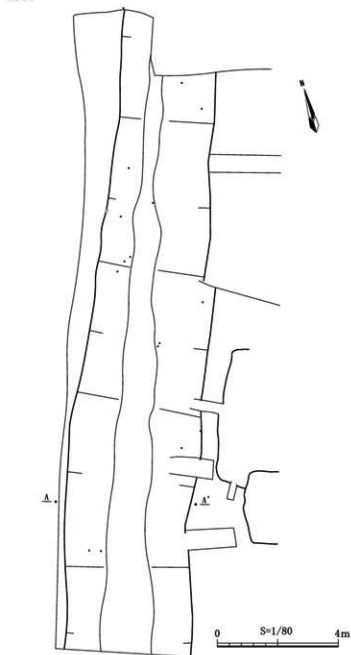
SD01

SD02・03・06



図158 竪穴建物跡 S108、溝 SD01～03、05、06

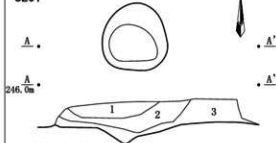
SD04



SD04土層注記

1. 10YR3/4暗褐色土 (しまり弱、粘性あり、粘性土、水分多い、径3~5mm炭化物、焼土入る)
2. 10YR3/4暗褐色土 (しまりあり、粘性あり、炭化物微量に入る)
3. 10YR3/3暗褐色土 (しまりあり、粘性あり、炭化物微量に入る、2層と酷似するが色調で分層)
4. 10YR3/3暗褐色土 (しまりあり、粘性あり、炭化物わずかに入る)
5. 10YR3/2黒褐色土 (しまりあり、粘性弱、砂質土、径10mm内外の礫が多く入る)
6. 10YR7/4にぶい黄褐色土 (しまりあり、粘性弱、シルト質、混入物なし)
7. 10YR5/4にぶい黄褐色土 (しまり強、粘性あり、シルト質) 1~7層大溝上層埋土
8. 7.5YR3/2~6/1黒褐色~褐灰色土 (砂礫層、裏埋構造、レンズ状堆積、径5mm礫が最大程度)
9. 10YR6/1褐灰色土 (均質な細粒砂層、8層と同じであるが、径5mmの礫が入らないため裏埋構造)
10. 10YR5/3にぶい黄褐色土 (9層よりも細粒)
11. 7.5YR3/2~6/1黒褐色~褐灰色土
12. 10YR7/4にぶい黄褐色土 (6層、16層に類似する、シルト質が強い)
13. 10YR5/3にぶい黄褐色土 (10層よりも細粒、シルト質)
14. 10YR6/2灰黄褐色土 (シルト質)
15. 10YR4/1褐灰色土 (砂質層)
16. 10YR5/4にぶい黄褐色土 (シルト質、しまりあり) 8~16層大溝埋土

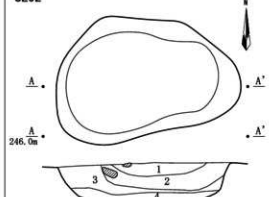
SL01



SL01土層注記

1. 焼土層
2. 暗褐色細粒砂 (礫を多く含む、炭化物多く含む)
3. 暗褐色細粒砂 (2層に地山ブロックを多く混じる)

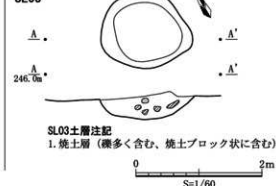
SL02



SL02土層注記

1. 焼土層 (礫多く含む、焼土ブロック状を含む)
2. 暗褐色土 (径30mm内外の礫を多く含む)
3. 褐色砂質土 (赤色粒子多く含む、炭化物含む)
4. 褐色土 (粘性あり)

SL03



SL03土層注記

1. 焼土層 (礫多く含む、焼土ブロック状を含む)

図 159 大溝 SD04、SL01~03

土坑群①

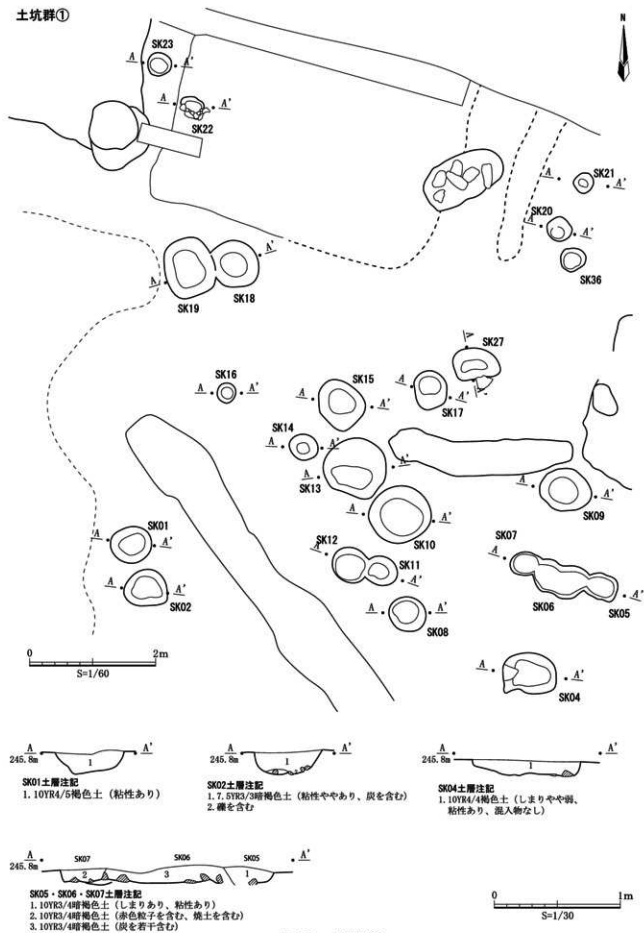


図 160 土坑群①

土坑群②

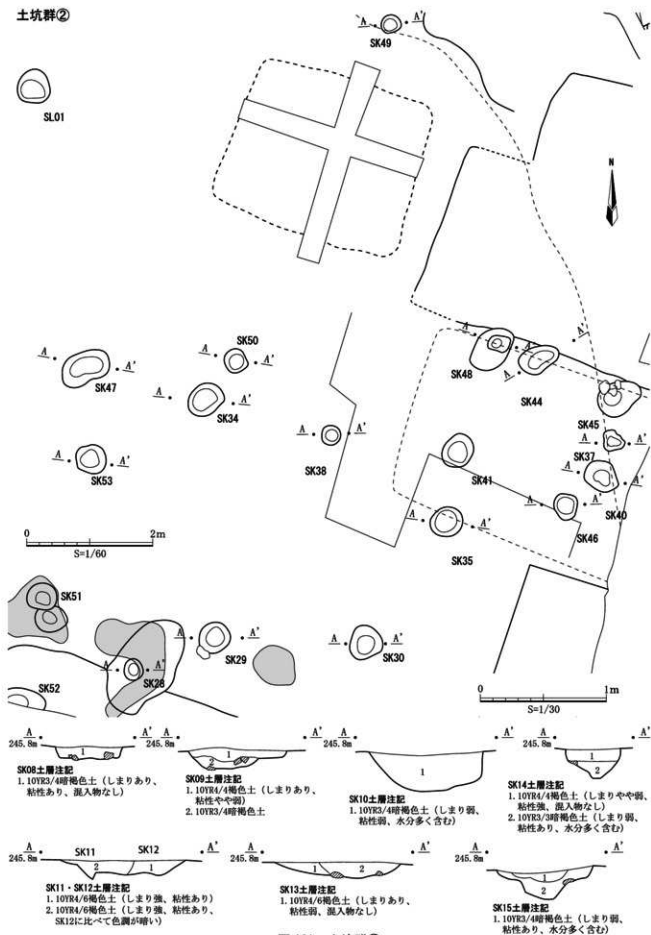
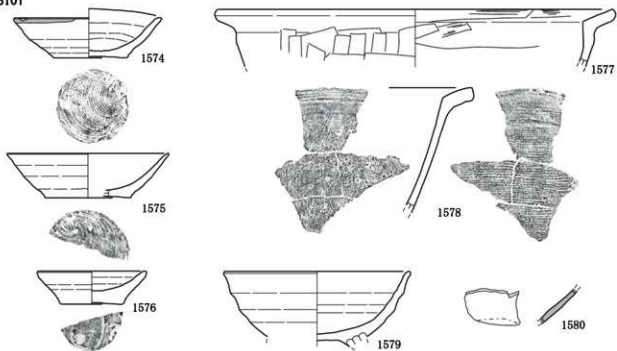


図 161 土坑群②

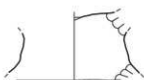
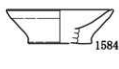
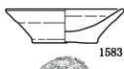
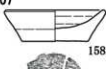
S101



S104



S107



1587

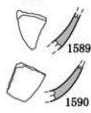
SD03



1588

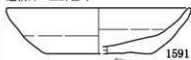
SD04

遺構外 土師器坏



1589

1590



1591



1592



1593



1594



1595



1596



1597

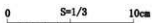


图 163 S101、S104、S107、溝 SD04、遺構外①出土土器

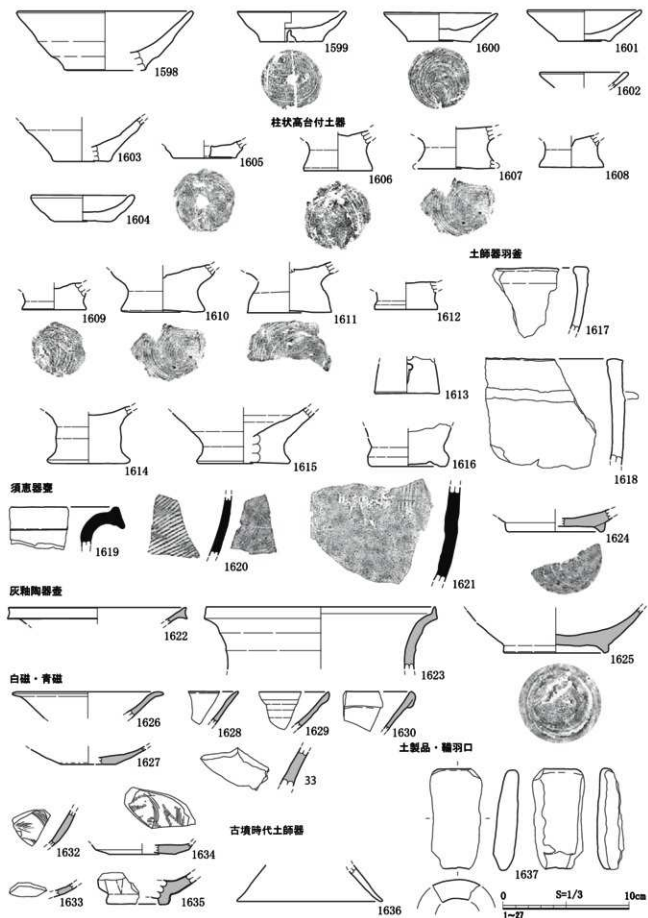


圖 164 遺構外出土土器②

表 15 第 2 次Ⅲ区調査 出土土器観察表

編年 層位 番号	図柄 番号	器種	寸法 (cm)			調製技法	外面		内面		胎土	残存度	時期	備考
			口徑	底径	高さ		外面	内面						
図 163 1374	S101	土師器	6.8	3.9	5.9	コテロコテロ	7.3306/6 褐色	5306/6 褐色	褐色、赤色胎子、 ϕ 3 mm 以上の線	平安	破片着			
図 163 1375	S101	土師器	(12.4)	2.3	16.0	コテロコテロ	7.3306/6 褐色	7.3306/6 褐色	黒、白・赤色胎子、黒目	平安				
図 163 1376	S101	土師器	0.23	2.7	5.0	高麗陶板成形手履	5306/6 明赤褐色	5306/6 明赤褐色	黒、白・赤色胎子、黒目、赤灰	平安				
図 163 1377	S101	土師器	—	(3.4)	—	外輪削へコテロ	5306/6 明赤褐色	5306/6 明赤褐色	黒、白・黒色胎子、黒目	平安	破片			
図 163 1378	S101	土師器	—	(4.0)	—	外輪削へコテロ	7.3306/4 褐色	7.3306/4 褐色	黒、赤色胎子、黒目	平安	破片			
図 163 1379	S101	土師器	(14.4)	0.5	—	コテロコテロ	10387/4 に近い黄褐色	10387/4 に近い黄褐色	黒、白・赤色胎子	平安	30%			
図 163 1380	S101	白磁	—	(2.8)	—	コテロコテロ	7.3306/6 褐色	7.3306/6 褐色	黒、白・赤色胎子	平安	破片			
図 163 1381	S104	土師器	(12.0)	(3.2)	—	コテロコテロ	7.3306/6 褐色	7.3306/6 褐色	黒、白・赤色胎子	平安	破片			
図 163 1382	S107	土師器	7.6	2.5	5.1	コテロコテロ	5306/6 明赤褐色	5306/6 明赤褐色	黒、白・赤色胎子、黒目、赤灰	平安	90%			
図 163 1383	S107	土師器	(0.4)	—	—	コテロコテロ	7.3306/6 褐色	7.3306/6 褐色	黒、白・赤色胎子	平安	60%			
図 163 1384	S107	土師器	2.8	(2.7)	(4.8)	コテロコテロ	7.3306/6 褐色	7.3306/6 褐色	黒、白・赤・黄色胎子、黒目	平安	20%			
図 163 1385	S107	土師器	(14.2)	4.5	2.1	コテロコテロ	7.3306/6 褐色	7.3306/6 褐色	黒、白色胎子、黒目	平安	外・一部脱落			
図 163 1386	S107	土師器	—	(2.9)	2.2	コテロコテロ	7.3306/4 に近い褐色	7.3306/4 に近い褐色	黒、白・赤色胎子、黒目、小黒	平安	90%			
図 163 1387	S107	土師器	—	(14.0)	—	コテロコテロ	5306/6 褐色	5306/6 褐色	黒、白・赤色胎子	平安	破片			
図 163 1388	S107	土師器	—	(2.3)	—	コテロコテロ	7.3307/7 灰白色	7.3307/7 灰白色	黒、白・赤色胎子	平安	破片			
図 163 1389	溝	青磁	—	(3.0)	—	7.3307/7 灰白色	—	—	黒、白・赤色胎子	平安	破片			
図 163 1390	溝	青磁	—	(2.9)	—	7.3307/7 灰白色	—	—	黒、白・赤色胎子	平安	破片			
図 163 1391	Z8-7	土師器	(14.4)	3.7	(8.2)	コテロコテロ	5306/6 明赤褐色	5306/6 明赤褐色	黒、赤色胎子、白色胎層	平安	20%			
図 163 1392	B-6	土師器	—	3.6	(6.8)	高麗陶板成形手履	5306/6 褐色	5306/6 褐色	黒、白色胎層、黒目	平安	破片			
図 163 1393	Zs-3	土師器	—	(4.0)	6.8	5306/6 明赤褐色	5306/6 明赤褐色	5306/6 明赤褐色	黒、白・赤色胎子、黒目	平安	10%			
図 163 1395	C-5	土師器	(14.0)	3.7	(6.2)	コテロコテロ	10387/4 に近い黄褐色	10387/4 に近い黄褐色	黒、赤色胎子、赤・白・黒色砂粒	平安	90%			
図 163 1396	Zs-6	土師器	—	(2.4)	(6.5)	コテロコテロ	10387/4 に近い黄褐色	10387/4 に近い黄褐色	黒、 ϕ 1 mm 砂粒、黒目	平安	破片			
図 163 1397	Zs-3	土師器	—	(2.7)	(6.0)	5306/6 褐色	5306/6 褐色	5306/6 褐色	黒、赤色胎子、白色胎層、黒目	平安	破片			
図 163 1398	Zs-5	土師器	(13.4)	4.7	(5.0)	コテロコテロ	7.3306/6 褐色	7.3306/6 褐色	黒、赤色胎子、白色胎層、黒目	平安	破片			
図 163 1399	Zs-5	土師器	0.7	0.8	4.9	コテロコテロ	7.3306/4 褐色	7.3306/4 褐色	黒、赤色胎子、赤・黒色砂粒	平安	70%			
図 164 1600	土師器	97727	8.8	2.3	5.0	高麗陶板成形手履	5306/6 褐色	5306/6 褐色	黒、赤色胎子、黒目	平安	高麗			
図 164 1601	Zs-3	土師器	0.0	2.5	(5.0)	高麗陶板成形手履	10387/4 に近い黄褐色	10387/4 に近い黄褐色	黒、白色胎子	平安	破片			
図 164 1602	Z2-2	土師器	—	(1.2)	—	コテロコテロ	5306/4 に近い褐色	5306/4 に近い褐色	黒、赤色胎子、白・黒色砂粒、黒目	平安	破片			
図 164 1603	C-6	土師器	—	(3.3)	—	コテロコテロ	7.3306/6 褐色	7.3306/6 褐色	黒、赤色胎子、赤目	平安	破片			
図 164 1604	Zs-3	土師器	0.23	2.1	4.6	コテロコテロ	7.3306/6 褐色	7.3306/6 褐色	黒、赤色胎子、赤・黒色砂粒	平安	90%			
図 164 1605	Zs-4	土師器	—	(1.9)	—	高麗陶板成形手履	5306/6 明赤褐色	5306/6 明赤褐色	黒、赤色胎子、赤・黒色砂粒	平安	破片			
図 164 1606	Zs-5	土師器	—	(3.2)	(5.1)	高麗陶板成形手履	7.3306/4 に近い褐色	7.3306/4 に近い褐色	黒、白・赤色胎子、黒目	平安	破片			
図 164 1607	Zs-5	土師器	—	(2.3)	—	高麗陶板成形手履	7.3306/4 に近い褐色	7.3306/4 に近い褐色	黒、赤色胎子、黒目	平安	破片			
図 164 1608	Zs-5	土師器	—	(3.0)	—	高麗陶板成形手履	10387/4 に近い黄褐色	10387/4 に近い黄褐色	黒、赤・白・黒色胎子、黒目、赤灰	平安	破片			
図 164 1609	Zs-4	土師器	—	(2.1)	(5.0)	高麗陶板成形手履	10387/4 に近い黄褐色	10387/4 に近い黄褐色	白色胎子	平安	破片			
図 164 1610	Zs-1	土師器	—	(3.8)	6.6	高麗陶板成形手履	7.3306/6 褐色	7.3306/6 褐色	赤・黒・白・黒色胎子、黒目	平安	破片			
図 164 1611	Zs-1	土師器	—	(4.0)	8.7	高麗陶板成形手履	5306/6 褐色	5306/6 褐色	赤・黒・白・黒色胎子、黒目、赤灰	平安	破片			
図 164 1612	Zs-5	土師器	—	(2.2)	(5.0)	高麗陶板成形手履	10387/4 に近い黄褐色	10387/4 に近い黄褐色	黒、白・赤色胎子	平安	破片			

試験 番号	試験 種別	試験 種別	寸法 (Leas)		調性技法	色調		靴土	残存度	備考
			口徑	底高		外底	内底			
図 164 1013	Z8-6	土師器	—	(2.4)	(5.0)	10187/3 に55、黄褐色	10187/3 に55、黄褐色	赤・白・黒色靴子、雲母、石灰	—	平安文
図 164 1014	Z8-5	土師器	—	(4.6)	(6.0)	7.5386/6 灰白色	7.5386/6 灰白色	赤・白・赤色靴子	—	平安文
図 164 1015	Z8-5	土師器	—	(4.3)	(7.4)	7.5385/6 黄褐色	7.5385/6 黄褐色	赤・赤色靴子、白色砂眼	—	平安文
図 164 1016	Z8-1	土師器	—	(3.1)	8.2	7.5383/4 に55、褐色	7.5383/4 に55、褐色	赤・赤・白・黒色靴子、雲母	—	平安文
図 164 1017	Z8-3	土師器	—	(3.2)	—	2.5311 黄褐色	2.5311 黄褐色	赤・白靴靴子、雲母	—	平安文
図 164 1018	Z8-6	土師器	—	(8.4)	—	5386/6 褐色	7.5312/2 灰褐色	赤・赤色靴子、灰石、雲母	—	平安文
図 164 1019	Z8-3	土師器	—	(3.2)	—	2.5381/1 黄褐色	—	—	—	平安文
図 164 1020	C-9	土師器	—	(4.7)	—	317/2 灰白色	—	—	—	平安文
図 164 1021	Z8-6	土師器	—	(6.8)	—	7.5386/1 灰白色	—	—	—	平安文
図 164 1022	Z8-5・6	土師器	—	(14.0)	(1.3)	317/1 灰白色	—	—	—	平安文
図 164 1023	Z8-6	土師器	—	(18.0)	(5.0)	2.5384 灰白色	—	—	—	平安文
図 164 1024	Z8-7	土師器	—	(1.8)	(2.0)	317/1 灰白色	—	赤・白靴子、白・黒色靴子	—	平安文
図 164 1025	Z8-4	土師器	—	(3.6)	8.3	87/1 灰白色	—	赤・白靴靴子	—	平安文
図 164 1026	Z8-6	土師器	—	(12.0)	(2.1)	318/1 灰白色	—	—	—	平安文
図 164 1027	Z8-7	土師器	—	(1.4)	(4.2)	87/1 灰白色	—	—	—	平安文
図 164 1028	Z8-6	土師器	—	(2.0)	—	318/1 灰白色	—	—	—	平安文
図 164 1029	Z8-5	土師器	—	(3.0)	—	318/1 灰白色	—	—	—	平安文
図 164 1030	Z8-5	土師器	—	(3.1)	—	318/1 灰白色	—	—	—	平安文
図 164 1031	Z8-6	土師器	—	(3.0)	—	10187/2 赤・白・黄褐色	—	—	—	平安文
図 164 1032	Z8-6	土師器	—	(2.8)	—	318/1 灰白色	—	—	—	平安文
図 164 1033	Z8-3	土師器	—	(0.9)	(5.2)	318/1 灰白色	—	—	—	平安文
図 164 1034	Z8-5	土師器	—	(2.3)	—	7.537/1 灰白色	—	—	—	平安文
図 164 1035	Z8-4	土師器	—	(2.3)	—	2.5381/1 赤・白・黄褐色	—	赤・赤色靴子、白・黒色砂眼、雲母	—	平安文
図 164 1036	Z8-5	土師器	—	(12.9)	(11.2)	10187/3 に55、黄褐色	10187/3 に55、黄褐色	赤・赤色靴子、白・黒色砂眼、雲母	—	平安文
図 164 1037	Z8-7	土師器	—	8.0	—	10187/3 に55、黄褐色	10187/3 に55、黄褐色	赤・赤色靴子	—	平安文

第5節 Ⅲ区Ⅱ期の遺構と遺物

第1項 大畦畔

<位置・主軸> A-3区西端からZW-2区西端に直線的に向かい、そこから直交して北進する。主軸は南北方向を基軸に、N-75°-W。<構造> 中央に幅2.1m、深さ0.6mの水路を有する大畦畔である。第1次調査Ⅱ期の大畦畔と接続する位置にある。水路の両側には石組みが構築されており、特に北岸の石組は良好に残存している。直角に曲がる部分には西岸に石組みが構築されている。この水路は東から西に向かって傾斜していることから、水流は西進すると想定され、水流が当たる西岸部分に浸食防止のための石組みが施工されたと考えられる。北進する大畦畔の水路には石組みは設置されていないことから、水流の影響を受ける部分のみ石組みによる補強がされたものと考えられる。

第2項 水田跡

大畦畔とZZ-1・2区、ZY-100～1区に構築された畦畔によって区画されて、3面の水田跡を検出した。標高は約246.1mで各水田面はほぼ平坦である。ZZ-1・2区の畦畔は南端で途切れており、東側に三日月形の掘り込みが見られる。この構造から水口に当たると想定され、三日月形の掘り込みは止水施設の痕跡の可能性もある。また、ZZ-1・2区で畦畔と同様の主軸を持つ溝状の掘り込みが見ついている。第1次Ⅱ期のSN02においても同様の溝状の掘り込みが検出しているが、機能は不明である。ZY-100・1区で検出した畦畔は、南側のプランが判然としない。

第3項 災害復旧痕跡

ZU・ZV-100・1区において、東西2.5m以上、南北3.5m、深さ0.5mの掘り込みを検出した。掘り込み面は、基本層序15層を上端として、Ⅱ期遺構面まで達している。掘り込み内の埋土は砂礫層で充填されており、堆積構造から人為的な埋め戻し層であると判断される。掘り込み面の時期比定に資する遺物等が出土していないことから、時期を判断することは困難であるが、直上の14層において明治期の陶磁器類が数多く出土している点を考慮して、近世以降の所産と推定する。

第4項 石列

ZU-5区～ZW-1区にかけて直線的に見られる石列を検出した。構成される礫は、こぶし大を主体として、人頭大のものが部分的に極微量混じる。石列の北端部は大畦畔の屈曲部までであり、大畦畔の石組みに乗かって石列が構築されている。大畦畔石組みと石列の間には間層が見られることから、構築の時期差があったことが分かる。ただし、北進する大畦畔と同じ軸を有していることから、同一の基軸線に基づく遺構形成であると考えられる。主軸N-15°-W。

第5項 畑跡？

ZW～ZX-3～6区にかけて長さ14.8m、幅7.0mの範囲において、溝状の掘り込みが連続して並ぶ遺構を検出した。調査段階では畝跡と判断している。東西方向の切り合いはほとんどなく、畝状の約0.1cmの盛り上がり連続して並ぶ。南北方向では、南から北に向かって切り合っている様子を見て取ることができ、作業工程として、南から北に向かった結果と推定される。本調査区で検出した畑跡について、他の調査区の畑跡と比較してみると、構造単位が特異的である。第1次、第2次1区、第3次のものと比較すると、一単位当たりの長さが短く、隣り合う畝のピッチも短い。ZX-2・3区で大畦畔を切って掘り込まれたものがあることから、畝以外の可能性を検討する余地はある。同様の掘り込み形態を有する遺構としては、災害復旧痕跡の可能性が考えられる。

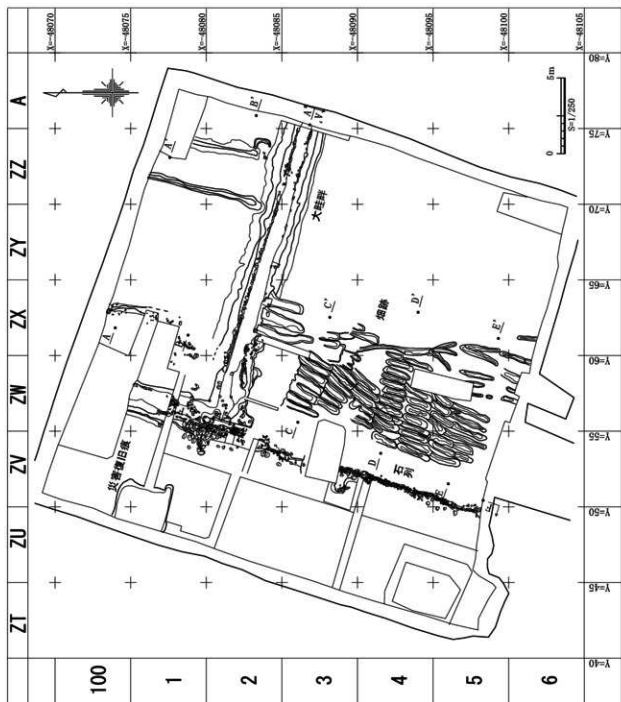
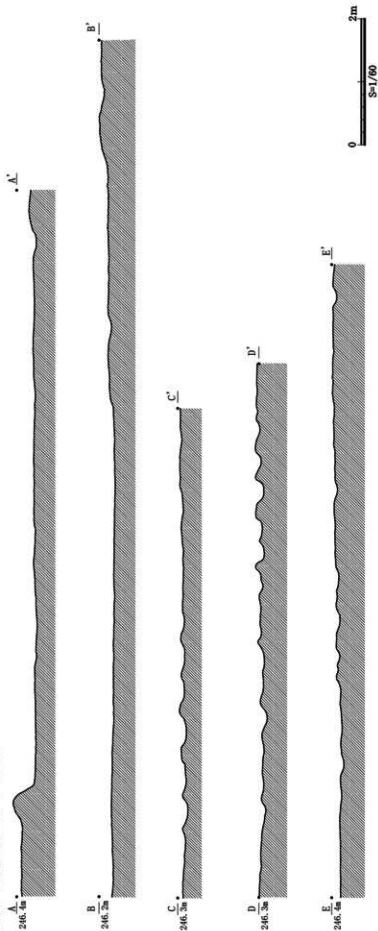


图165 第2次Ⅲ区Ⅱ期全体图

畦畔・畝状遺構エレベーション

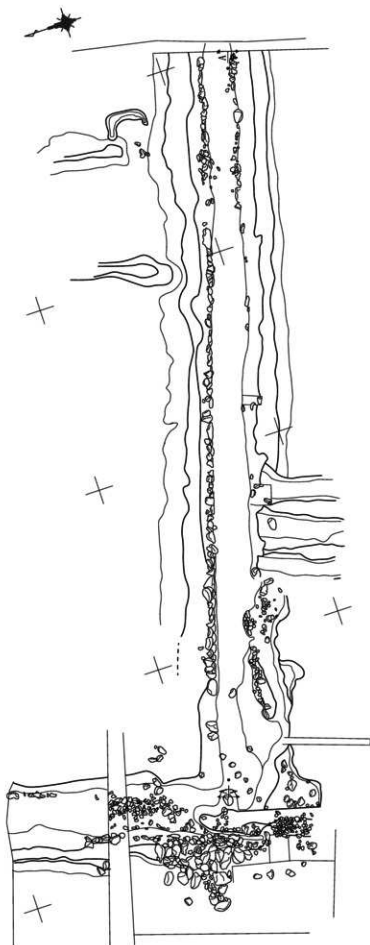


石列見透し



図 166 水田面・畝状遺構エレベーション、石列見透し

大睦群北側海岸見透し図



大睦群北側海岸見透し図

図 167 大睦群

第6章 第3次調査の調査成果

第1節 1期の遺構と遺物

第1項 竪穴建物跡 (SD)

竪穴建物跡 S101 (遺構：図 169・170、遺物：図 172)

<位置・主軸> I-7区に位置している。主軸方位はN-16.9°-E。<形状・規模> 東西4.2m×南北3.05mの方形を呈する。遺構北側のプランは不明瞭であった。検出面からの深度は0.2m。壁面はやや皿状に立ち上がる。<床面> 地山の砂礫層で掘方となる。貼り床は検出しなかった。<柱穴> 建物跡に付属する柱穴は検出しなかった。<カマド> 東壁中央やや南寄りに位置する。袖石の一部が遺存した状態で検出した。カマドの明確な掘方は確認できなかったが、竪穴建物跡の外側に約1m伸びる長大な煙道プランを検出した。<その他> S102北側には人頭大の垂円礫の集石がある。集石の状況はややランダムであり、用途・機能は不明である。S102の床面付近で検出したため、S102に伴う遺構として判断した。<出土遺物> 1638・1639は土師器皿。口縁端部が玉縁状に肥厚し、体部下半に斜行ヘラケズリヘラケズリが見られる。1640～1642は土師器環。体部下半に斜行ヘラケズリが施される。1647は土師器環底部破片を転用した有孔円板である。1643～1646は土師器甕。外面は縦方向ハケメ、内面は横方向ハケメにより調整される。<時期> 10世紀前半頃(甲斐型VII期)

竪穴建物跡 S102 (遺構：図 169・170、遺物：図 172)

<位置・主軸> H-1-3区に位置している。主軸方位はN-17.2°-E。<形状・規模> 東西2.95m×南北2.35mの隅丸方形を呈する。検出面からの深度は0.4m。壁面はやや皿状に立ち上がる。<床面> 地山の砂礫層で掘方となる。貼り床は検出しなかった。<柱穴> 建物跡に付属する柱穴は検出しなかった。<カマド> 南西隅に位置する。袖石の一部が遺存している状態で検出した。焚口部分は浅く掘り込まれている。明確な煙道は確認できなかった。<出土遺物> 1648、1649は土師器甕。体部外面は縦方向のハケメ、内面は横方向のハケメにより調整される。1649は底部に木葉痕が見られる。<時期> 10世紀代

竪穴建物跡 S103 (遺構：図 170、遺物：図 172)

<位置・主軸> F-6区に位置している。主軸方位は不明。<形状・規模> 東西4m×南北4mの範囲に遺物が集中して出土した。掘り込みは判断できなかったため、壁の状況、深さは不明。<出土遺物> 1650は土師器環の口縁部破片。口縁端部が玉縁状に肥厚している。1651は土師器甕底部破片。<時期> 10世紀前半

第2項 掘立柱建物跡 (SB)

掘立柱建物跡 SB01 (遺構：図 171)

<位置・主軸> F-G-8区に位置している。主軸方位N-4°-E。<桁行・梁間> 桁行2間×梁間1間の掘立柱建物跡である。検出はやや困難であり、地山直上まで掘り込んだ状態であろうと検出できた。<柱穴・芯心距離> 径30cmの円形～不整形の柱穴によって構成されている。西列中央の柱穴のみ浅い溝状の掘り込みが見られるのみである。各柱穴の深さは西列中央の溝状の掘り込み以外は約20～30cmでほぼ一定である。芯心距離は約2.2mで一定である。<出土遺物> 柱穴からの遺物の出土は見られなかった。<時期> 平安時代

第3項 土坑 (SK)

第3次調査では3基の土坑を検出した。他の調査区に比べて分布密度は希薄である。SK01は径0.7mの円形で深さ0.2m、SK02は径1.0mの円形で深さ0.3m、SK03は径1.2mの楕円形で深さ0.5m。SK01からは土師器環(1652)が出土した。口縁端部が玉縁で、体部下半に斜行ヘラケズリが見られる。

第4項 遺構外出土遺物

遺構外では、土師器環(1653～1668)、土師器皿(1669～1670)、高台環(1671)、柱状高台付土器(1672)、土師器甕(1674～1685)、土師器羽釜(1686)、灰軸陶器皿(1687)、灰軸陶器碗(1689～1691)、灰軸陶器壺(1692～1695)、白磁碗(1698)、須恵器甕(1696・1697)、古墳時代土師器(1699・1700)、弥生土器(1701・1702)、金属製品(1703・1704)を図化・掲載した。土師器環・皿の傾向として、口縁端部が玉縁を呈し体部

下半に斜行ヘラケズリが見られるもので占められており、他の年次の調査区と比較して、出土する型式が限定的である。土師器甕は口縁端部が四角形に肥厚するタイプのもので占められ、唯一 1675 だけが口縁端部が尖り、内面口縁部付近にミガキが見られ特異的である。これらの傾向は竪穴建物跡出土遺物も同様である。編年上、これらの出土遺物の特徴は新町前遺跡の平安時代集落では最も古い時期に設定することができ、集落造営時期のみ当該地を集落として空間利用していたと考えることができ、それ以降は利用されなくなる区域であったと考えられる。

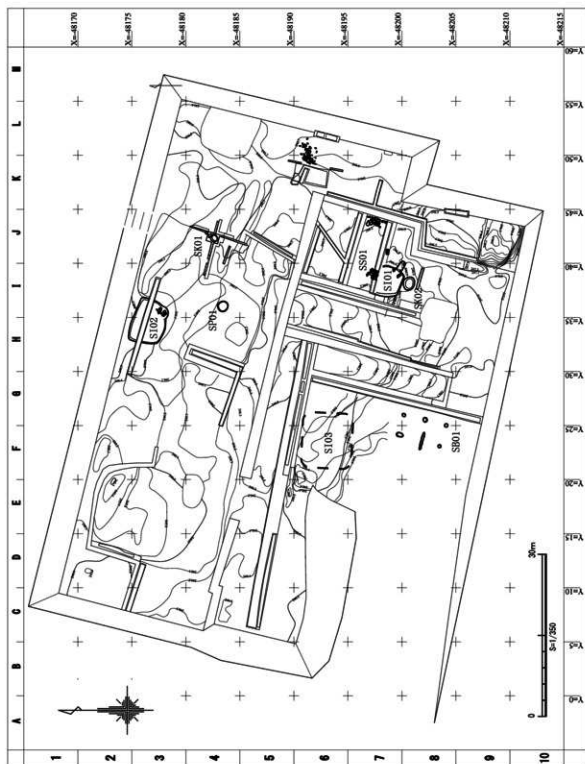
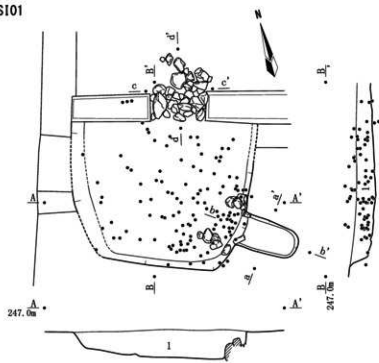


図168 3次調査遺構全体図（I期）

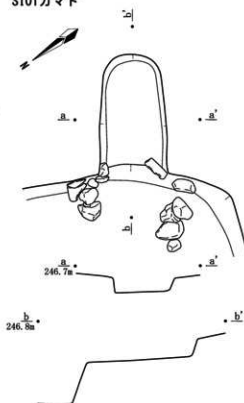
S101



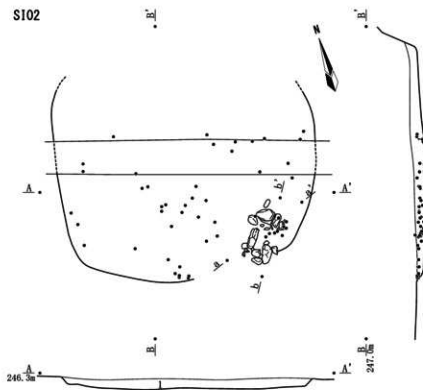
S101土層説明

1. 黒褐色細粒砂質土 (径1cmの礫を多く含む、こぶし大の礫を微量含む、炭化物を多量含む、焼土粒微量含む、遺物含む)

S101カマド



S102



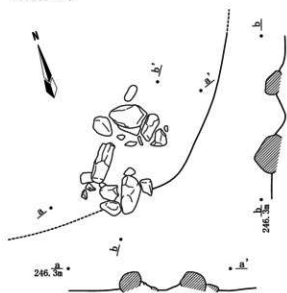
S102土層説明

1. 黒褐色細粒砂質土 (径1cmの礫を多く含む、こぶし大の礫を微量含む、炭化物を多量含む、焼土粒微量含む、遺物含む)

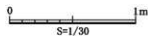
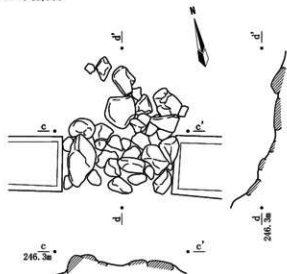


図 169 竪穴建物跡 S101、S102

S102カマド



S101内集石



S103

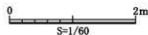
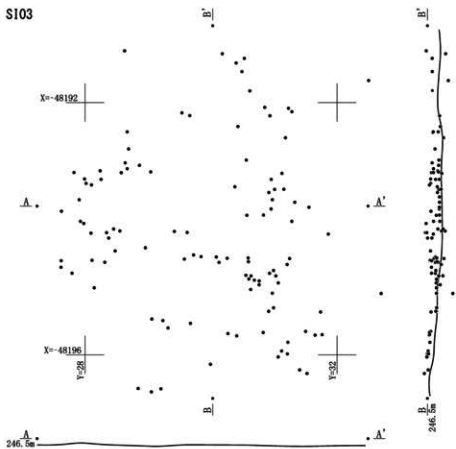
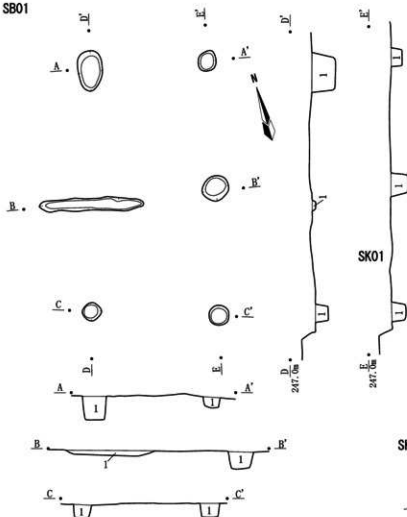


図 170 竪穴建物跡 S101・S102 カマド、S103 遺物分布

SB01

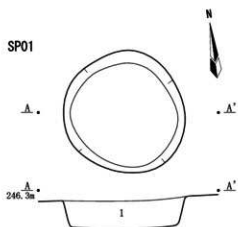


SB01土層説明

1. 黒褐色細粒砂質土 (径1cmの礫を多く含む、こぶし大の礫を微量含む、炭化物を多量含む、焼土粒微量含む、遺物含む)



SP01

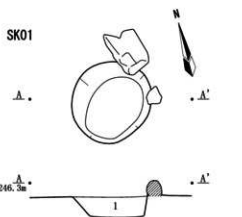


SP01、SK01・SK02土層説明

1. 黒褐色細粒砂質土 (径1cmの礫を多く含む、こぶし大の礫を微量含む、炭化物を多量含む、焼土粒微量含む、遺物含む)



SK01



SK02

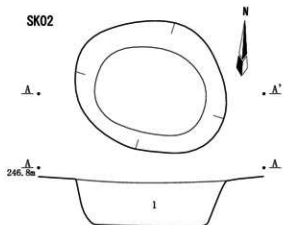
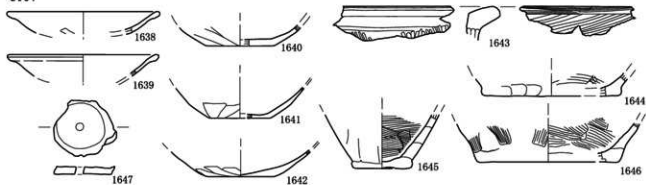
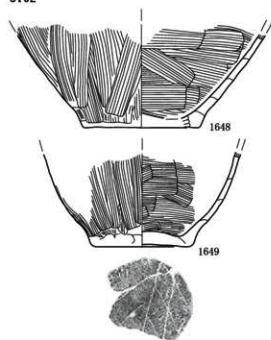


図 171 掘立柱建物跡 SB01、ピット SP01、土坑 SK01、SK02

S101



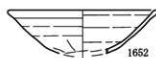
S102



S103



SK01



遺構外
土師器坏

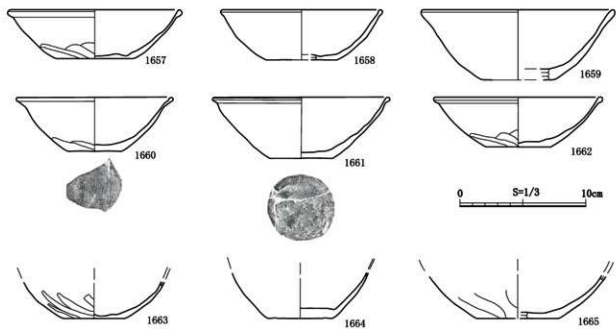
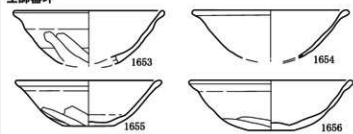


図 172 竪穴建物跡 S101・S102、SK01、遺構外①出土遺物

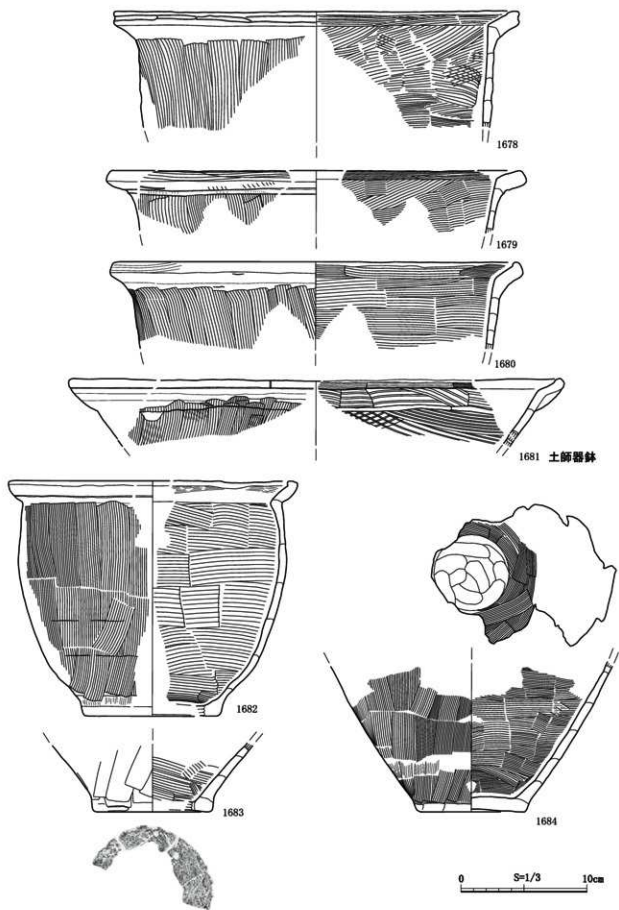


圖 173 遺構外出土遺物②

土師器壺

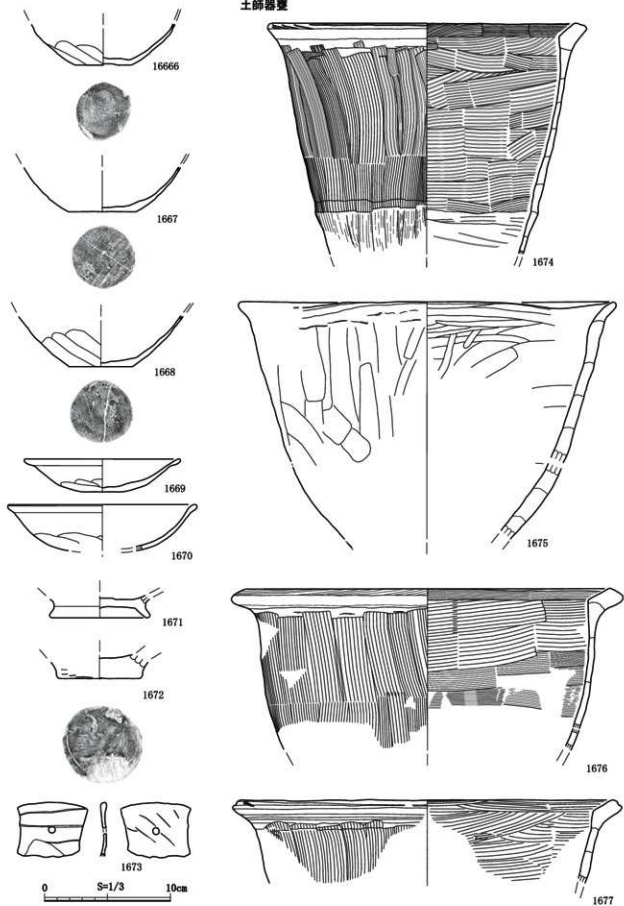


图 174 遺構外出土遺物③

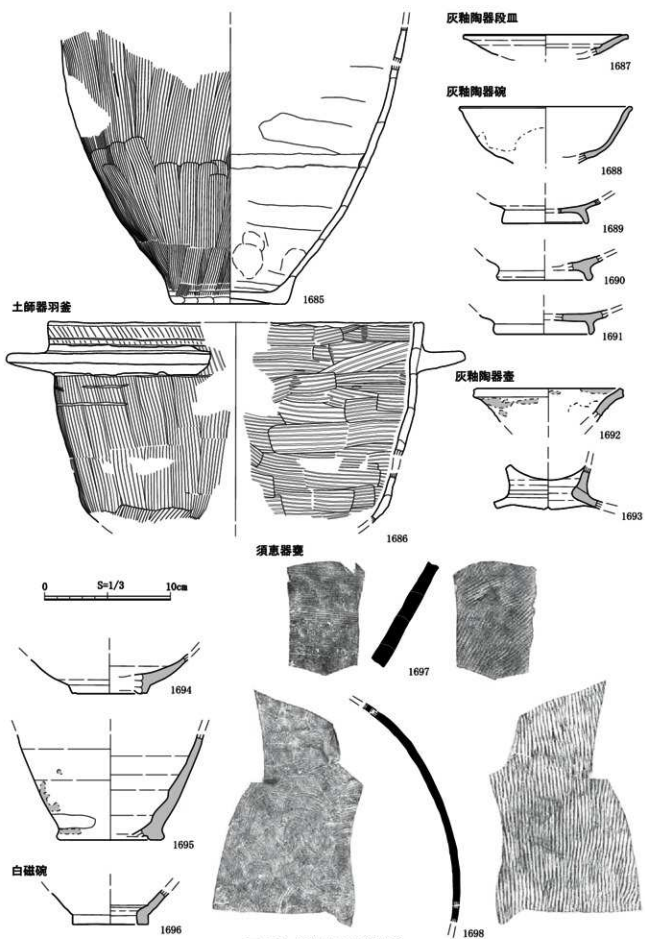
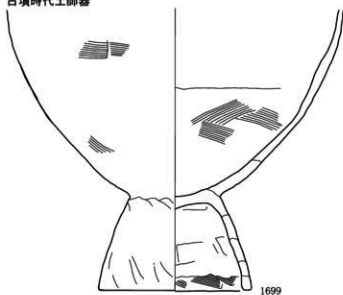


圖 175 遺構外出土遺物④

古墳時代土師器



弥生土器



0 S=1/3 10cm

圖 176 遺構外出土遺物⑤

表 16 第 3 次調査 出土土器観察表

編年 番号	遺物 番号	遺物 種別	測厚	口徑	底径	器高	調査 方法	色調	胎土	構成	残存 成	時期	備考
172	1638	土器	—	(12.1)	(1.8)	—	ロウナテ灰体部下半部付近へケラズリ	2.白陶土質褐色	黒質 灰石、赤土、赤色胎子含む	良好	破片	19世紀前半	
172	1639	土器	—	(12.0)	(1.7)	—	ロウナテ灰体部下半部付近へケラズリ	2.白陶土質褐色	黒質 灰石、赤土、赤色胎子少量含む	良好	破片	19世紀前半	
172	1640	土器	—	(15.3)	(1.7)	—	ロウナテ灰体部下半部付近へケラズリ	2.白陶土質褐色	黒質 灰石、赤土、赤色胎子少量含む	良好	破片	19世紀前半	
172	1641	土器	—	(14.8)	(2.0)	—	ロウナテ灰体部下半部付近へケラズリ	2.白陶土質褐色	黒質 灰石、赤土、赤色胎子含む	良好	破片	19世紀前半	
172	1642	土器	—	(5.2)	—	—	外周縁方向へケム、内周縁方向へケム	2.白陶土質明褐色	黒 赤土、赤土、赤色胎子含む	良好	破片	19世紀前半	
172	1643	土器	—	(11.0)	(1.8)	—	内周縁方向へケム、器底本裏面	2.白陶土質褐色	黒 赤土、赤土、赤色胎子少量含む	良好	破片	19世紀前半	
172	1644	土器	—	(4.3)	(4.0)	—	外周縁方向へケム、内周縁方向へケム、器底本裏面	2.白陶土質明褐色	黒 赤土、赤土、赤色胎子含む	良好	破片	19世紀前半	
172	1645	土器	—	(11.2)	(3.0)	—	外周縁方向へケム、内周縁方向へケム、器底本裏面	2.白陶土質明褐色	黒 赤土、赤土、赤色胎子含む	良好	破片	19世紀前半	
172	1647	土器	—	(6.2)	—	—	ロウナテ、器底中央へ有孔	2.白陶土質明褐色	黒 赤土、赤土、赤色胎子含む	良好	破片	19世紀前半	
172	1648	土器	—	(6.1)	(6.2)	—	外周縁方向へケム、内周縁方向へケム、器底本裏面	2.白陶土質明褐色	黒 赤土、赤土、赤色胎子含む	良好	破片	19世紀前半	
172	1649	土器	—	(7.7)	(7.0)	—	外周縁方向へケム、内周縁方向へケム、器底本裏面	2.白陶土質明褐色	黒 赤土、赤土、赤色胎子含む	良好	破片	19世紀前半	
172	1650	土器	—	(3.0)	(1.7)	—	ロウナテ	2.白陶土質褐色	黒質 赤土、赤土、赤色胎子含む	良好	破片	19世紀代	
172	1651	土器	—	(7.0)	(1.3)	—	ナツ	2.白陶土質褐色	黒 灰石、黒色胎子含む	良好	破片	19世紀代	
172	1652	土器	—	(11.9)	(3.3)	—	ロウナテ灰体部下半部付近へケラズリ	2.白陶土質褐色	黒質 灰石、赤土、赤色胎子含む	良好	25%	19世紀前半	
172	1653	土器	—	(12.0)	(4.3)	—	ロウナテ灰体部下半部付近へケラズリ	2.白陶土質褐色	黒質 赤色胎子多く含む	良好	破片	19世紀前半	
172	1654	土器	—	(12.0)	(3.0)	—	ロウナテ灰体部下半部付近へケラズリ	2.白陶土質褐色	黒質 赤色胎子多く含む	良好	破片	19世紀前半	
172	1655	土器	—	(1.6)	(3.9)	(3.6)	ロウナテ灰体部下半部付近へケラズリ	2.白陶土質褐色	黒質 赤色胎子多く含む	良好	25%	19世紀前半	
172	1656	土器	—	(3.1)	(3.6)	(4.0)	ロウナテ灰体部下半部付近へケラズリ	2.白陶土質褐色	黒質 赤土、赤土、赤色胎子多く含む	良好	10%	19世紀前半	
172	1657	土器	—	(3.8)	(6.1)	(3.9)	ロウナテ灰体部下半部付近へケラズリ	2.白陶土質褐色	黒質 赤色胎子多く含む	良好	50%	19世紀前半	
172	1658	土器	—	(12.9)	(5.0)	(4.0)	ロウナテ灰体部下半部付近へケラズリ	2.白陶土質褐色	黒質 赤色胎子多く含む	良好	20%	19世紀前半	
172	1659	土器	—	(12.0)	(4.3)	(4.3)	ロウナテ灰体部下半部付近へケラズリ	2.白陶土質褐色	黒質 赤色胎子多く含む	良好	25%	19世紀前半	
172	1660	土器	—	(14.1)	(5.0)	(3.9)	ロウナテ灰体部下半部付近へケラズリ	2.白陶土質褐色	黒質 赤色胎子多く含む	良好	破片	19世紀前半	
172	1661	土器	—	(3.1)	(6.2)	(4.8)	ロウナテ灰体部下半部付近へケラズリ	2.白陶土質褐色	黒質 赤土、赤色胎子多く含む	良好	70%	19世紀前半	内周縁部欠損
172	1662	土器	—	(4.8)	(2.8)	—	ロウナテ灰体部下半部付近へケラズリ	2.白陶土質褐色	黒質 赤土、赤色胎子多く含む	良好	破片	19世紀前半	
172	1663	土器	—	(3.1)	(3.0)	—	ロウナテ灰体部下半部付近へケラズリ	2.白陶土質褐色	黒質 赤色胎子多く含む	良好	破片	19世紀前半	
172	1664	土器	—	(6.4)	(3.4)	—	ロウナテ灰体部下半部付近へケラズリ	2.白陶土質褐色	黒質 赤土、赤色胎子多く含む	良好	破片	19世紀前半	
172	1665	土器	—	(4.4)	(3.2)	—	ロウナテ灰体部下半部付近へケラズリ	2.白陶土質褐色	黒質 赤色胎子多く含む	良好	破片	19世紀前半	
172	1667	土器	—	(3.3)	(3.0)	—	ロウナテ灰体部下半部付近へケラズリ	2.白陶土質褐色	黒質 赤色胎子多く含む	良好	破片	19世紀前半	
172	1668	土器	—	(3.0)	(4.0)	—	ロウナテ灰体部下半部付近へケラズリ	2.白陶土質褐色	黒質 赤色胎子多く含む	良好	破片	19世紀前半	
172	1669	土器	—	(2.4)	(3.0)	(2.6)	ロウナテ灰体部下半部付近へケラズリ	2.白陶土質褐色	黒質 赤色胎子多く含む	良好	破片	19世紀前半	
172	1670	土器	—	(3.0)	(3.0)	—	ロウナテ灰体部下半部付近へケラズリ	2.白陶土質褐色	黒質 赤色胎子多く含む	良好	破片	19世紀前半	
172	1671	土器	—	(7.6)	(1.0)	—	ロウナテ、器口付高付	2.白陶土質褐色	黒質 赤色胎子多く含む	良好	破片	19世紀前半	
172	1672	土器	—	(6.4)	(1.0)	—	ロウナテ、器底中央	2.白陶土質褐色	黒質 赤色胎子多く含む	良好	破片	19世紀前半	
172	1673	土器	—	(4.0)	(1.0)	—	ロウナテ、器底中央へ有孔	2.白陶土質褐色	黒質 赤土、赤色胎子多く含む	良好	破片	19世紀代	
172	1674	土器	—	(18.3)	(1.0)	—	外周縁方向へケム、内周縁方向へケム	2.白陶土質褐色	黒 赤土、赤色胎子少量含む	良好	破片	19世紀代	
172	1675	土器	—	(18.0)	(1.0)	—	外周縁方向へケム、内周縁方向へケム	2.白陶土質褐色	黒 赤土、赤色胎子少量含む	良好	破片	19世紀代	

第2節 II期の遺構と遺物

第1項 畑跡

II期遺構面では、調査区一面に畑の畝跡を検出した。標高は246.5～246.8、m検出はやや困難であり、調査区東西側においては検出が困難でありプランは判然としない。調査区南側では東西方向に伸びる畝が見られ、主軸N-10～15°-Eの主軸に直交する。畝の幅は約0.4m、高さは検出時点で約0.1～0.2mの盛り上がり方を有していた。調査区北側では南北方向に主軸を有する畝跡が見ついている。東西方向に伸びる畝を切って構築されていることから、主軸の異なる畝群には時間差が認められる。主軸方位は第1次SN16、第2次1区・Ⅲ区の畝跡と同様であり、同じ基軸設定の下で構築されたと考えられる。出土遺物はほとんどなく、構築時期及び存続時期、廃絶時期の特定に資する資料は無いが、検出した層序関係から他の調査区同様に中世に帰属するものとみて大過ない。

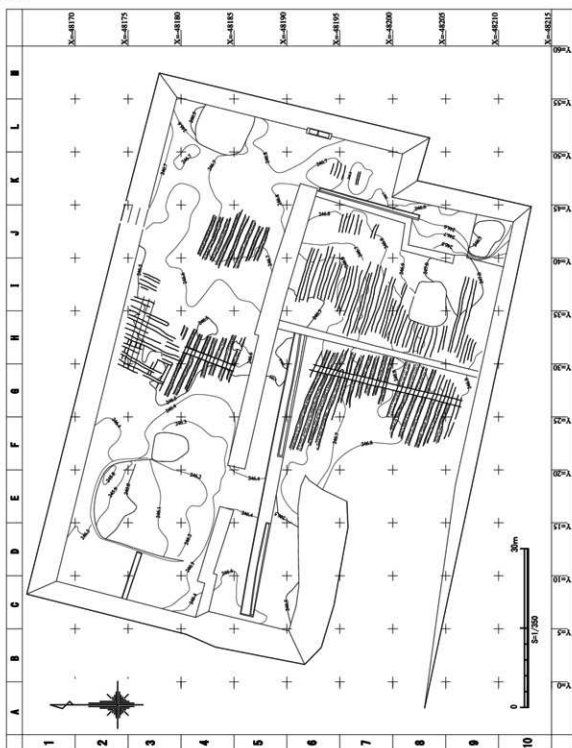


図177 第3次調査遺構全体図（II期）

Ⅱ期畑跡

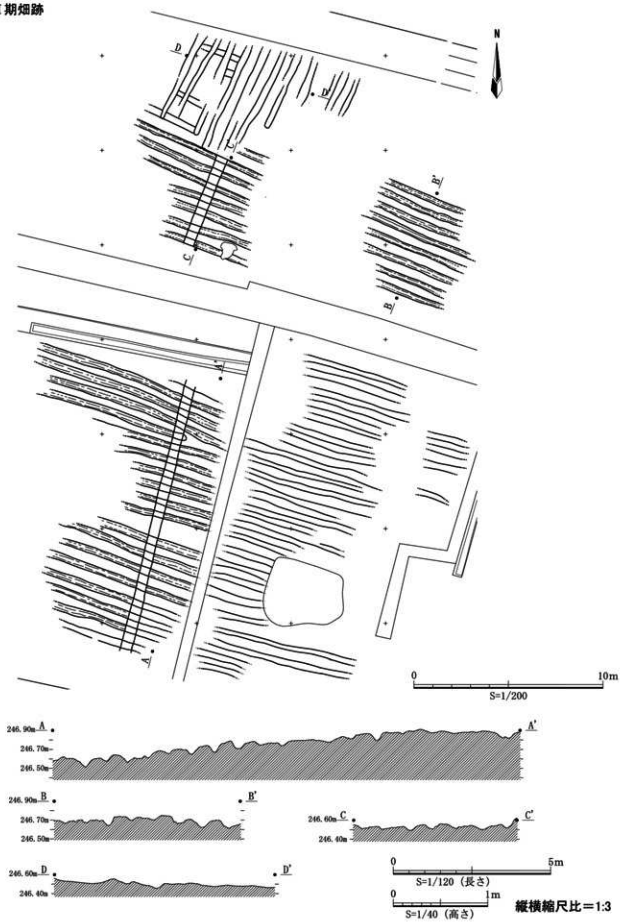


図178 畑跡

第7章 第4次調査の調査成果

第1節 I期の遺構と遺物

第1項 竪穴建物跡(SD)

竪穴建物跡 S107 (遺構: 図 180、遺物: 図 182)

<位置・主軸> D・3・4区に位置している。<形状・規模> 東西4.15m×南北2.9mの楕円形を呈する。検出面からの深度は0.3m。壁面はやや皿状に立ち上がる。<床面> 覆土3層では炭化物を多量に含む土層がみられる。床面は平坦で地山細粒砂層で掘方となり、貼り床は見られない。<柱穴> 検出しなかった。<炉> 炉を有さない。<その他> 覆土中の炭化物が多く、2層では焼土も多くみられる。炭化材の遺存が少ないが、焼失竪穴建物跡と考えられ、空気の供給が良好であったため、建築材が燃え残らなかったものと想定される。<出土遺物> 大破片の遺物は建物跡北側に集中する傾向がある。1705～1706は甕で、1705の口縁部にはキザミが施される。1707～1709は壺。1707の体部は甕状を呈する。1710・1711は台付甕。1710は台部のくびれ部がくの字状であるが、1711のくびれ部は緩く湾曲する。<時期> 弥生時代終末～古墳時代初頭

竪穴建物跡 S108 (遺構: 図 180、遺物: 図 182)

<位置・主軸> D・E-2区に位置している。<形状・規模> 東西3.4m×南北3.4mの不整形を呈する。検出面からの深度は0.3m。壁面は皿状に立ち上がる。<床面> 床面は若干波打つような形状を呈するが、基本的には平坦である。<柱穴> 検出しなかった。<炉> 炉を有さない。<出土遺物> 建物跡西側に多く出土する傾向がある。1712は台付甕。体部内面は横方向ハケ、外面は縦方向のハケメ後体部中央部は横方向のハケメで調整されている。1713～1720は甕。体部外面は縦方向ハケメ、内面は横方向ハケメで調整されている。1715～1719は口縁部にキザミが施される。58は口縁部がキャリバー形を呈する甕。内面は横方向のミガキが施されている。1723は小型銚。体部外面下半は反時計回り方向に傾く縦方向ハケメ、体部上半は時計回りに傾く縦方向ハケメで調整されている。1724は壺体部破片。<時期> 弥生時代終末～古墳時代初頭

竪穴建物跡 S109 (遺構: 図 180、遺物: 図 181)

<位置・主軸> C-1区に位置している。<形状・規模> 東西3.35m×南北2.4mの不整形を呈する。建物跡の北側は調査区外にある。検出面からの深度は0.15m。壁面は皿状に立ち上がる。<床面> 床面は基本的に平坦であるが、西側は深さ0.2mほど落ち込む。<柱穴> 建物跡中央部に東西方向に並ぶ柱穴(SP1・SP2)を検出した。深さ20cm。<炉> 炉を有さない。<出土遺物> 1725・1726は壺。1725は口縁部を折り返して作っており、端部にキザミが施される。1726口縁外面は斜め方向のハケメで調整されている。1727は台付壺?の台部。立ち上がりやや急峻。1728・1729は甕の底部。1730～1732は甕破片。<時期> 弥生時代終末～古墳時代初頭

第2項 溝状遺構(SD)

溝状遺構 SD03～12 (遺構: 図 175、遺物: 図 177)

<遺構概要> SD03～SD09は南西-北東方向の溝で、SD10～12はそれに直交する北西-南東方向の溝。いずれも幅約0.5～7mで深さ0.2～0.3m。断面形状は皿形、箱型のもので構成されている。SD05、06はS108に切られている。SD06と07、SD04と06、12は切り合い関係にあるが、前後関係は把握できなかった。土層堆積の観察では、水の流れの有無は判断できず、ほぼ平坦でありその方向も不明である。これらの溝群については、調査時点ではその機能・用途を推定できなかったが、平面プランの規則性から、以下の点が指摘できる。① SD04・5・7・8は同様の軸かつ長さもほぼ同じであり、並列する可能性がある。② 同一の番号が付されている2本のSD06は、約1mの芯々距離で並列しており、やや南側に湾曲する角度も同じであり対をなしているかもしれない。③ SD11と12も同様に主軸と屈曲部の様相が酷似している点から、この2本の溝が対になる可能性がある。以上のことから、この溝状遺構は3つの遺構群が重複していると推測する。

<出土遺物> 1733は壺底部破片。SD05から出土した。1734・1735は甕破片。SD06から出土した。1736は甕口縁部破片。SD07から出土した。1737は甕破片。

第3項 ビット (SP)

I期遺構面では、SP21～23の3基のビットを検出した。径約0.3m、深さ0.2～0.4m。溝状遺構群の南東に位置しており、3基のビットが集中する。用途は不明である。

表 17 溝状遺構計測一覧表

遺構名	位置	寸法 (m)			主軸	その他
		長さ	幅	深さ		
SD04	D-3区	2.8	0.5	0.2	N-64.9-E	
SD05	D-2・3区	3.8	0.7	0.1	N-49.1-E	
SD06 北側	C-2・3区、D-2区	8.6	0.4	0.2	N-68.4-E	
SD06 南側	C～E-3区	9.6	0.3	0.2	N-71.7-E	
SD07	C・D-2区	2.8	0.3	0.2	N-48.5-E	
SD08	C・D-2区	4.4	0.4	0.2	N-48.9-E	
SD09	B-3区	2.8	0.4	0.1		
SD10	D-2・3区	1.6	0.3	0.3	N-26.7-W	
SD11	D-2・3区	3	0.3	0.1	N-20.3-W	
SD12	B-2・3、C-2・3区	4.8	0.3	0.2	N-31.1-W	
SD16	D-3区	0.4	0.3	0.1		

第4項 遺構外出土遺物

1741～1755は壺。1741・1742は折り返し口縁。1741は口縁端部にキザミを施すものであり、外面に櫛描波状文がみられる。1742は外面を縦方向のハケで調整するがややランダム。1745は肩部に縄文が施されており、2個のボタンが付されている。1746の内面には上部に縦方向ミガキ、下部に縦方向ハケメが見える。1747・1748は体部破片。1747の外面は格子状にミガキが施されている。内面下部は横方向ハケメが均質に並んで施されている。1748の外面は縦方向ハケメ後肩部のみ横方向ミガキが施されている。内面は横方向ハケメが施されている。1749～1753は底部破片。1754・1755は台付甕の台部。1755の外面はハケメがきれいに並ぶ。1756・1757は高環。台部に透かしが施される。1757の体部外面は縦方向を基調としたミガキ、内面は横方向のミガキで調整されている。1757はほぼ完形の高環である。1758は台を有する瓢型の壺。台部に扁平な球形の体部を有し、口縁部は頸部から鉛直方向に立ち上がる形状を有する。頸部は縦方向ハケメ、体部は横方向ハケメ、高台部は縦方向ヘラケズリで調整されている。

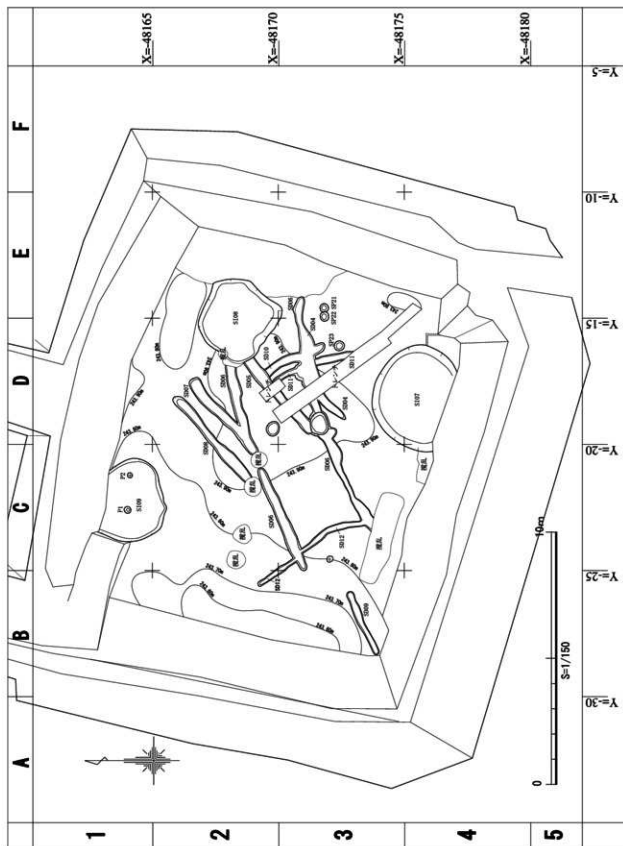
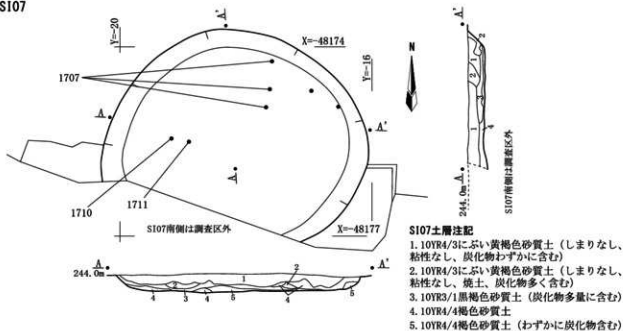
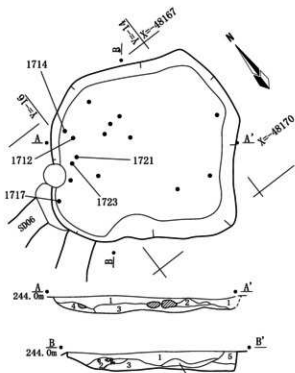


图179 第4次調査遺構全体図（I期）

S107

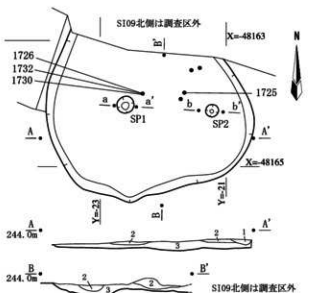


S108

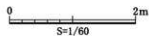
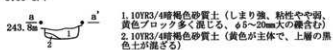
**S108土層注記**

1. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土（しまりなし、粘性なし、炭化物わずかに含む）
2. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土（しまりなし、粘性なし、焼土、炭化物多く含む）
3. 10YR3/1黒褐色砂質土（炭化物多量に含む）
4. 10YR4/4褐色砂質土
5. 10YR4/4褐色砂質土（わずかにカーボン含む）

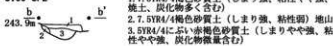
S109

**S109土層注記**

1. 粗砂まじり中粒砂、金雲母をわずかに含む、全体的に炭が広がる
2. 1と3の中間の粒径
3. 一層とくらべ細かい、細砂の寄りの中粒砂

**S109-SP1**

1. 10YR3/4暗褐色砂質土（しまり強、粘性やや弱、黄色ブロック多く混じる、φ5~20mm大の礫含む）
2. 10YR3/4暗褐色砂質土（黄色が主体で、上層の黒土が混ざり）

S109-SP2

1. 7.5YR4/4褐色砂質土（しまり強、粘性やや強、焼土、炭化物多く含む）
2. 7.5YR4/4褐色砂質土（しまり強、粘性弱）地山
3. 5YR4/4にぶい赤褐色砂質土（しまりやや強、粘性やや強、炭化物微量含む）



図180 竪穴建物跡S107~09平面図

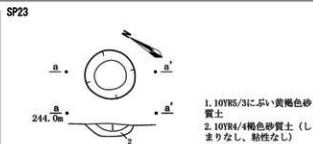
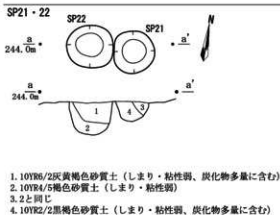
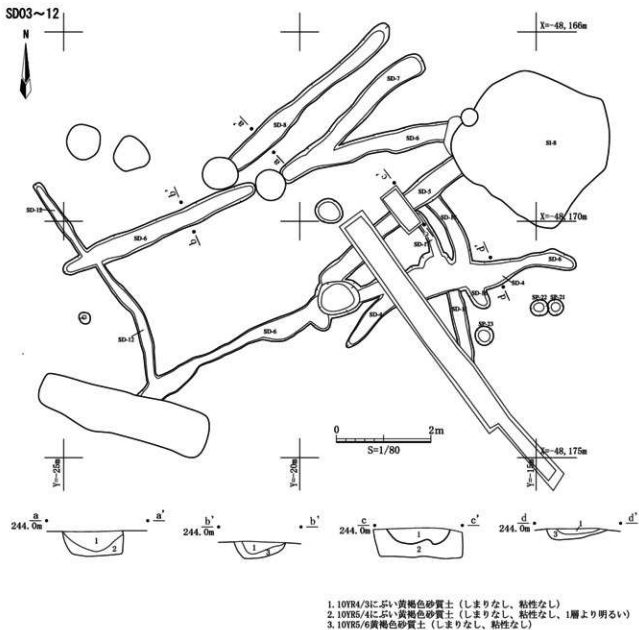
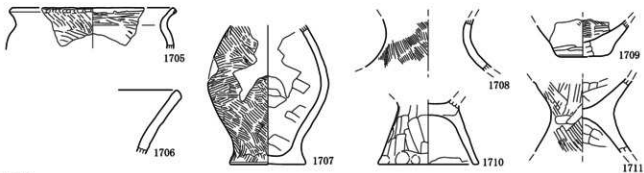


図181 4次I期 溝SD03~12、ピットSP21~23

S107



S108

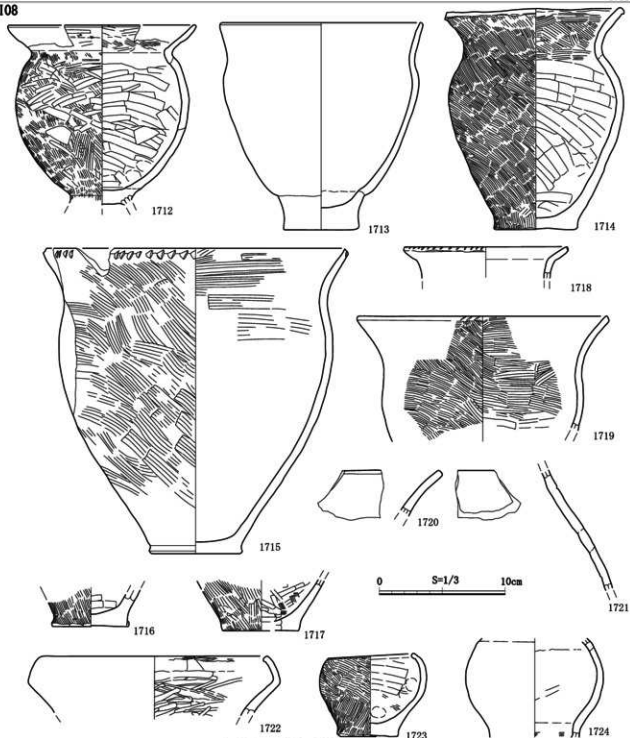
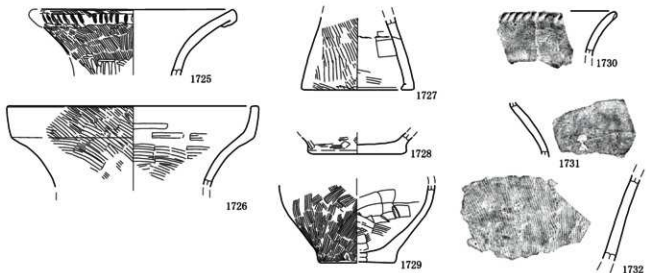


图182 S107、S108 出土土器

S109



SD05



1733

SD06



1734



1735

SD07



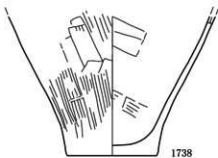
1736

SD09



1737

SD10



1738

SP23



1739

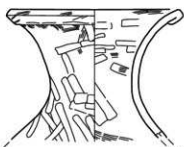


1740

I 期遺構外



1741



1742



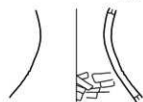
1743



1745



1746



1744

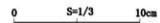


图183 S109、溝 (SD)、I 期遺構外①出土土器

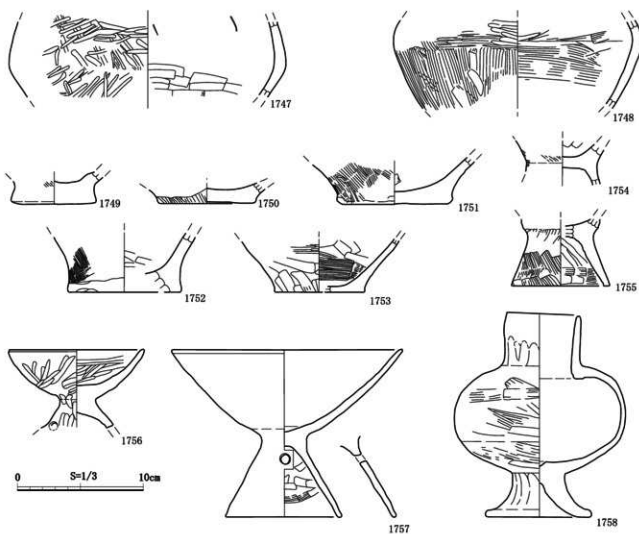


圖184 I期遺構外②出土土器

第2節 II期の遺構と遺物

第1項 竪穴建物跡(SI)

竪穴建物跡 SI05 (遺構：図 184、遺物：図 187)

<位置・主軸> D-3・4区に位置している。<形状・規模> 東西 3.8 m×南北 4.55 mの楕円形を呈する。検出面からの深度は 0.4 m。壁面はやや皿状に立ち上がる。<床面> 覆土 3層では炭化物を多量に含む土層がみられる。床面は平坦で地山細粒砂層で掘方となり、貼り床は見られない。<柱穴> 検出しなかった。<炉> 灰を有さない。<その他> 覆土中の炭化物が多く、2層では焼土も多くみられる。炭化材の遺存が少ないが、焼失竪穴建物跡と考えられ、空気の供給が良好であったため、建築材が燃え残らなかったものと想定される。<出土遺物> 大破片の遺物は建物跡北側に集中する傾向がある。1759～1761は裏で、1761の口縁端部にはキザミが施される。1762は裏底部。1763は台付裏の台部。<時期> 弥生時代終末～古墳時代初頭

竪穴建物跡 SI06 (遺構：図 184、遺物：図 187)

<位置・主軸> D-3・4区に位置している。<形状・規模> 灰跡と思われる焼土の分布がみられる土坑状の掘り込みを検出した。規模は東西 0.63 m、南北 0.5 m。灰石等の構造材は検出しなかった。<出土遺物> 1764・1765は裏底部破片。外面は縦方向のハケメ、内面は横方向のハケメによって調整されている。1766は台付裏の台部。1767～1769は小型の鉢。1768の口縁部外周はミガキによって調整されているが、体部は縦方向のハケメを基調とする。1769は体部上半が屈曲して開く形状を呈する。1770・1771は高環。<時期> 弥生時代終末～古墳時代初頭

第2項 ビット(SP) (遺構：図 184～186、遺物：図 187)

II期遺構面では、SP05～SP20までの13基(SP10・11は欠番)が検出した。竪穴建物跡に付随すると明確に判断できるビットはなく、また、掘立柱建物に伴うものとも考えられない。ビットの分布は竪穴建物跡 SI05、SI06の間に集中しているが、切り合いの関係から SI06に共存するもの可能性があり、SI06の規模次第では SI06の柱穴になるかもしれない。いずれにしても、SI06の規模が明らかにならなかったため、推定の域を出ない。

第3項 遺構外出土遺物(遺物：図 187)

1778は壺口縁部であり、口縁端部にキザミが施される。1779は同じく壺口縁部であり端部が折り返されている。内面はハケメによる調整が施されている。1780は壺の底部であり、内面は横方向のハケメ、外面は横方向のミガキによって調整されている。1781は台付裏の台部。くびれ部には粘土帯が付けられており、縦方向のキザミが施されている。1782、1783は台付裏の台部。1782はやや内湾しているのに対し、1783は直線的に立ち上がっている。両方とも外面は縦方向のハケメ、内面は横方向のハケメが施されている。

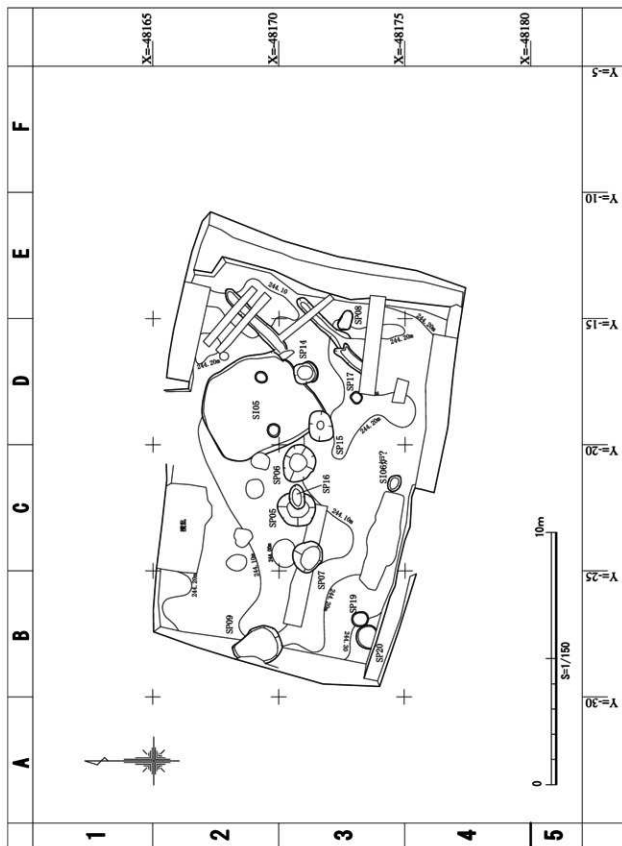
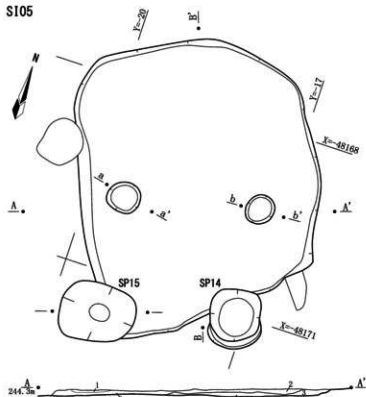


圖185 4次調査 遺構全体圖 (Ⅱ期)

S105

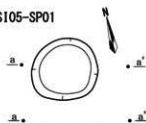


<S105土層説明>

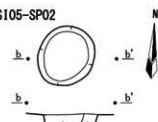
1. 10YR4/2灰黄褐色砂質土、カーボン多量に含む(しまりなし、粘性なし)
2. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土(しまりなし、粘性なし)
3. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土、焼土含む(しまりなし、粘性なし)

0 1 2 3
S=1/60

S105-SP01



S105-SP02

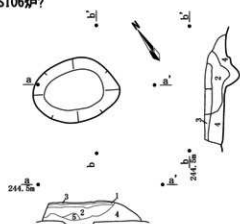


<S105-SP01, 02土層説明>

1. 10YR4/2灰黄褐色砂質土、カーボンわずかに含む(しまりなし、粘性なし)
2. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土(しまりなし、粘性なし)

0 1
S=1/30

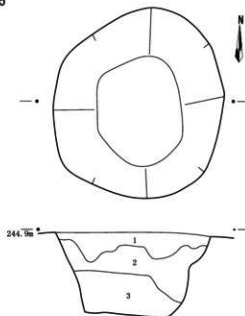
S106炉?



<S106炉?土層説明>

1. 10YR5/6赤色砂質土(しまり強、粘性なし、焼き締まっていて硬い)焼土
2. 10YR5/3赤褐色砂質土(しまりなし、粘性なし、焼土混ざる)
3. 10YR4/2灰黄褐色砂質土(しまりなし、粘性なし)
4. 10YR5/3にぶい黄褐色砂質土(しまりなし、粘性なし)
5. 10YR5/3赤褐色砂質土(しまりなし、粘性なし、焼土わずかに含む)

SP05

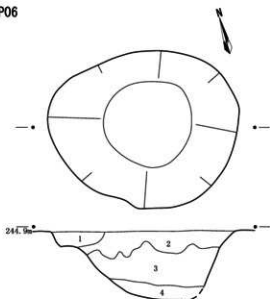


<SP05土層説明>

1. 10YR5/2灰黄褐色砂質土(しまりなし、粘性なし)
2. 10YR4/2灰黄褐色砂質土(しまりなし、粘性なし)
3. 10YR4/2灰黄褐色砂質土、2層よりやや暗い(しまりなし、粘性ややあり)

図186 竪穴建物跡S105、S106炉?、ピットSP05

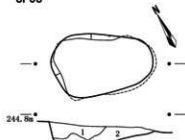
SP06



<SP06土層説明>

1. 10YR5/2灰黄褐色砂質土 (しまりなし、粘性なし)
2. 10YR4/2灰黄褐色砂質土 (しまりなし、粘性なし)
3. 10YR4/2灰黄褐色砂質土 (しまりややあり、粘性ややあり)
4. 10YR3/3暗オリーブ褐色砂質土 (しまりややあり、粘性ややあり)

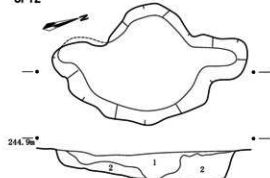
SP08



<SP08土層説明>

1. 10YR4/2灰黄褐色砂質土 (しまりなし、粘性なし)
2. 10YR4/3灰黄褐色砂質土 (しまりなし、粘性ややあり)

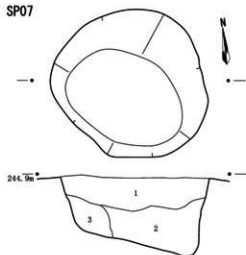
SP12



<SP12土層説明>

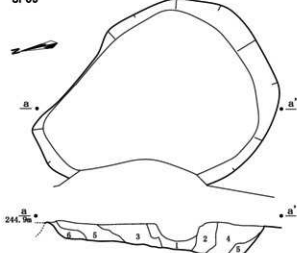
1. 10YR3/3暗褐色砂質土、炭化物わずかに含む (しまりなし、粘性ややあり)
2. 10YR4/2灰黄褐色砂質土 (しまりなし、粘性ややあり)

SP07



1. 10YR5/3にぶい黄褐色粘質土 (しまりなし、粘性ややあり)
2. 10YR4/2灰黄褐色砂質土 (しまりなし、粘性ややあり)
3. 10YR3/3暗褐色砂質土 (しまりなし、粘性ややあり)

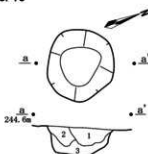
SP09



<SP09土層説明>

1. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土 (しまり・粘性やや弱)
2. 10YR3/3暗褐色砂質土 (しまり・粘性やや弱、1~2cm大の小礫含む)
3. 10YR4/5褐色砂質土 (しまり・粘性やや弱)
4. 10YR3/2黒褐色砂質土 (しまり・粘性やや弱、炭化物少量含む、小礫多く含む)
5. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土 (しまり・粘性やや弱)
6. 10YR4/4褐色砂質土 (しまり・粘性弱)

SP13



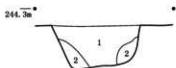
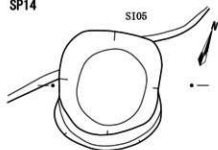
<SP13土層説明>

1. 10YR3/2黒褐色砂質土主体 (しまり・粘性やや強、焼土・炭化物多く含む)
2. 10YR4/2灰黄褐色砂質土 (しまり・粘性弱)
3. 10YR5/3にぶい黄褐色砂質土 (しまり・粘性弱)

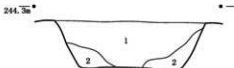
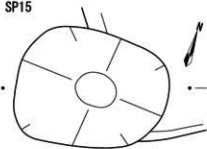


図187 ピットSP06~09, SP12・13

SP14



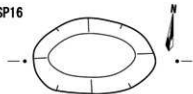
SP15



<SP14・15土層説明>

1. 10YR4/2灰黄褐色砂質土（しまりなし、粘性なし）
2. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土（しまりなし、粘性なし）

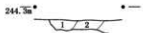
SP16



<SP16土層説明>

1. 10YR4/2灰黄褐色砂質土（しまり・粘性やや弱）
2. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土（しまり粘性弱）

SP17



<SP17・18土層説明>

1. 10YR4/2灰黄褐色砂質土（しまりなし、粘性なし）
2. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土（しまりなし、粘性なし）

SP19・20



調査区南壁



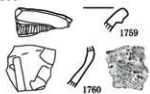
<S119・20土層説明>

1. 10YR4/2灰黄褐色砂質土（しまりなし、粘性なし）
2. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土（しまりなし、粘性なし）



図188 SP14～17、SP19・20

S105



1759

1760



1762

S106



1764



1766

S105-SP01



1761



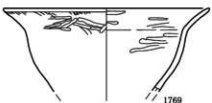
1763



1765



1767



1769



1771



1768

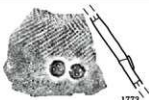


1770

SP05



1772



1773

SP06



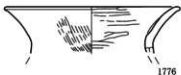
1774

SP07



1775

SP12



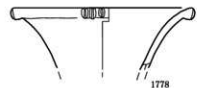
1776

SP15



1777

II期遺構外



1778



1779



1780



1781



1782



1783

0 S=1/3 10cm

图189 II期出土土器

表 19 第4次調査(Ⅱ期) 出土土器観察表

種別	報告番号	図録番号	図録番号	図録番号	寸法 (cm)			成形・調製技法		内面	底面	色調	胎土	焼成	時期	備考
					口径	底径	器高	外壁	内面							
土器	図 189 1719	S105	壺	破片	—	(1.9)	折り返し口縁、ハケム	ヨコハケム	—	—	10XF7/4 に近い黄褐色	赤褐色胎子・長石・雲母を含む	良好	弥生		
土器	図 189 1700	S105	壺	破片	—	(3.3)	タテハケム	—	—	—	2. 3386年褐色	赤褐色胎子・長石・雲母を含む	良好	弥生		
土器	図 189 1701	S105	壺	破片	—	(3.0)	—	—	—	—	10XF5/4 に近い黄褐色	赤褐色胎子を含む	良好	弥生		
土器	図 189 1702	S105	壺	破片	—	(3.8)	口唇部にハケム状工具による筋状	ヘラナデ	—	—	10XF7/4 に近い黄褐色	赤褐色胎子・長石・雲母を含む	良好	古墳	反転瓦蓋	
土器	図 189 1703	S105	台付壺	破片	—	(9.4)	(6.0)	—	—	—	2. 3386年褐色	黒褐色 長石・石灰多量を含む	良好	弥生		
土器	図 189 1704	S106	壺	破片	—	(3.4)	ヘラ削り	ヘラ削り	—	—	内：2. 3384年褐色・2. 3386年褐色 外：1. 5497年黄褐色	白色胎子・小礫を含む	良好	弥生	反転瓦蓋	
土器	図 189 1705	S106	壺	破片	—	5.2	(2.7)	縦方向ハケム	縦方向ハケム	—	2. 3386年褐色	白色・黒色胎子・雲母	良好	弥生	反転瓦蓋	
土器	図 189 1706	S106	台付壺	破片	—	10.4	(9.7)	縦方向ハケム	縦方向ハケム	—	黒褐色 赤褐色胎子・長石・石灰多量を含む	黒褐色 赤褐色胎子・長石・石灰多量を含む	良好	弥生	反転瓦蓋	
土器	図 189 1707	S106	高杯	破片	(1.1)	—	(4.7)	縦方向ハケム	縦方向ハケム	—	3386年褐色	黒褐色 赤褐色胎子多量を含む	良好	弥生	反転瓦蓋	
土器	図 189 1708	S106	高杯	60%	(12.9)	5.2	(5.9)	縦方向ハケム、縦方向ハケム	縦方向ハケム	—	3386年褐色	黒褐色 赤褐色胎子多量を含む	良好	弥生	反転瓦蓋	
土器	図 189 1709	S106	高杯	50%	(96.4)	—	(7.4)	縦方向ハケム	縦方向ハケム	—	3386年褐色	白色胎子多量を含む	良好	弥生	反転瓦蓋	
土器	図 189 1710	S106	高杯	破片	(20.0)	—	(4.3)	縦方向ハケム	縦方向ハケム	—	3386年褐色	黒褐色 赤褐色胎子多量を含む	良好	弥生	赤泥、反転瓦蓋	
土器	図 189 1711	S106	高杯	—	(17.4)	(3.4)	縦方向ハケム	縦方向ハケム	—	—	内：2. 3386年褐色・2. 3387年褐色 外：2. 3387/4 に近い黄褐色	赤褐色胎子・雲母	良好	弥生	反転瓦蓋	
土器	図 189 1712	S915	壺	破片	(19.0)	—	(4.4)	折り返し口縁、縦方向ハケム	縦方向ハケム	—	3386年褐色	赤褐色胎子・石灰・長石多量を含む	良好	弥生	反転瓦蓋	
土器	図 189 1713	S915	壺	破片	—	(5.9)	石字・折付文、羽状溝文	縦方向ハケム	縦方向ハケム	—	10XF7/3 に近い黄褐色	赤褐色胎子・長石・長石少量を含む	良好	弥生	反転瓦蓋	
土器	図 189 1714	S916	壺	破片	—	(4.4)	—	—	—	—	3386年褐色	赤褐色胎子・長石・石灰多量を含む	良好	弥生	反転瓦蓋	
土器	図 189 1715	S917	壺	破片	—	(3.1)	縦方向ハケム	縦方向ハケム	—	—	3386年褐色	赤褐色胎子・雲母	良好	弥生	反転瓦蓋	
土器	図 189 1716	S912	壺	破片	(13.4)	—	(3.7)	縦方向ハケム	縦方向ハケム	—	内：2. 3387年褐色 外：2. 3386/2. 3387年褐色	赤褐色胎子・石灰・長石多量を含む	良好	弥生	反転瓦蓋	
土器	図 189 1717	S915	壺	破片	(17.4)	—	(3.4)	縦方向ハケム	縦方向ハケム	—	内：2. 3387年褐色 外：2. 3386/4 に近い黄褐色	赤褐色胎子・石灰・長石多量を含む	良好	弥生	反転瓦蓋	
土器	図 189 1718	目黒	壺	破片	(14.4)	—	(4.9)	調整不明	調整不明	—	3386年褐色	赤褐色胎子・石灰・長石多量を含む	良好	弥生	反転瓦蓋	
土器	図 189 1719	目黒	壺	破片	—	(2.9)	折り返し口縁	—	—	—	7. 3386年褐色	赤褐色胎子・石灰・長石多量を含む	良好	弥生	反転瓦蓋	
土器	図 189 1720	目黒	壺	破片	—	(8.4)	縦方向ハケム、ミダキ	縦方向ハケム、ミダキ	—	—	3386年褐色	赤褐色胎子・石灰・長石多量を含む	良好	弥生	反転瓦蓋	
土器	図 189 1721	目黒	高杯?	破片	—	(2.4)	縦方向ハケム、調整不明	縦方向ハケム	—	—	10XF7/4 に近い黄褐色	赤褐色胎子・石灰・長石多量を含む	良好	弥生	反転瓦蓋	
土器	図 189 1722	目黒	台付壺	破片	—	(9.4)	(5.9)	縦方向ハケム	縦方向ハケム	—	5386年褐色	黒褐色 赤褐色胎子多量を含む	良好	弥生	反転瓦蓋	
土器	図 189 1723	目黒	台付壺	破片	—	(9.4)	(6.4)	縦方向ハケム	縦方向ハケム	—	10XF7/3 に近い黄褐色	赤褐色胎子・雲母	良好	弥生	反転瓦蓋	

第3節 Ⅲ期の遺構と遺物

第1項 竪穴建物跡 (SI)

竪穴建物跡 SI01 (遺構：図 189、遺物：図 192)

<位置・主軸> B-1・2区に位置している。<形状・規模> 東西 2.9 m×南北 4.2 mの隅丸方形を呈する。検出面からの深度は 0.3 m。壁面はやや皿状に立ち上がる。西半は調査区外にある。<床面> 床面は平坦で地山細粒砂層で掘方となり、貼り床は見られない。床面には噴砂の痕跡が見られる。噴砂の上面は埋土上面まで到達している。<柱穴> 壁際に柱穴と思われるピットを 2 基検出した。<カマド> カマドは検出しなかった。<出土遺物> 1784～1786 は土師器環。1787・1788 は柱状高台付環。台部が三角形を呈しており、底部との境界に平坦面を持つ。1789 は土師器羽釜。把手部は脱落している。把手下部に指頭圧痕が横方向に並ぶ。1790 は甕底部か。丸底であり、横方向のハケにより調整されている。<時期> 12 世紀

竪穴建物跡 SI02 (遺構：図 189、遺物：図 192)

<位置・主軸> B・C-3区に位置している。<形状・規模> 東西 3.0 m以上×南北 4.25 m以上の隅丸方形を呈する。検出面からの深度は 0.2 m。壁面は垂直に立ち上がる。建物跡東側はカクラン、北東隅は SI03 のカマドにより切られており、南側は調査区外にある。<床面> 掘方は凹凸が著しい。機能時の床面は判然としない。<柱穴> 検出しなかった。<カマド> カマドを有さない。<出土遺物> 1791～1795 は土師器環。体部は外側に開き、外湾するものが多い。1796 は土師器甕破片。1802 は灰釉陶器碗。<時期> 11 世紀前半

竪穴建物跡 SI03 (遺構：図 190)

<位置・主軸> C-3区に位置している。<形状・規模> 東西 1.4 m、南北 0.8 mの掘り込みが見られ、焼土、及び炭化物が多量に散在している。カマドの構造を復元し得る掘方などは判然としない。SI02 を切っている。<出土遺物> 掲載しうる遺物は出土しなかった。<時期> SI02 との切り合い関係から、11 世紀前半以降と考えられる。

竪穴建物跡 SI04 (遺構：図 190・191、遺物：図 192)

<位置・主軸> D・E-2・3区に位置している。<形状・規模> 東西 5.35 m×南北 5.5 mの不整形を呈する。検出面からの深度は 0.6 m。壁面は皿状に立ち上がる。床面には噴砂の痕跡が見られ、埋土上面まで到達している。<床面> 床面は平坦であり、貼り床は見られない。<柱穴> 南西隅に当たる場所に柱穴と思われるピットを検出した。その他の柱穴は検出しなかった。<カマド> 袖石、天井石が遺存している状態で検出した。焚口部分には、炭化材、焼土を含む土層があり、破壊行為等がされずに埋没したと考えられる。<出土遺物> 1797 は土師器皿。口縁部が外側に開く。体部下半には斜行ヘラケズリが見られる。1798～1800 は土師器環。1801 は土師器甕体部外面のハケメが薄くみられる。1802 は灰釉陶器碗。<時期> 11 世紀前半

第2項 溝状遺構 (SD)

溝状遺構 SD01・02 (図 191)

D・E-3区において並行して検出した。機能は不明である。時期不明。

第3項 ピット (SP)

Ⅲ期遺構面では、SP01～04の4基のピットを検出した。SP01～03は深さ約0.2mの浅いもの。SP04は0.4mで深い。それぞれ竪穴建物跡に近い位置で検出しているが、機能や竪穴建物跡との関連は不明である。SP04からは弥生時代甕破片が出土した。

第4項 遺構外出土遺物

1807・1808 はカワラケ。底部が分厚く、口縁端部が尖る。1809 は柱状高台付皿。1810～1812 は土師器甕、1813 は土師器羽釜。1814～1817 は青磁片。鍋蓋弁文が施された碗の破片である。

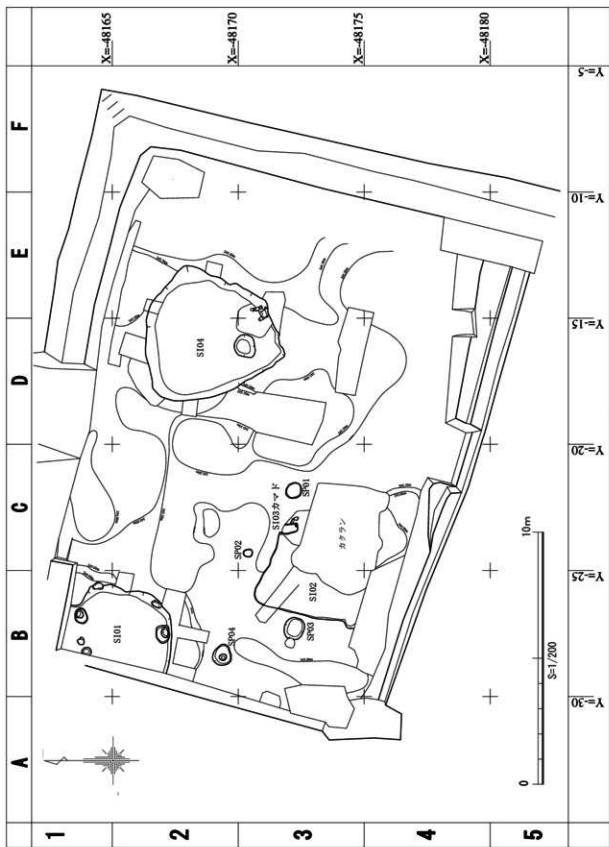
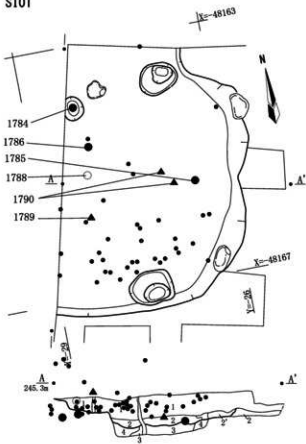


図190 第4次調査 遺構全体図(Ⅲ期)

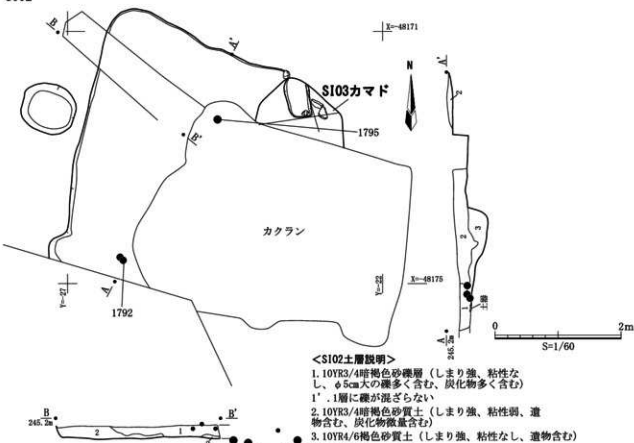
S101



<S101土層説明>

1. 10YR3/3暗褐色砂質土 (しまり強、粘性なし、炭化物、焼土微量混じる、遺物含む、φ150mm大の礫多く含む)
2. 10YR3/4暗褐色砂質土 (しまりやや強、粘性やや強、炭化物、焼土1層より少量混じる)
- 2' 下層の地山ブロックが多く混じる
3. 10YR4/3い黄褐色砂質土 (しまりやや強、粘性やや強、2層から地山まで漸移的に変わる層)
4. 10YR4/4褐色砂質土 (しまりやや強、粘性弱) 地山

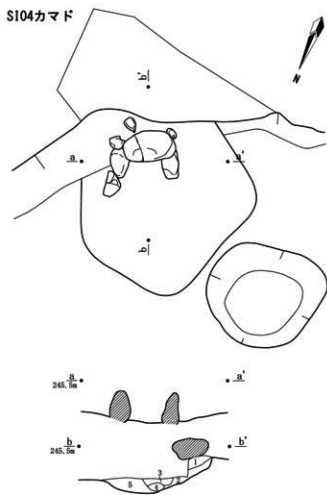
S102



<S102土層説明>

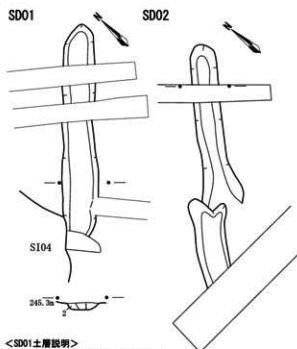
1. 10YR3/4暗褐色砂礫層 (しまり強、粘性なし、φ5cm大の礫多く含む、炭化物多く含む)
- 1' .1層に礫が混ざらない
2. 10YR3/4暗褐色砂質土 (しまり強、粘性弱、遺物含む、炭化物微量含む)
3. 10YR4/6褐色砂質土 (しまり強、粘性なし、遺物含む)

図191 竪穴建物跡S101、S102



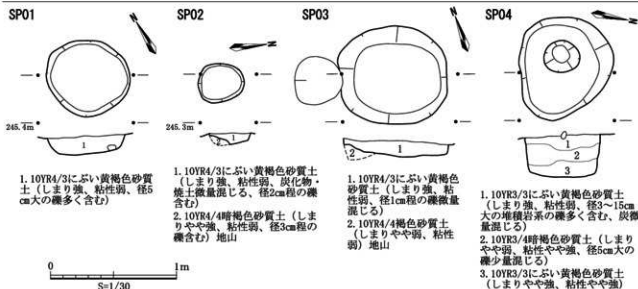
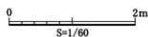
<S104カマド土層説明>

1. 10YR3/2黒褐色粘質土（しまり強、粘性やや強、炭化物含む）
2. 10YR4/4褐色砂質土に粘性含む（しまりやや強、粘性弱）
3. 10YR3/2黒褐色粘質土（しまり弱、粘性弱、炭化物多く含む）
4. 10YR4/4褐色砂質土（焼土多く含む）
5. 10YR3/2黒褐色粘質土（炭化物・焼土微量含む）



<SD01土層説明>

1. 10YR4/2灰黄褐色砂質土（しまりなし、粘性なし）
2. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土（しまりなし、粘性なし）



- SP01**
1. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土（しまり強、粘性弱、径5cm大の礫多く含む）

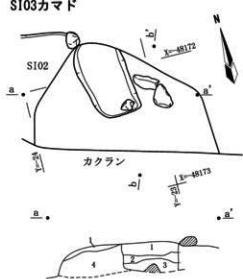
- SP02**
1. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土（しまり強、粘性弱、炭化物・焼土微量混じる、径2cm程の礫含む）
 2. 10YR4/4暗褐色砂質土（しまりやや強、粘性弱、径3cm程の礫含む）地山

- SP03**
1. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土（しまり強、粘性弱、径1cm程の礫微量混じる）
 2. 10YR4/4褐色砂質土（しまりやや弱、粘性弱）地山

- SP04**
1. 10YR3/3にぶい黄褐色砂質土（しまり強、粘性弱、径3~15cm大の堆積岩系の礫多く含む、炭微量混じる）
 2. 10YR3/4暗褐色砂質土（しまりやや弱、粘性やや強、径5cm大の礫少量混じる）
 3. 10YR3/3にぶい黄褐色砂質土（しまりやや強、粘性やや強）

図192 竈穴建物跡S104カマド、溝SD01、SD02、ピットSP01~SP04

S103カマド

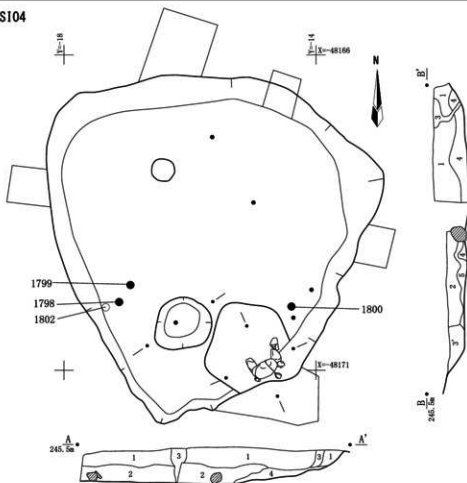


<S103カマド土層説明>

1. 10YR3/3暗褐色砂質土（しまり強、粘性なし、焼土、炭多く含む（カマド内堆積））上層住居のカマド
2. 10YR3/3暗褐色砂質土（しまり強、粘性なし、1層に焼土炭混じらない）上層住居のカマド床
3. 10YR2/3黒褐色砂質土（しまり強、粘性やや強）下層竪穴の埋土
4. 10YR4/3にぶい黄褐色砂礫層（しまり強、粘性なし、φ6cm大の礫多く含む）
5. 10YR3/1黒褐色粘質土に砂礫多く含む（しまりあり、粘性ややあり、3~5cm大の小礫多く含む）
6. 10YR7/3にぶい赤褐色粘質土に砂礫を含む（しまりあり、粘性ややあり）

0 1m
S=1/30

S104



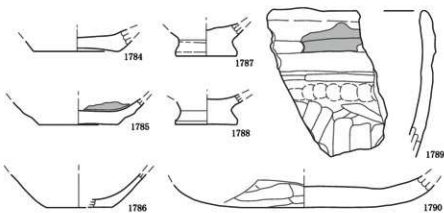
<S104土層説明>

1. 10YR3/1黒褐色粘質土に砂礫多く含む（しまりあり、粘性ややあり）
2. 10YR3/1黒褐色粘質土に砂礫多く含む（しまりあり、粘性あり、5~20cm大の礫多く含む）
3. 10YR5/3にぶい黄褐色砂質土（しまりあり、粘性なし）
4. 10YR7/3にぶい黄褐色粘質土（しまりなし、粘性なし）
5. 黒褐色粘質土（しまりあり、粘性強、小礫含む）

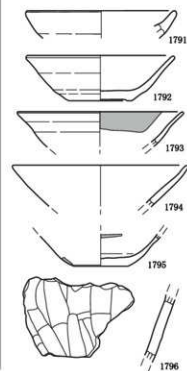
0 2m
S=1/60

図193 竪穴建物跡S103カマド、S104

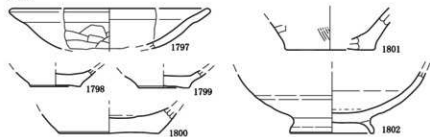
S101



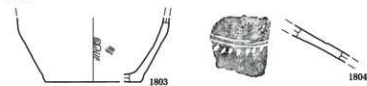
S102



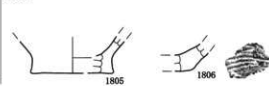
S104



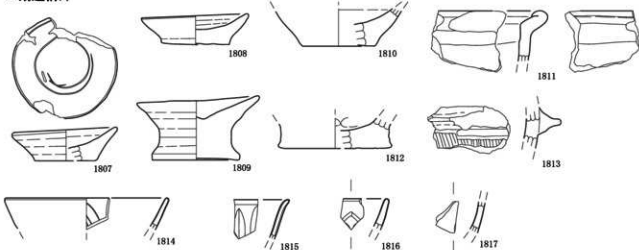
SD02



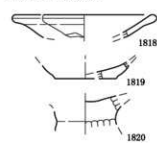
SP04



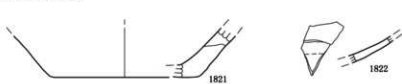
III期遺構外



III期部室棟地点



IV期出土遺物



0 S=1/3 10cm

圖194 III期、IV期、部室棟地点出土土器

表 20 第 4 次調査 (Ⅲ期・Ⅳ期・部室棟地点) 出土土器観察表

編年 番号	遺跡名	種類	部様	保存体	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	内径	底面	色調	胎土	地肌	時期	備考
Ⅹ 194 1794	S101	土師器	杯	破片	—	6.7	(11.3)	Ⅹ 194 1794	Ⅹ 194 1794 破片	内：2.5385/4 に近い褐色 外：2.5385/4 に近い褐色	白色・褐色胎土・黒色含む	良好	平安	
Ⅹ 194 1795	S101	土師器	杯	破片	—	(6.2)	(12.1)	Ⅹ 194 1794	Ⅹ 194 1794 破片	内：2.5385/4 に近い褐色 外：2.5385/4 に近い褐色	白色胎土多量、黒色多く含む	良好	平安	反転光潤
Ⅹ 194 1796	S101	土師器	杯	破片	—	8.2	(12.3)	ナゾ	Ⅹ 194 1796 破片	白色・白色・褐色胎土含む	良好	平安	反転光潤	
Ⅹ 194 1797	S101	土師器	杯	破片	—	4.7	(12.3)	Ⅹ 194 1794	Ⅹ 194 1794 破片	白色・白色・褐色胎土少量含む	良好	平安		
Ⅹ 194 1799	S101	土師器	杯	破片	—	4.8	(12.4)	Ⅹ 194 1794	Ⅹ 194 1794 破片	白色・白色・褐色胎土少量含む	良好	平安		
Ⅹ 194 1799	S101	土師器	杯	破片	—	(10.0)	(12.3)	ナゾ	本體	白色・褐色胎土多量含む 中央部・褐色胎土多量含む 外：0.9763/1 褐色	良好	平安	反転光潤	
Ⅹ 194 1791	S102	土師器	甕	破片	(11.4)	—	(12.3)	Ⅹ 194 1791	Ⅹ 194 1791 破片	内：0.9818/4 明褐色 外：0.9818/4 明褐色	白色胎土少量含む	良好	平安	反転光潤
Ⅹ 194 1792	S102	土師器	甕	破片	(11.4)	(13.0)	Ⅹ 194 1791	Ⅹ 194 1791 破片	Ⅹ 194 1791 破片	褐色胎土少量、黒石混入、黒色胎土少量含む	良好	平安	反転光潤	
Ⅹ 194 1793	S102	土師器	甕	破片	(11.4)	(13.3)	Ⅹ 194 1791	Ⅹ 194 1791 破片	Ⅹ 194 1791 破片	褐色胎土少量、黒石混入、黒色胎土少量含む	良好	平安	反転光潤	
Ⅹ 194 1794	S102	土師器	甕	破片	(11.4)	—	(13.3)	Ⅹ 194 1791	Ⅹ 194 1791 破片	Ⅹ 194 1791 破片	褐色胎土少量、黒石混入、黒色胎土少量含む	良好	平安	反転光潤
Ⅹ 194 1795	S102	土師器	甕	破片	(11.4)	(13.0)	Ⅹ 194 1791	Ⅹ 194 1791 破片	Ⅹ 194 1791 破片	褐色胎土少量、黒石混入、黒色胎土少量含む	良好	平安	反転光潤	
Ⅹ 194 1796	S102	土師器	甕	破片	(11.4)	(13.0)	Ⅹ 194 1791	Ⅹ 194 1791 破片	Ⅹ 194 1791 破片	褐色胎土少量、黒石混入、黒色胎土少量含む	良好	平安	反転光潤	
Ⅹ 194 1797	S104	土師器	甕	破片	(11.4)	(13.3)	Ⅹ 194 1791	Ⅹ 194 1791 破片	Ⅹ 194 1791 破片	褐色胎土少量、黒石混入、黒色胎土少量含む	良好	平安	反転光潤	
Ⅹ 194 1798	S104	土師器	杯	破片	(11.4)	(14.0)	Ⅹ 194 1791	Ⅹ 194 1791 破片	Ⅹ 194 1791 破片	褐色胎土少量、黒石混入、黒色胎土少量含む	良好	平安	反転光潤	
Ⅹ 194 1799	S104	土師器	杯	破片	(11.4)	(14.0)	Ⅹ 194 1791	Ⅹ 194 1791 破片	Ⅹ 194 1791 破片	褐色胎土少量、黒石混入、黒色胎土少量含む	良好	平安	反転光潤	
Ⅹ 194 1800	S104	土師器	杯	破片	(11.4)	(14.0)	Ⅹ 194 1791	Ⅹ 194 1791 破片	Ⅹ 194 1791 破片	褐色胎土少量、黒石混入、黒色胎土少量含む	良好	平安	反転光潤	
Ⅹ 194 1801	S104	土師器	甕	破片	(11.4)	(17.0)	(13.4)	Ⅹ 194 1791	Ⅹ 194 1791 破片	褐色胎土少量、黒石混入、黒色胎土少量含む	良好	平安	反転光潤	
Ⅹ 194 1802	S104	土師器	杯	破片	9%	(8.6)	(4.9)	Ⅹ 194 1791・反 転・少量含む、平 滑面	Ⅹ 194 1802 破片	褐色胎土少量含む、径 4 ~ 5mm の黒胎土含む	良好	平安	反転光潤	
Ⅹ 194 1803	S202	赤土器	甕	破片	(17.4)	(15.1)	Ⅹ 194 1803	Ⅹ 194 1803 破片	Ⅹ 194 1803 破片	褐色胎土少量含む	良好	弥生		
Ⅹ 194 1804	S202	赤土器	甕	破片	(17.4)	(15.1)	Ⅹ 194 1803	Ⅹ 194 1803 破片	Ⅹ 194 1803 破片	褐色胎土少量含む	良好	弥生		
Ⅹ 194 1805	S204	赤土器	甕	破片	(16.4)	(12.3)	Ⅹ 194 1805	Ⅹ 194 1805 破片	Ⅹ 194 1805 破片	褐色胎土少量含む	良好	弥生		
Ⅹ 194 1806	S204	赤土器	甕	破片	(16.4)	(12.3)	Ⅹ 194 1805	Ⅹ 194 1805 破片	Ⅹ 194 1805 破片	褐色胎土少量含む	良好	弥生		
Ⅹ 194 1807	Ⅹ 194 1807	土師器	杯	破片	9%	8.0	4.7	2.1	Ⅹ 194 1807	Ⅹ 194 1807 破片	褐色胎土少量、黒石混入、黒色胎土少量含む	良好	平安	
Ⅹ 194 1808	Ⅹ 194 1808	土師器	杯	破片	9%	8.4	3.4	2.1	Ⅹ 194 1808	Ⅹ 194 1808 破片	褐色胎土少量、黒石混入、黒色胎土少量含む	良好	平安	
Ⅹ 194 1809	Ⅹ 194 1809	土師器	杯	破片	9%	8.1	6.8	Ⅹ 194 1809	Ⅹ 194 1809 破片	褐色胎土少量、黒石混入、黒色胎土少量含む	良好	平安		
Ⅹ 194 1810	Ⅹ 194 1810	土師器	杯	破片	(15.8)	(13.0)	Ⅹ 194 1810	Ⅹ 194 1810 破片	Ⅹ 194 1810 破片	褐色胎土少量、黒石混入、黒色胎土少量含む	良好	平安		
Ⅹ 194 1811	Ⅹ 194 1811	土師器	甕	破片	(14.0)	(14.0)	ナゾ	Ⅹ 194 1811	Ⅹ 194 1811 破片	褐色胎土少量含む	良好	平安		
Ⅹ 194 1812	Ⅹ 194 1812	土師器	甕	破片	(16.0)	(12.4)	Ⅹ 194 1812	Ⅹ 194 1812 破片	Ⅹ 194 1812 破片	褐色胎土少量、黒石混入、黒色胎土少量含む	良好	平安	反転光潤	
Ⅹ 194 1813	Ⅹ 194 1813	土師器	杯	破片	(12.4)	(12.3)	Ⅹ 194 1813	Ⅹ 194 1813 破片	Ⅹ 194 1813 破片	褐色胎土少量、黒石混入、黒色胎土少量含む	良好	平安		
Ⅹ 194 1814	Ⅹ 194 1814	土師器	杯	破片	(12.4)	(12.3)	Ⅹ 194 1813	Ⅹ 194 1813 破片	Ⅹ 194 1813 破片	褐色胎土少量、黒石混入、黒色胎土少量含む	良好	平安		
Ⅹ 194 1815	Ⅹ 194 1815	土師器	杯	破片	(12.4)	(12.3)	Ⅹ 194 1813	Ⅹ 194 1813 破片	Ⅹ 194 1813 破片	褐色胎土少量、黒石混入、黒色胎土少量含む	良好	平安		
Ⅹ 194 1816	Ⅹ 194 1816	土師器	杯	破片	(12.4)	(12.3)	Ⅹ 194 1813	Ⅹ 194 1813 破片	Ⅹ 194 1813 破片	褐色胎土少量、黒石混入、黒色胎土少量含む	良好	平安		
Ⅹ 194 1817	Ⅹ 194 1817	土師器	杯	破片	(11.0)	(12.5)	Ⅹ 194 1813	Ⅹ 194 1813 破片	Ⅹ 194 1813 破片	褐色胎土少量、黒石混入、黒色胎土少量含む	良好	平安		
Ⅹ 194 1818	Ⅹ 194 1818	土師器	杯	破片	(11.0)	(12.5)	Ⅹ 194 1813	Ⅹ 194 1813 破片	Ⅹ 194 1813 破片	褐色胎土少量、黒石混入、黒色胎土少量含む	良好	平安		
Ⅹ 194 1819	Ⅹ 194 1819	土師器	杯	破片	(14.8)	(13.3)	Ⅹ 194 1819	Ⅹ 194 1819 破片	Ⅹ 194 1819 破片	褐色胎土少量、黒石混入、黒色胎土少量含む	良好	平安	反転光潤	
Ⅹ 194 1820	Ⅹ 194 1820	土師器	杯	破片	(11.0)	(12.4)	Ⅹ 194 1819	Ⅹ 194 1819 破片	Ⅹ 194 1819 破片	褐色胎土少量、黒石混入、黒色胎土少量含む	良好	平安	反転光潤	
Ⅹ 194 1821	Ⅹ 194 1821	土師器	杯	破片	(11.0)	(13.0)	Ⅹ 194 1819	Ⅹ 194 1819 破片	Ⅹ 194 1819 破片	褐色胎土少量、黒石混入、黒色胎土少量含む	良好	平安	反転光潤	
Ⅹ 194 1822	Ⅹ 194 1822	土師器	杯	破片	(11.0)	(12.2)	Ⅹ 194 1819	Ⅹ 194 1819 破片	Ⅹ 194 1819 破片	褐色胎土少量、黒石混入、黒色胎土少量含む	良好	平安	反転光潤	

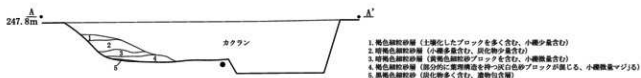
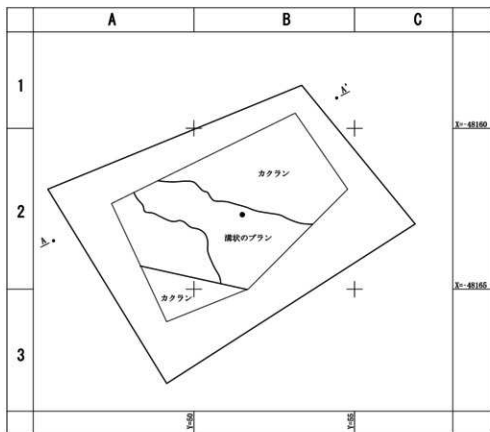


図195 部室棟地点全体図

第4節 部室棟地点の調査

部室棟地点の調査は、約30mの範囲を対象として実施した。大半が市川高校建設時におけるカクランにより、調査を必要とする埋蔵文化財はほとんど遺存していなかった。発掘調査では、地表面下約1.2m地点において、溝状のプランを検出した。当該プランについては掘削作業を実施したが、明確な遺構であることを判別できなかったが、平安時代の遺物が微量出土している。この溝状プランについては、約20cm下において人頭大の礫層が露出しており、第1～3次調査のⅡ期、第4次調査のⅢ期遺構面の直下にみられる遺物包含層に該当すると考えられる。

部室棟地点の調査については、周囲の攪乱が著しく土層堆積状況の観察が十分にできなかったものの、他地区における平安時代の遺物包含層が遺存している状況を確認した。

第8章 自然科学分析

第1節 第1次調査の自然科学分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

山梨県西八代郡市川三郷町市川大門に所在する新町前遺跡の発掘調査では、平安時代の集落跡や中世の水田跡などが検出されている。

本分析調査では、主に平安時代の遺構や堆積物を中心として、遺構の年代観や古環境、古植生、用材選択、植物資源利用などの推定を目的として、放射性炭素年代測定、炭化材同定、種実同定、微細物分析、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析を実施する。以下、分析項目ごとに分析調査報告を行う。

第1項 放射性炭素年代測定

1. 試料

放射性炭素年代測定の試料は、調査区で検出された竪穴建物跡 SI01～SI44、SK1008、SP4003、SS30001、SS3002、SI15 表層焼土遺構などから採取された炭化材 30 点である。試料の詳細は、結果とともに表 1 に示す。

2. 分析方法

分析試料は AMS 法で実施する。試料表面の汚れをメス、ピンセット、超音波洗浄等により物理的に除去する。塩酸や水酸化ナトリウムを用いて、試料内部の汚染物質を化学的に除去する（酸-アルカリ-酸処理:AAA）。なお、通常は水酸化ナトリウム水溶液の濃度を上げていき、最終的に 1M 溶液で処理を実施するが、試料が脆弱に必要な炭素を得られなくなる可能性がある場合、水酸化ナトリウム溶液の濃度が薄い段階で処理を停止する。濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と記載する。その後、試料を燃焼させて CO₂ を発生させる。

真空ラインで不純物（水など）を取り除き、CO₂ を精製する。これを鉄を触媒として水素で還元し、グラファイトを生成させる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置（NEC 社製）を用いて、14C の計数、13C 濃度（13C/12C）、14C 濃度（14C/12C）を測定する。AMS 測定時に、米国国立標準局（NIST）から提供される標準試料（HOX-II）、国際原子力機関から提供される標準試料、バックグラウンド試料の測定も行う。

δ 13C は試料炭素の 13C 濃度（13C/12C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma:68%）に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での動向に従う（Stuiver and Polach, 1977）。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウェアは Oxcal 4.3 (Bronk, 2009)、較正曲線は Intcal 13 (Reimer et al., 2013) を用いる。

3. 結果および考察

結果を表 1、図 1 に示す。試料の測定年代（補正年代）についてみると、竪穴建物跡では約 900～1,280yrBP、竪穴建物に伴う土坑 SK01 および用途不明の土坑 SK1008 で 1,140～1,180yrBP、土壌炭や用途不明の円形土坑、焼土遺構などで 850～1,000yrBP の値が得られている。

暦年較正は、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、及び半減期の違い（14C の半減期 5,730 ± 40 年）を較正することによって、暦年代に近づける手法である。測定誤差 2σ の暦年代は、SI32（試料 No.19）で 7 世紀後半～8 世紀（calAD 675～770）、SP4003（試料 No.27）で 12 世紀中頃～13 世紀前半（calAD 1,155～1,255）の値を示したが、それ以外は 8 世紀後半～12 世紀後半にまとめられ、平安時代とされる発掘調査所見を支持する結果と言える。

表1 放射性炭素年代測定結果 (1)

試料名	性状	分析 方法	測定年代 yrBP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年校正用	暦年校正年代		標準	Code No.
						年代	年代		
1 S101 ①	木炭	AAA	1200 ± 20	-27.12 ± 0.31	1204 ± 24	e cal AD 774 - cal AD 778	1176 - 1172 calBP	0.037	AAA- 182395
						cal AD 769 - cal AD 869	1161 - 1081 calBP	0.645	
2 S102 カマド	木炭	AAA	970 ± 20	-28.94 ± 0.29	967 ± 21	e cal AD 724 - cal AD 739	1226 - 1211 calBP	0.039	AAA- 182396
						cal AD 767 - cal AD 800	1183 - 1060 calBP	0.915	
3 S102 炭山	木炭	AAA	990 ± 20	-24.71 ± 0.38	991 ± 22	e cal AD 1023 - cal AD 1045	927 - 905 calBP	0.326	AAA- 182397
						cal AD 1095 - cal AD 1129	855 - 830 calBP	0.305	
4 S104 床直上	木炭	AAA	1190 ± 20	-26.3 ± 0.35	1185 ± 22	e cal AD 1142 - cal AD 1147	898 - 893 calBP	0.051	AAA- 182398
						cal AD 1019 - cal AD 1053	931 - 897 calBP	0.379	
5 S105 カマド	木炭	AAA	1120 ± 20	-27.25 ± 0.44	1123 ± 24	e cal AD 1080 - cal AD 1053	855 - 797 calBP	0.575	AAA- 182399
						cal AD 1015 - cal AD 1043	935 - 907 calBP	0.104	
6 S106 カマド	木炭	AAA	1100 ± 20	-28.51 ± 0.47	1095 ± 24	e cal AD 991 - cal AD 1050	959 - 900 calBP	0.704	AAA- 182400
						cal AD 1085 - cal AD 1125	865 - 825 calBP	0.292	
7 S107 SKI	木炭	AAA	940 ± 20	-27.55 ± 0.44	936 ± 22	e cal AD 1136 - cal AD 1150	814 - 800 calBP	0.048	AAA- 182401
						cal AD 996 - cal AD 975	912 - 888 calBP	0.122	
8 S115 カマド	木炭	AAA	1140 ± 20	-30.28 ± 0.48	1135 ± 22	e cal AD 802 - cal AD 844	1148 - 1106 calBP	0.329	AAA- 182402
						cal AD 856 - cal AD 883	1084 - 1067 calBP	0.221	
9 S116 F-1	木炭	AAA	1010 ± 20	-26.55 ± 0.47	1009 ± 22	e cal AD 771 - cal AD 804	1179 - 1056 calBP	0.949	AAA- 182403
						cal AD 834 - cal AD 898	1016 - 1014 calBP	0.005	
10 S116 カマド	木炭	AAa	980 ± 20	-24.87 ± 0.41	976 ± 23	e cal AD 983 - cal AD 906	1057 - 1044 calBP	0.122	AAA- 182404
						cal AD 916 - cal AD 968	1034 - 982 calBP	0.326	
11 S118 カマド	木炭	AAA	1090 ± 20	-26.75 ± 0.42	1091 ± 22	e cal AD 782 - cal AD 787	1168 - 1163 calBP	0.005	AAA- 182405
						cal AD 877 - cal AD 889	1073 - 961 calBP	0.949	
12 S120 B-14	木炭	AAA	1050 ± 20	-28.56 ± 0.46	1049 ± 24	e cal AD 900 - cal AD 921	1050 - 1029 calBP	0.259	AAA- 182406
						cal AD 950 - cal AD 985	1000 - 965 calBP	0.423	
13 S122 カマド	木炭	AAA	1020 ± 20	-30.44 ± 0.36	1018 ± 22	e cal AD 891 - cal AD 966	1059 - 954 calBP	0.954	AAA- 182407
						cal AD 1040 - cal AD 1051	910 - 899 calBP	0.097	
14 S126	木炭	AAA	980 ± 20	-26.82 ± 0.28	981 ± 21	e cal AD 1082 - cal AD 1151	868 - 789 calBP	0.585	AAA- 182408
						cal AD 1032 - cal AD 1156	918 - 794 calBP	0.934	
15 S126 カマド	木炭	AAA	1070 ± 20	-27.43 ± 0.49	1069 ± 22	e cal AD 888 - cal AD 903	1062 - 1047 calBP	0.167	AAA- 182409
						cal AD 919 - cal AD 965	1031 - 985 calBP	0.515	
16 S127	木炭	AAA	1000 ± 20	-26.43 ± 0.49	1004 ± 22	e cal AD 778 - cal AD 790	1172 - 1160 calBP	0.024	AAA- 182410
						cal AD 827 - cal AD 841	1123 - 1109 calBP	0.016	
17 S130 カマド	木炭	AAA	920 ± 20	-27.48 ± 0.46	918 ± 22	e cal AD 864 - cal AD 983	1096 - 967 calBP	0.914	AAA- 182411
						cal AD 995 - cal AD 1030	955 - 920 calBP	0.682	
18 S130 カマド	木炭	AAA	1050 ± 20	-28.56 ± 0.46	1049 ± 24	e cal AD 985 - cal AD 1043	965 - 907 calBP	0.929	AAA- 182412
						cal AD 1106 - cal AD 1119	844 - 831 calBP	0.025	
19 S132 カマド	木炭	AAA	1020 ± 20	-30.44 ± 0.36	1018 ± 22	e cal AD 1020 - cal AD 1045	930 - 905 calBP	0.386	AAA- 182413
						cal AD 1095 - cal AD 1120	855 - 830 calBP	0.255	
20 S132 カマド	木炭	AAA	1020 ± 20	-30.44 ± 0.36	1018 ± 22	e cal AD 1142 - cal AD 1147	898 - 893 calBP	0.042	AAA- 182414
						cal AD 1015 - cal AD 1055	935 - 895 calBP	0.454	
21 S132 カマド	木炭	AAA	980 ± 20	-26.82 ± 0.28	981 ± 21	e cal AD 1077 - cal AD 1154	873 - 796 calBP	0.590	AAA- 182415
						cal AD 961 - cal AD 921	1049 - 1029 calBP	0.243	
22 S132 カマド	木炭	AAA	1050 ± 20	-28.56 ± 0.46	1049 ± 24	e cal AD 951 - cal AD 985	999 - 962 calBP	0.429	AAA- 182416
						cal AD 893 - cal AD 997	1057 - 953 calBP	0.940	
23 S132 カマド	木炭	AAA	1020 ± 20	-30.44 ± 0.36	1018 ± 22	e cal AD 1066 - cal AD 1012	944 - 928 calBP	0.014	AAA- 182417
						cal AD 996 - cal AD 1019	964 - 932 calBP	0.682	
24 S132 カマド	木炭	AAA	1020 ± 20	-30.44 ± 0.36	1018 ± 22	e cal AD 902 - cal AD 929	1048 - 1030 calBP	0.045	AAA- 182418
						cal AD 964 - cal AD 1025	986 - 925 calBP	0.909	
25 S132 カマド	木炭	AAA	980 ± 20	-26.82 ± 0.28	981 ± 21	e cal AD 1048 - cal AD 1086	992 - 864 calBP	0.400	AAA- 182419
						cal AD 1124 - cal AD 1139	826 - 812 calBP	0.113	
26 S132 カマド	木炭	AAA	1070 ± 20	-27.43 ± 0.49	1069 ± 22	e cal AD 1150 - cal AD 1160	890 - 784 calBP	0.160	AAA- 182420
						cal AD 1041 - cal AD 1107	969 - 843 calBP	0.483	
27 S132 カマド	木炭	AAA	1000 ± 20	-26.43 ± 0.49	1004 ± 22	e cal AD 1117 - cal AD 1206	833 - 744 calBP	0.471	AAA- 182421
						cal AD 970 - cal AD 1015	980 - 935 calBP	0.682	
28 S132 カマド	木炭	AAA	1000 ± 20	-26.43 ± 0.49	1004 ± 22	e cal AD 899 - cal AD 923	1051 - 1027 calBP	0.151	AAA- 182422
						cal AD 946 - cal AD 1020	1094 - 930 calBP	0.893	
29 S132 カマド	木炭	AAA	920 ± 20	-27.48 ± 0.46	918 ± 22	e cal AD 996 - cal AD 1033	954 - 917 calBP	0.682	AAA- 182423
						cal AD 986 - cal AD 1043	964 - 905 calBP	0.885	
30 S132 カマド	木炭	AAA	920 ± 20	-27.48 ± 0.46	918 ± 22	e cal AD 1095 - cal AD 1129	855 - 830 calBP	0.062	AAA- 182424
						cal AD 1142 - cal AD 1147	898 - 893 calBP	0.008	
31 S132 カマド	木炭	AAA	920 ± 20	-27.48 ± 0.46	918 ± 22	e cal AD 1146 - cal AD 1094	904 - 856 calBP	0.418	AAA- 182425
						cal AD 1120 - cal AD 1141	830 - 809 calBP	0.175	
32 S132 カマド	木炭	AAA	920 ± 20	-27.48 ± 0.46	918 ± 22	e cal AD 1147 - cal AD 1158	893 - 792 calBP	0.088	AAA- 182426
						cal AD 1034 - cal AD 1165	916 - 785 calBP	0.954	

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。

2) yrBP 年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

4) AAAは酸-アルカリ-酸処理、AAaはアルカリの濃度を薄くした処理を示す。

5) 暦年の計算には、Oxcal4.3を使用。

6) 暦年の計算には表に示した丸める前の値を使用している。

7) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年校正曲線や暦年校正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

8) 統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である。

表1 放射性炭素年代測定結果(2)

試料名	性状	分析 方法	測定年代 yrBP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年校正用	暦年校正年代										Code No.			
						年代値											標準		
						1 σ		2 σ		1 σ		2 σ		1 σ				2 σ	
18	SI31 カマド	木炭	AAA	1200 ± 20	-26.66 ± 0.36	1200 ± 23	0	cal	AD	775	cal	AD	778	1175	-	1172	calBP	0.025	AAA-
							cal	AD	769	cal	AD	869	1161	-	1081	calBP	0.637	182412	
							2	cal	AD	730	cal	AD	736	1220	-	1214	calBP	0.012	
							cal	AD	769	cal	AD	889	1181	-	1061	calBP	0.942		
19	SI32	木炭	AAA	1280 ± 20	-26.48 ± 0.29	1275 ± 21	0	cal	AD	697	cal	AD	720	1283	-	1283	calBP	0.309	AAA-
							cal	AD	742	cal	AD	766	1298	-	1184	calBP	0.293	182413	
							2	cal	AD	675	cal	AD	770	1275	-	1180	calBP	0.954	
20	SI33 カマド	木炭	AnA	1130 ± 20	-24.32 ± 0.42	1128 ± 22	0	cal	AD	891	cal	AD	904	1059	-	1046	calBP	0.143	AAA-
							cal	AD	917	cal	AD	967	1033	-	963	calBP	0.539	182414	
							2	cal	AD	876	cal	AD	788	1169	-	1162	calBP	0.009	
							cal	AD	781	cal	AD	996	1074	-	964	calBP	0.945		
21	SI36 カマド3番	木炭	AnA	1220 ± 20	-23.90 ± 0.27	1221 ± 23	0	cal	AD	727	cal	AD	738	1223	-	1212	calBP	0.082	AAA-
							cal	AD	768	cal	AD	779	1182	-	1171	calBP	0.092	182415	
							cal	AD	790	cal	AD	830	1190	-	1120	calBP	0.292		
							cal	AD	837	cal	AD	866	1113	-	1084	calBP	0.215		
							2	cal	AD	695	cal	AD	700	1255	-	1250	calBP	0.008	
							cal	AD	719	cal	AD	745	1240	-	1205	calBP	0.199		
							cal	AD	764	cal	AD	887	1106	-	1065	calBP	0.700		
22	SI41 カマド	木炭	AnA	1090 ± 20	-24.41 ± 0.39	1089 ± 23	0	cal	AD	961	cal	AD	921	1049	-	1029	calBP	0.224	AAA-
							cal	AD	959	cal	AD	989	1000	-	961	calBP	0.448	182416	
							2	cal	AD	893	cal	AD	932	1057	-	1018	calBP	0.336	
							cal	AD	957	cal	AD	1013	1013	-	837	calBP	0.618		
23	SI42 カマド	木炭	AAA	1170 ± 20	-26.21 ± 0.46	1168 ± 22	0	cal	AD	778	cal	AD	792	1172	-	1158	calBP	0.126	AAA-
							cal	AD	804	cal	AD	842	1146	-	1108	calBP	0.263	182417	
							cal	AD	860	cal	AD	893	1090	-	1057	calBP	0.292		
							2	cal	AD	772	cal	AD	900	1178	-	1050	calBP	0.850	
							cal	AD	922	cal	AD	949	1028	-	1001	calBP	0.194		
24	SI43 カマド	木炭	AAA	1040 ± 20	-26.51 ± 0.29	1035 ± 23	0	cal	AD	991	cal	AD	1029	959	-	930	calBP	0.682	AAA-
							2	cal	AD	974	cal	AD	1028	976	-	922	calBP	0.954	182418
25	SI44 SK01	木炭	AAA	1140 ± 20	-26.11 ± 0.34	1136 ± 23	0	cal	AD	886	cal	AD	904	1064	-	1046	calBP	0.179	AAA-
							cal	AD	917	cal	AD	967	1033	-	963	calBP	0.503	182419	
							2	cal	AD	777	cal	AD	790	1173	-	1160	calBP	0.029	
							cal	AD	809	cal	AD	817	1141	-	1133	calBP	0.010		
							cal	AD	826	cal	AD	842	1124	-	1108	calBP	0.022		
							cal	AD	863	cal	AD	983	1087	-	967	calBP	0.894		
26	SK1008	木炭	AAA	1180 ± 20	-26.35 ± 0.25	1183 ± 23	0	cal	AD	778	cal	AD	793	1172	-	1157	calBP	0.123	AAA-
							cal	AD	802	cal	AD	845	1148	-	1105	calBP	0.324	182420	
							cal	AD	855	cal	AD	885	1095	-	1065	calBP	0.235		
							2	cal	AD	771	cal	AD	895	1179	-	1055	calBP	0.934	
							cal	AD	929	cal	AD	939	1021	-	1011	calBP	0.020		
27	SI4003	木炭	AAA	850 ± 20	-27.84 ± 0.49	852 ± 23	0	cal	AD	1169	cal	AD	1216	791	-	734	calBP	0.682	AAA-
							2	cal	AD	1115	cal	AD	1205	795	-	695	calBP	0.954	182421
28	SI5001	木炭	AnA	970 ± 20	-27.08 ± 0.42	970 ± 22	0	cal	AD	1022	cal	AD	1045	928	-	905	calBP	0.344	AAA-
							cal	AD	1095	cal	AD	1120	855	-	830	calBP	0.290	182422	
							cal	AD	1142	cal	AD	1147	808	-	803	calBP	0.048		
							2	cal	AD	1017	cal	AD	1053	933	-	897	calBP	0.492	
							cal	AD	1079	cal	AD	1153	871	-	797	calBP	0.552		
29	SI5002	木炭	AAA	990 ± 20	-23.91 ± 0.34	990 ± 21	0	cal	AD	1015	cal	AD	1043	935	-	907	calBP	0.578	AAA-
							cal	AD	1105	cal	AD	1119	845	-	821	calBP	0.194	182423	
							2	cal	AD	993	cal	AD	1048	937	-	902	calBP	0.712	
							cal	AD	1088	cal	AD	1124	862	-	826	calBP	0.199		
							cal	AD	1138	cal	AD	1149	812	-	801	calBP	0.043		
30	SI15 岩盤 粘土遺構	木炭	AAA	1000 ± 20	-26.03 ± 0.34	999 ± 21	0	cal	AD	998	cal	AD	1005	952	-	945	calBP	0.065	AAA-
							cal	AD	1011	cal	AD	1037	939	-	913	calBP	0.617	182424	
							2	cal	AD	989	cal	AD	1045	961	-	905	calBP	0.854	
							cal	AD	1095	cal	AD	1120	855	-	830	calBP	0.089		
							cal	AD	1142	cal	AD	1147	808	-	803	calBP	0.011		

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。

2) yrBP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

4) AAAは酸-アルカリ-酸処理、AnAはアルカリの濃度を薄くした処理を示す。

5) 暦年の計算には、Oxcal4.3を使用。

6) 暦年の計算には表に示した丸める前の値を使用している。

7) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年校正曲線や暦年校正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

8) 統計的に真の値が入る確率は σ は68%、2 σ は95%である。

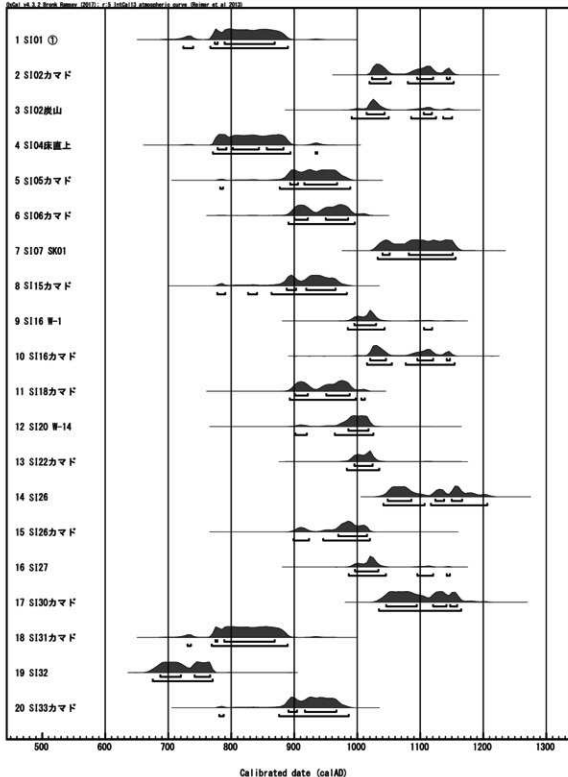


図1. 暦年較正結果(1)

第2項 炭化材同定

1. 試料

炭化材同定の試料は、平安時代の焼失住居から出土した炭化材 50 点である。試料の詳細は、結果とともに表 2 に示す。

2. 分析方法

炭化材は、剃刀を用いて木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作成し、電子顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。材組織の特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

3. 結果

結果を表2に示す。試料中に複数の樹種がある場合にはこれらを記載する。検出された種類は、コナラ亜属クスギ節が圧倒的に多く、その他ヒノキ科、コナラ亜属コナラ節、サクラ属、カエデ属、イネ科草本類が検出される。SI16のW-32は材ではなく、炭化米の塊であった。炭化材の多くは割片で、年輪数は数年のものが多い。小径枝や樹皮付きの破片もある。あくまでも

表2 炭化材同定結果

No.	遺構層位	サンプル	樹種	備考
1	SI01	①	クスギ節	年輪3 小枝
2	SI01	②	クスギ節	年輪3+ 割片
3	SI01	③	クスギ節	年輪10+ 割片
4	SI01	④	クスギ節	年輪5+ 割片
5	SI01	⑤	クスギ節	年輪7+ 割片
6	SI16	W-1	クスギ節	年輪5+ 割片
7	SI16	W-2	イネ科草本類	
8	SI16	W-3	クスギ節	年輪2 小枝
9	SI16	W-4	イネ科草本類 / カエデ属	年輪2+ 割片
10	SI16	W-5	クスギ節	年輪2+ 割片
11	SI16	W-6	クスギ節	年輪3+ 割片
12	SI16	W-9	ヒノキ科	年輪3+ 割片
13	SI16	W-10	クスギ節	年輪3+ 割片
14	SI16	W-11	ヒノキ科	年輪2+ 割片
15	SI16	W-12	カエデ属	年輪8+ 割片
16	SI16	W-15	クスギ節	年輪6+ 割片
17	SI16	W-20	クスギ節	年輪8+ 割片
18	SI16	W-23	クスギ節	年輪4 小枝
19	SI16	W-24	クスギ節	年輪5+ 割片
20	SI16	W-30	クスギ節	年輪2 小枝
21	SI16	W-31	コナラ節	年輪5+ 割片
22	SI16	W-32	炭化米（籾殻付き）の塊	
23	SI16	W-33	サクラ属	年輪1+ 割片
24	SI16	W-34	クスギ節 / コナラ節	年輪4+ 割片
25	SI20	W-1	クスギ節	年輪3+ 割片
26	SI20	W-6	クスギ節	年輪4+ 割片
27	SI20	W-7	クスギ節	年輪3+ 割片
28	SI20	W-11	クスギ節	年輪13+ 割片
29	SI20	W-14	クスギ節	年輪16+ 割片
30	SI20	W-15	クスギ節	年輪7+ 割片
31	SI20	W-17	クスギ節	年輪2+ 割片
32	SI20	W-18	クスギ節	年輪3+ 割片
33	SI20	W-19	クスギ節	年輪3+ 割片
34	SI20	W-20	クスギ節	年輪14+ 割片
35	SI20	W-21	クスギ節	年輪5+ 割片
36	SI20	W-22	クスギ節	年輪23+ 割片
37	SI20	W-23	クスギ節	年輪13+ 割片
38	SI20	W-24	クスギ節	年輪8+ 樹皮あり
39	SI20	W-25	クスギ節	年輪10+ 割片
40	SI20	W-26	クスギ節	年輪8+ 割片
41	SI20	W-27	イネ科草本類	
42	SI20	W-28	イネ科草本類	
43	SI20	W-29	クスギ節	年輪8+ 割片
44	SI20	W-30	クスギ節	年輪5+ 割片
45	SI20	W-31	クスギ節	年輪7+ 割片
46	SI20	W-32	クスギ節	年輪11+ 割片
47	SI20	W-33	クスギ節	年輪7+ 割片
48	SI20	W-34	クスギ節	年輪15+ 割片
49	SI20	W-35	クスギ節	年輪6+ 割片
50	SI20	W-36	イネ科草本類	

予想であるが、全体的にみて細かい材が多いのではないかとと思われる。10～20年を超える割片もあるが、割片が大きいわけではなく、いずれも年輪幅が狭い個体である。このような割片は老木の外側に多いので、大径のものも含まれている可能性がある。以下に解剖学的な特徴を述べる。

・ヒノキ科 (Cupressaceae)

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型?で、放射組織は単列、1~15細胞高。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (Quercus subgen. Quercus sect. Prinus) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1~3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔孔、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (Quercus subgen. Quercus sect. Cerris) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1~3列、孔圏外で急激に径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・サクラ属 (Prunus) バラ科

散孔材で、年輪のはじめにやや大型の道管が配列し、孔圏外でやや管径を減じた後、単独または2~6個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1~6細胞幅、1~60細胞高。

・カエデ属 (Acer) カエデ科

散孔材で管壁は薄く、単独および2~3個が複合して散在し、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔孔を有し、壁孔は対列~交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1~4細胞幅、1~40細胞高。

・イネ科草本類 (Gramineae)

断面は直径3mm(葉鞘含む)の円柱状で、中心部には髓がある。茎の周囲が葉鞘に包まれる。小径の道管の左右に1対の大型の道管があり、その外側に篩部細胞がある。これらを繊維細胞(維管束鞘)が囲んで維管束を形成する。タケ類に比べて繊維細胞が薄いため、草本類と思われる。柔組織中は海綿状の粗い細胞からなり、維管束も大きく繊維細胞も薄い。一方茎の周辺の維管束は小型で、繊維細胞の密度が高く、細胞壁も厚い。このように維管束が組織中に散在し、不斉中心柱をなす。葉鞘の構造、茎の太さ、繊維細胞の発達状況からイネ科草本類であり、稈の太さから草丈1m以下の小~中型の草本類植イネ科と思われる。なおヨシやイネなど水生のイネ科は髓が中空になることが多いので、これらとは違うと思われる。

4. 考察

検出された種類は、コナラ亜属クヌギ節が圧倒的に多い。クヌギはやや重硬で強度があるため、建築材や器具材に用いられることもあるが、良質な薪炭材として用いられることが多い。クヌギは里山林の主要な構成種であるほか、河川沿いにも多く分布することから、遺跡近くで得やすい樹種であり、当時も建築材や薪炭材等様々な用途で使われたことが推測される。クヌギは成長が早く、萌芽による再生も早いので、継続的に木材を得ることができる点も、多く使われた理由の一つと思われる。2~3年輪の小径木と思われる破片が存在し、年輪幅が広い4~5年輪分の割片が多くみられることから、燃料材等に使われた小径木が多い可能性も考えられるが、一方では老木に多い年輪の詰まった割片もあることから、建築材として使われた中~大径木の破片も混ざっている可能性もある。その他の樹種には、ヒノキ科、コナラ亜属コナラ節、サクラ属、カエデ属が検出される。これらも河川沿いや谷筋などにみられることが多い樹木であり、当時燃料材や建築材として使われていた可能性がある。平安時代の県内の木材利用状況を木材利用データベース(伊東・山田編, 2012)でみると、いずれも過去に炭化材としての出土例がある。長坂町の健康村遺跡(バリノ・サーヴェイ株式会社, 1994)でも、平安時代の住居跡からコナラ亜属多量に見つかっているが、こちらはクヌギ節とともにコナラ節も多い。長坂町は山間部なので、コナラやミズナラといったコナラ節の樹木が容易に採取できることが理由と思われる。

一方、イネ科草本類も検出される。イネ科は、古くから屋根材、用具、燃料などの資材として使われており、これらの一部であったと思われる。観察の結果、種類は不明だが、通気用の組織が発達していないことから、イネやヨシなど水生のイネ科である可能性は薄い。

第3項 種実同定・微細物分析

1. 試料

樹実同定および微細物分析の試料は、流路に掘り込まれた落ち込み部分より出土した水洗済み種実1式と、微細物分析は壁穴建物跡土壌25点、土坑土壌1点、柱穴土壌1点、円形の土坑土壌1点、土墳墓と思われる石敷の遺構土壌1点、性格不明遺構土壌1点の30点である。試料の詳細は、結果とともに表3に示す。

2. 分析方法

(1) 種実同定

試料を双眼顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、種実を拾い出す。

種実の同定は、現生標本や石川(1994)、中山ほか(2010)、鈴木ほか(2012)等を参考に実施し、部位・状態別の個数を数えて、結果を一覧表で示す。状態は半分以下を破片、半分残存を半形、半分を上回る残存を完形としている。

同定された分類群は、写真を添付する他、主な種実の大きさをデジタルノギスで計測し、結果を一覧表に記して同定根拠とする。

分析後は、種実を分類群別に容器に入れ、分析残渣を袋に戻して保管する。

(2) 微細物分析

土壌試料から炭化物や骨片等の遺物を可能な限り壊さず回収するために、以下の方法を実施する。

1) 水洗前抽出

試料500gを秤量し、肉眼観察で確認された炭化物片等の遺物を抽出後、常温乾燥させる。

2) 水洗

試料に水を満たした容器に投入し、容器を傾けて浮いた炭化物等を粒径0.25mmの篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌し、容器を傾けて炭化物を回収する作業を炭化物等が浮かなくなるまで繰り返す(20回程度)。残土を粒径0.25mmの篩を通して水洗する。

水洗後、水に沈んだ試料を、粒径2mm、0.5mmの篩に通し、粒径別に常温乾燥させる。

3) 抽出同定

乾燥後、粒径の大きな試料から順に双眼顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定可能な炭化種実と炭化材(2mm以上)、骨片などを抽出する。炭化種実の同定は、現生標本や石川(1994)、中山ほか(2010)、鈴木ほか(2012)等を参考に実施し、部位・状態別の個数を数えて、結果を一覧表で示す。炭化種実以外の分析残渣は、確認される種類(炭化材や植物片、骨)の定量的な量比を一覧表にプラス「+」で示す。

分析後は、炭化種実を分類群別容器に入れて保管する。炭化材と骨片は、個数と重量を記録後、容器に入れて保管する。分析残渣は、粒径別の重量を記録後、袋に入れて保管する。

3. 結果

(1) 種実出土状況

結果を表3に示す。分析に供された試料を通して、木本2分類群(オニグルミ、モモ)45個の種実が同定された。

流路に掘り込まれた落ち込み部分より出土したものは、種実同定の結果、オニグルミ核完形2個、半形7個、破片4個、モモ核完形11個、半形6個、破片15個が同定された。

表3 種実同定結果

試料No.	採取遺構	分類	非炭化種実							
			オニグルミ			モモ				
			核			核				
完形	半形	破片	完形	半形	破片					
1	1号流路	種実	2	7	4	11	6	15		

(2) 微細物分析

結果を表4に示す。また、炭化種実の写真を図版に示して同定根拠とする。分析に供された全30試料を通して、木本1分類群(モモ)、草本13分類群(イネ、エノコログサ属、アワ、ヒエ属、キビ、オオムギ、コムギ、ムギ属、イネ科、アカザ属、ササゲ属、マメ科、アカネ科)の炭化種実が抽出同定された。分析残渣は、炭化材や植物片、砂礫類、骨片が確認された。炭化種実が抽出された遺構を中心に下記に記載する。

1) 竪穴建物跡

遺構別出土炭化種実、SI26 焼土・炭化物・灰が多く、イネ果実破片 9 個、アワ果実完形 1 個、オオムギ果実完形 2 個、コムギ果実完形 1 個、ムギ類果実破片 6 個、ササゲ属子葉破片 3 個、次に SI26 カマド焼土からイネ果実完形 1 個、破片 7 個、アワ果実完形 4 個、SI30 カマド焼土からイネ果実完形 3 個、果実破片 10 個、ムギ類果実破片 1 個が多く、SI02 カマド焼土からムギ類果実破片 1 個、SI07 カマド焼土からオオムギ果実完形 1 個、ムギ類果実破片 1 個、SI15 カマド焼土からイネ果実破片 1 個、SI16 カマド焼土からモモ核破片 1 個、ササゲ属子葉完形 1 個、破片 1 個、SI18 カマド焼土からイネ果実破片 1 個、SI18 カマド前焼土からイネ果実破片 1 個、SI44SK01 焼土・炭化物からイネ果実完形 1 個、破片 2 個、オオムギ果実破片 1 個、コムギ果実破片 1 個、ムギ類果実破片 3 個の栽培植物が抽出同定された。

その他に少量ではあるが SI26 焼土・炭化物・灰からエノコログサ属完形 1 個、イネ科果実完形 1 個、アカネ科種子完形 1 個、SI26 カマド焼土からイネ科果実破片 1 個、マメ科子葉破片 3 個、SI30 カマド焼土からイネ科果実完形 2 個、SI44SK01 焼土・炭化物からイネ科果実破片 1 個の雑草が抽出同定された。また、炭化材が 186 個 5.38g、骨片 42 個 2.28g 確認された。

2) 土坑

SK1008 からイネ果実破片 4 個、ムギ類果実破片 1 個の栽培植物が抽出同定された。

3) 柱穴

SP4003 炭化材から種実が確認されなかった。炭化材が 214 個 1.50g 確認された。

4) 円形の土坑

SS3001 焼土から種実が確認されなかった。

5) 土壇墓と思われる石敷の遺構

SS3002 焼土からイネ類破片 11 個、アワ類完形 2 個、果実完形 3 個、キビ果実完形 9 個、ムギ類果実破片 1 個、ササゲ属子葉完形 2 個の栽培植物とエノコログサ属完形 5 個、果実完形 1 個、ヒエ属果実完形 10 個、イネ科類破片 26 個、果実完形 1 個、アカザ属種子 6 個の畑作雑草が抽出同定された。

(3) 炭化種実の記録

炭化種実各分類群の写真を図版 3 に、また、水洗し済み種実の計測値を表 5 に示して同定根拠とする。以下、各分類群の形態的特徴を述べる。

・オニグルミ (*Juglans ailanthifolia* Maxim. var. *sachalinensis* (Miyabe et Kudo) Kitamura) クルミ科クルミ属 図版番号 1

茶褐色で円形～楕円形を呈し、一端がとがる。側面には縦に走る一本の縫合線がめぐる。表面に縦方向の浅い彫紋が走り、不規則な隆起がある。出土核は最大長さ 3.0cm、幅 2.5cm、厚さ 2.6cm を測る。(1 号流路)

・モモ (*Prunus persica* Batsch) バラ科モモ属 図版番号 2.3

黄褐色～黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の溝と隆起がある。炭化した核破片も確認できる。最大長さ 2.6cm、幅 2.2cm、厚さ 1.9cm を測る。(1 号流路)

・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属 図版番号 4.5

穎は炭化しており黒色。扁平楕円形を呈し、下端に枝梗が残る。表面には微細な顆粒状突起がある。完形のもの無かった。

果実は炭化しており黒色。長楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。

・エノコログサ属 (*Setaria*) イネ科 図版番号 6.7

表5 出土核計測値

オニグルミ 核				モモ 核			
試料	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	試料	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)
1	28.82	24.04	23.88	1	24.69	20.48	16.54
2	30.77	25.24	25.55	2	26.13	22.06	14.95
3	35.11	24.33	—	3	23.99	21.16	15.43
4	32.95	23.80	—	4	24.16	18.39	12.18
5	28.29	22.38	—	5	26.06	19.40	15.66
6	33.85	26.67	—	6	23.61	19.50	13.90
7	30.49	24.36	—	7	23.86	16.46	12.55
8	36.94	—	—	8	24.19	20.59	16.31
9	36.90	—	—	9	21.16	17.56	11.31
				10	20.27	16.53	13.32
				11	20.10	14.65	13.03
				12	25.36	18.85	—
				13	24.54	19.52	—
				14	24.15	19.58	—
				15	23.22	17.48	—
				16	26.78	—	19.67
				17	23.97	—	14.82
平均	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	平均	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)
	32.68	24.40	24.72		23.84	18.81	14.59
最大	36.94	26.67	25.55	最大	26.78	22.06	19.67
最小	28.29	22.38	23.88	最小	20.10	14.65	11.31

注) 種実の計測値 (mm) はデジタルノギス使用による。

穎は炭化しており黒色。楕円形を呈す。表面には横方向の微細な隆起がある。

果実は炭化しており黒色。楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。

- ・アワ (*Setaria italica* Beauv.) イネ属イネ科 図版番号 8.9

穎の表面には横方向の微細な隆起がある。

果実は炭化しており黒色。楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。

- ・ヒエ属 (*Echinochloa*) イネ科 図版番号 10

果実は炭化しており黒色。楕円形を呈し、表面には微細な縦方向の模様がある。

- ・キビ (*Panicum miliaceum* L.) イネ科キビ属 図版番号 11

果実は炭化しており黒色。円形を呈し、側面は倒卵形で基部の方へ薄くなる。胚部は斜切形。

- ・オオムギ (*Hordeum vulgare* L.) イネ科オオムギ属 図版番号 12

果実は炭化しており黒色。楕円形を呈す。腹部の端には胚がある。背面には縦に一本の溝がある。側面の形は曲率が大きく、胚と胚乳との接する輪郭線は山形である。

- ・コムギ (*Triticum aestivum* L.) イネ科コムギ属 図版番号 13

果実は炭化しており黒色。楕円形を呈する。腹部の端には胚がある。背面には縦に一本の溝がある。比較的四角い形を呈し、短い。

- ・ムギ類 イネ科

オオムギもしくはコムギと思われ、背面には縦に一本の溝があるが発泡しており破片のため胚の確認ができないためムギ類とした。

- ・イネ科 (*Gramineae*) 図版番号 14.15

穎は炭化しており黒色。楕円形を呈し、腹面はやや平ら。背面は丸い。表面は滑らかである。

果実は炭化しており黒色。円形から楕円形を呈し、胚の部分はとれていくぼんでいる。

- ・アカザ属 (*Chenopodium*) アカザ科 図版番号 16

種子は炭化しており黒色。円形を呈し、片面の中央から周縁まで浅い溝が走る。

- ・ササゲ属 (*Vigna*) マメ科 図版番号 17

子葉は炭化しており黒色。楕円形を呈し、縦に一本の溝状の筋が走る。

- ・マメ科 (*Leguminosae*)

子葉は炭化しており黒色。楕円形を呈す。破片のため科までの同定にとどめる。

- ・アカネ科 (*Rubiaceae*) 図版番号 18

種子は炭化しており黒色。偏球形を呈し、背面は広楕円状円形である。中央に円形の穴がある。

4. 考察

種実同定の結果では木本 2 分類群が、微細物分析の結果では各遺構より木本 1 分類群、草本 13 分類群から成る炭化種実群が得られた。

1 号流路から確認されたオニグルミは、川沿いなどの湿り気の多いところに生育する落葉高木で食用可能である。モモは、排水の良い場所に栽培される落葉小高木で食用可能なほか祭祀用途にも用いられる。また、モモは、稲作と共に栽培植物として伝来する。多くの遺跡から出土し、弥生時代から古墳時代にかけて出土量が増える傾向がある。これらの樹木が当時の遺跡周辺域に生育していたと考えられる。

竪穴建物跡から抽出同定された炭化種実は樹木であるモモ、栽培される水生植物であるイネ、畑作植物であるアワ、オオムギ、コムギ、ムギ類、ササゲ属がある。全体的に個体数は少ないが、火を受けたもののみが炭化し残存したとみなされる。いずれも栽培植物であり、利用時にこぼれ落ちたものが火を受けたと考えられ、雑穀で主食となるイネ、アワ、オオムギ、コムギ、野菜であるササゲ属が認められた。竪穴建物跡では雑穀類が同定されているが、一方で SI16 では雑穀類ではなく、モモ、ササゲ属が抽出同定され、他とは異なる様相を示す。

その他に少量ではあるがエノコログサ属、イネ科、アカネ科、マメ科子葉の畑作雑草があり、種実の付いた植物体が燃料として使われたものに由来すると考えられる。土坑から抽出、同定された炭化種実のイネ、ムギ類は近隣で利用されたものに由来すると考えられる。また、土壌墓と思われる石敷の遺構から抽出同定された炭化種実のイネ、アワ、キビ、ムギ類、ササゲ属は副葬または供献である可能性が考えられる。調査地点の周囲には人里植物ないし畑作雑草で日当たりの良い乾燥地に生育するエノコログサ属、ヒエ属、イネ科、アカザ属が生育していたと考えられる。

第4項 珪藻分析

1. 試料

珪藻分析の試料は、SD4001 溝より4点、SD4002より8点の、計12点の土壌が採取されている。試料は層位的に採取されており、試料番号は上位より付されている。試料の詳細は、結果とともに表6に示す。

2. 分析方法

湿重約5gをビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を4～5回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のブリュウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油浸600倍または1000倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が200個体以上になるまで同定・計数した。なお、原則として、珪藻殻が半分以上破損したものについては、誤同定を避けるため同定・計数は行わない。200個体が産出した後は、標準種等の重要な種類の見落としがないように、全体を精査し、含まれる種群すべてが把握できるように努める。

珪藻の同定と種の生態性については、Hustedt(1930-1966)、Krammer and Lange-Bertalot(1985-1991)、Desikachary(1987)、Lange-Bertalot(2000)などを参考にする。群集解析にあたり個々の産出化石は、まず塩分濃度に対する適応性により、海水生、海水～汽水生、汽水生、淡水生に生態分類し、さらにその中の淡水生種は、塩分・pH、水の流動性の3適応性についても生態分類し表に示す。

堆積環境の変遷を考察するために、珪藻化石が100個体以上検出された試料について珪藻化石群集変遷図を作成する。出現率は化石総数を基数とした百分率で表し、1%以上の出現率を示す分類群についてのみ表示する(図中の●印は、総数が100個体以上産出した試料うち1%未満の種を、+印は総数100個体未満の場合の産出を示す)。図中には、海水生・汽水生・淡水生種の相対頻度と淡水生種を基数とした塩分・pH・流水の相対頻度について図示する。

塩分に対する適応性とは、淡水中の塩類濃度の違いにより区分したもので、ある程度の塩分が含まれた方がよく生育する種類は好塩性種とし、少量の塩分が含まれていても生育できるものを不定性種、塩分が存在する水中では生育できないものを嫌塩性種として区分している。これは、主に水域の化学的な特性を知る手がかりとなるが、単に塩類濃度が高いか低いかといったことが分かるだけでなく、塩類濃度が高い水域というのは概して閉鎖水域であることが多いことから、景観を推定する上でも重要な要素である。

pHに対する適応性とは、アルカリ性の水域に特徴的に認められる種群を好アルカリ性種、逆に酸性水域に生育する種群を好酸性種、中性の水域に生育する種を不定性種としている。これも、単に水の酸性・アルカリ性のいずれかがわかるだけでなく、酸性の場合は湿地であることが多いなど、間接的には水域の状況を考察する上で必要不可欠である。

流水に対する適応性とは、流れのある水域の基物(岩石・大型の藻類・水生植物など)に付着生育する種群であり、特に常時、流れのあるような水域でなければ生育出来ない種群を好流水性種、逆に流れのない水域に生育する種群を好止水性種として区分している。流水不定性は、どちらにでも生育できる可能性もあるが、それらの大半は止水水域に多い種群である。なお、好流水性種と流水不定性種の多くは付着性種であるが、好止水性種には水塊中を浮遊生活する浮遊性種も存在する。浮遊性種は、池沼あるいは湖沼の環境を指標する。

なお、淡水生種の中には、水中から出て陸地の乾いた環境下でも生育する種群が存在し、これらを陸生珪藻と呼んで、水中で生育する種群と区分している。陸生珪藻は、陸地の乾いた環境を指標することから、古環境を推定する上で極めて重要な種群である。

3. 結果

結果を表6、図2に示す。分析した12試料すべて珪藻殻は産出した。また、SD4001③、④、SD4002①～⑤、⑧の8試料からは100個体以上産出したが、その他の試料は産出数が少なかった。以下、地点ごとに結果を記す。
・SD4001

試料番号①からは、29個体産出した。保存状態は壊れた殻が多く、一部の殻に溶解の痕跡が認められるため、不良～極不良である。産出した分類群は、淡水性種のみで構成される。産出した種は、淡水生種で流水性種の

Cymbella turgidula 等である。

試料番号②からは、71 個体産出した。保存状態は、壊れた殻が多く、一部の殻に溶解の痕跡が認められるため、不良～極不良である。産出した分類群は、淡水性種のみで構成される。産出した種は、淡水性種で流水性種の *Cymbella turgidula*、*Gomphonema clevei*、*Gomphonema parvulum* 等である。

試料番号③からは、200 個体以上産出した。保存状態は、完形の殻が多いが、一部に壊れている殻もあるため、普通である。産出した分類群は、淡水性種のみで構成される。淡水生の生態性(珪藻の 3 つの適応性:水中の塩分・pH・流水に対する適応性)を整理してみた場合、以下のような傾向が認められる。まず、塩分に対する適応性は、貧塩不定性種が優先する。次に、pH に対する適応性は、アルカリ性種が優先する。流水に対する適応性は、流水不定性種および流水性種が、それぞれ 40% 程度産出し、止水性種 10% 程度産出する。また、本試料は水生珪藻が優先し、陸生珪藻は極低率にしか産出しない。特徴的に産出した種は、淡水性種で流水性種の *Cymbella turgidula*、*Navicula elginensis* var. *neglecta*、*Synedra inaequalis* 等である。

試料番号④からは、200 個体以上産出した。保存状態は、完形の殻が多いが、一部に壊れている殻もあるため、普通である。産出した分類群は、淡水性種のみで構成される。産出した種の生態性についてみると、塩分に対する適応性は、貧塩不定性種が優先する。次に、pH に対する適応性は、アルカリ性種が優先する。流水に対する適応性は、流水性種が優先する。特徴的に産出した種は、淡水性種で流水性種の *Coconeis placentula* var. *lineata*、*Cymbella turgidula*、*Navicula viridula* 等である。

・SD4002

試料番号①～③の 3 試料は、産出種に多少の差異はあるものの、ほぼ同様の傾向を示す。試料番号①は 136 個体、試料番号②、③は 200 個体以上産出した。保存状態は、完形の殻が多いが、一部に壊れている殻もあるため、普通である。産出した分類群は、いずれも試料も淡水性種を主にするが、試料番号③のみ淡水～汽水性種が低率に伴う種群で構成される。本 3 試料の淡水生の生態性についてみると、塩分に対する適応性は、いずれも貧塩不定性種が優先する。次に、pH に対する適応性は、いずれもアルカリ性種が優先する。流水に対する適応性は、いずれも流水性種が優先する。本 3 試料は、水生珪藻が優先するが、陸生珪藻は低率にしか産出しない。特徴的に産出した種は、淡水性種で流水性種の *Coconeis placentula* var. *lineata*、*Cymbella turgidula*、*Synedra inaequalis*、淡水性種で流水不定性種の *Gomphonema parvulum* 等である。

試料番号④および⑤の 2 試料は、産出種に多少の差異あるものの、ほぼ同様の傾向を示す。試料番号④からは 180 個体、試料番号⑤からは、143 個体産出した。保存状態は、完形の殻もあるが、壊れたからも多いため、普通～不良である。産出した分類群は、淡水性種のみで構成される。本 2 試料の淡水生の生態性についてみると、塩分に対する適応性は、いずれも貧塩不定性種が優先する。次に、pH に対する適応性は、いずれもアルカリ性種が優先する。流水に対する適応性は、いずれも流水不定性種が優先するが、流水性種も 20～30% 程度産出する。本 2 試料は、水生珪藻が優先するが、陸生珪藻は極低率にしか産出しない。淡水性種で流水性種の *Coconeis placentula* var. *lineata*、*Cymbella turgidula*、流水不定性種の *Caloneis silicula*、*Gyrosigma acuminatum* 等である。

試料番号⑥および⑦の 2 試料は、産出種に多少の差異あるものの、ほぼ同様の傾向を示す。

試料番号⑥からは 36 個体、試料番号⑦からは 45 個体産出した。保存状態は壊れた殻が多く、一部の殻に溶解の痕跡が認められるため、不良～極不良である。産出した分類群は、淡水性種のみで構成される。産出した種は、淡水性種で流水性種の *Cymbella turgidula* 等である。

試料番号⑧からは 200 個体以上産出した。保存状態は、完形の殻が多いが、一部に壊れている殻もあるため、普通である。産出した分類群は、いずれも試料も淡水性種を主にするが、試料番号③のみ淡水～汽水性種が低率に伴う種群で構成される。本試料における淡水生の生態性についてみると、塩分に対する適応性は、貧塩不定性種が優先する。次に、pH に対する適応性は、アルカリ性種が優先する。流水に対する適応性は、流水性種が優先する。本試料は、水生珪藻が優先するが、陸生珪藻は低率にしか産出しない。特徴的に産出した種は、淡水性種で流水性種の *Cymbella turgidula*、*Planothidium lanceolatum*、*Synedra inaequalis* 等である。

表6 珪藻分析結果 (1)

種 類	生態性			S1001				S1002				
	塩分	pH	濁度	①	②	③	④	①	②	③	④	
<i>Chaetoceros (Chaetoceros) (Hbr.) Hustler</i>	0/0-0/0	0/0	0/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Aureora anatina</i> Hustler	0/0-0/0	0/0	0/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Aureora anatina</i> var. <i>aurata</i> (Hustl.) Van Soest	0/0-0/0	0/0	0/0	3	1	-	-	3	4	1	10	3
<i>Aureora</i> spp.	0/0-0/0	0/0	0/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Chaetoceros aureolum</i> Hustl.	0/0-0/0	0/0	0/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Chaetoceros ellipticus</i> (Hbr.) Hustl.	0/0-0/0	0/0	0/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Chaetoceros plumosus</i> var. <i>subulatus</i> (Hbr.) Hustl.	0/0-0/0	0/0	0/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Chaetoceros plumosus</i> var. <i>lineatus</i> (Hbr.) Hustl.	0/0-0/0	0/0	0/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Chaetoceros</i> spp.	0/0-0/0	0/0	0/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cyclotella lundii</i> (Hustl. ex Hustl.) Van Soest	0/0-0/0	0/0	0/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cyclotella longicollis</i> Hustl.	0/0-0/0	0/0	0/0	17	15	20	08	36	09	43	18	12
<i>Cyclotella</i> spp.	0/0-0/0	0/0	0/0	3	4	5	-	1	-	4	1	5
<i>Diploneis oblongata</i> (Daug.) Hustl.	0/0-0/0	0/0	0/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Diploneis ovalis</i> (Hustl.) Hustl.	0/0-0/0	0/0	0/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Diploneis</i> spp.	0/0-0/0	0/0	0/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eucampia arctica</i> (Hustl. ex Hustl.) B.G. Bates	0/0-0/0	0/0	0/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Epithemia adusta</i> (Hustl.) Hustl.	0/0-0/0	0/0	0/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Epithemia</i> spp.	0/0-0/0	0/0	0/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria capitata</i> Hustler	0/0-0/0	0/0	0/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria alata</i> (Hustl.) Lange-Bertalot	0/0-0/0	0/0	0/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria</i> spp.	0/0-0/0	0/0	0/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Frustulia</i> spp.	0/0-0/0	0/0	0/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema clavifrons</i>	0/0-0/0	0/0	0/0	7	1	-	-	3	9	2	-	-
<i>Gomphonema gracile</i> Hustler	0/0-0/0	0/0	0/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema parvum</i> (Hustl.) Hustl.	0/0-0/0	0/0	0/0	8	2	1	-	3	10	2	3	4
<i>Gomphonema</i> spp.	0/0-0/0	0/0	0/0	3	-	-	-	3	2	-	-	-
<i>Gyrodinium aureolum</i> (Hustl.) Hustler	0/0-0/0	0/0	0/0	4	5	5	-	3	72	43	-	6
<i>Gyrodinium scapularis</i> (Hustl.) Hustl.	0/0-0/0	0/0	0/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gyrodinium</i> spp.	0/0-0/0	0/0	0/0	2	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Heterosira amplicornis</i> (Hbr.) Hustl.	0/0-0/0	0/0	0/0	1	8	2	-	13	12	3	-	-
<i>Heterosira circularis</i> var. <i>subrotunda</i> (Hustl.) Van Soest	0/0-0/0	0/0	0/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Heterosira confusum</i> (Hustl.) Hustl.	0/0-0/0	0/0	0/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Heterosira cryptostoma</i> Lange-Bertalot	0/0-0/0	0/0	0/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Heterosira oligomera</i> var. <i>neglecta</i> (Hustl.) Patrick	0/0-0/0	0/0	0/0	1	7	3	-	6	10	-	-	-
<i>Heterosira viridula</i> (Hustl.) Hustl.	0/0-0/0	0/0	0/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Heterosira</i> spp.	0/0-0/0	0/0	0/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Heterosira amplicornis</i> (Hbr.) Hustl.	0/0-0/0	0/0	0/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Heterosira</i> spp.	0/0-0/0	0/0	0/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnastrum acrocephalum</i> K. Smith	0/0-0/0	0/0	0/0	3	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnastrum brevicauda</i> Hustler	0/0-0/0	0/0	0/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnastrum brevisetatum</i> Hustl.	0/0-0/0	0/0	0/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnastrum lundii</i> Hustl.	0/0-0/0	0/0	0/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnastrum microsetatum</i> (Hbr.) Hustl.	0/0-0/0	0/0	0/0	3	3	-	-	-	-	-	-	-

表6 珪藻分析結果 (2)

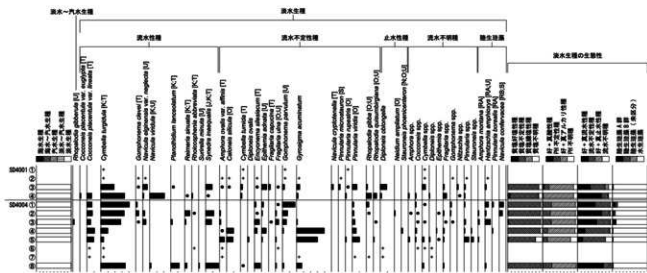
種 類	生態性			S1001				S1002				
	塩分	pH	濁度	①	②	③	④	①	②	③	④	
<i>Pinnastrum brevicauda</i> Hustler	0/0-0/0	0/0	0/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnastrum submarginatum</i> Gregory	0/0-0/0	0/0	0/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnastrum viridula</i> (Hustl.) Hustler	0/0-0/0	0/0	0/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnastrum</i> spp.	0/0-0/0	0/0	0/0	3	2	3	2	5	2	10	-	-
<i>Platydium lamellatum</i> (Hustl. ex Hustl.) Lange-Bertalot	0/0-0/0	0/0	0/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Platydium sinuata</i> (Hustl.) Hustl. ex Hustl.	0/0-0/0	0/0	0/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Rhodomonas abbreviata</i> (Hustl.) Lange-Bertalot	0/0-0/0	0/0	0/0	4	2	-	-	3	2	-	-	-
<i>Rhodomonas gibba</i> (Hbr.) Hustl.	0/0-0/0	0/0	0/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Rhodomonas submarginata</i> Hustler	0/0-0/0	0/0	0/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Sclerophloeus papilla</i> (Hustl.) Hustler	0/0-0/0	0/0	0/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> (Hustl.) Hustler	0/0-0/0	0/0	0/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis</i> spp.	0/0-0/0	0/0	0/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Sviridula angusta</i> Hustl.	0/0-0/0	0/0	0/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Sviridula sinuata</i> Hustl.	0/0-0/0	0/0	0/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Thalassiosira (Thalassiosira) K. Hustler</i>	0/0-0/0	0/0	0/0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
海水～汽水種	0/0	0/0	0/0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
汽水種	0/0	0/0	0/0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
淡水～汽水種	0/0	0/0	0/0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
淡水種	29	73	196	209	127	206	218	180	142	36	45	201
沼澤～汽水種	0/0	0/0	0/0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

凡例

塩分/濁度/濁度に対する安定性 pH/水素イオン濃度に対する安定性 汽水/淡水に対する安定性
 0/0: 汽水種 al-0: 汽水～汽水種 1-h: 汽水～汽水種
 0/0-0/0: 海水種 al-1: 汽水～汽水種 1-0: 汽水種
 0/0: 汽水種 ind: ind 不定性種 ind: ind 不定性種
 0/0-1/0: 汽水種～汽水種 ac-1: 汽水種 e-0: 汽水種
 0/0-1/1: 汽水種～汽水種 ac-1: 汽水種 e-1: 汽水種
 0/0-1/0: 汽水種～汽水種 ac-1: 汽水種 e-1: 汽水種
 0/0-0/0: 汽水種～汽水種 ac-1: 汽水種 e-1: 汽水種
 0/0-0/0: 汽水種～汽水種 ac-1: 汽水種 e-1: 汽水種

採集地情報

1: 海水種 2: 汽水種 3: 汽水種 4: 汽水種 5: 汽水種 6: 汽水種 7: 汽水種 8: 汽水種 9: 汽水種 10: 汽水種
 11: 海水種 12: 汽水種 13: 汽水種 14: 汽水種 15: 汽水種 16: 汽水種 17: 汽水種 18: 汽水種 19: 汽水種 20: 汽水種
 21: 海水種 22: 汽水種 23: 汽水種 24: 汽水種 25: 汽水種 26: 汽水種 27: 汽水種 28: 汽水種 29: 汽水種 30: 汽水種
 31: 海水種 32: 汽水種 33: 汽水種 34: 汽水種 35: 汽水種 36: 汽水種 37: 汽水種 38: 汽水種 39: 汽水種 40: 汽水種
 41: 海水種 42: 汽水種 43: 汽水種 44: 汽水種 45: 汽水種 46: 汽水種 47: 汽水種 48: 汽水種 49: 汽水種 50: 汽水種
 51: 海水種 52: 汽水種 53: 汽水種 54: 汽水種 55: 汽水種 56: 汽水種 57: 汽水種 58: 汽水種 59: 汽水種 60: 汽水種
 61: 海水種 62: 汽水種 63: 汽水種 64: 汽水種 65: 汽水種 66: 汽水種 67: 汽水種 68: 汽水種 69: 汽水種 70: 汽水種
 71: 海水種 72: 汽水種 73: 汽水種 74: 汽水種 75: 汽水種 76: 汽水種 77: 汽水種 78: 汽水種 79: 汽水種 80: 汽水種
 81: 海水種 82: 汽水種 83: 汽水種 84: 汽水種 85: 汽水種 86: 汽水種 87: 汽水種 88: 汽水種 89: 汽水種 90: 汽水種
 91: 海水種 92: 汽水種 93: 汽水種 94: 汽水種 95: 汽水種 96: 汽水種 97: 汽水種 98: 汽水種 99: 汽水種 100: 汽水種



淡水-汽水-淡水性種と水生種-陸生種との産出率と環境因子との関係。淡水性種の比率は淡水性種の存在を基準として百分率で算出した。1/1000以上の割合は上記した3つの区別について示す。なお、●は1%未満、×は1000分の0.01の割合について算出した産出率を示す。

産出率の単位

- ①: 外洋沿岸種 ②: 内洋沿岸種 ③: 海洋環境産種 ④: 汽水環境産種 ⑤: 汽水半滞環境産種 ⑥: 汽水環境産種 ⑦: 汽水環境産種 ⑧: 淡水環境産種 ⑨: 汽水環境産種 ⑩: 汽水環境産種 ⑪: 汽水環境産種 ⑫: 汽水環境産種 ⑬: 汽水環境産種 ⑭: 汽水環境産種 ⑮: 汽水環境産種 ⑯: 汽水環境産種 ⑰: 汽水環境産種 ⑱: 汽水環境産種 ⑲: 汽水環境産種 ⑳: 汽水環境産種 ㉑: 汽水環境産種 ㉒: 汽水環境産種 ㉓: 汽水環境産種 ㉔: 汽水環境産種 ㉕: 汽水環境産種 ㉖: 汽水環境産種 ㉗: 汽水環境産種 ㉘: 汽水環境産種 ㉙: 汽水環境産種 ㉚: 汽水環境産種 ㉛: 汽水環境産種 ㉜: 汽水環境産種 ㉝: 汽水環境産種 ㉞: 汽水環境産種 ㉟: 汽水環境産種 ㊱: 汽水環境産種 ㊲: 汽水環境産種 ㊳: 汽水環境産種 ㊴: 汽水環境産種 ㊵: 汽水環境産種 ㊶: 汽水環境産種 ㊷: 汽水環境産種 ㊸: 汽水環境産種 ㊹: 汽水環境産種 ㊺: 汽水環境産種 ㊻: 汽水環境産種 ㊼: 汽水環境産種 ㊽: 汽水環境産種 ㊾: 汽水環境産種 ㊿: 汽水環境産種

図2 主要珪藻化石群集

4. 考察

各溝の堆積環境について、珪藻分析結果から検討する。

(1)SD4001

試料番号④から特徴的に産出した種は、淡水性種で流水性種の *Cocconeis placentula* var. *lineata*, *Cymbella turgidula*, *Navicula viridula* 等である。産出した種の生態性について述べると、流水性種の *Cocconeis placentula* var. *lineata* は、河川等の流水域の基物(礫等)に大型の藻類と共に付着生育する種である。Asai & Watanabe(1995)は、清浄な水域に生育する種であることから、好清水性種としている。同じく、流水性種の *Cymbella turgidula*, *Navicula viridula* は中〜下流性河川指標種群(安藤,1990)と呼ばれ、河川沿いの河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形がみられる部分に集中して出現するとされる。

以上の産出種の生態性および群集の特徴から、試料番号④が堆積する頃の溝内の環境を推定すると、流水性種が複数産出していることから、流水域であったと考えられる。

試料番号③から特徴的に産出した種は、淡水性種で流水性種の *Cymbella turgidula*, *Navicula elginensis* var. *neglecta*, *Synedra inaequalis* 等である。産出した種の生態性(前述していない種)について述べると、流水性種の *Navicula elginensis* var. *neglecta* は、河川や溝等の定常的な水の流れる水域の基物(礫、水草、大型の藻類)に付着生育する種である。流水性種の *Synedra inaequalis* は、安藤(1990)によれば、環境指標種群を設定した中で、河川の上流の峡谷部に集中して出現し、他の地域では出現しないか、出現しても主要でないことから、上流性河川指標種群と位置付けている。また、Asai & Watanabe(1986)は、本種は清浄な水域を指標する種であるとして好清水性種としている。

以上の産出種の生態性および群集の特徴から、試料番号③が堆積する頃の溝内も流水域であったと考えられる。

試料番号②から産出した種は、淡水性種で流水性種の *Cymbella turgidula*, *Gomphonema clevei*, *Gomphonema parvulum* 等である。産出した種の生態性(前述していない種)について述べると、流水性種の *Gomphonema clevei* は、アジアと熱帯アフリカの特産の種であり、河川に優占的に出現する着床種とされる(Hustedt,1938)。流水不定性種の *Gomphonema parvulum* は、流水に対して不定だけでなく、塩分濃度やpHに対しても不定であり、極めて高い適応力を持つ種であり、さまざまな水域に認められる。そのため、Asai & Watanabe(1995)は、広域適応種としている。ただし、経験的には、流水域に多産することが多いことから、以前は流水性種に含まれていた種である。

本試料の珪藻化石は産出数が少なかったため、産出した種の生態性のみで環境を推定することは難しいが、試料番号④および③と同様に流水性種が産出していることから、本試料の堆積時も流水域であった可能性が示唆される。

試料番号①から産出した種は、淡水生種で流水性種の *Cymbella turgidula* 等である。本試料の珪藻化石は産出数も少なかったため、産出した種の生態性のみで環境を推定することは危険である。ただ、試料番号④および③と同様に流水性種が産出していることから、本試料の堆積時も流水域であった可能性が示唆される。

(2)SD4004

試料番号⑧から特徴的に産出した種は、淡水生種で流水性種の *Cymbella turgidula*, *Planothidium lanceolatum*, *Synedra inaequalis* 等である。産出した種の生態性(前述していない種)について述べると、*Planothidium lanceolatum* は、安藤(1990)によれば、中～下流河川指標種群とされている。

以上の産出種の生態性および群集の特徴から、本試料の堆積時の環境を推定する。本試料からは、流水性種が複数産出していることから、試料番号⑧堆積時は流水域であったと考えられる。

試料番号⑦および⑥の2試料から産出した種は、淡水生種で流水性種の *Cymbella turgidula* 等である。珪藻化石の産出数が少なかったため、産出した種の生態性のみで環境を推定することは危険である。ただ、試料番号⑧と同様に流水性種が産出していることから、本試料堆積時も流水域であった可能性が示唆される。

試料番号⑤および④の2試料から産出した種は、淡水生種で流水性種の *Cocconeis placentula* var. *lineata*, *Cymbella turgidula*, 流水不定性種の *Caloneis silicula*, *Gyrosigma acuminatum* 等である。産出した種の生態性(前述していない種)について述べると、流水不定性種の *Caloneis silicula* は、貧塩-不定、好アルカリ性、流水不定とされ、比較的、広範に認められる種であるが、沼沢湿地において優占して認められることの多い種である。淡水生種で流水不定性種の *Gyrosigma acuminatum* は、淡水生で塩分不定、好アルカリ性、流水不定とされるが、淡水では淀んだ止水域や汽水域からも見出される種である。

以上の産出種の生態性および群集の特徴から、本試料の堆積時の環境を推定する。本試料からは、流水性種が複数産出しているが、淀みのあるような水域に生息する種が特徴的に産出していることから、流水の影響があった時期はあったが、やや淀みのあるような水域環境が長く続いていたと考えられる。

試料番号①～③の3試料から産出した種は、淡水生種で流水性種の *Cocconeis placentula* var. *lineata*, *Cymbella turgidula*, *Synedra inaequalis*, 淡水生種で流水不定性種の *Gomphonema parvulum* 等である。

以上の産出種の生態性および群集の特徴から、本試料が堆積する頃になると、再び溝内は流水域になったと考えられる。

第5項 花粉分析・植物珪酸体分析

1. 試料

花粉分析および植物珪酸体分析の試料は、2区中島西壁より採取された A1,A2,B1,B2,C1～C4,D1～D4,E1～E6,F1～F3,G1,G2,H1,H2,I1～I6(試料番号1～31)の、計31点である。アルファベットの各層の区分は、各層は層厚5cmずつ採取し、上位から順番に番号が付けられている。なお、A～Cは洪水砂層、D～Eは水田作土層、F～Hは平安時代遺物包含層、Iは遺構確認面以深(I1以上)が遺構確認面である。

これらの層準から採取された31点について、花粉分析、植物珪酸体分析を実施する。

2. 分析方法

(1) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛、比重2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や鳥倉(1973)、中村(1980)、藤木・小澤(2007)、三好ほか(2011)等を参考にしている。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の分布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフオンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。なお、木本花粉総数が100個未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を+で表示するにと

どめておく。

(2) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュワックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤(2010)の分類を参考に同定し、計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、乾土1gあたりの植物珪酸体含量(同定した数を乾土1gあたりの個数に換算)を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100個/g未満は「<100」で表示する。各分類群の含量は10の位で丸め(100単位にする)、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。また、各分類群の植物珪酸体含量を図示する。

3. 結果

(1) 花粉分析

結果を表7、図3に示す。花粉化石の産出状況は全体的に悪く、定量解析が行えるだけの個体数が得られた試料はD4、H2の2試料のみであった。分析残渣も全体的に少なく、特に有機物残渣が少ない試料が多い。また、わずかに検出される花粉化石の保存状態も悪く、花粉外膜が破損あるいは溶解しているものなどが多く認められた。

A～Cでは分析残渣中に有機物残渣が極めて少ない。花粉化石、シダ類胞子はいずれの試料からもほとんど検出されず、わずかに木本花粉のマツ属、スギ属、ハンノキ属など、草本花粉のイネ科、ヨモギ属、キク亜科などが認められたに過ぎない。

Dは他の試料と比較すると花粉化石が多く産出し、特に最下位のD4で多産する。木本花粉ではクリ属が特異的に多産するのが特徴で、次いでマツ属、コナラ属コナラ亜属が多く、モミ属、ツガ属、ハンノキ属、ブナ属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属一ケヤキ属、ニフトコ属などを伴う。草本花粉ではイネ科が最も多く産出し、カヤツリグサ科、イブキトラノオ節、サナエタデ節-ウナギツカミ節、アカザ科、ナデシコ科、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ亜科などを伴う。D3は少ないながらも草本花粉が多い傾向があり、イネ科、ヨモギ属が多く、カヤツリグサ科、アカザ科、キク亜科、タンポポ亜科などを伴う。栽培の可能性のあるソバ属も確認された。木本花粉はツガ属、マツ属、スギ属、コナラ亜属、ニレ属一ケヤキ属などがわずかに認められる。D2、D1は産状が悪く、ツガ属、マツ属、スギ属、クルミ属、アカガシ亜属などの木本花粉、イネ科、カヤツリグサ科、アカザ科、タンポポ亜科などの草本花粉が認められた。

E～Gも花粉化石はほとんど、あるいは全く検出されない。検出された花粉化石は、木本花粉のマツ属、ブナ属、アカガシ亜属、ニレ属一ケヤキ属、エノキ属-ムクノキ属、草本花粉のオモダカ属、イネ科、クワ科、ヨモギ属、キク亜科などである。なお、Eでややシダ類胞子が多く認められる。

Hについてみると、上位のH1では草本花粉のヨモギ属が1個体確認されたのみであるが、H2からはかろうじて定量解析ができる程度の産出が認められたが、花粉化石の保存状態は悪い。花粉化石群集は木本花粉の割合が高く、ハンノキ属が最も多く産出し、モミ属、ツガ属、マツ属、スギ属、ブナ属、コナラ亜属、ニレ属一ケヤキ属などを伴う。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、アカザ科、キク亜科、タンポポ亜科などがわずかに認められる程度である。

Iは花粉化石の産状が悪く、ほとんどあるいは全く検出されない。わずかにマツ属、ハンノキ属などの木本花粉、イネ科、クワ科、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ亜科などの草本花粉が認められた程度である。

(2) 植物珪酸体分析

結果を表8、図4に示す。以下に、2区中島西壁の土層試料について植物珪酸体の産状を述べる。

A～Cでは多くの試料で植物珪酸体が検出されない。僅かに認められるB2、C1、C2、C4ではタケ亜科あるいは分類群が明確にならない不明が見られるに過ぎない。

水田作土層とされるD1～D4からは植物珪酸体が検出され、その保存状態は概ね良好である。産状はいずれ

表7 花粉分析結果(1)

種 類	2区中島西壁															
	A1	A2	B1	B2	C1	C2	C3	C4	D1	D2	D3	D4	E1	E2	E3	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	
木本花粉																
モミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	6	-	-	-	
ツガ属	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	2	3	-	-	-	
トウヒ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	
マツ属椎管束亜属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	13	1	-	-	
マツ属(不明)	-	1	-	1	-	-	-	1	1	-	1	12	-	-	-	
コウヤマキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
スギ属	-	1	-	-	3	1	-	-	-	1	1	1	-	-	-	
イナヱ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ヤナギ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	
ヤマモモ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	
サワグルミ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	
クルミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	
ハンノキ属	4	2	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	2	-	-	
ブナ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-	
コナラ属コナラ亜属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	13	-	-	-	
コナラ属アカガシ亜属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	4	-	-	-	
クリ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	162	-	-	-	
ニレ属-ケヤキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2	-	-	1	
エノキ属-ムクノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
グミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	
ウコギ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	
ニワトコ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	
スイカズラ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
草本花粉																
オモダカ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
イネ科	-	2	2	-	-	-	-	1	-	3	35	100	-	-	-	
カヤツリグサ科	-	-	-	-	-	-	-	-	1	5	7	34	-	-	-	
イボクサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	
クワ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
イブキトラノオ節	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	9	-	-	-	
サナエタデ節-ウナギツカミ節	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	10	-	-	-	
タデ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	
ソバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	
アカザ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	4	11	-	-	-	
ナデシコ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	8	-	-	-	
カラマツソウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	6	-	-	-	
アブラナ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	
バラ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	
キカシグサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	
セリ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	
オミナエシ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	
マツムシソウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	
ヨモギ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	20	57	-	-	-	
キク亜科	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	3	9	-	-	1	
タンポポ亜科	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	4	20	-	-	-	
不明花粉																
不明花粉	-	1	-	-	-	-	-	-	-	2	-	15	-	-	-	
シダ類胞子																
ヒカゲノカズラ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ゼンマイ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	
他のシダ類胞子	1	1	1	-	1	-	1	-	13	69	81	22	20	7	16	
合 計																
木本花粉	4	4	1	3	4	2	1	2	3	2	11	226	3	0	1	
草本花粉	0	2	2	0	1	0	1	1	2	13	81	274	1	0	1	
不明花粉	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	0	15	0	0	0	
シダ類胞子	1	1	1	0	1	0	1	0	13	69	81	23	20	7	16	
合計(不明を除く)	5	7	4	3	6	2	3	3	18	84	173	523	24	7	18	

表7 花粉分析結果(2)

種 類	2区中島西壁															
	E4	E5	E6	F1	F2	F3	G1	G2	H1	H2	I1	I2	I3	I4	I5	I6
	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
木本花粉																
モミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	19	-	-	-	-	-	-
ツガ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	-	-	-	-	-	-
トウヒ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マツ属雄推管束亜属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
マツ属(不明)	-	-	-	-	1	-	-	-	-	5	-	-	-	-	-	-
コウヤマキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
スギ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	23	-	-	-	-	-	-
イナヰ科—イヌガヤ科—ヒノキ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヤナギ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヤマモモ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サワグルミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クルミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ハンノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	41	-	-	1	-	-	-
ブナ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	-	-	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-
コナラ属アカガシ亜属	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クリ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ニレ属—ケヤキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-
エノキ属—ムクノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
グミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウコギ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
ニワトコ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
スイカズラ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
草本花粉																
オモダカ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ科	-	1	-	-	-	-	-	-	-	5	1	-	1	-	-	1
カヤツリグサ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7	-	-	-	-	-	-
イボクサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クワ科	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
イブキトラノオ節	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サナエタデ節—ウナギツカミ節	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タデ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ソバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカザ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ナデシコ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カラマツソウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アブラナ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
バラ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キカシグサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
セリ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オミナエシ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マツムシソウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	-	1	-	-	-	-	-	1	1	-	-	1	-	1	-	-
キク亜科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-
タンポポ亜科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	1	-	-	-	-
不明花粉																
不明花粉	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-	-	-
シダ類胞子																
ヒカゲノカズラ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
ゼンマイ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
他のシダ類胞子	15	10	2	2	2	2	-	-	1	13	3	3	3	3	-	3
合 計																
木本花粉	0	0	1	1	1	0	0	0	0	110	0	0	1	1	0	0
草本花粉	0	2	0	0	0	1	0	1	1	16	5	2	1	1	0	1
不明花粉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0
シダ類胞子	15	10	2	2	2	2	0	0	1	13	4	3	3	3	0	3
合計(不明を除く)	15	12	3	3	3	3	0	1	2	139	9	5	5	5	0	4

表8 植物珣酸体含量 (1)

(値 /g)

分類群	2区中品西暦														
	A1	A2	B1	B2	C1	C2	C3	C4	D1	D2	D3	D4	E1	E2	E3
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
イネ科葉部細胞珣酸体															
イネ属	-	-	-	-	-	-	-	-	800	2,900	1,800	2,200	2,400	1,600	800
クマザサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	200	200	200	200	-
メダケ属	-	-	-	-	-	-	-	-	600	200	-	-	-	-	-
タケ茎科	-	-	-	-	<100	-	-	-	800	500	700	200	200	200	<100
ヨシ属	-	-	-	-	-	-	-	-	400	200	300	200	200	200	<100
ススキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	400	200	300	-	200	200	-
コムギ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1,000	1,000	200	200	400	800	-
イナゴフナギ茎科	-	-	-	-	-	-	-	-	1,000	1,200	800	-	900	800	<100
不明	-	-	-	-	<100	<100	-	-	5,400	3,700	4,500	2,700	3,100	4,000	200
イネ科葉身細胞珣酸体															
イネ属	-	-	-	-	-	-	-	-	3,200	4,900	5,400	6,400	5,100	2,800	1,500
クマザサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	500	200	200	200	-	<100
メダケ属	-	-	-	-	-	-	-	-	800	500	-	-	-	-	-
タケ茎科	-	-	-	-	-	-	-	-	<100	600	500	700	1,000	200	200
ヨシ属	-	-	-	-	-	-	-	-	200	200	300	200	200	400	<100
ススキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	400	-	200	200	-	-	-
シノ属	-	-	-	-	-	-	-	-	400	700	200	300	800	-	<100
不明	-	-	-	<100	-	-	-	-	<100	8,600	10,200	9,000	8,400	7,100	5,600
合計	-	-	-	-	<100	<100	-	-	10,500	10,000	9,200	5,900	7,700	8,200	1,200
イネ科葉部細胞珣酸体															
イネ科葉身細胞珣酸体	-	-	-	<100	-	-	-	-	<100	14,300	17,600	16,200	17,200	13,700	9,100
細胞珣酸体含量	0	0	0	<100	<100	<100	0	<100	24,800	27,600	25,400	23,100	21,400	17,400	4,200
珣化細胞片															
イネ属細胞体	-	-	-	-	-	-	-	-	*	*	*	*	*	*	*
コムギ属細胞体	-	-	-	-	-	-	-	-	*	*	*	*	*	*	*
イネ属細胞列	-	-	-	-	-	-	-	-	*	*	*	*	*	*	*
イネ属細胞細胞列	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	*
イネ科起源 (その他)															
棒状細胞体	-	-	-	*	*	-	-	-	*	*	*	*	*	*	*
長細胞表面	-	-	-	-	*	-	-	-	*	*	*	*	*	*	*
毛細胞表面	-	-	-	-	-	-	-	-	*	*	*	*	*	*	*

- 1) 含量は、10の位で丸めている (100単位にする)。
 2) 合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に入れている。
 3) <100 : 100 未満 (と記載)
 4) - : 未検出、* : 含有、** : 多い。

表8 植物珣酸体含量 (2)

(値 /g)

分類群	2区中品西暦																	
	E4	E5	E6	F1	F2	F3	G1	G2	H1	H2	I1	I2	I3	I4	I5	I6		
	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31		
イネ科葉部細胞珣酸体																		
イネ属	900	900	200	1,600	2,300	900	200	200	200	1,900	1,700	900	300	<100	200	-		
クマザサ属	-	<100	<100	-	-	100	-	-	-	-	-	200	-	-	-	-		
メダケ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
タケ茎科	<100	<100	-	100	100	<100	-	-	200	300	200	-	-	-	-	-		
ヨシ属	-	-	-	<100	100	100	-	-	100	-	-	-	-	-	-	-		
ススキ属	-	-	-	300	300	-	-	-	<100	200	<100	<100	<100	-	-	<100		
コムギ属	-	-	-	200	300	200	-	-	100	-	-	-	-	-	-	-		
イナゴフナギ茎科	<100	-	<100	400	300	-	200	<100	-	100	-	200	-	-	-	-		
不明	200	400	900	4,100	1,900	600	500	100	200	2,000	400	200	200	1,000	200	100		
イネ科葉身細胞珣酸体																		
イネ属	2,100	1,700	1,400	2,600	3,900	4,300	900	1,500	1,800	2,200	2,500	2,100	600	200	400	100		
クマザサ属	-	<100	<100	-	-	300	<100	-	-	-	<100	<100	-	<100	-	-		
メダケ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
タケ茎科	-	100	-	-	-	100	300	-	<100	100	<100	200	200	<100	-	-		
ヨシ属	-	-	-	<100	100	200	<100	<100	-	200	200	<100	-	-	-	-		
ススキ属	-	100	-	200	100	-	-	-	100	-	-	-	-	-	-	-		
シノ属	<100	-	-	200	100	-	<100	-	-	<100	<100	-	-	-	-	-		
不明	1,200	1,700	600	2,600	2,200	4,400	1,300	1,500	600	3,300	1,400	2,000	600	200	<100	-		
合計	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
イネ科葉部細胞珣酸体																		
イネ科葉身細胞珣酸体	1,300	1,500	1,200	6,600	5,300	2,100	900	400	400	4,700	2,500	1,800	600	1,100	200	200		
細胞珣酸体含量	4,400	3,800	2,000	5,600	5,500	9,300	2,800	3,100	2,500	4,000	4,400	4,400	1,400	500	500	100		
珣化細胞片																		
イネ属細胞体	*	*	-	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*		
コムギ属細胞体	-	-	-	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*		
イネ属細胞列	*	*	-	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*		
イネ属細胞細胞列	-	-	-	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*		
イネ科起源 (その他)																		
棒状細胞体	**	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*		
長細胞表面	-	-	-	*	*	*	-	-	-	*	*	*	*	*	*	*		
毛細胞表面	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*		

- 1) 含量は、10の位で丸めている (100単位にする)。
 2) 合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に入れている。
 3) <100 : 100 未満 (と記載)
 4) - : 未検出、* : 含有、** : 多い。

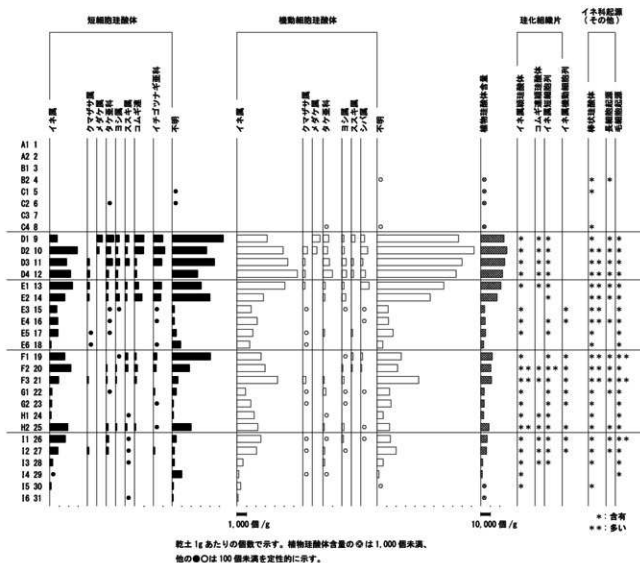


図4. 植物珪酸体含量

4. 考察

洪水砂層とされる A、B、C の各層からは、花粉化石、植物珪酸体ともにほとんど検出されなかった。花粉分析試料では A～C の分析残渣中に有機物残渣が極めて少ない。花粉や植物珪酸体はシルト粒径なので、無機物のシルト粒子と挙動を共にする。洪水の影響を受ける中でシルト粒子とともに花粉化石や植物珪酸体が下流域へ流亡し、土層中に蓄積しにくい状態にあったと思われる。なお、わずかに認められる種類から、マツ属、スギ属、ハンノキ属などの木本類、タケ亜科を含むイネ科、ヨモギ属、キク亜科などの草本類が、当時の周辺に生育していたことが窺える。

水田作土層とされる D1～D4 では、栽培植物であるイネ属の産出が目立ち、穎珪酸体や短細胞列も検出された。これより、各土層中にイネ属の植物体が埋積していたことが想定される。安定した稲作が行われた水田跡の土層では、栽培されていたイネ属の植物珪酸体が土層中に蓄積され、植物珪酸体含量 (植物珪酸体密度) が高くなる。水田跡 (稲作跡) の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体 (機動細胞由来) が試料 1g 当り 5,000 個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われた可能性が高いと判断されている (杉山, 2000)。なお、3,000 個/g でも水田層が検出されることから、判断基準が 3,000 個/g とされる場合もある。D1～D4 では機動細胞珪酸体の含量が 3,000～6,000 個/g であり、この事例と比較して多いあるいは同等と言える含量値である。そのため、D1～D4 では稲作が行われた可能性が高いと判断され、発掘調査所見を裏付けられるものと言える。なお、

イネ属の含量が上位に向かって減少する傾向が見られる。この点については、層相や堆積環境を含めて検討の余地が残される。また栽培種を含む分類群であるコムギ連も産出し、短細胞珪酸体や顆粒酸体が見られた。そのため、水田での稲作が行われていた頃も調査区の近傍や周辺地でムギ類が栽培されていた可能性が考えられる。

花粉化石でも、Dは他の試料と比較すると花粉化石が多く産出し、特に最下位のD4で多産する。草本類をみると、D4、D3ともイネ科が多産する。植物珪酸体の産状を考慮すると、栽培種のイネ属に由来する花粉も含まれている可能性がある。その他ではカヤツリグサ科、イブキトラノオ節、サナエタデ節-ウナギツカミ節、アカザ科、ナデシコ科、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ亜科などが認められる。これらはいずれも開けた明るい場所に生育する、いわゆる「人里植物」を多く含む分類群である。よって、当時の調査地周辺の草地植生に由来すると思われる。なおD3からは、可能性のあるソバ属の花粉も確認されたことから、イネやムギ類だけでなく、ソバ属の栽培利用も可能性がある。

木本類ではD4からクリ属が特異的に多産する。クリ属は虫媒花であり、局地的要素を反映する種類である。しかしながら水田作土層ということ、D4からのみ多産することなどを踏まえると、極近傍にクリ属が生えていたと言うよりも、クリ属の植物体が何らかの影響(人為も含む)で堆積層内に混入したと考えるのが妥当である。クリ属を除くと、河原や沢沿いなどに生育するスギ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属など、林縁や森林を構成するモミ属、ツガ属などの針葉樹、ブナ属、コナラ属アカガシ亜属、ニワトコ属など、二次林などを構成するマツ属などが認められる。よって、これらは当時の周辺植生を反映していると推測される。

水田床土層E層1～E層6でも、イネ属が産出する。特にE層1では機動細胞珪酸体が5,100個/μgであり、前述の事例と同等であることから、稲作が行われていた可能性が考えられる。なお、E層2から下位ではイネ属の含量が減少する傾向も見られる。この点は、上層での稲作に伴う攪拌により下位へ植物珪酸体が落ち込んだことを反映すると思われる。ただし、下層から継続して稲作が行われてイネ属の含量が増加した可能性も否定できず、今後さらに層相や堆積環境を含めて検討することが望まれる。コムギ連も、産出が上位のE層1とE層2に限られており、上層から落ち込んだものと考えられる。一方、花粉化石はほとんど検出されない。何らかの要因で分解されたなどの可能性があるが、現時点では明言できない。

平安時代遺物包含層とされるF層、G層、H層でもイネ属が産出した。機動細胞珪酸体が900～4,300個/μgであり、前述の事例と比較すれば同等あるいは少ないと言える含量値である。そのため、これらの土層で稲作が行われていたとしても、後代の水田と比べて耕作期間が短い可能性や、堆積速度が早いことによりイネ属が蓄積しにくい状態にあった可能性が考えられる。なお、珪化組織片が上位の水田耕土と比較して多い傾向が見られる。イネ属の珪化組織片は植物体由来のものであり、イネ属の植物体(籾殻や稲藁)はコメの収穫後に容易に入手でき、住居構築材や燃料材などの生活資材として利用される場合がある。そのため、珪化組織片は稲作に伴って耕作土に混入するだけでなく、稲藁などが利用された場所や投棄された場所に混入する場合もある。平安時代遺物包含層で珪化組織片が検出された点からは、利用された稲藁や残滓が遺物と共に土層に混入した可能性も考えられる。この点についても層相や堆積環境を含めて検討の余地が残される。またコムギ連もF層やH層で産出した。後述する平安時代の住居跡に見られたカマドの焼土などの微細物分析によりオオムギやコムギの種実が産出したことを考慮すれば、コムギ連の植物珪酸体や珪化組織片はこれらムギ類の栽培を反映するものと思われる。

花粉化石では木本類を中心に認められるが、全体的に保存状態が悪い。一般的に花粉やシダ類胞子は、腐蝕に対する抵抗性が種類により異なっており、落葉広葉樹に由来する花粉よりも針葉樹に由来する花粉やシダ類胞子の方が酸化に対する抵抗性が高いとされている(中村,1967;徳永・山内,1971;三宅・中越,1998など)。検出された花粉の保存状態が悪いこと、ある程度分解の影響を受けても同定可能な種類が多く認められることから、花粉化石は堆積後の好気的環境により分解され、分解に強い種類が選択的に残されたと考えられる。なお、検出された花粉化石群集は、モミ属、スギ属、ハンノキ属などの木本類、イネ科、カヤツリグサ科などの草本類であることから、周辺の河川沿いや林縁、草地などの植生に由来すると思われる。

最上面が平安時代遺物確認面である1層では、下位から上位にかけて連続的にイネ属が産出し、上位で産出が目立った。その含量は前述の事例と比較すればやや少ないと言える値であるが、耕作期間が短いなどの要因によりイネ属が蓄積しにくい状態にあった場合には、稲作が行われていたことを反映するものかもしれない。その場合には、平安時代の遺構が構築される以前に本調査地点が稲作地として利用されたことが想定される。ただし、I層上部の含量は上位のH層と同程度であり、下位に向かって含量が減少することから、上位からの落ち込みである可能性も否定できない。また顆粒酸体も検出されたコムギ連についても、当時の栽培を反映する可能性もある

が、上位からの落ち込みの可能性も否定できない。この点についても層相や堆積環境を含めて検討の余地が残される。一方、花粉化石はほとんど検出されないことから、取り込まれにくかったことや分解・消失した可能性がある。

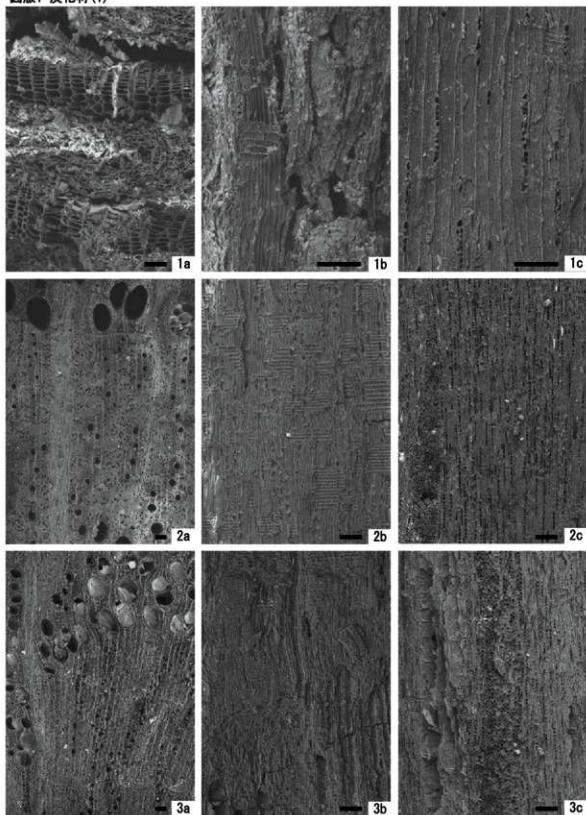
ところで、IからDではタケ亜科、ヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科、シバ属など検出され、土層が形成される過程で調査区周辺にこれらのイネ科が生育していたと想定される。タケ亜科には、クマザサ属が見られた。クマザサ属はブナを中心とした森林の林床に生育するだけでなく、森林が失われた空間に侵入してササ林を作ることがある。そのため、調査区周辺に林分やササ林が存在し、そこからクマザサ属の植物珪酸体がもたらされたのかもしれない。またタケ亜科やススキ属には開けて乾いた草原のような場所に生育する種類が多く、ヨシ属は湿潤な場所に生育することが多い。これより、調査区周辺に草地や湿地も存在したことが窺える。

引用文献

- 安藤一男,1990,淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用.東北地理,42,73-88.
- Asai Kazumi&Watanabe Toshiharu,1995,Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2)Saprophilous and saproxitous taxa.Diatom,10,35 - 47.
- Bronk, R. C.,2009,Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon,51,337-360.
- Desikachary, T. V., 1987, Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean. Madras science foundation,1-13. Plates,401-621.
- 藤木利之・小澤智生,2007,琉球列島産植物花粉図鑑.アケアコーラル企画,155p.
- 林 昭三,1991,日本産木材顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
- Hustedt, F., 1930, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7, Leipzig, Part 1, 920p.
- Hustedt, F., 1937-1938, Systematische und ökologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. I ~ III. Arch. Hydrobiol. Suppl., 15. 131-809p, 1-155p, 274-349p.
- Hustedt, F., 1959, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7, Leipzig, Part 2, 845p.
- Hustedt, F., 1961-1966, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeres-gebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7, Leipzig, Part 3, 816p.
- 石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
- 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
- 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.
- 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久(編),2012,木の考古学 出土木製品用材データベース.海青社,449p.
- 伊藤良永・堀内誠示,1991,陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用.日本珪藻学誌,6,23-44.
- 近藤鎌三,2010,プラント・オパール図譜.北海道大学出版会,387p.
- 小杉正人,1988,珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用.第四紀研究,27,1-20.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot H., 1985, Naviculaeae. Bibliotheca Diatomologica, vol. 9,p.250.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot H., 1986, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa, 2(1): 876p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot H., 1988, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(2): 596p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot H., 1990, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(3): 576p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot H., 1991a, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(4): 437p.
- Lange-Bertalot, H., Witowski, A., Metzeltin, D.,2000,ICONOGRAPHIA DIATOMOLOGICA Annotated diatom micrographs. Diatom Flora of Marine Coasts ,1,925p.
- 三宅 尚・中越信和,1998,森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態.植生史研究,6,15-30.

- 三好教夫・藤木利之・木村裕子,2011,日本産花粉図鑑,北海道大学出版会,824p.
- 中村 純,1967,花粉分析,古今書院,232p.
- 中村 純,1980,日本産花粉の標徴 I II (図版),大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12,13集,91p.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2010,日本植物種子図鑑(2010年改訂版),東北大学出版会,678p.
- バリノ・サーヴェイ株式会社,1994,健康村遺跡自然科学分析調査報告,山梨県北巨摩郡長坂町健康村遺跡(仮称)東京都新宿区立区民健康村建設事業に伴う発掘調査報告書,新宿区区民健康村遺跡調査団,116-124.
- Reimer, P. J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Hafliðason, H., Hajdas, I., Hatté, C., Heaton, T. J., Hoffmann, D. L., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., Manning, S. W., Niu, M., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Staff, R. A., Turney, C. S. M., and van der Plicht, J.,2013,IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP, Radiocarbon,55,1869-1887.
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I and Gasson P.E. (編),2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification] .
- 島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織,地球社,176p.
- 島倉巳三郎,1973,日本植物の花粉形態,大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集,60p.
- Stuiver, M., and Polach, H. A.,1977,Discussion Reporting of 14C Data, Radiocarbon ,19, 355-363.
- 杉山真二,2000,植物珪酸体(プラント・オパール),辻 誠一郎(編著)考古学と自然科学3 考古学と植物学,同成社,189-213.
- 鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文,2012,ネイチャーウォッチングガイドブック 草木の種子と果実-形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実 632種-,誠文堂新光社,272p.
- 徳永重元・山内輝子,1971,花粉・胞子,化石の研究法,共立出版株式会社,50-73.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification] .

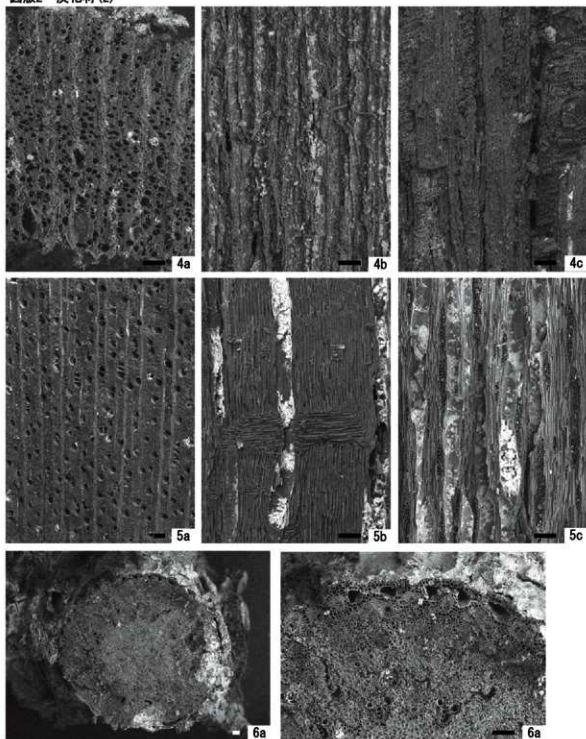
図版1 炭化材(1)



1. ヒノキ科 (SB16 W-11:14)
2. コナラ亜属クヌギ節 (SB16 W-1:6)
3. コナラ亜属コナラ節 (SB16 W-31:21)

a:木口 b:年目 c:板目
スケールは100 μ m

図版2 炭化材(2)



4. サクラ属 (SB16 W-33:23)
5. カエデ属 (SB16 W-12:15)
6. イネ科草本類 (SB20 W-36:50)

a:木口 b:縦目 c:板目
スケールは100 μ m

図版3 炭化種実



1. オニグルミ 核(1号流路:1)
2. モモ 核(1号流路:1)
3. モモ 核(SB16カマド:6)
4. イネ 穎(SS3002:29)
5. イネ 果実(SB30カマド:12)
6. エノコログサ属 穎(SS3002:29)
7. エノコログサ属 果実(SS3002:29)
8. アワ 穎(SS3002:29)
9. アワ 果実(SS3002:29)

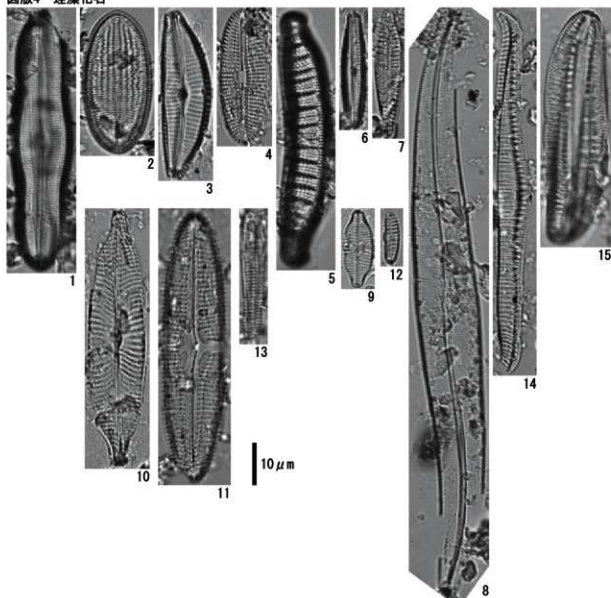
10. イヌビエ属 果実(SS3002:29)
11. キビ 果実(SS3002:29)
12. オオムギ 果実(SB26:10)
13. コムギ 果実(SB26:10)
14. イネ科 穎(SS3002:29)
15. イネ科 果実(SB30カマド:12)
16. アカザ属 種子(SS3002:29)
17. ササガ属 子葉(SB16カマド:6)
18. アカネ科 種子(SB26:10)

5.0mm 1.0mm
(1, 2) (3)

1.0mm
(4, 6-11, 14-16, 18)

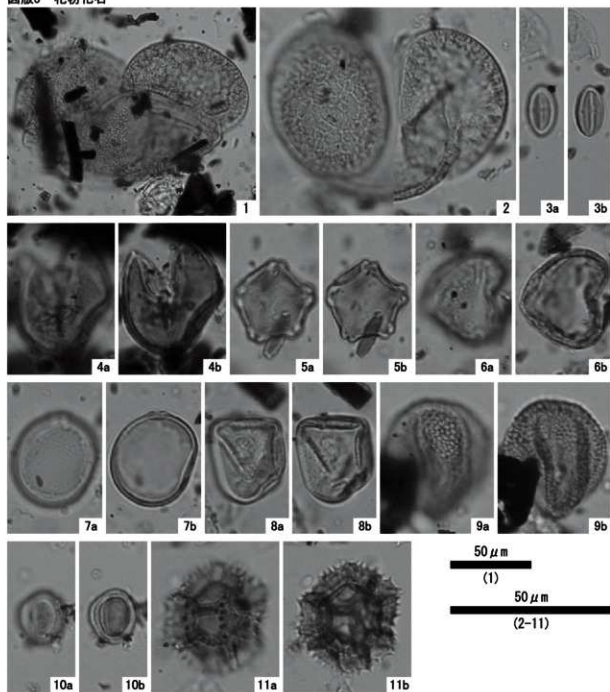
1.0mm
(5, 12, 13, 17)

图版4 珪藻化石



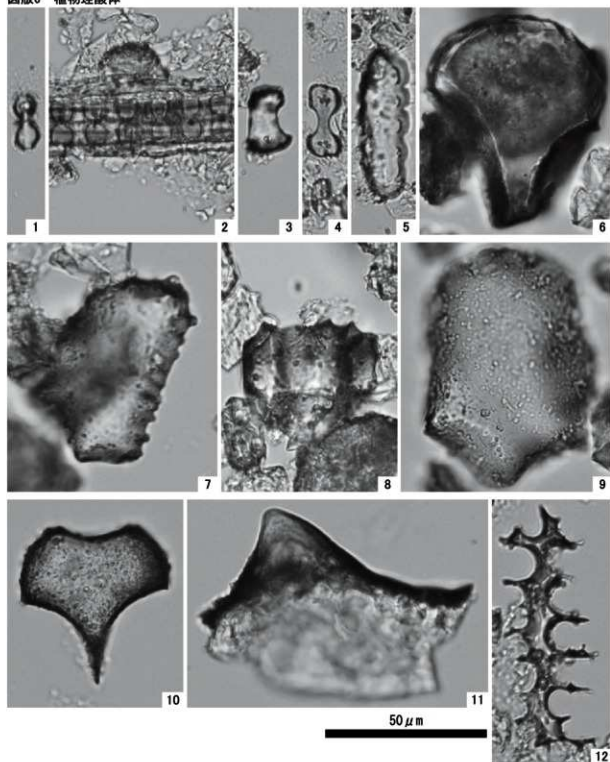
1. *Caloneis silicula* (Ehr.) Cleve (SD4004 ④:8)
2. *Cocconeis placentula* var. *lineata* (Ehr.) Cleve (SD4004 ④:8)
3. *Cymbella turgidula* Grunow (SD4001 ④:4)
4. *Diploneis oblongella* (Naeg.) Cleve-Euler (SD4004 ⑦:11)
5. *Epithemia adnata* (Kuetz.) Brebisson (SD4004 ④:8)
6. *Gomphonema clevei* Fricke (SD4001 ②:2)
7. *Gomphonema parvulum* (Kuetz.) Kuetzing (SD4004 ①:5)
8. *Gyrosigma acuminatum* (Kuetz.) Rabenhorst (SD4004 ④:8)
9. *Navicula elginensis* var. *neglecta* (Krass.) Patrick (SD4004 ③:7)
10. *Navicula viridula* (Kuetz.) Kuetzing (SD4001 ④:4)
11. *Pinnularia viridis* (Nitz.) Ehrenberg (SD4004 ⑤:9)
12. *Reimeria sinuata* (Greg.) Kociolek et Stoermer (SD4004 ②:6)
13. *Rhoicosphenia abbreviata* (Ag.) Lang-Bertalot (SD4001 ④:4)
14. *Rhopalodia gibba* (Ehr.) Mueller (SD4001 ④:4)
15. *Rhopalodia quisumbirgiana* Skvortzow (SD4004 ④:8)

図版5 花粉化石



1. モミ属(2区中島西壁 H2:25)
 2. マツ属(2区中島西壁 D4:12)
 3. クリ属(2区中島西壁 D4:12)
 4. スギ属(2区中島西壁 H2:25)
 5. ハンノキ属(2区中島西壁 H2:25)
 6. コナラ属コナラ亜属(2区中島西壁 D4:12)
 7. イネ科(2区中島西壁 D4:12)
 8. カヤツリグサ科(2区中島西壁 D4:12)
 9. ソバ属(2区中島西壁 D3:11)
 10. ヨモギ属(2区中島西壁 D4:12)
 11. タンポポ亜科(2区中島西壁 D4:12)

図版6 植物珪酸体



1. イネ属短細胞珪酸体 (2区中島西壁 D4:12)
3. クマザサ属短細胞珪酸体 (2区中島西壁 E2:14)
5. コムギ連短細胞珪酸体 (2区中島西壁 F1:19)
7. クマザサ属機動細胞珪酸体 (2区中島西壁 F3:21)
9. ヨシ属機動細胞珪酸体 (2区中島西壁 F3:21)
11. イネ属頑珪酸体 (2区中島西壁 F3:21)

2. イネ属短細胞列 (2区中島西壁 F1:19)
4. ススキ属短細胞珪酸体 (2区中島西壁 F1:19)
6. イネ属機動細胞珪酸体 (2区中島西壁 H2:25)
8. メダケ属機動細胞珪酸体 (2区中島西壁 D1:9)
10. シバ属機動細胞珪酸体 (2区中島西壁 E4:16)
12. コムギ連頑珪酸体 (2区中島西壁 F1:19)

第2節 第2次調査の自然科学分析

第1項 土層堆積構造観察

株式会社 古生態研究所

はじめに

今回の調査では、新町前遺跡調査区の堆積層の累重状況について、現地にて堆積学・土壌学的な層相観察を行い、遺跡形成過程に関する検討を行った。

1 調査地点・方法

調査地点は、御坂山地に端を発する芦川の谷口付近に拡がる扇状地扇端に位置する。発掘調査では、平安時代(10～11世紀)の建物跡、中世の水田跡などが確認されている。

現地調査は、2020年2月3・4日の2日間で実施した。調査区壁面に累重する堆積層、土壌層について、岩質や堆積・土壌構造の記載、写真撮影を行う。これらの記載にあたっては、砕屑物について公文・立石(1998)の「新版 砕屑物の研究法」、土壌について日本ペドロジー学会編(1997)の「土壌調査ハンドブック 改訂版」に従う。粒径区分はWentworth(1922)の粒度区分にもとづき記載する。なお、観察記載は、調査担当者に説明を行いながら実施した。

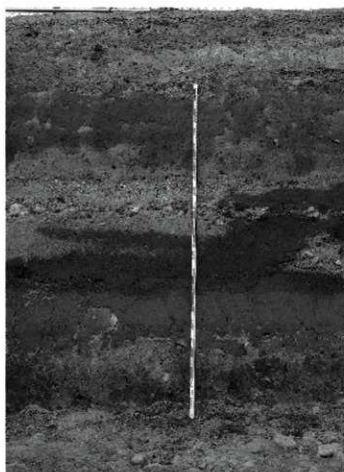
2 調査区の堆積層の累重状況

調査区の堆積層の累重状況を示す断面写真を図1～5に示す。調査区の堆積層は、大きく9層に区分される。ここでは便宜的な層名として、上位より1層～9層の層名を付す。

9層は、調査底面である10～11世紀の遺構確認面で確認される砂礫層である。この砂礫層の累重状況は、調査区西部の本砂礫層を掘削して構築されている10～11世紀の南北方向の大溝壁面でのみ確認される。砂礫層上面は、平坦ではなく起伏が認められる。調査区南西部では、礫層が上に凸状をなして堆積し、その頂部付近の礫が遺構確認面上に帯状に露出している(図2)。この上に凸状をなして堆積する砂礫層は、浅い壟型をなす流路状の堆積空間を埋積しており、南東から北西へ向かっての一方向流の掃流によって運搬・堆積した、基質支持をなすトラフ型斜交葉理・層理の堆積構造が認められる(図2)。構成する礫は、小型の巨礫の長軸300mm前後のものが多く、これらの礫の隙間に円盤状ないし球状をなす20～50mm前後の垂円礫をなす大型の中礫～大礫からなる。礫の隙間を充填する基質は、極粗粒砂(1.2mm)～細粒の中礫(4.8mm)で構成される。この流路状の堆積空間のベースをなす堆積物も斜交葉理の発達する砂礫層からなる。本砂礫層は下部から上部にかけて細粒化する。下部は小型の巨礫～大礫を主体とし、上部は細礫～中礫を主体とする。礫の隙間を充填する基質は、極粗粒砂～細粒の中礫で構成される(図3写真1の9b層、図4写真2の9層)。

今回の調査区では、調査区西部以外の礫層については確認できていないが、確認された範囲では、浅い壟型をなす流路状の堆積空間を埋積しており、これらが再侵食しながら側方および上方へ積層している。このような堆積状況から、礫層は河床を埋積した堆積物と判断され、礫層を堆積させた流路は、河床が浅く、さらに頻繁に流路移動や分流を行っていた可能性が示唆される。このような流路は、増田(1999)による河川堆積作用の堆積学的特徴の解説にもとづくと、網状河川の堆積システムで形成されたと解釈される。本遺跡が存在する温暖湿潤地域では、一般的に網状流路の堆積システムが扇状地で形成されることが多く(チャーレーほか,1995)、本遺跡が芦川の扇状地に位置することと調和的である。扇状地の網状河川では、一般的に河岸が低く、河床変動に関係する粒径集団の土砂移動が激しいため、流路内の特定の場所でも集中的に堆積が進行し、またこのような流路特性により、扇状地の流路では、河床上昇とこれに伴う流路変更が発生しやすく、流路変更後に、それまで流下していた流路により形成されたパーの地形の凹凸がそのまま残される(山本,2004)。調査区で認められる礫層の凹凸は、この網状河川の流路移動に起因する氾濫原上の微地形と推定される。また、礫層上部は土壌生成が進行しており、流路移動後に離水し、植生が再生領域に変化したことが推定される。9層の形成年代については、遺構面との関係から、10世紀以前と判断されるが、詳細は不明である。

8層は、砂礫層上面に累重するシルト～シルト混じり砂からなる細粒堆積物である(図3の8層)。緩傾斜の扇状地表面では、洪水によって細粒砂～中粒砂が主として供給される(山本,2004)ことから、8層は網状河川の流路が相対的に速くへ移動した後に、その流路から洪水によって供給されたものと推定される。8層は9層上面の凹地部分で厚く、凸部分で薄い。



- 1層 現在の表土
- 2層 近代の耕作土
- 3層 天地返しに伴う溝を充填する砂礫
- 4層 近世の耕作土
- 5層 洪水氾濫に伴う砂層～砂礫堆積物
- 6層 中世の水田耕作土
- 7層 水田耕作土
- 8層 氾濫堆積物を母材とする古土壌
10～11世紀の遺構の検出層準
- 9層 砂礫層

1. 調査区東壁南部



- 1層
- 2層
- 3層
- 4層
- 5層
- 6層
- 7層
- 8層
- 9層

2. 調査区北壁中央部

図1 調査区の断面写真

凹地部分の8層では古土壌を挟み、8a層と8b層に細分される(図3の8a層・8b層上部)。したがって、8層は地表で土壌発達するような堆積休止期を挟む、間欠的な洪水堆積物の積層からなることが推定される。10～11世紀の遺構検出面は、8a層上部の土壌層位が相当する。8a層最上部1cm程度は泥勝ちとなることから、当該期の調査区が湿潤化傾向にあったことが推定される。この変化の原因は不明であるが、周辺の河床上昇など何らかの原因によって調査区の水文の条件が変化した可能性が高い。調査区では、10～11世紀以降に居住域としての土地利用がされなくなることとも同調的であり、今後調査地域の地形発達過程を踏まえ検証していくことが課題として認識される。

なお、調査区西部で検出された大溝の埋土の層相変化をみると、埋土3層は、土壌生成が進行している、8層由来のブロック土や流入土からなる堆積物、埋土2層は、菓理構造が確認される上方粗粒化する泥層～中粒砂からなる。層相から、溝内の滞水域に流入した氾濫堆積物と推定される。埋土1層は塊状無層理をなす砂質泥～泥質砂からなる。ブロック土が多く混じり、細礫・中礫も混じる。層相から人為的の営力で形成された堆積物と推定される。このような埋土の層相をみると、南壁では北壁で確認される埋土3層が認められないことから、埋土3層形成期段階の溝は南壁まで到達していなかったが、その後、溝を延長する必要が生じたとみられる。本溝が排水機能を有していた場合、上記の8層最上部の湿潤化と対応するように溝を拡張したとも考えられる。現地調査時には、溝から溝肩部の断面観察ができなかったため、発掘調査時の断面写真などから再検証する必要はある。

7層は8層上面を層状に覆う、僅かに細礫・中礫が混じる砂混じり泥からなる。人為的に擾乱されており、見かけ上は塊状無層理をなす。擾乱が顕著な上部では微細な炭片が混じり、僅かに腐植の集積が確認される。下部ではブロック土状の構造が確認されるが、8層由来の偽礫がほとんど取り込まれていない。このような層相と下位の8層との層界が明瞭であることを踏まえると、7層は人為的の営力で形成された客土の可能性が高い。発掘調査時には6層上面において大畦畔・畦畔を伴う水田遺構が確認されているが、この大畦畔の断面では、7層期の段階で大畦が構築されている状況が確認される(図5の畦畔1)。7層形成期には、調査区一帯が水田域へと変化したことが推定される。

6層:7層上面を層状に覆う、僅かに細礫・中礫が混じる泥質砂からなる。本層も人為的に擾乱され塊状無層理をなしている。上部で擾乱が顕著であり、腐植が集積しているが、調査区東部では、この腐植集積層が下記する洪水氾濫堆積物からなる5層形成期の営力で侵食されている。層相から耕作土と推定され、上記したように本層上面で水田遺構が確認されていることと同調的である。以上のことから、7層・6層形成期には調査区一帯が水田域へと変化したことが推定される。

5層は、調査区東半部を主体に堆積する、洪水氾濫にともなう砂層～砂礫堆積物からなる。洪水初期に堆積したとみられる最下部の細礫混じり粗粒砂層は、下位層の6層上部を侵食しており、下部に6層由来の泥質砂の偽礫が取り込まれており、浅くて速い流れで形成されたことがうかがえる。その上位に南南東から北北西方向に傾斜する大型のフォーセット層理構造をもった上方粗粒化する砂礫堆積物が累重する。一方、調査区西部では数cm程度の細礫混じり粗粒砂が薄く堆積するのみで、南南東側から供給された洪水氾濫に伴う堆積物の西部に相当するとみられる。堆積後に離水し、土壌生成が進行している。

4層は、層状に積層する砂質泥～泥質砂の積層からなる。人為的に擾乱され塊状無層理をなす耕作土からなる。発掘調査の結果、近世の水田耕作土とされている。

3層は、「天地返し」に伴い、元の水田耕作土を取り出した溝状の空間に人為的に充填された砂礫堆積物である。この砂礫は4層上部形成後に発生したとみられる洪水氾濫砂層に相当する。水田の復旧のために復旧させたい範囲の端部を溝状に深く掘削し、その空間に復旧させる側の氾濫砂礫を元の水田の高さまで充填させる。氾濫砂が取り除かれた細長い元の水田土表面に、最初の溝と平行に少し間をあけて新しく溝を掘削し、掘り出した水田土を氾濫砂で充填した最初の溝に乗せ、新たに掘削した溝に氾濫砂を充填させる。この作業を繰り返すことで、形成されたのが2層である。2層は見かけ上塊状無層理をなす、人為的に擾乱された泥質砂からなる。近代の水田耕作土とされる。

3 調査区的环境変遷

上述してきた調査区の堆積層の累重状況および発掘調査の結果に基づいて、調査区的环境変遷を整理する。

調査区が位置する緩傾斜の扇状地では、網状流路の河床堆積物である砂礫層の堆積後、流路移動に伴い、土壌生成が進行する堆積休止期を挟む、間欠的な洪水氾濫に伴う細粒砂屑物が供給される堆積場に変化する。最上部の土壌生成期には、10世紀～11世紀の人間の居住域となったが、水文条件の変化に伴う湿潤化などによ



1. 調査区西壁南部

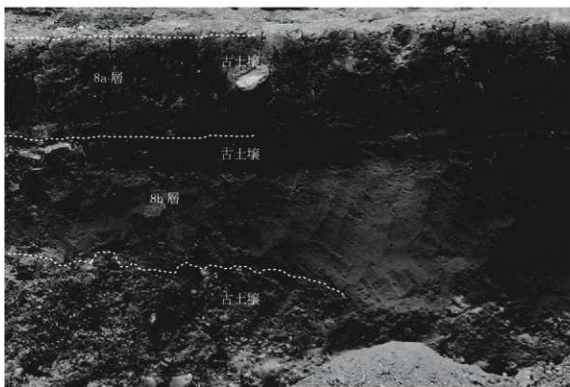


2. 調査区西壁南半部：砂礫層の堆積状況

図2 調査区の断面写真



1. 調査区西壁南部

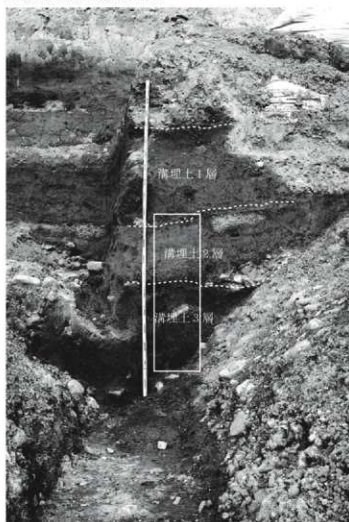


2. 調査区西壁南半部：砂礫層の堆積状況

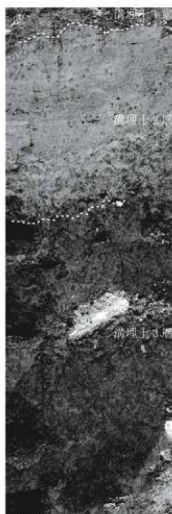
図3 調査区の断面写真



1. 調査区西部の大溝埋土南壁



2. 調査区西部の大溝埋土北壁

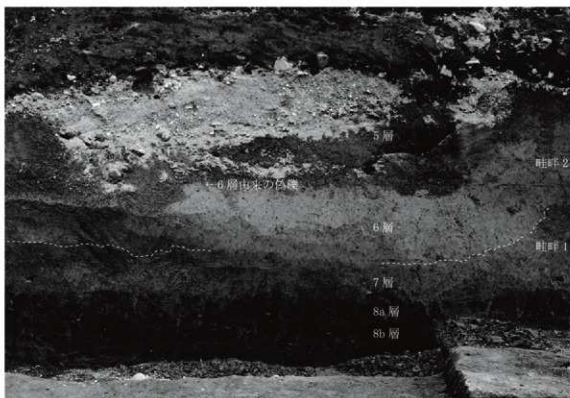


左写真の□範囲

図4 調査区の断面写真



1. 調査区東壁 大畦畔と溝の検出状況



1. 調査区東壁 大畦畔北側の状況

図5 調査区の断面写真

り居住域は廃絶したとみられる。その後、中世にかけて、調査区一帯は水田域に変化し、中世～近世に発生した洪水の被害を受けるものの、基本的には近代まで耕作地としての土地利用が継続していたことが確認される。

今回の調査では、今後の課題として、10世紀の遺構の基盤をなす流路堆積物、その上位を覆う洪水氾濫堆積物で確認される古土壌層、最下位の水田層などの年代層序学的検討が上げられる。また、土壌生成が進行している層準や人為的擾乱が及んでいる層準を対象に風化に耐性のある植物珪酸体分析を実施することで、当該期の植生景観の一端を検討することも有効と考える。さらに隣接する調査区などの調査成果を踏まえ、本地域における地形発達などの環境変化と、人間による土地利用の変化を複合的に検討していくことが重要な課題として認識される。

参考文献

- チョーレー,R.J・シヤム,S.A・サグデン,DE.,1995,現代地形学,大内俊二訳,古今書院,692p.
増田富士雄,1999,透水層・帯水層のトレース:ダイナミック地層学からのアプローチ,地下水位技術,41,1-15.
増田富士夫・伊勢屋ふじ子,1985,“逆グレーディング構造”:自然堤防帯における氾濫洪水堆積物の示相堆積構造,堆積学研究会会誌,22・23,108-116.
日本ペドロロジー学会編,1997,土壌調査ハンドブック 改訂版,博友社,169p.
山本晃一,2004,構造沖積河川学-その構造特性と動態-,山海堂,690p.

第9章 総括

第1節 新町前遺跡の段階設定について

今回の新町前遺跡の調査では、弥生時代終末、平安時代～中世の生活面を検出した。ここでは、総括して遺跡の変遷を示す。

<第1段階> 弥生時代終末～古墳時代初頭(古)・集落 第4次調査I期遺構面。現在確認している範囲では、新町前遺跡において最も古い段階。竪穴建物跡では、第4次-SI07・SI08・SI09。SI08は焼失竪穴建物跡。いずれの建物跡においてもがは検出しなかったため、当該期における建物利用として居住空間ではなかった可能性もある。

<第2段階> 弥生時代終末～古墳時代初頭(新)・集落 第4次調査II期遺構面。竪穴建物跡では、第4次-SI05、SI06が跡?がある。出土土器の型式は第1段階と大差がないが、検出面としては、約0.5mの間層がある。この間層はほぼ均質な細粒砂によって構成されており、中に土壌化した層を挟むことからやや安定した環境が続いていたことが示唆される。第1段階との土器型式による時間差はほとんど無いことには留意されたい。第2段階をもって、一時新町前遺跡における集落は断絶する。

<第3段階> 10世紀前半・集落 第1～3次調査において検出している。土師器環及び皿は口縁端部が玉縁状に肥厚して、体部下半は斜位ヘラケズリにより調整される。環は口径11.4cm～18.6cm、底径は3.6cm～6.8cmで口径:底径の比は3.1～3.6:1。甕は外面縦方向のハケメ、内面は横方向のハケメによって調整され、口縁部は四角く肥厚して広がる形状を呈する。その他、土師器羽釜、灰軸陶器皿・壺、須恵器甕が共存する。竪穴建物跡では、第1次-SI03・12・25・33・36・41・45・49・50、第2次I区-SI02、04、第3次SI01・02・03がある。平安時代になって集落が改めて形成される時期である。当該期には、第1次調査の調査区中央を南北に縦断する自然流路とした溝(NR1001、3001、4001)が流れている。竪穴建物跡は概ね溝(NR)の西側に分布する傾向がある。

<第4段階> 10世紀後半・集落 土師器環及び皿は第3段階と同様に口縁端部が玉縁状になるが、体部下半の斜位ヘラケズリが無いものもある。また、体部下半の斜位ヘラケズリが第3段階に比べて若干雑に見える。口径は11.4cm～16.8cm、底径は4.0cm～7.0cmで口径:底径の比は2.8～2.4:1。竪穴建物跡では、第1次-SI14、26、29、31、42、44、48が該当する。当該期においても第1次-NR1001、3001、4001は存続していたと考えられる。この時期の集落は、第3段階に比べると竪穴建物跡の軒数が減少する傾向があるが、建物配置においては密度が上がる傾向があり、溝(NR)の西側に規制されている状況が窺える。

<第5段階> 11世紀前半・集落 土師器環は前段階までに見られた玉縁状の口縁形状は消滅し、体部の器壁厚のまま端部を作り出すややや尖る形状を呈している。底部のヘラケズリ調整は完全に消滅し、回転系切りによる切りっぱなしである。また、底部の厚さは比較的薄く作られている。口径は10.5cm～14.8cm、底径は3.2cm～7.0cmで口径:底径の比は3.2～2:1。全体のフォルムはやや箱型に近くなる。竪穴建物跡では、第1次-SI04、05、15、34、35、40、第2次I区-SI01が該当する。また、NR1001、3001、4001は当該段階までの遺物が含まれており、この段階をもって埋没したと考えられる。この時期の集落は、主に溝(NR)の東側に展開する傾向が見られ、建物は散在しており密度が低い。

<第6段階> 11世紀後半・集落 土師器環の器高が低くなり、次第に土師皿に容容していく初期段階。器壁は第5段階以降分厚くなる傾向があり、底部も厚底になる。また、脚高台付土器がみられるようになる段階である。口径は9.0cm～15.8cm、底径は3.6cm～7.8cmで口径:底径の比は2.5～2:1。全体のフォルムはやや箱型に近くなる。竪穴建物跡では、第1次-SI02、08、10、18、19、23、27、38、39、第2次III区-SI04、第4次-SI04が該当する。前段階と同様に建物は散在している傾向があるが、前段階まで存続していたと考えられる溝(NR)の西側にも広く展開していく。

<第7段階> 12世紀前半・集落 環は皿に統合されていき、いわゆるカワラケとなっていく段階。柱状高台付土器がみられるようになる。竪穴建物跡では、第1次-SI01、30、第2次III区-SI07、第4次-SI01が該当する。竪穴建物跡の軒数としては前段階に比べて激減している。ただし、当該期前後において、居住建屋の構造が竪穴建物跡から掘立柱建物に容容していくことから、集落の衰退と捉えられない。その他、柱状高台付土器が集中して出土したSX1002がある。また、遺構外出土遺物では第2次I区、第3次においては出土量が極端に少ないまたは皆無であった。

＜第8段階＞ 12世紀後半・集落？ カワラケの器高がほぼ底の厚さと変わらないほど低いものが出現する。同様のカワラケは西田町遺跡（笛吹市）にみられる。新町前遺跡では、772（SD4001出土）、881（SK3003出土）、887（SK3018出土）、901（SK4001出土）、908（SK4003出土）、939（SX1001出土）、1043～1047（遺構外出土）がある。これらの出土状況から、当該期の集落様態を明らかにできる遺構はないが、第1次及び第2次調査において検出した大溝（第1次SD4001、第2次SD04）の機能時期はこの段階に該当すると思われる。大溝の機能及び内部空間の利用については後述することとしたいが、前段階までの集落様態とは明らかな変質が認められる。ただし、次段階の土器型式が出土せず遺物量も極めて希薄であることから短期間の存続であったと考えられ、現段階では第8段階をもって集落は廃絶したと考える。

＜第9段階＞ 13世紀以降・生産域 第9段階以降は、土地利用の形態を生産域に変遷する。第8段階からの連続性は明らかではないが、第8段階の遺構掘り込み面（第3～8段階遺物包含層上面）が第9段階の耕作により層界が不整合になっていること、第1・2次Ⅲ区において検出した大畦畔が2～3回にわたって作り替えがされていることを考慮すると、それほど時間を置かず土地利用が変化したと推測される。当段階では、第1・2次Ⅲ区において水田跡、第1次南西隅、第2次Ⅰ区、第3次調査において畑跡が検出しており、概ね今回の新町前遺跡の調査対象区の北東側に水田、南西側に畑跡が展開していたと考えられる。水田床土層からは、土師質播鉢や初鉢年が15世紀以降となる古銭が出土し、水田跡を覆う砂礫層中からも土師質播鉢が出土して近世以降の陶磁器が含まれないことから、15世紀頃に河川氾濫によって廃絶したと考えられる。

第2節 新町前遺跡の変遷について

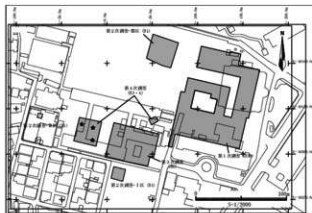
前節において新町前遺跡の土器が示す段階を1～9段階まで設定した。これにより、各段階に分布する遺構（竪穴建物跡、溝等の主要かつ時期が明確にわかるもの）から集落の変遷を検討する。第1段階は、弥生時代終末～古墳時代初期の古段階の遺構面である。第1・2段階とも第4次調査のみの検出であることから、その分布を考察することは困難である。ただし、当該期における集落については、当県においても身洗沢遺跡に代表されるように扇状地の末端部に位置する傾向が認められる。それは水田耕作における地質的な条件のもと選地がなされていたと考えられる。また、第2次調査に先立つ試掘調査において、地表面下約3.8m地点で検出した不整形遺構は十字に交差したプランを検出している。試掘調査では明確な標高値を記録していないが、地表面からの深さをもとに考えると、第4次調査における弥生時代後期の遺構面に該当する可能性がある。このプランについて切り合い関係は認められなかったため、水田の区画であったかもしれない。また、遺跡が所在する地域については、第1次調査Ⅰ区の地山が筋状に礫層が分布している状況や同次Ⅱ期の河川氾濫流路が幾筋に分岐している状況からも、扇状地の末端部であったことは間違いなく、これらの様相から、当該地に弥生時代後期の集落が展開していたと推察される。

第3段階以降第8段階までは、第1～4次まで広く展開して見られる平安時代後期～中世に至る集落期である。第3段階は、集落の形成期である。発掘調査では、第1～4次とも10世紀前半より古い平安時代遺物の出土は全く認められないことから、当段階において、突如入植がはじまったと考えられる。竪穴建物跡の分布とすると、当該期に第1次調査の中央部を南北に流れるNR01の西側に展開する傾向が認められる。また、第3次調査では、当該期の竪穴建物跡しか検出しておらず、かつ遺構外出土遺物も10世紀代に限定される。このことから、NR01に沿って集落が展開していたと考えられる。また、竪穴建物跡の密度は低く、やや散在的であることも特徴として挙げられる。

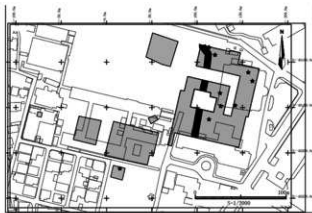
第4段階は、10世紀後半と位置付けている。これまでの調査では検出件数が少なく、総合的な分布を考察することは難しい。竪穴建物跡は前段階同様にNR01の西側に集中しているが、密度は前段階と比べて密度がかなり高い傾向が認められる。第3・4段階の集落については、NR01の西側に集落域が規制されている様相が窺え、何かしらの支配体制の下で、集落が突如当該地域に作られた可能性を示唆していると考えられる。

第5段階においては、前段階までとは打って変わって、NR01の東側に集落域が遷移する様子が見えてくる。当該期においては、NR01はすでに埋没または埋没しつつある状況であり、その規制線としての機能を有していないと考えられる。また、当段階から竪穴建物跡の軒数が増大しており、活動が活発化した時期であると考えられる。ただし、第2次調査Ⅰ区においても他の竪穴建物跡とは離れた位置で竪穴建物跡が見つかっており、より広範囲の集落様相とすると、別の集落グループが存在していた可能性は十分にある。

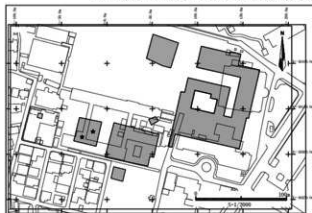
第6段階では、NR01は完全に埋没しており、竪穴建物跡の分布はかなり散在的である。竪穴建物跡の軒数が



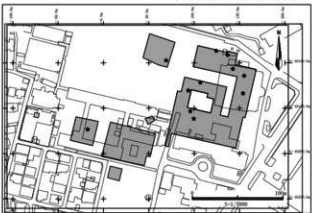
第1段階 (弥生時代終末~古墳時代初頭)



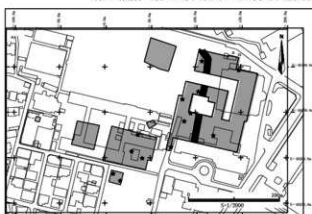
第5段階 (11世紀前半)



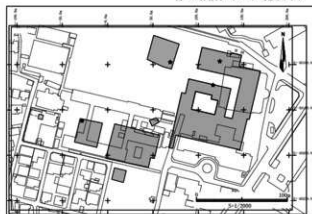
第2段階 (弥生時代終末~古墳時代初頭)



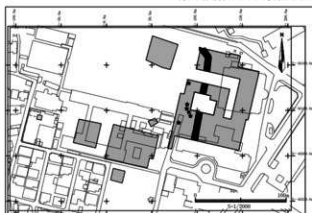
第6段階 (11世紀後半)



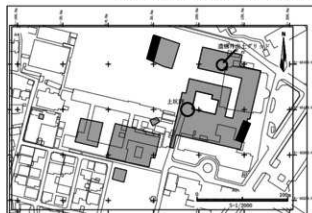
第3段階 (10世紀前半)



第7段階 (11世紀後半~12世紀初頭)



第4段階 (10世紀後半)



第8段階 (12世紀前半)

図 196 新町前遺跡遺構変遷図

増大する一方で、第1次調査区における当該階の竪穴建物の分布は、南西方向の2つの列状になっているように見える。これは、この2つの列状のグループの間では、基盤層として礫層が筋状に分布していること由来していると考えられ、その礫層を避けて竪穴建物を構築したことにより、当該分布傾向を示していること想定される。また、前段階と同様に第4次調査、第2次調査Ⅲ区においてやや離れた地点に竪穴建物が見出している。前段階の継承の中でグループが維持されている可能性がある。

第7段階になると、竪穴建物の軒数は激減する傾向がうかがえる。第8章における土層堆積構造の観察結果より、第7・8段階辺りで地下水水位が上昇していく傾向がある可能性が指摘されている。そのことから、集落地域からの脱却に向けた動向として、竪穴建物跡の検出が減少した可能性がある。集落域としての分布は北側に分布する傾向が認められる。当該地域の地形としては、南側は扇状地の低地部に当たるため、地下水水位から遠いところに集落域が変遷していったと考え、ストリーターの親和性が高い。ただし、第4次調査区においても竪穴建物跡が見出していることから、扇状地低地部に居住を規制されていた可能性も考えられ、より広範囲の集落の展開を考慮しなければならない。周辺事例の増加が待たれる。

第8段階においては竪穴建物から掘立柱建物に建物構造が遷移した時期であり、竪穴建物跡は見出していない。遺構とすると、第1次調査区南東隅、第2次Ⅲ区調査区西端において検出した大溝が該当する。当該大溝の機能とすると、そのV字状の断面形状から防衛的機能を持つ土地区画の可能性と居住域の乾燥を目的とした排水の溝の可能性などが考えられる。前者の可能性に着目すると、第3段階から始まる平安時代集落においては、一般的な集落であり特殊遺物の出土は極めて少ない。この一般集落からの遺跡の継続性を考慮すると、突然防衛的機能を有する、いわゆる館的な土地利用に突如変化するのとは不自然であると考えられる。一方で、当該期については、秋山氏が想定している、「在地に武士団が形成される過程」で市河荘が分解し、「鎌田、稲積、小井川、布施、青島」荘が成立したことを背景とすると、10世紀代から土地開発が行われた当該地域において、12世紀段階で青島荘が成立したことに連動して、集落から荘園の管理施設へと変遷する土地利用の変化も考慮すべきである。次節において触れるが、本集落においては、鍛冶が有する竪穴建物跡や椀形埴輪、輪郭口のような鉄器の加工、修理を担う小鍛冶に関連する遺構・遺物が数多く見出していることは、甲府盆地の土地開発に関連して考察していかなければならない課題である。ただし、大溝の幅が一町（約109m）の単位に類似した長さであることは注視すべき現象である。

第9段階は図194に示していないが、水田、畑を検出した生産域の土地利用になる。特に北側に水田が構築されており、南側は畑として利用される傾向がある。第1次調査Ⅱ期及び第2次Ⅲ区Ⅱ期調査においては、水田に引水するための用水路を中央に持つ大畦畔が見出している。この用水路は南東から北西に向かって伸びていることから、当該期における芦川の流路が新町前遺跡より南側を流れていた可能性が示唆される。また、大畦畔の線形はやや蛇行した形がとれているが、階段状を呈する線形の頂部に対して水田の畦畔が作られていること、水田の畦畔は直線的に作られていることから、用水路の線形が自然地形に沿っていること、水田の畦畔が畦行線の頂部に位置し直線的に区画されていることから長方形の土地区画を意識していることが想定される。この様子は、土地区画の整備の意識によるものであり、当該期に存在したと考えられる青島荘における土地区画であった可能性が指摘できる。

前段階において構築された大溝については、約25°東偏しているのに対して、第9段階の水田区画はそれより若干北側によっており、東偏約9～12°程の傾向がみられる。この東偏約10°前後については、現在の甲府市中～東部地域における条里の傾きに近い線形を呈している。また、令和6年3月10日に行われた山梨県考古学協会の部会である甲斐条里研究会の総会「甲斐条里の成立時期を考古学的に考える」において、筆者は甲府市大里町、大津町、宮原町、中央市成島、中橋、極楽寺周辺においても、同様の条里の傾きが残っていることを報告している。現状の市川大門地区においては、傾きの土地区画を検出することができなかったが、当遺跡において、同様の土地区画を持つ水田区画を検出したことは、古代市川荘から分派して派生したと想定される青島荘の実態を見ている可能性を示唆している。

第3節 新町前遺跡出土の鍛冶関連遺構・遺物について

本遺跡では、前節において触れたように、鍛冶関連遺構及び遺物が多く見出している。その内容は、鍛冶が持つ竪穴建物跡、輪郭口、鍛冶滓などがあげられる。これらの出土傾向について、本節で解説する。

輪郭口は、多くは28点（1332～1360）を報告した。その大半が平安時代遺物包含層からの出土であるが、

竪穴建物跡から出土したものも多い。列挙すると、SI05・10・15・16・28・38 でみられるほか、SK4003 では2点検出している。竪穴建物跡では、第5・6段階の竪穴建物跡に限って検出しており、現段階では10世紀代にさかのぼって鞆羽口が検出したものはない。平面的な分布状況では、調査区全域において散在的に検出している。最後に鍛冶滓についてみてみると。鉄滓が出土した竪穴建物跡はSI11、15、23、31、41、44、46、49で出土しているが、SI41では2点、SI44では4点、SI46では5点、SI49では4点の出土があり、一定の竪穴建物跡に集中する傾向がある。特にSI44、SI46では鍛冶かと思われる土坑を有しており、カマドが構築されていない点から工房としての機能を有する竪穴建物跡と考えられる。鞆羽口は10世紀代の竪穴建物跡からの出土がみられない一方、鞆羽口は10世紀代に遡る竪穴建物跡からの出土が多くみられる。それぞれの遺物の残存度については検証の余地があるが、いずれにしても平安時代集落が形成されて以来、小鍛冶が行われていたことがわかる。新町前遺跡では、特に桃形滓の出土が多く、今回報告していない細かい鉄滓の出土も非常に多い。この出土状況が、一般的な集落におけるいわゆる村の鍛冶屋さんが操業して産出する量となるのか、それ以上の土地開発による鉄製農具の消耗が認められる分量になるのかは明らかではないが、他の同時期集落と比較しても多い傾向が認められるだろう。

第4節 新町前遺跡から出土した貿易陶磁について

新町前遺跡の大きな特徴とすると、貿易陶磁の出土量が多いことが挙げられる。第1～4次を通して、約300点の貿易陶磁が出土しており、その全点を掲載・報告した。出土点数は非常に多いものの、その全てが破片資料であり、復元実測を積極的に進めても、底部～口縁部まで復元できるものは無い。ここではこれら貿易陶磁の出土傾向について整理しておきたい。

新町前遺跡から出土する貿易陶磁では、明確に遺構に伴って検出しているものは皆無である。いずれも遺物包含層または遺構覆土でも流れ込みによるものであり、出土状況から集落において貿易陶磁を使用していたとの判断はできない。むしろ、上記のような状況であることは、貿易陶磁を取り扱う集団ではなかったことを示唆しており、やはり第3～8段階における集落は一般的な階層の集団であったことを裏付けている。しかし、なぜこの地域における遺物包含層から貿易陶磁の出土が多くみられるのだろうか。一つは外部からの破片を含む土壌の供給を考えなければならないだろう。当該地域は扇状地の扇端部であり、水の営力による土砂、礫、遺物等の供給が多く想定される地域である。例えば、第1から2段階の間層は約50cmあるが、どちらも弥生時代後期の生活面であり、1土器型式の年代間において堆積したとすると、かなりの土砂の運搬作用によって急激に土層が堆積したと考えられる。同様に、平安時代集落における遺物包含層は約30～50cmと厚く堆積しているを踏まえると（その中に第3～8段階の生活面があったと想定されるが、発掘調査では間層内において遺構の判別をすることができなかった）、より上流域（現在の市川三郷町役場付近か）において貿易陶磁を取り扱うことができた階層の居住域が存在した可能性がある。現段階においては想像の域を出ないが、予察として提示しておきたい。

<参考文献>

- 磯貝正義 1988 「郡の成立—甲斐国巨麻郡の場合—」『郡司及び采女制度の研究』
- ラインハルト・ツェルナー 1990 「土着—初期甲斐源氏の屋形造り—」『甲府市史研究』第8号
- 秋山敬 2003 『甲斐の荘園』甲斐新書刊行会
- 拙稿 2021 『新町前遺跡（第1次）概報』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第330集 山梨県観光文化部・同教育委員会



第1次I期垂直写真（モザイク写真、写真上が北）



第1次Ⅱ期垂直写真（モザイク写真、写真上が北）



第3次Ⅰ期垂直写真（写真上が北）



第3次Ⅱ期垂直写真（写真上が北）



第4次Ⅰ期垂直写真（写真左が北）



第4次Ⅱ期垂直写真（写真左が北）



第4次Ⅲ期垂直写真（写真左が北）



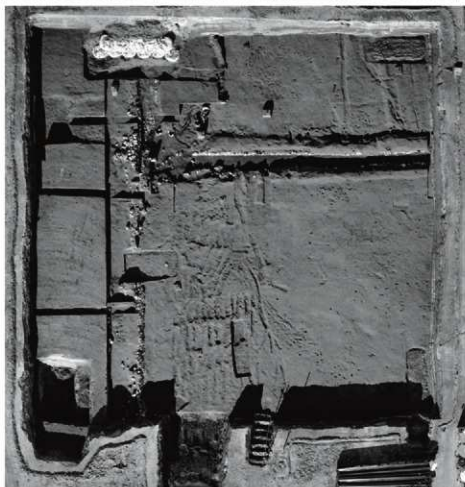
第2次Ⅰ区Ⅰ期垂直写真
(写真上が北)



第2次Ⅰ区Ⅱ期垂直写真
(写真上が北)



第2次Ⅲ区Ⅰ期垂直写真



第2次Ⅲ区Ⅱ期垂直写真



SI01 完掘



SI02 完掘



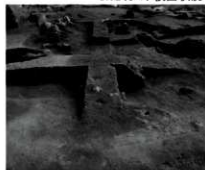
SI02 カマド検出状況



SI03 完掘



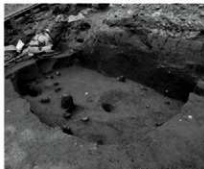
SI03 カマド遺物出土状況



SI04 調査状況



SI04 カマド完掘



SI05 遺物出土状況



SI06 完掘



SI06 カマド完掘



SI07 調査状況



SI08 完掘



SI08 カマド①遺物出土状況



SI08 カマド②遺物出土状況
第1次 遺構写真①



SI09 完掘



SI09 カマド完掘



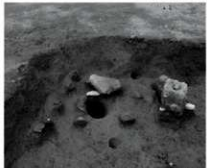
SI10 調査状況



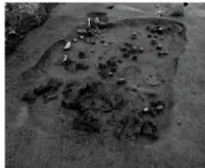
SI11・12 調査状況



SI14・17 完掘



SI15 カマド遺物出土状況



SI16 炭化材検出状況



SI16 カマド遺物出土状況



SI18 カマド遺物出土状況



SI19 完掘



SI20 炭化材検出状況



SI20 炭化材



SI22 完掘



SI23 遺物出土状況



SI23 カマド遺物出土状況

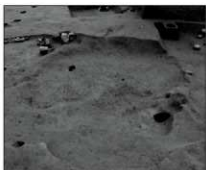


SI24 完掘

第1次 遺構写真②



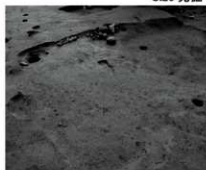
SI25 完掘



SI26 完掘



SI27 完掘



SI28 完掘



SI28 カマド完掘



SI28 壁際集石



SI29・31 完掘



SI30 完掘



SI30 カマド遺物出土状況



SI32 調査状況



SI33 完掘



SI33 カマド完掘



SI33 遺物出土状況



SI33 カマド遺物出土状況

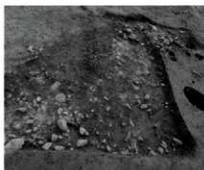


SI34 完掘

第1次 遺構写真③



SI34 カマド完掘



SI35 完掘



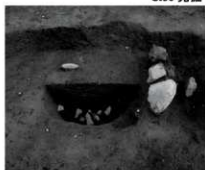
SI36 完掘



SI36 遺物出土状況



SI36 カマド周辺遺物出土状況



SI36 カマド横土坑



SI37 調査状況



SI38 調査状況



SI39 調査状況



SI40 遺物出土状況



SI41 完掘



SI41 カマド遺物出土状況



SI41 巨礫下遺物出土状況

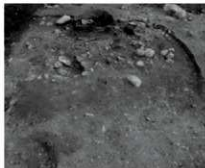


SI42 完掘



SI42 カマド

第1次 遺構写真④



SI43 完掘



SI44 完掘



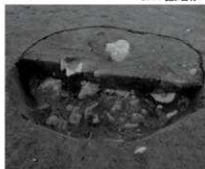
SI44 鍛冶炉



SI45 完掘



SI46 完掘



SI46 鍛冶炉半截



SI47 完掘



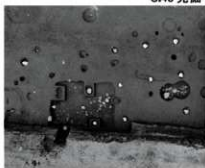
SI48 完掘



SI48 カマド遺物出土状況



SI49・50 完掘



SB01・02 垂直写真



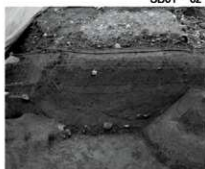
SB01・02



SB01 柱穴掘り込み



NR1001 完掘



NR1001 兩壁土層堆積

第1次 遺構写真⑤



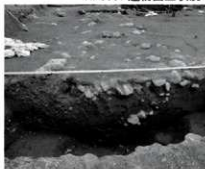
NR3001 遺物出土状況



NR3001 南壁土層堆積状況



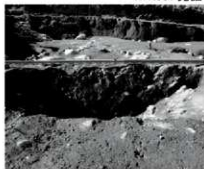
NR4001 完掘



SD4001 断面



SD4001 完掘



SD4003 断面



SS3001 完掘



SS3002 完掘



SK3028 掘り込み



SK4003 完掘



SX1002 遺物出土状況



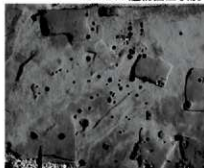
SX1003 遺物出土状況



ピット群①

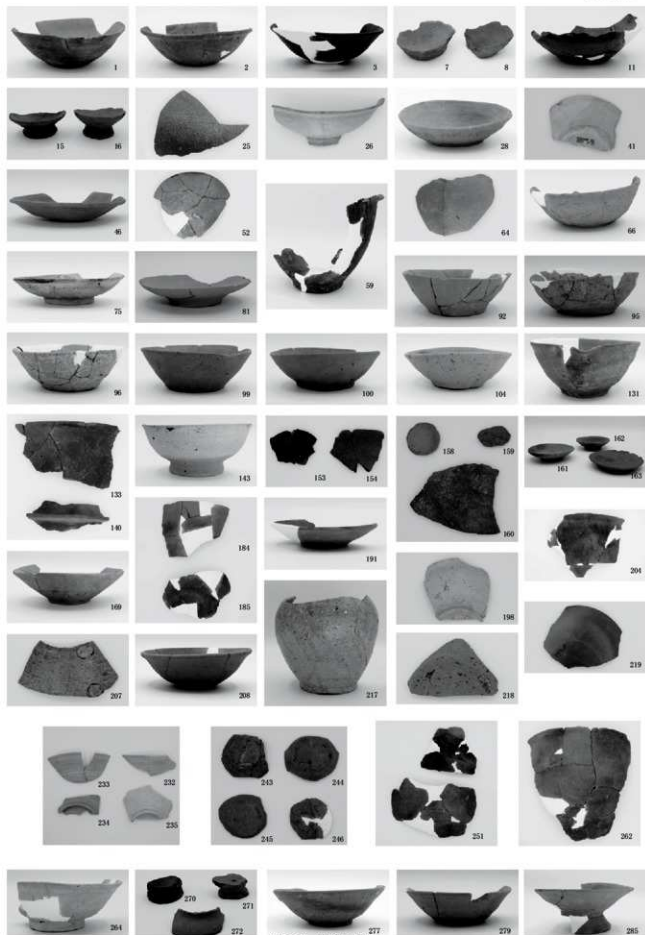


ピット群②

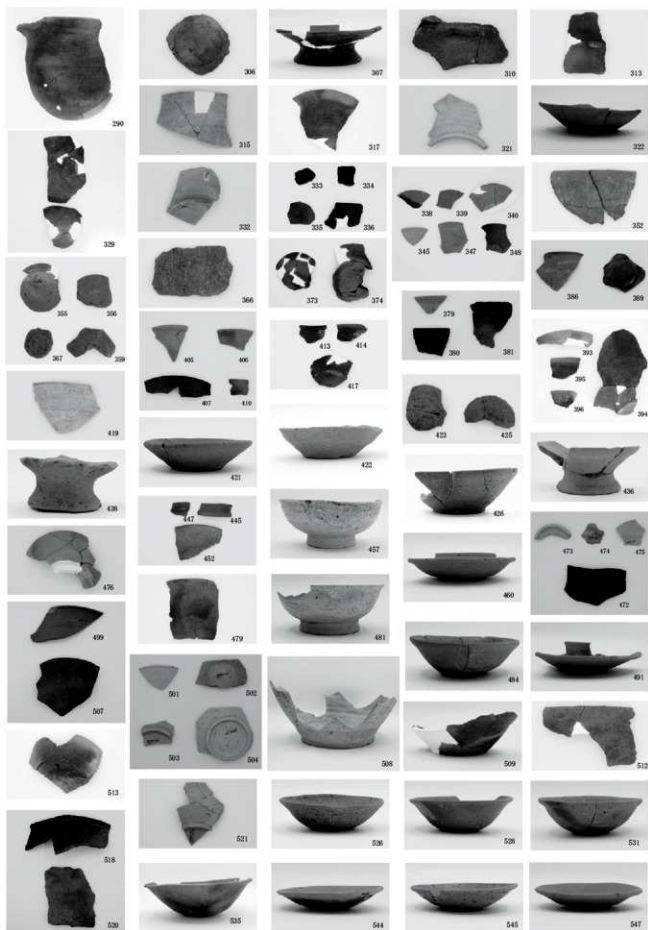


ピット群③

第1次 遺構写真⑥



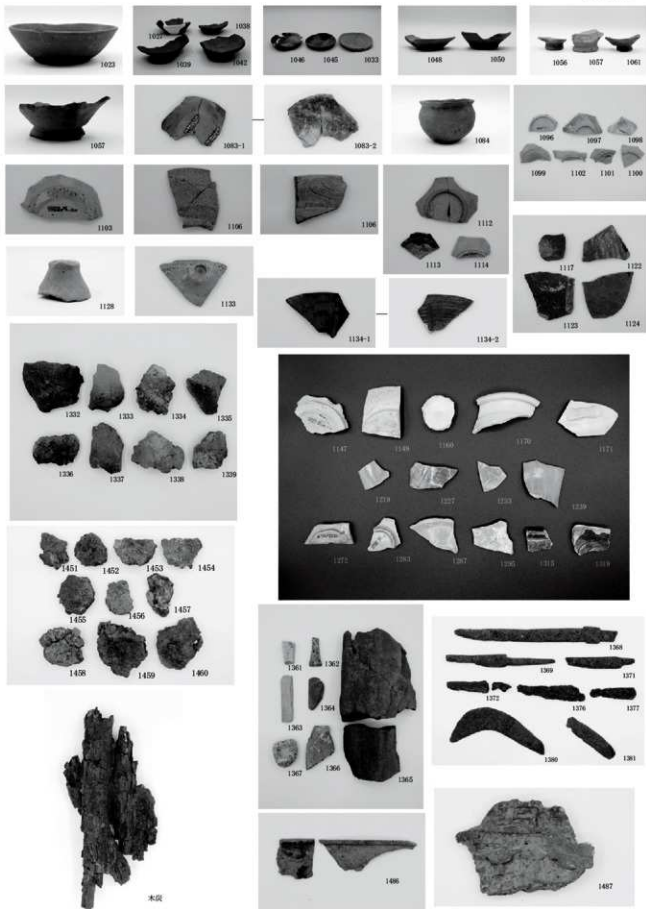
第1次 遺物写真①



第1次 遺物写真②



第1次 遺物写真③



第1次 遺物写真⑤



大睦畔Ⅰ区全景



大睦畔水路石組み



大睦畔取水口



大睦畔取水口②



大睦畔石組み北列



大睦畔Ⅱ区全景



大睦畔を壊す氾濫流路



水田面と氾濫流路の方向



水田面



水田面と足跡



SN04 足跡



足跡②



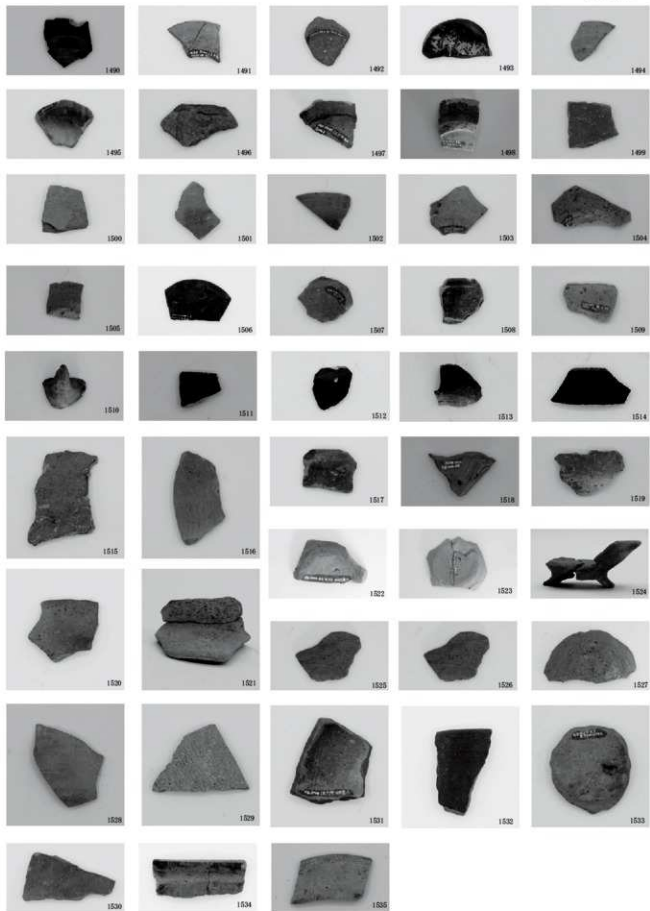
SN16 跡



市川高校生徒の見学会
第1次Ⅱ期遺構写真



発掘体験セミナー



第1次 II期遺物写真



SI02 カマド完掘



SI03 カマド完掘



SI03 カマド袖石



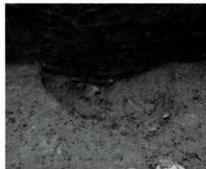
SI05 完掘



SL01 半截



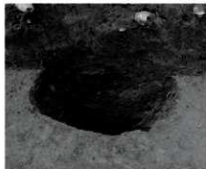
SK01 完掘



SK07 完掘



SP08 完掘



SP17 完掘



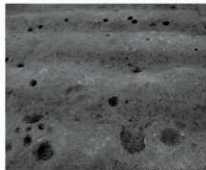
SX01 完掘



SZ01 完掘



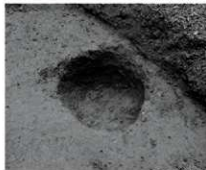
跡検出状況



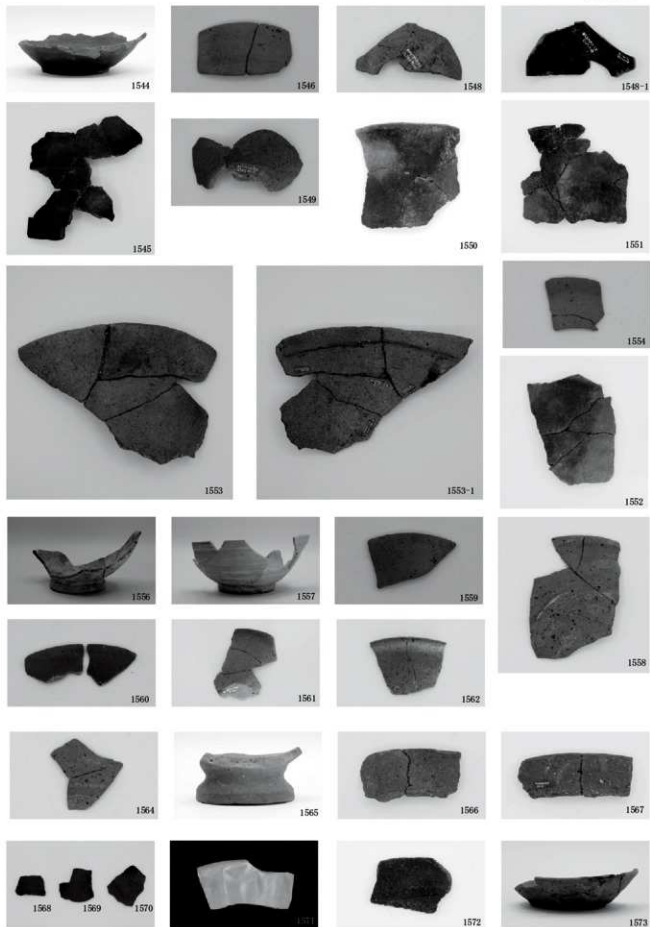
畝上に見える株痕?



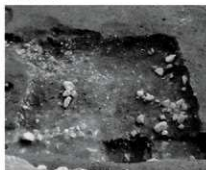
II区俯瞰写真



SK01 完掘



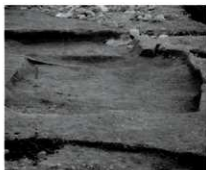
第2次 I 区遺物写真



S101 完掘



S101 カマド検出状況



S102 完掘



S103 完掘



S104 完掘



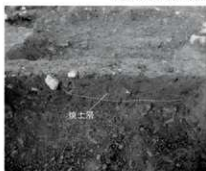
S106 とビット群



S104 完掘 (南から)



S104 完掘 (北から)



S102 断面



ビット群①俯瞰



Ⅱ期水田足跡



大睦群



大睦群の石組み護岸

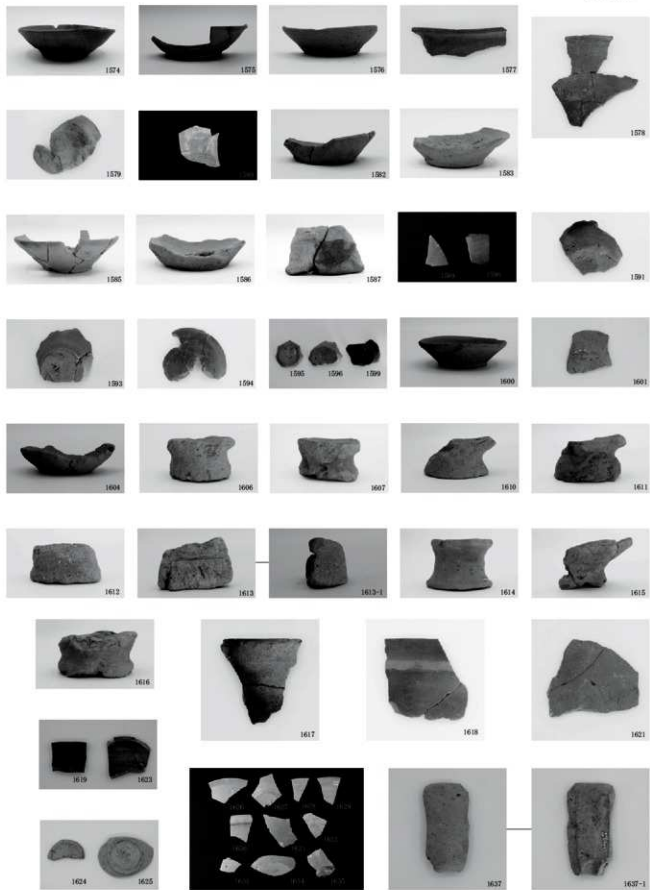


大睦群の断面



畑跡? (災害復旧痕跡か)

第2次Ⅲ区遺構写真



第2次Ⅲ区遺物写真



SI01 カマド



SI01 完掘



SI02 完掘



SI02 カマド完掘



SB01 完掘



SK01 遺物出土状況



SP03 完掘



煙完掘状況

第3次遺構写真



土師器坏



土師器皿



厚底の土師器坏



須恵器・灰釉陶器



土師器壺



台付壺



土師器壺



土師器羽釜

第3次遺物写真



SD06 断面



SI08 遺物出土状況



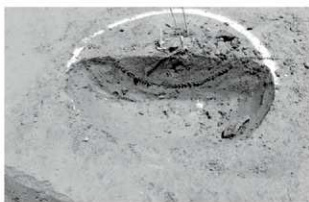
SI08 遺物出土状況近景



SI09 断面



SP21・22 断面



SP23 断面



遺跡見学会 (2022.07.24)



遺物出土状況 (1714)

第4次 I 期遺構写真



第4次 I 期遺物写真



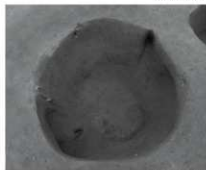
SI05 断面



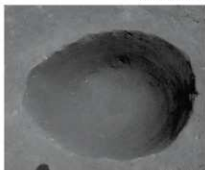
SI06 炉焼土



SI06 炉焼土半截



SP05 完掘



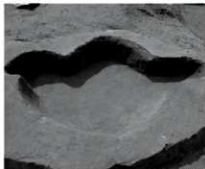
SP06 完掘



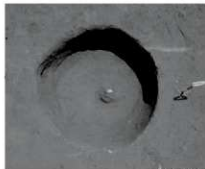
SP08 完掘



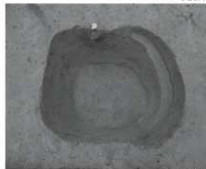
SP09 完掘



SP12 完掘



SP13 完掘



SP14 完掘



SP15 完掘



SP16 完掘



SP17・18 断面

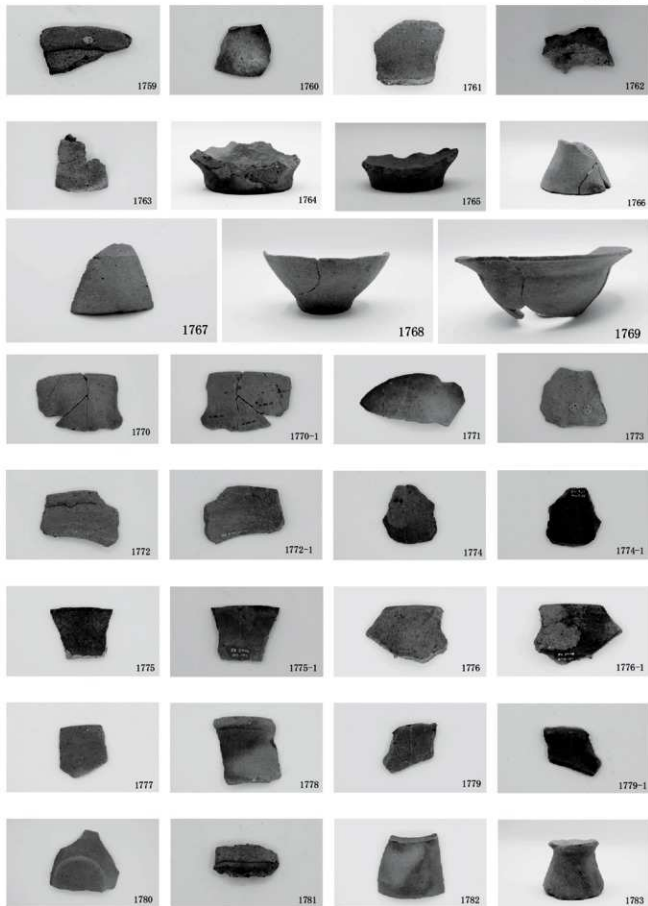


SP19・20 完掘



出土状況 (1758)

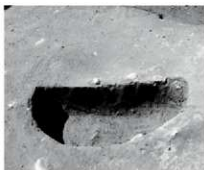
第4次Ⅱ期遺構写真



第4次Ⅱ期遺物写真



SI01 東西断面



SI01SP01 半截



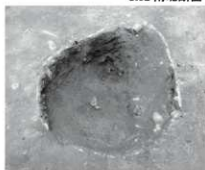
SI02 南北断面



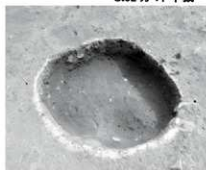
SI02 カマド半截



SI04 カマド完掘



SI04SP01 完掘



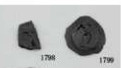
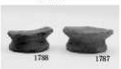
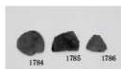
SP01 完掘



SP04 完掘



都室棟地点完掘



第4次Ⅲ期 遺構・遺物写真

報 告 書 抄 録

ふりがな	しんまちまえいせき (第1～4次)						
書名	新町前遺跡 (第1～4次)						
副題	青洲高校 (峡南地域単位制・総合制高校) 建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第342集						
著者名	御山亮済、パリオ・サーヴェイ (株)、(株) 古生態研究所						
発行者	山梨県観光文化・スポーツ部、山梨県教育委員会						
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター						
所在地・電話	〒400-1508 山梨県甲府市下曾根町 923 TEL:055-266-3016						
発行年月日	平成36年3月26日						

ふりがな 所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しんまちまえ いせき 新町前遺跡 (第1次)	山梨県西 八代郡市 川三郷町 市川大門 1733-2			35° 33' 59.20''	138° 30' 01''	2018/4/26 ～ 2019/2/4	約 5,700 m ²	峡南地域単位制・ 総合制高校、青 洲高校建設事業
しんまちまえ いせき 新町前遺跡 (第2次)						2019/7/16 ～ 2020/2/26	I区: 約 169 m ² II区: 約 2 m ² III区: 約 676 m ²	
しんまちまえ いせき 新町前遺跡 (第3次)						2020/12/14 ～ 2021/2/26	約 1,300 m ²	
しんまちまえ いせき 新町前遺跡 (第4次)						2023/3/4 ～ 2023/7/29	約 600 m ²	

要約	<p>新町前遺跡が所在する市川三郷町市川大門地区では、本調査以前には遺跡の存在が知られていない地域であった。発掘調査では、弥生時代終末～古墳時代初頭及び10世紀前半～12世紀の集落跡と15世紀頃まで存続したと考えられる水田や畑を検出した。甲府盆地において見つまっている集落遺跡では、各期とも標高が最も低い場所に位置しており、当該期の甲府盆地の集落景観に一石を投じる成果となった。平安時代～中世の集落遺跡では、小鍛冶に関連する遺構や遺物が数多く出土しており、この集落の甲斐国における位置づけを表象していると考えられる。また、当該期の遺物包含層からは青磁や白磁などの貿易陶磁が約270点出土しており、周辺地域において高い地位の階層集団の存在が想定される。</p>
----	---

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第342集

新町前遺跡（第1～4次）

青洲高校（峡南地域単位制・総合制高校）建設工事に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2022年3月18日 印刷

2022年3月26日 発行

編集 山梨県埋蔵文化財センター
山梨県甲府市下曾根町923
TEL 055-266-3016

発行 山梨県観光文化・スポーツ部、山梨県教育委員会

印刷 株式会社 峡南堂印刷所
